
SIGN 序章

WhiteEight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S I G N 序章

【Nコード】

N7538H

【作者名】

WhiteEight

【あらすじ】

” 霊による死 ” が間近に迫っている ” サイン ” を知る事の出来る少女…優。彼女は霊のために霊を祓うことを決意する。長編アクションゴーストファンタジー！

第1話 死を告げる印

S I G N 序章

第1話 死を告げる印

今日も天気は曇り。

天気予報では午後から雨が降るかもしれないとの事。

「優！朝ご飯も食わんと！」

まだ学校へ行く時間ではないぞ」

この人はうちのお祖母ちゃん。

私のお母さんのお母さんで、口うるさいのがたまに傷かな。

今現在、両親が不在なため一家の主といったところね。

「お祖母ちゃんごめん。食欲ないんだ！じゃあ行ってきますす！」

「あ、くらー！」

優は走って行ってしまった。

「やれやれ…困ったものだわ……。」

育ち盛りというのに…最近の若いもんときたら…」

私の名前は白^{しろ}凧^{なまき} 優^{ゆう}。

地元の高校に通う普通の女子高生………ではない。
残念ながら。

何が普通ではないか…
それは私の家系が大いなる要因といえる。

「あら白凧の巫女様。おはようございます。今日も早いわね」
「お、おはようございます…」

今は、地元の商店街のおばさん…。

「おお！巫女様じゃあ！拝ませておくれえー！」
「す、すみません…！」
「急いでますのでー！ー！」

優は猛ダツシユで商店街を駆け抜けた。

そつ…私の家は地元じゃ有名な神社である。

手伝いと修行をかねた巫女の仕事…これのせいで町じゃ巫女様だの、
拝ませてくれたのだと…。

かんっぜんにつ！

マスクott化してるわ…。

もうそんな毎日にウンザリしたから、人通りの少ない時間帯にずら
して登校してるわけ。

それでもこの有様だからね。

最初は悪い気もしなかったけど、こつ毎日だと…恥ずかしいし…。

「つて…もう学校ついちゃった…」

7時30分…つて…

始業時間までまだ1時間近くもあるわ…。

あれ？

グラウンドに誰がいる…。

朝練でもしてる生徒かな…？

だが良く見ると、制服姿に木刀という…どうみても部活動をしている感じではない。

周りを見ても他に生徒らしき人も見当たらないし。

それにしても…あの人。

木刀を構えて目を閉じているけど…何をしてるんだろ…？

ん…？この人…どこかで…。

その瞬間、突風が優を突き抜けていった。

「!？」

見ると木刀を持った生徒が思い切り振り切ったあとの姿があった。

いつ振りぬいたか…目の前にいたのに気づかなかった…。

「…!？き、君は…。」

木刀の生徒がこちらに気づいたようだ。

!!

「あ…!…やっぱり…!

君、うちのクラスの男子!」

名前は…確か…

「天城…君」だっけ…

「しゅ、出席番号1番！天城あまぎ 勇ゆう！

み、巫女殿と話すのは、実は初めてです！」

ハイテンションで背筋を伸ばして声を張り上げた。

う、うわあ…。

こ、この人…見た目、ものすごいカッコイイのに…なんか変態だっ
たみたい…。

に、逃げたほうがいいかな…。

「あ、あの…こんな朝早くにグラウンドの真ん中で何してたの…？」

って私！

何聞いてるのよ！

「あ。これはですね！精神統一です！

これから学業にいそしまなければならぬので、その下準備です

」！

「へ、へえ…」

もしかして……それって毎日…？」

「はい！」

めっちゃ笑顔でハイって言われたぞ…。

この人軽く天然…？

てか、今までこの人の存在に気づかなかったのか私…。

「あ、あの巫女殿は何故このような時間に…？始業までまだ1時間近くあるかと…」

「あ、あの…その巫女殿ってやめてくれるかな…。」

は、恥ずかしいからさ…。」

「こ、これは失礼を！」

で、では…その…白風…優さん…。」

な、なぜフルネームで呼ぶ…！

というよりも何故フルネームを覚えられているのか…。

「あ、あの！俺も勇っていつんです。
漢字は違うけど…同じ”ゆづ”ですね」

そのアピールのためかッ！
こやつ乙女かッ！

「ほ、ほんとだねえ…ははは…」

むう…なんというか…
この屈託のない笑顔がなんか…。

…。

いやいや…！落ち着くのよ優！
私はそんなキャラじゃないのよっ！

そ、そうよ！

一瞬ときめきのようなモノを感じた気がしたけど…それは気のせい
よ！

ええ！惑わされちゃだめ！

「じゃ、じゃあ自分！先に教室に行きます！
では！」

「あ…」

行っちゃった…。
なんだったのかしら。

「…今教室に行くのは非常に気まずいわね…。
トイレにでもいつとくか…」

その後…普通に授業があり…
何事も変わらぬ時間が過ぎた。

気づけば下校時間である。

放課後

「はあ…」

今朝のことがあったせいか…
一日中やたらと彼に意識がいつてしまった…。
一体何をしてるんだろ…私…。

これは…まさか…！？
いや、落ち着くのだよ！私の理想はあんな天然じゃないわ！

「あ……」

いつの間にかもう商店街の入り口か……。

また巫女だのなんだのと言われたくないわね……特に今日は。

仕方ない……遠回りして帰るか……。

てか雲行きが怪しくなってきたわね……やっぱり天気予報通り降るのかしら？

少し急ぎ足でいい。

人気の少ない路地裏。

前を男性が一人歩いている。

酷く肩を落としているようだ。

「……？」

なに…このざわつき……。
まさか…

ポオツ…

男の背中に赤い印が浮き上がっているのが見える。

「ッ…!!」

嘘でしょ…今月入って何人目!?

む…

確か…5人目だった…かな…。

私には他の人には見えない”印”が見える。
これはうちの家系に代々伝わる体質らしい。

いわゆる一つの特異能力という奴だ。
靈感の一つ上の段階といえはいいか…。

一般的に靈感が強く

”霊が見える”

程度の話ではない。

何かしらの理由から霊に憑依され…

”霊による死”が迫っている時に現れる”サイン”

そう、目の前を歩く男は…今まさに死の淵に立たされていると言える。

このまま放って置けば、あの人は間違いなく死ぬ。

これに例外はないという。

救う方法は一つ。

憑依している霊を祓うほかにない。

「どっする…?」

霊を祓うのは容易ではない。

下手をすれば、こちらに憑依し…最悪死ぬ。

あの人から漏れてくる霊気…。

それほど大きな霊気ではないわね…。
恐らく人の霊…。

動物霊じゃなければ、やれる自信はあるわ。
今月に入って5人目ですもの。

単体であれば私でも十分に扱える…！

ちなみに靈気を強さで感じることは私の能力とは関係ない。
ある程度靈感があつて、何度も靈に接していけば身につく感性。

「ふう…」

優：あなたならやれるわ…！自信をもって…」

いつものように自分を励まし、覚悟を決める。
経験はあるとはいえ、まだまだ見習い程度。
挑む際の緊張感は半端ではない。

男に気づかれぬように、ゆっくり尾行する優。

男は古びた倉庫に入って行った。

「あれ…
あそこを歩いている人…白風優さんじゃないか…！？
何してるんだろう…って、倉庫に入って行った…！！？
なんだろう…胸騒ぎがする…」

天城勇は倉庫へと足を向けた。

聖ヶ丘4丁目5番地・第5倉庫

やはりここは使われなくなった倉庫だ…。
外観からしてそんな気はしたけど…。

というか…なんか異臭がするわね…。
何かが腐っているような…。

酷い臭いだ…早く出たい。

それにしても…当然ながら真っ暗だ…。

さっきの男は何処にいったんだろう？

この空気…なんだかヤバイかも…。
ここに入ってから、倉庫内に凄い靈気を感じる…。

さっきの男から感じたものだけじゃない…。

まずったかもしれないな…。
他にも霊がいたら…完全にヤバイ…。

一対多なんて経験ないもの。

「！」

暗闇に目が慣れてきた瞬間、数メートル先…恐らく中心部に人影が見える。

さっきの男だろうか？

優は咄嗟に身を物陰に隠した。

「うっ…」

麗子お……………もう勘弁してくれ……………」

男が何かにすがりながら、怯えたように呟いている。

「……………ここからじゃ見えないわね……………近づかないと」

その瞬間…

カランツ…！

「！」

優は足元にあったピンを倒してしまった。

ツ…！

気づかれた！？

「……………誰か……………いるのか……………？」

男が立ち上がった。

こちらに歩いてくる！

やばッ……！

優は姿勢を低くして、急いで迂回した。

「……………気の……………せいかな？」

はあ……………はあ……………。
落ち着くのだよ。

！…どうやら中央付近までこれたようね…。

フニッ…

「！？」

優が手をついた部分に、何かとても柔らかい感触が…。

「きゃあああッ！…！」

！！……しまった！

思わず声を張り上げるのも致し方ない。
優の足元には死体が転がっていた。

衣服を身に着けていない…恐らく女性…。
優はすぐに目をそらしたので判別は出来ていない。

ただ、チラっと見えた髪の毛の長さからそう思った。

「誰だ……お前…」

いつからここに？…あ……それ見ちゃった？」

男が目の前に立ちふさがっている。

当然ながら見つかってしまった。

やばい……！

こんなケースは初めてだ！

霊よりも……この人間のほうがヤバイ！

「あ、あなた……これ……」

「見られちゃったらしようがないや。

そうだよ。それも……あれも……あれもあれもあれも」

男は次々と色んな方向を指差していく。

「そして……麗子も……みいーんな僕がやったんだ……」

死体は……この人だけじゃないってこと……！？

「全部で7人……」

眠ってるんだ……ここ。

君も今日から仲間入りだよ……君のその制服……この地元の子だね？
流石にこの地元から人が消えたら……ここ見つかったっちゃうかもなあ

……」

「あ！ま、まて…！」

男が優を追おうとした瞬間、
麗子と呼ばれる女性が凄まじい力で男の肩を掴み、引きとめた。

「ぐッ！何を…んだ！…は、離せ…！」

「さあ…みんな…」

「この憎き男を…喰らうとしましょう…」

そう言うと、一人…また一人と死者たちが立ち上がった。

そして、ひたひたと足を引きずりながら男のほうへ歩み寄っていく。

「…！」

優は考えていた。

自分はどうすればいいのかを。

今まで自分は霊に死を宣告された人間を少なからず救ってきた…。

それは時に、その人間のため…

また時に、霊自身のために…。

とり憑かれる側にも要因がある場合がある。

むしろその方が圧倒的に多い。

だからこそ霊自身に事情を聞き…そこから自分で考え判断する。

憑かれた側に反省が必要か否か。

もし必要であれば、私は霊の行為を無理に止めはしない。

だけど、殺させはしない…絶対に。

どんな経緯で怨みを生んだにしろ…霊に殺させはしない。

それで救われる魂はないからだ。

いつだってそうしてきた。

それが母や祖母からの教えであり、自身の信念だから。

目の前のあの男は大罪を犯した。

救う価値もないクズかもしれない。

でも…そんな人間でも、私はこれまで死から救ってきた。
他ならぬ霊のためにだ。

死してなお咎を背負い、成仏できず宙をさま迷う…。
そんな悲しい思い…させられない！

今だって私は救う気にいる…。
でも……

正直リスクが大きすぎる…。

彼女の霊気が外にいた頃よりも大きい…。

私の手に負えるレベルじゃないかもしれない…。
それに加えて他に6人…。

どうする…？

つて…ああ…私馬鹿だ。

考えるよりもほら、体が動いてるもん。

優は男のほうに駆け出していた。

「待って！！」

「……」

霊たちが優の方向を見る。

男はいえば助けてを連呼するばかりだ。

優は無言で男に近づいた。

「た、たす…」

バキッ！！！！

全力の右ストレートが男の顔面に入った。

「ガハッ！！」

「少し黙れ…このカスが」

「……………」

怯える男。

霊たちも唾然としているようだ。

「私の言葉…わかるね？」

その男があなたたちにしたこと…許されることじゃない…。
あなたたちがこの男を殺したいと思っているのもわかるわ」

「…わかる……？」

ビリッビリッ…！
空気が一瞬にして張り詰める。

「…。

私はあなた達のような人たちを沢山見てきた。
でも…私自身が経験したことは…もちろん無いわ…。
だから本当のところ…理解は出来ていないかもしれない。
私があなた達と同じ立場なら…同じように殺してやりたい気持ち
になるかもしれない」

「だったら…黙ってみていろ…」

この男は独りを装い…女に近づき…何人も騙し、
弄び…最後には拷問した拳句…殺した…」

「…」

「それでも…」

私たちはこの男を殺すまでに憎みはしなかった…
自分達の愚かさも感じていたし…

だが…この男は再び女を騙そうと計画する日々……なんの反省も
していない…

もう生かしてはおけない……そう判断した…。

彼女たちも同意してくれたよ……だから殺す……同じように苦し
めて……

死ぬ寸前まで苦しめて殺してやるんだ…！」

「…それはさせない…させるわけにはいかない…！」

「あ!？」

優がそう言った瞬間、麗子の半分崩れた顔が怒りに満ちた表情に変わった。

同時に男の肩を掴む手にも力が入った。指が肩にめり込むほどの力だ。

「ぐわあああああ!！」

男は悲鳴を上げる。

なんとという威圧感…。

面と向かってるだけで冷や汗が止まらない…。

恐怖で足の震えも止まらないし…。

今までで一番…かもね。

「ごめんね…。

でも…あなた達にそいつは殺させない…!

殺してもあなた達は救われないもの…。」

「関係のない…お前がでしゃばるな…。」

こいつより先に殺してやるうか?。」

矛先が私に向き始めた…まずい…

「この男の罪は私が警察に言うわ…
これだけのことをしたんだもの。死刑になるわ！
ね？…私に任せてくれないかな？」

「は？は？は？
なに？なんて？」

麗子の体が小刻みに震えだした。

！？
なに…？

こんなの初めて…やばい…！
理性を失ったの！？

まさかこれが…”狂気”！？

こうなったら交渉どころじゃない…！
どうする？どうすればいい？

ドンッ！！

麗子が物凄い勢いで優に突進してきた！

「！」

ドガッ！！

体が反応したのは彼女の体当たりを受けた瞬間だった。

「きゃあああああッ！」

優は勢いよく吹き飛ばされた！

その拍子に鉄柱に背中を打ちつけたようだ。

「…っっっ…」

痛い…なんてもんじゃないわよ…！
意識を失わなかっただけよかったわ…。

こんなことなら…お祖母ちゃんの霊術の修行もっと真剣にやっ
てればよかった…。

こんな状況じゃ治癒に集中も出来ない…！

このままだと本当にヤバイじゃん…私…。

”死”

ふと頭によぎった死の感覚。

死ぬ…！？

冗談じゃないわ…

こんなところで死ねない…！

お母さんとお父さんに…もう一度会っただ！

「はははははははははは！！立つ？立つ？立てる？」

麗子が徐々に迫ってくる。

完全に理性を失っているようだ。

「はあ…はあ…！来なさいよ！」

やるしかないものね…！

第1話 完

NEXT SIGN…

第2話 破邪の刃

S I G N 序章

第2話 破邪の刃

私の武器は一つ…。
邪を祓う霊力を込めた札…これのみ。

私自身が作ったものが数枚と、お祖母ちゃん仕込みの破邪札が2枚…。

今は目の前の、あの女性から確実に祓う。

本当はこんなやり方、嫌だけど…ごめんね。
私の力が足りないばかりに…。

でも死ぬわけにはいかないの…勝手なことを言ってるかもだけど…。
大丈夫、私を信じて…あの男もタダで済ますつもりはないからね！

「いくよ…！」

優は残る力を振り絞り、麗子に向かって正面を駆け出した！

「邪なる魂よ！迷わず逝かれよ…神のもとへ…！！はあッ！」

優は麗子の頭部に札を貼るべく、腕を突き出し突進した！

が…その瞬間激しい痛みが優の腹部を襲う！

「ガハッ…！」

何者かの腹部への打撃。

優の体はくの字型に曲がってしまった。

「く…！」

見ると他の死体が横から足を出して突進を止めたようだ。

自身の前に進む力と向かってくる力が重なったせいでダメージも大きいようだ。

「邪魔…死ね…殺す」

だめだ…あの女性の狂気にあてられて、他の6人も狂気化した…ッ！

このままじゃヤバイ…！

しゃがみこむ優に追い討ちをかけるべく理性を失った死体が襲い掛

かる！

ドガッ！！

その時だった。

何が起きたかわからなかったが、死体があらぬ方向へ飛んでいったのだ。

「！？」

「はぁ…はぁ…大丈夫ですか！？」

この声…

まさか……………！

暗闇から姿を現したのはクラスメイトの天城勇だ。

「あ、あなた…なんでここに！？」

ということとは、今ふつとばしたのって……………この人がやったの！？

「……………これはどういう事ですか…ッ！」

僕は夢を見ているのか……………死体が動き出すなんて…バイオハザー

「ドですか！」

「はは…。」

悪いけど、これは夢でもなければゲームでもないわ…現実よ」

「どつやら…そのようで…！はアッ…！」

迫り来る死体たちを容赦なく木刀でなぎ払う天城勇。

この人…強い！

ただの天然じゃなかったのね…！

「はあ…はあ！やっぱゾンビって殴ったくらいじゃ死なないですね…！」

次から次へとキリがなく起き上がってくる！

あ、すでに死んでるんですけど…！ははは」

「ははは…じゃない！いくらやっても意味はないわ！

体に傷はつくけど、基本的にダメージはないんだから。

やるなら粉々になるくらいじゃないとダメよ…！」

つていつても、そんなこと出来ない…。

気持ち的に無理よ…この人達は罪も無く殺された人達だもの。

「うらあぁっ！！」

バキッ！！

勇は近づく死体を容赦なく打ちのめす！

「って…あんた！何容赦ないことしてるのよ！？
この罰当たりッ！！」

「あ…やっぱりそうですよね……。
僕、呪われちゃったりしちやいますかね…」

ありえるぞ…いやほんと…。

「……でもね。僕、あなたを…白凧優さんを死なせるわけにはい
かないです。

僕は最悪呪われちゃっても、ほら、そこは巫女様の力で助けてく
ださい！

ね「！」

そういつてニコッと笑いかける勇。

「天城君…」

こんな時だっていうのに…。

ありがとう…。

「とにかくどうすれば、この状態から脱せるかを考えてください！
僕自慢じゃないですけど剣に集中してる間は物事を深く考えられないんです！」

天城勇は迫り来る死体をなぎ払いながら言った。

「わかったわ…！」

天城君：難しいことかもしれないけど、彼女たちをこれ以上傷つけないで！」

「……………ですね…！これでも自分心痛んでいますから！
女性に剣を振るうなんて、剣士失格です！」

ガシツ！

「え！？」

そういうと優の腕を掴んで全力で死体たちの間を駆け抜けた！

「ちょ、ちよつと…！…ッつ…！」

「ごめんなさい！」

あなたが何処か傷めてるのはわかりますが、今は辛抱して足を動

かしてください！」

全力で駆け抜ける二人、死体たちも反応はするものの、動きは鈍いようだ。

「そ、そうじゃないの！」

逃げないで！もういいから止まって！」

優がそう叫ぶと天城は足を止めた。

「はあ…はあ………」

「な、何故なんです？」

このままじゃ、また襲われるだけですよ！？」

「ふう…。いい？」

一つ！私は自分から首を突っ込んだことは最後までやり遂げる主義。

二つ！このまま私たちが逃げれば確実に無関係な人間が襲われる。だから逃げない！

お願い…あなただけ逃げて…」

「じゃ、じゃあせめて警察を呼ぶとか！」

「足手まといよ…。」

状況を把握できず混乱…何の役にも立たないわ。
あなたのその冷静さが普通じゃないわよ」

「そ、そうなのかな。はは…。」

この天然がっ！

適応力ありすぎだったの！

こんな非現実な状況…パニックに陥って当然だったのに…。

「さっきはありがとう…助けてくれて。

私なら一人で大丈夫だから。もう行って！」

「ううん。

僕は逃げないよ。君をおいて逃げるわけにはいかない」

「何を…言っ…！」

「ね…！」

彼の力強い目を見たら断れなくなった。

「天城君も馬鹿な人だね」

「かもね。はは！」

んで、僕に出来ることは？」

出来ること…か。

彼に注意をひかせて…その隙に札をはる…。

…！？

札が…

「……………う…嘘！？」

「ど、どうしたの？」

ふ、札がない…。

さっきの場所に落としたの！？

「…はあ…。

私としたことが…もうダメ…。切り札を落としてきちゃった…」

優はその場にしゃがみ込んだ。

「……白凧さん…僕がやります…。
あのゾンビさんには悪いかもしれませんが…徹底的に倒す以外無いのであれば…」

勇は木刀を握る手に力を入れた。

「木刀……。」

ツ！……これしかないか…！」

何かを思いついた優は立ち上がった。

「天城君…その木刀私に貸してくれない？」

「それは構いませんが…」

白凧さん、剣を使えるんですか？」

「やったことはないけど、一時的には振りぬけるはず」

霊力を使って筋力を一時的に高めれば…やれないことはないはず。

「それだったら僕がやりますよ！

そのほうが確実ですよ！」

「そうじゃないの。」

その木刀に私の霊力を込める…霊に打撃は通じなくても、これなら通じるはず！

呪印を書けないから長い時間、霊力を木刀に留めていられない…だからあなたにやってもらわねにもいかない」

「よくはわからないけど…それが最善策であるならお任せします」

勇は木刀を手渡した。

ズシッ！

「！…なにこれ……！？」

重い…。

木刀なんか初めて触ったけど…こんな重いものなのかしら…？

「重いです…よね？」

それ、ちよつと特別仕様なんです。女の子にはやつぱり厳しいんじゃないかな…」

確かにこれを振り回すのは無理があるわ…いくら一時的に力を増強するっていつても…。

だからと言って呪印なしに霊力を留められない…。

もう方法はないの…？

「例えば白凧さん自身にその…霊力ですか？

それを込めて殴ったり、そういうのじゃだめなんですか？」

「…確かに物に込める事が出来るんだから…私自身に留めることだって出来て当然よね！」

なんでそんな事に気づかなかつたの！？

てか…そうだよ！

よく考えたら普段筋力を上げる時も、霊力を集中して留めていたんだ…！

じゃあ、つまり…あの状態では霊的な攻撃力に変わってたんだ…！

「ふふふ…よっしゃ！

希望が見えてきたわ！行くわよ！」

優は麗子たちがいる方向へ戻っていった！

「…ひひ…見つけた…！」

麗子他6人もひたひたとろついている…！

こちらを視認したようだ…全員がこちらに足を向けた！

「ごめんね…こんな終わらせ方しか出来なくて…いくよ…!」

優は正面きつて突進した!

今度は他の6人も後ろにいる!邪魔はない!

「はぁッ!…!」

渾身の右ストレートが麗子の胸を打ちつける!

どうだ…!?

「…!優さん!危ない!」

え?

ドガッ!!

麗子の重い拳を腹部に受け、優は宙を舞った!

そしてそのままドラム缶に激突した。

「白風さんッ!…!」

急いで駆け寄る勇。

「ガハッ…

はぁ……………はぁ……………なんで……………」

血を吐く優。

二度にわたる腹部への強打、飛ばされた衝撃で背や腰にも相当のダメージがある。

「クソッ……………よくも！白凧さんを……………！」

私の靈気が弱すぎてダメージを与えられなかった……………？
そもそも靈力が拳に留まっていたの……………？

「も、もう一度……………！」

優はふらふらしながら立ち上がった！

「もう無理だ！白凧さんボロボロじゃないか！
ほら！立ってるのも限界じゃないか！」

「でも……………やらなくちゃ……………」

「無茶だ…！これ以上やったらあなたが死んじやいますよ…！」
僕がやります…！」

「…あなたじゃ…無理だつて…」

「そんな状態のあなたこそ無理です！」

お願いです…任せてください！本気で打ち込めば…碎けますから」

勇の顔が本気になった…！

…待てよ…？

「天城君…今朝やってた精神統一…」

あの時のあれ…やれる？」

「？…やれますけど…こんな時にですか！？」

「あの物凄い振り…私のほうまで風圧がきたでしょ…」

「渾身の一打…」

実はあれ、剣術の奥義を練習してるものなんです…。

うちの祖父はあの技で離れている場所の物を、斬り付けることが
出来ました…。

研ぎ澄まされた風は刃を生む……天城流剣術・奥義風刃剣…

僕にはまだ無理ですけど…風を放つぐらいなら…」

「もしかしたら…全員を一撃でやれるかもしれない……
大きな賭けだけどね…」

今出来る最善策…それしかない。
それがもし失敗したら…。

ううん。

失敗なんか考えるな！

絶対に出来る！

「チャンスは一度…」

はずせばあとはないと思って…」

「大丈夫です…僕はここ一番のほうやれるタイプですから。
不謹慎ですが…こういった緊張感は嫌いではないです」

OK…！

優は木刀を握る勇の両手を握った。

「！」

「いい？まだよ…彼女たちが横一列になった瞬間…」

「！なるほど…」

「いつもは縦一文字ですが…今日は横一文字ですね…！」

「ええ…！」

「あともう少し…！」

「優さん…その、このままの姿勢だと振りぬけないんですけど…」

「あ、ああごめんなさい！」

「勇は居合いの型をとった。」

「優は寝そべる形で斬撃の間合いに入らないようにしながら、かつ後ろに回された木刀の一部を握っている。」

「はあッ…！」

「よし…霊力を込めたわ！」

「まだよ…私が良いっていったら全力で振りぬいて頂戴！」

「私がこの手を離せば、すぐに霊力は抜けて行ってしまふ。だから振りぬく寸前までこの手は離せない。」

少しでも留めた状態で剣を振りぬけば、霊力の抜ける方向は彼女達の方向！
私の考え通りになれば全員に私の邪を祓う霊力を与えることができるはず！

「了解です……」

勇は目を閉じた。

すごい……近くにいると、威圧感を感じる……。

！！

え……なにこれ……！？

優は一瞬別のところに意識がいった！

その隙を彼女たちは見逃さなかった。

彼女達は勇に向かって一斉に襲い掛かってきた！

それに気づいた彼女は木刀から手を離し叫んだ！

「今よ！」

その瞬間物凄い勢いで木刀を振りぬいた天城勇。

木刀は彼女達に触れる事無く空を切る。

同時に勇たちに彼女達の体が降り注ぐ！

「うわっ！」

7人分の体当たりをくらい、勇たちは死体の下敷きになってしまった。

「うっっ…」

勇は優の腕を掴み、引っ張りつつ自分も這い出て行った。

「はあ…はあ…！」

大丈夫ですか…？白凧さん………」

「え…ええ…なんとかね………」

二人は死体の山からなんとか這い出ることが出来た。

「…動かない…ですね」

「みたいね…もう大丈夫よ…」

彼女達の霊気は感じない…今の一撃で消滅した…」

「か八か作戦はうまくはいったわ…あと一瞬タイミングが遅れてたら危なかった…」

でも…。

これじゃ…救ったことにならない…ッ…！
わかっていただけ…」

優は死体たちに手を合わせ一礼すると、無言のまま歩いていった。

「白凧さん…」

嬉しそうな顔はしなかったな…」

勇も同様に手を合わせ一礼をして優を追った。

「う…う…」

男が目を覚ました。

「…目が覚めた？」

「ひ、ひい！…あ、あれ…あいつらは！？」

男は慌てふためきながら叫んだ。

「もう…いないわ…」

「いない…？はは…！そうか…！はあ…
あの化け物どもめ…！」

化け物の一言に優はキレた。

静かに男に近づき、全力の右ストレートを顔面にお見舞いする！

「な、なにをしゃがる…このクソガキ…！」

「このクズ野郎…ッ！」

お前のほうがよほど化け物だよ！

私が彼女達の変わりにお前を半殺しにしてやるっか？」

そうやって男の右腕を掴むと思い切り本来曲がらない方向へ曲げて見せた。

ポキッ！！

嫌な音が響き渡り、男の絶叫が混ざり合う。

「次は左腕か？」

「も、もうやめて…お願いだ！」

泣き叫び、懇願する男。

「そうやって助けを求める人間に…お前はどうした？」

優が腕を掴もうとしたその時だった。

勇が彼女を後ろから抱きしめた。

「！…」

「…白風さん…」

もう十分です…あとは警察へ…法が彼を裁きます…」

「うっ……」

優は思い切り泣きじゃくった。

悔しかった。

無力な自分…。

自信過剰で自分ならどうにかできる…そう思ってた自分が腹立たしくて仕方がなかった。

第2話 完

N E X T S I G N …

第3話 白凧家の人々

S I G N 序章

第3話 白凧家の人々

パトカーが容疑者の男と彼女達の亡骸を運び、雨の降る闇に消えていく。

そう…。

あれからすぐに警察へ連絡し…ものの15分で到着。
男の逮捕、死体の回収。

逮捕時、男はブツブツと何かをつぶやくだけで、完全に精神が壊れていたかに見えた。

「んで…君達はなんでこんな所へ？」

「えっと…それはですね……」

倉庫内で若い刑事に尋問される天城勇と白凧優。
勇はなんと言ったらいいかわからずで、笑顔でごまかしているようだ。

優のほうはというと、まだ先ほどのことから立ち直れないでいるよ
うだ。

俯いたまま黙っている。

「君達ね！ちゃんと説明してくれなきゃわかんないだろ！？」

「まあまあ…鈴木。もういいから、お前先い署に戻ってる」

「ええ！？シンさん！でも…」

白髪交じりの老練の刑事が現れ、若い刑事に指示をする。

「でもも、へチマもねえ！言うとおりにしろ！」

「は、はい…」

そう言うと急いで外に出て行った。

「…ったく…。」

んでえ…君は白風優…さん…。

ほお…もしかして雪さんの娘さんかね？」

！…何故私の名を…それよりも…

「…母を…知ってるんですか？」

「ああしつとるよ。」

まああれだ…話は後々つてことで…いつまでもここには居たくないだろう？外に出ようや。

それと…一応調書とか書かないといけないし、悪いけど署まで来てもらえるかな？

もちろん今日じゃなくていい。明日にでもそこの彼氏と一緒に来てくれや。

聖ヶ丘5丁目の朝霞警察署だから」

「か、彼氏だなんて、僕そんな…ははは」

ポカンッ！

優は拳骨で勇の頭を思い切り殴った。

「彼氏じゃないですからッ！」

「…殴らなくても」

はしゃぐからよ！

もお！

「あはは！やっと笑顔になったな！

雪さんに良く似てる…」

「刑事さんはお母さんをよく知ってるんですね…
どうしてですか…?」

そう尋ねるとシン刑事は頭をボリボリとかきながら倉庫の出口へ向かいつつ応えた。

「とりあえず、家に送ろう。」

話は向かいながらでもできるしなあ」

そういつて三人はパトカーに乗った。

「彼氏のほうは家は何処なんだい?」

「えーっと」

「彼氏じゃないですからッ!

それと天城君も家によってもらうんで…うちをお願いします」

「ええ!?!いいんですか!?!」

く…予想通りはしゃぎおつて…この天然男めっ！

「色々と話したいことあるし…」

君の怪我もどうかしないかしね。

私に気を使って言わないでいるのかしれないけど…あちこち傷だらけじゃない…。

素直に言いなさいよ…馬鹿！

「わくわく！」

「一応親御さんには連絡入れたほうがいいんじゃないかあ？
もう21時回ってるからなあ」

ええ！？

もうそんな時間なの！？

雨も強いし…。

なんだかとんでもない一日だったな…。

「親にはさっきメールしてきましたから…大丈夫です！」

優は笑顔で携帯を見せた。

パトカーはゆっくりと白凧神社を目指して走り始める。

「いやはや…それにしても思い出すよ！」

君のお母さん…雪さんと、お父さんの蓮次さんもなあ、こうして乗せたことがあるんだよ」

ええええええ！？

「お、お母さんとお父さん…パトカーに乗るだなんて…。」

いったい何をやらかしたのよ…。前科持ちだったんだ…なんかシヨック…」

「いやいや！そうじゃなくてだね。」

君達のように事件に巻き込まれて、乗せたって意味だよ」

な、なんだ…。

「年も君達と同じ頃だったかなあ……」

「そうなんだあ……親子そろって……なんかすみません」

「いやいや……」

「……今回の件も……霊がらみの事件なんだろう？」

え！？

「はは。その顔を見るとやっぱりそうか」

「刑事さん……なんで……」

シン刑事は驚く優の顔を見てニヤリと笑った。

「どうしてかって？」

それは、もうこういふのには慣れっこだからさ。

ワシに靈感なんぞはないが、さっきの現場の死体や……あの犯人の男を見れば察しはつく。

そして決め手は君！

「慣れっ…って…」

どういうことなの!?

「君のご両親も昔何度も殺人事件を解決したり、我々警察に秘密裏に協力してくれてたんだよ。

こういった一般常識の通じない不可解な事件なんかにな」

!…もしか…あれのことか…。

「…ゴーストバスターズ…」

「あはは!そうそう!

彼らはそういつて活動してたっけなあ…懐かしい!」

私はどうみてもダサイネーミングセンスだと思って育ってきましたが…。

「君達も2代目ゴーストバスターズ目指して活動してるんだろ?」

「違います!断じて!

私はそんなダサイことはしません!

それに彼は無関係です」

うう〜っと少しなみだ目でこちらを見る天城勇。
子供かつ！

「まあまあ！とにかくにも…
あまり無茶だけはしないでくれな。ご両親は…まだ見つかったは
いないんだろう？」

…。

優は俯いてしまった。

「っと…余計なことだったかね…」

「…いえ。大丈夫です。
それに両親は死んでません…絶対に」

「…（優さん…）」

それからしばらく、無言の時間が流れた。
何か気まずい空気が流れ、外の雨音だけがやたら耳についた。

そうしてるうちに白凧神社へと到着した。

「っと…ここだな。お疲れさん！二人とも」

「刑事さんありがとございました！」

「ワシは八坂 やさか 真 しん。

こいつはワシの携帯番号とメールアドレスだ。

何かあればワシに言ってくれ。

署のモンはああいう事件には全く慣れてない…というか理解も出
来ないと思うからな」

二人は名刺を受け取った。

まあそうだろう。

この人が異例だといえる。

普通の人に言ったところで理解できない話だからね。

「じゃあな！明日、忘れずに署に来てくれな。

なあに…形式だけのもんだから心配しなくていい」

そう言つとシン刑事は行ってしまった。

「なんだかすごいね…白凧さん」

「何が?…というか濡れるわ。」

「話は中でしましょ?」

優は門をくぐり、駆け足で玄関先へ向かった。
後を追う様に勇も急ぐ。

「いつみても…なんかいいですね…白凧神社」

そういうものかしら…。

私は住んでるから…そういう風に感じたことないなあ。

ガラガラッ!

「ただいまあ!…さ、入って」

「お、お邪魔します」

ドタドタドタ!

祖母・茜が走ってきた。

かと思ったらポカンと頭を小突かれる優。

「いつ………たあぁいッ！！何するのさ！」

「何するじゃない！」

連絡もよこさんと！こんな夜更けまで！

しかも男連れとはどういうことじゃ！

この不良孫め！」

「な…！」

私にだって理由があるんだからッ！

何よ頭ごなしに！」

二人の言い合いになって口を挟めない勇。

「ええーっと…！」

『なに！？』

二人してハモらなくても…そう思う勇であった。

ようやく落ち着き、3人は客間で腰を落ち着かせる。

「なるほど…そういう事があったのかえ」

茜は勇の傷を治療しながら言った。

「す、すごい…！痛みが消えた…」

「もう大丈夫じゃろ？次は優…お主を見ようか」

勇と入れ替わりに優が祖母の前に座った。

「お祖母ちゃんの治癒術はすごいでしょ！

切り傷、打ち身、その他骨折とかも完治はしないまでも回復の促進とか、ほんとすごいの！」

自慢げに笑顔で語る優。

「これッ！」

自慢することではないわっ！

第一無関係の人間に使ってよいものでもないというに…

今回は優を救ってくれた事に対する礼！特別じゃ！」

「まったくケチケチして！そんだけの力なんだもん、もっとオープンにすればいいのに」

「はあ……。
よいか？優……何度も言うが、ワシらの力は一般的には異端じゃ……。
いかに便利で有能であれ……普通の人間からすればワシらは化け物
じゃ
」

「……」

「人はの……人知を超えた物事を畏怖し……、存在を否定し……拒絶する。
色々な人間に知られれば、ワシらは化け物扱いされ……迫害の対象
となる……」

「わかってる……わかってるわよ」

そうだった……。
この人……天城勇……。

この人のリアクションが全然引かないっていうか……拒絶をしないか
ら……。
こちら側の人間のように接してしまっていた。

人は最初だけ有難がり……次第に妬みに変わり……そして最後には非
難の対象にする。
悲しいかな、それが人の性……。

忘れてはいけないことだ…。

「僕にも…なんとなくその気持ちが変わります…。

祖父も同じように剣術の世界から迫害を受けていました…。

お前の剣はペテンだとか…。

ちよつと人より秀でて…出来ないことをやってのけるものだから…。

でもそれは血の滲む様な努力の先に手にした力で…

そういう事を出来ない人間に祖父が馬鹿にされるのが…たまらなく嫌でした」

「天城君…」

「だから僕は…祖父と同じ道を行こうと思ってます。

人からどんなにさげすまれようが、馬鹿にされようが…

自分の道を貫きます！祖父と同じように。

死に際に祖父はとても清しい顔をしていました。

僕はそんな祖父を尊敬してるし…それに…何より剣が好きだから」

満面の笑みを浮かべてそう語る勇。

「お主、なかなかいい男であるな。見直したぞ」

「あ、ありがとうございます！」

僕！天城勇と申します！よろしくお願いします！」

治療が終わった優は立ち上がって勇を見た。

「お祖母ちゃん、ちょっと見て欲しいの」

「見る？」

優は勇に木刀を構えるように言った。

「こ、こんな客間で振るんですか!？」

「振らなくてもいいの。」

ただ、あの精神統一モードになってほしいの」

「は、はあ…。」

よくわかりませんが…わかりました」

勇は木刀を構えて目を閉じ…精神統一を始めた。

ザワツ…!

…ッ…!
来た…ッ!

「な…!？」

祖母、茜も驚きの表情を見せる。

「ね…すごい靈気なの…!この人」

茜と優には天城勇の放つ、巨大な靈気を感じていた。

タタタタ…!

何処からか足音が近づいてきた。
と、同時にガラツとふすまが開けられた!

「なに!?!どうしたの!?!この靈気!?!」

現れたのは優の姉。
長女・白凧亜子。

「あ、亜子姉ちゃん」

「…優のお友達…？」

びっくりするじゃない！

急に感じたことのない、すごい靈氣が家の中からするんだもん」

「あはは…ごめんなさい！天城君！もういいわよ！」

そついうとゆっくり目を開ける、同時に靈氣が静まっていく。

「こんなんでもよかったんですかね…って…あれ！？

あ、あわわ！えーっと…お姉さま？…ですか？」

「あ…はい。

姉の亜子と言います。はじめまして」

「うわあぁっ！お姉さまも美人だ！

は、はじめまして！ぼ、僕！天城勇っていいいます！」

こ、こいつ…。

なんだろ、なんか今ものすごく殴りたくなった。

「あつは！美人だなんて…上手いこというわね！

それに妹と同じ名前なんだ！すごい偶然ね！」

「漢字は違うんですけどね！僕のは勇ましいの勇です！」

「いあいあ！ホントのことですよ！自分嘘がつけませんからっ！」

姉と勇が和気藹々と話している最中、祖母と優は話しを始めた。

「驚いたのお…霊気の強さで言えばお前よりも上だよ…優」

「そう…だと思っ。」

彼、今朝も今と同じように精神統一してたんだけど…その時はまるで何も感じなかったのに…

恐らくさっきの戦いで私の霊力に反応して覚醒したんだと思うけ

ど…」

「それにしてもじゃ…」

内にこれだけの霊気を秘めていたとなると…血かのう？

霊術師の血筋の者かもしれんぞ？」

「ねえ、勇君晩御飯はまだなんでしょ？
うちで食べていったら？」

っていつの間にそんな話になってるのよ！

「え…でも…」

チラッと優を見る勇。

「なんで私の顔を見るのよ！
お祖母ちゃん別に構わないよね？」

「ああ。ワシと亜子はもう食べたから…お主等の分をこさえてくる
とするかね」

「あ！お祖母ちゃん！私も少しだけ！」

亜子が手を上げて言った。

「そう言つと思つたわ。3人分用意してくる。
まっとなれい」

そう言つと茜は客間を跡にした。

「そつだ！優：あなたまた危ない事したの？
その制服！ボロボロじゃない！」

「ああ…うん。ちょっとね…あは」

「あは！じゃない！

みつともないから着替えてらっしやい！」

「むう！亜子ねえはいつつも口づるさいったらありやしない！
お祖母ちゃんそっくりね！」

「なんですってえ！」

スタコラと優は部屋を出て行った。

「まったく…いつまでも子供なんだから」

「はは…！いいですね姉妹って」

勇が羨ましそうに亜子を見た。

「勇君は兄弟は？」

「いえ…僕は一人っ子です。

だから兄弟とか姉妹とか…なんかいいなって」

「そっか…」

ドタドタ！

「おまたあ！」

優が戻ってきた。

普通に白いTシャツに体操着のズボンだ。

「…あんたねえ…」

彼がいるのに、よくそんな恰好でいれるわね…」

「か、彼つてなによ！」

天城君はただのクラスメイト！

それ以上でも以下でもないわ！」

うっ…と涙目になる天城勇。

「おおおよしよし…」

「らっ！勇君をいじめるんじゃない！」

「な…！私は何も！」

この天然男…きいいいッ!!

「こりゃ！お主等客間でドタバタするでない！」

茜が戻ってきた。

いい匂いが部屋を包み込む。

「白凧家特製カレーじゃ！」

「うわああ！やったあ！今日カレーなんだ！」

「はは！すごいや！うずらの卵が入ってる！」

(こごやってみると、優さんも普通の女の子なんだなって思うな

…。さっきの優さんとは…ううん

どっちも僕の好きな彼女だよ…うん)」

今日という日は本当に色々なことがあったけど…。

でもこうして4人で楽しい時間を味わえるのは生きてるからなんだ
って…すごく実感できた。

『いっただきまあー！す！』

第3話 完

N
E
X
T

S
I
G
N
…

第4話 目覚め

S I G N 序章

第4話 目覚め

「う…ううーん……」

もう朝かあ…。

昨日はなんか色々あつて疲れちゃったな。

お！雨があがつてる！

今日は快晴なりねえ！

優はトイレ・洗顔・歯磨きを早々に済ませ、制服に着替えた。

うしつと！

まだ7時…か。

昨日晩御飯遅かったから…お腹空かないなあ。
でも食べないとお祖母ちゃん煩いだろうなあ。

「んー…」

『優！』

居間のほうからお祖母ちゃんの声だ。
朝ご飯食べるーってことかな。

優は居間に向かった。

「はいはい！今日は食べて行きますよーだ！」

つて…あれ？
料理がない…。

「座って…」

「？…どうしたの？
朝からそんな深刻そうな顔して」

「昨日は天城君が居た手前…言わなかったのだが…。
お主…最近”印”を度々見るといふのは本当かの？」

「うん。今月に入って昨日で5人！今日が6月17日でしょ…
17日で5人って…なんか今までに経験がないくらい多いわね」

「うむ…月に一人いるかないか…その程度だったのに…これは異常といわざるを得ぬ」

祖母・茜の表情がゆがむ。

「やっぱり…そうなの？」

「うむ…。過去に何度かあったことは確かじゃが…。

私が知る限り…近年このような事態は、
記憶が間違っておらねば…20年前かの…それ以来じゃ」

「何が原因なの？」

「うむ…理由は定かではないが…印が出るほどの怨念を生むというのは…」

今の不景気も要因のひとつであろうな…。
とにかく負の感情が霊を狂気に走らせる…いわば強壮剤のようになっているのやもしれん」

「狂気か…」

昨日の霊も…急に狂気化しちゃってね…。

しかも理性を保っていた他の霊まで影響つけちゃってさあ。

私…あんなの初めてだった」

「優…」

「今後は印を見たとしても…深追いはするでない」

「え？何よ…それ」

「意味わかんない…私には無理って言いたいの!？」

「この際じゃからハツキリ言う。」

「お主はまだまだ半人前…いやそれ以下じゃ。」

「今まで幾度となく霊を救ってきた功績は認めるし、素質もある」

「だったら!」

「それを凌ぐ、また次元が違う相手が出るかも知れんのじゃ…
経験の浅いお主では…何も出来ぬまま殺されるのがオチ…」

「!…それって……。」

「まさか…”妖魔”……?」

「あくまで可能性の話じゃ…」

「それ以前に狂気化した本当に強力な怨霊とお主はやりあったこと
がない…」

「もっとも経験すれば…今のお主なら確実に死ぬだろうがな」

「なによ…!」

”よいな!今後見かけても首を突っ込むでないぞ!!”

「身を守る術、戦う術をちゃんと一から教えるからそれまでは待て!”

だつてさ…!」

んな事言つたつて…目の前で死を宣告されてる人間を見て見ぬ振りをしろつていうの!?

そんなこと…したくないじゃない。

優は考え事をしながら学校へ向かった。

周りの人に声をかけられた気がしたが、集中してたため気がつかなかったようだ。

気づけば校門の前についていた。

「8時か…もうすぐ始業だ。教室に急ごう」

グラウンドを見てみた。

天城勇の姿はないようだ。

流石にこの時間だからもう教室にいったのかな。

聖ヶ丘高等学校1 - B組

ガラガラッ

「おはよー!」

皆が声をかけてくれる。

優は挨拶をかわしながら自分の席へ。

右斜めに彼、天城勇の席がある。

勇は自席でボーっとしている。

「おーい!おっす!」

「…」

反応がない。

「もしもし！」

「」

どうしたんだ？

顔を覗き込む優。

「はっ！わ！わわわ…！」

白風優さん！ど、どどどどどうしたんですか！いきなり！

「それはこっちの台詞。」

どうしたの？なんかぼーっとしちゃって…」

「にじじじゃ…その…話じつらるので…」

休憩時間に…ちょっと付き合ってもらえますか？

？

何かあったのかな？

休憩時間

屋上

「で…」

話ってなに？わざわざ屋上まで来たんだから、そろそろ話してみ
「！」

「それがですね…」

僕…急に見え始めちゃって……」

見え始める？

「その…おばけが…」

ああ！

そうか…この人、今まで霊感が全くなかったんだ。
それじゃ戸惑うかもねえ。

「その…正直戸惑ってます…」

僕、実は怖いものベスト3にお化けがランクインしてるほどな
んです…」

「つつても、そんなにいるってわけでもないでしょ？」

よく幽霊を信じない人間が言う台詞がある。
幽霊がほんとにいたら、今まで死んでいった何億、何兆の幽霊がいるじゃないか…とかなんとか。

実際そんなにいるわけがない。
成仏できない霊がさ迷うだけで、ほとんどの霊が成仏して地上には残っていない。

私自身天国や地獄があるのかはわからないけど、確かに天に昇っていくことは実際に目にはしている。
昇天っていうけど、ほんとなんだなって思った。

「で、でもですよ!？」

ひ、人が透けてるんですよ!?!こっちを見てたりするんですよ!
「？」

「お、落ち着きなさいってば!

ま、まあ最初は色々あるかもだけど、そのうち慣れてくるからさ
「！」

「そ、そういうものなんですかね…。
わかりました…ありがとつです…」

わかりましたつて…

物凄い落ち込みようじゃない…。

「むう…よし！」

「じゃあ景気付けにうちに遊びにくる？」

「え！？いいんですか！？」

「げ、現金な奴だな…正直というかなんというか…。

まあ落ち込んだ顔よりは…やっぱり…。

はっ！

また私ってば！だめ！だめよ優！

「？」

「と、とにかく！放課後私の家に行くわよ！」

はい！と物凄い笑顔で返された。

放課後

「よし！じゃあ行くわよ！」

「はい！お供します！」

って…私いつの間にか、この人とすごい仲良しになってる…。
それもすごく！物凄く自然に！！

なんという恐ろしい…！
というか…昨日までしゃべったことすらなかったのに…この急接近
はなんなの！？
ふ、普通なのかしら…？

いきなり友達になった男を…自宅に招きいれるなんて！
わ、私って第三者的にみたら、物凄い大胆すぎじゃないの！？

て、てか…

ふ、ふしだら者ですか！？

えええええ！？

お、落ち着くのよ！

な、なにもそんなつもりじゃないし！

て、てか！

よくよく考えたら…私男の子を家に呼んだことなんか…今まで一度

も無かったじゃないの！

なんということ…！

今までやれなかった色々なことをわずか2日で色々しちゃってるわ
！私！

「はわわ…」

「ど、どうしたの？白風さん」

ポツ！

や、やだ！

なにこれ…急に意識しだしちゃった！
か、顔赤くなってたらどうしよう…！

べ、別にそんなんじゃないんだからっ！

って、私ツンデレみたいじゃないの！

「な、なによ！あんななか！」

パチンッ

あ！思わずひっぱたいちゃった！

「な、なぜ…」

「ご、ごめん！私何やってるんだろう！」

「あ！」

「え？」

勇が急に何かを思い出したかのような顔をした。

「警察！いかなきゃ！」

あ！！

すっかり忘れてたよ！

そうだった…聴取にいかなきゃだった。

「じゃ、じゃあ今から行きますか」

「そ、そうね…」

二人は方向を変え警察へ向かった。

聖ヶ丘5丁目・朝霞警察署
刑事課

「シンさん！八坂警部！」

「あんだよ！鈴木！どうした！」

「昨日の事件なんすけど…どう思います？」

「どつって何が？」

「腐乱死体…あちこち傷が残ってましたよね。
鑑識の話じゃ死後ついたもので…というかごく最近のものらしい
っすよ！」

「へえ…」

「へえ…って！」

「あいつがやったのかな…」

「あいつ？」

「ええ！昨日の高校生の小僧ですよ！」

「木刀持った！傷跡は棒状の何かによる殴打痕…間違いないっすよ」

…あのガキ！」

「鈴木ッ！！」

シン刑事が声を張り上げた。

「…な、なんです」

「終わったヤマだ…あんま気にするな」

「気にするなつて…死体を弄ったかもしれないんですよ！？」

「じゃあ何か？あの少年が死体を木刀で殴ったてののか？」

「何のために？証拠は？犯人の野郎がやったかもしれんだろ？ええ！？」

「そ、それは…」

「とにかくだ！…下手に疑ってかかるもんじゃねえ…」。

俺達は疑うのが商売だが、だからこそ見あまっちゃならねえ。よく覚えておけ…」

「……はい」

「八坂警部！受付から電話ですよ！」

シン刑事は近くの電話に出た。

「はい。八坂…」

「おお来たかい！了解だ。すぐにそっちに行くから待たせておいてくれ」

ガチャ

「今の電話…例の二人ですか？」

「ああ。噂をすればなんとやらだな。

「じゃあちよっくら出迎えにいつてくる。茶の準備でもしててくれや」

「やあ二人ともよく来てくれたね」

椅子で寛いでいた二人の前にシン刑事が現れた。

二人はすぐに立ち上がった。

「いえ、昨日は送っていただいたありがとうございます」

「遅くなってすみませんでした」

「いやいや。君達は学生だろう。」

その辺りは心得てるつもりさ。

遅くなっても悪いからな、とっとと済ませよう」

こっちへ来てくれと二人を連れて階段を上る。

3階についた。

「さあこっちだ。」

緊張してるかい？安心しな、形式だけっていったら？

相手はワシだし、そう気張るな。先に入って座っててくれ」

少し安心した。

警察ってなんか怖いイメージが強かっただけに、ああやって親切にしてもらえると安心するものである。

それからしばらくして、調書とお茶にお菓子を持ってシン刑事がやってきた。

なんともイメージする取調べとは違い、お菓子を食べながら、他愛

無い話を交えつつ…。

事実関係をありのまま話しながら聴取は30分ほどで終わった。

「ご苦労だったね…」

「私…何も罰せられないんですか？」

あの男の腕折りましたけど…」

「いや…気にせんでいい。

君のやったことを咎める人間はおらんよ。

それにしても、よく正直に話したね」

「私は…私の正義であの行為をしました。

もし、それでたとえ裁かれたとしても…後悔はありません。

だから正直に話しました」

「はは！ますます雪さんに似てるよ！

気に入った！また何かあったらワシにいつてくれな」

「ええ。シンさんお仕事頑張ってくださいね」

「自分も何かあれば相談します！シン警部！」

「あはは！おうよ！いつでもきな！

彼女を守ってやんなよ！剣士！」

「はい！」

むう…。

剣士…か。

まあ…彼氏よりかはいいかな。

「じゃあ帰ろうか。今日はもう日も暮れるし！」

「ですね！もう6時になりますしね！」

あ、送っていかなくても大丈夫ですか？

というか、どの道自分は帰るのに白凧さんの家通りますし…

うん！一緒に帰りましょう！そうしましょう！」

「って…なんか強引ね…」。

まあいいわ。じゃあ送ってもらいます！」

「らじゃっ！」

二人は夕暮れ道を笑顔で帰っていった。

これから恐怖が二人を待ち受けているとも知らずに…。

第4話 完

NEXT SIGN…

第5話 最悪の敵

S I G N 序章

第5話 最悪の敵

「…」

なんだか…こうして二人きりで帰ってると…
こ、ここここ恋人みたい…思われるんだろうか…。

む、むづ…

べ、別に天城君は嫌いじゃないし…。

な、なんだろこの気持ち…。

「…さん！優さん！？」

「へ！？」

な、なに！？どうしたの！？

「いえ…何度も話しかけてるんですけど、返答がないので…。
どうかしました？」

「な、なんでもないわよ！」

うづ…調子狂うなあ！

ザワツ…！

「え…」

「？……どうかしましたか？白風さん」

この感じ…

間違いない…。

辺りを見回してみる。

すると電信柱の前にぼーっと突っ立っている男性がいる。
身なりを見る限り…大学生くらいの男性だ。

「…白風…さん？」

「見えるのよ…」サイン」が

どうする…？

というか、まだ陽も落ちきってない上に、ここは人通り結構あるよ！？

こんなところであの人…死ぬ気でのいるの？

もしかして、これから移動をはじめるとか？

…てか、私…関わったらダメって言われてるんだよね…どうする…
どうすればいい！？

「あの男性…ですか。」

僕には何も見えないですね…やっぱり」

そうだ…！

今は彼がいるんだ…力はまだ自在に操れないけど…。
いざとなれば二人でかかれば問題ないわ！

いくのよ…！

それにしても連日遭遇なんて…ほんと普通じゃないわよッ…！

優はゆっくりと男性に近づいた。

そのあとを勇がぴったりとくっついていく。

「あ、あのー…」

「?…はい?」

え…?

サインが消えた…?

誤反応…だったの?

「あ、いえ…ごめんなさい、人違いでした」

「?…そう」

そついつと男性は歩き出した。

「白風さん…どうしたんです?」

「わからない…急にサインが消えた…
こんな事初めてだ…」

ザワツ…!ザワ…。

印が出ている者の近くにいると感じる、このざらつく感じが消えて

ない…。

…でもサインが出ていない…。
どういふことなの？

その時だった。

「ええ…！？」

前方を歩くあの男に再びサインが！

「どづいつこと…！？」

「また印が出たんですか？」

「ええ…あの男に確かに見えてる…
やっぱりさっきの見間違いない」

「出たり消えたりって…
その印は霊が憑依している人間を殺そうとしている警告なんです
よね？」

「ええ…もうすぐにでも”殺つてやる”ってサインよ…。
あれが出た以上ターゲットは必ず殺される…数時間のうちにね…」

「それが出たり消えたりって…迷ってるってことですか…?」

わからない…。

そんなケース私だって初めてだもの…!

「とにかくあの人をこっそりつけましょう…」

殺る気であれば人気の無いところに必ずいくはず…」

ごめんお祖母ちゃん…やっぱり無視なんて出来ないや…!

二人は男の尾行を開始した。

距離は十分保ちつつ、逃がさない程度の速さで尾行する。

「ばれてないんですかね…?」

「多分ね…」

段々暗くなってきた上に、人通りの少ない方向へむかっている…。

やっぱり…あの人を殺す気ね…ッ!

相手が一人であれば大丈夫…！
今日は彼もいるし、私も札を持つてる。

いけるわ…！

何よりあの人から感じる霊気は昨日の霊より遥かに小さい。

…大丈夫！

尾行を続けて30分ほど経った…その時…。

男は歩みを止めた。

男の最終地点は建物のような屋内ではなく、何も無い空き地だ。
雑草が生い茂ってる。

辺りを見回しても人気はない…。

あちらにとっても、こちらにとっても…ここなら問題ないだろう。

その時だった。

「くくく…出ておいでよ。女子高生とその彼氏君」

『!?!』

二人は同時に驚いた。

気づかれてた!?
いつから…!?

「……白凧さん…もしかして…僕達…」

「誘い込まれた…みたいだね」

二人はゆっくりと物陰から姿を現した。

それを感じたのか、男もゆっくりと振り返った。

特に威圧感も感じない…憑依されているような感じもあまりない。

正常を保っているように思える。

「またサインが出ていない…。
今ならまだ話を通じるかもしれないわ！
ねえ！とり憑いてる人…ッ！わかる？出てきて欲しいの」

優がそう言うと、辺りがざわつき始める。

ビリッ！ビリッ！！

空気が張り詰める！

物凄い威圧感だ！

「く…！」

一瞬にして男を包む霊気の大きさが膨れ上がる！

こいつ…！？

今まで猫をかぶっていたの…！？

凄いプレッシャーだ…！

霊気の大きさがヤバさを物語っている…。

間違いない。

これは相手に出来るレベルじゃない…！

たとえ天城君と組んでやったところでも恐らく…！

「はは…！愚かな人間…」

ひよっとして、私をなだめようとするつもりだったか？」

ドサッ！

勇が片足を地につけた。

「天城君！？」

「はあ……はあ……」

息が絶え絶え…おまけにすごい量の汗をかいている。

無理もないか…これだけの靈気をあてられちゃ…！

！！！！！！

優は目を疑った。

「天城……君……」

彼にサインが見える……。

見えなくなつたんじゃないやなくて……ターゲットを選んでた……？

そんなことが……出来るの！？

憑依しない相手なのに……？

「君達……」

それで隠してるつもりかもしれないけど……普通じゃないよね？

人間にしては、物凄く大きな”気”だ……。

どちらかといえば、私達よりだよね」

「え！？」

こいつ……一体……！？

普通の霊じゃ……ないの！？

「特に君……」

実に弱々しいけど、内なる霊気はすごいよね？

”器”が物語ってるよ」

天城勇を指差し、そう言うと次の瞬間だ！

10m…確かにそれだけの距離があったのに…
一瞬にして勇の目の前にいる…!

ガタガタ…

優は震えが止まらなかった。

「くく…君たちあれかなあ？」

霊感が少しばかりあるから、お払いごっこでもしてた？

だめだよ？ちよつとした出来心がこうやって死を招く…くく」

二人を見下すかのように不気味な笑みを浮かべながら男は言う。

ダメだ…体が動かない…!

「ちなみに、殺す前に教えてあげる。

私は人間霊ではない…狐だよ。

君達を見つけたとき、ご馳走だと思ったよ…。

だから解りやすいように…誘ってみたんだ…!くくく!まんまと
食いついたねえ!

くく…どうかな?イメージ通り…ずる賢いだろ?」

動物霊…く…!

なんでこんなところにいるのよ…!

「その顔…察するに、私のような動物霊がなぜこんな所にいるのか…かな？」

それはこの男がいけないんだよ。興味本位で私の住処を荒らすんだもの。

阿須磨山つて知ってるかなあ？霊山なんだけどねえ…そこから憑いてきちゃったんだよ…」

自分を指差しながら喋る狐。

徐々に表情が狂気に染まっていく。

ゾゾゾ…！
ゾクッ！

「人間を…喰らいにねッ…！」

ドサッ！

あまりの威圧感に、天城勇はその場に倒れこんだ。

優も倒れそうになるものの、片足を地につける程度で踏みとどまっている。

「これだけ威嚇しても倒れないか…気に入ったよ人間」

余裕の笑みを浮かべる狐。

「く…！」

体は動かないが、目で威嚇する優。

「いい眼だね…。」

決して屈することの無い…光に満ちたい眼だ。

その強気な姿勢がいつまでとれるか…実に見ものだね…」

そついうと狐は倒れた勇の首に手を回した。

「…！や、やめろ…！」

「いいね…その顔…」

私が本気でやれば…一瞬でねじ切れる…。

まあ…この”入れ物”も壊れるかもだけどね…クク！

まあどのみちこの入れ物も用が済んだら喰ってやるんだけどね」

体が動かない…！

助けなきゃなのに……なんて言うこと聞かないのよ！

私の馬鹿…ッ！！

はあ…はあ…

助けて…お祖母ちゃん…！

「ははは！動けないようだね…。
可哀想に…じゃあお別れだよ…彼氏君…」

狐が首に回した右手に力を入れようとしたその瞬間だった！

”何か”が奴を攻撃した。

その何かはわからなかったが、狐の体は遙か遠方に飛ばされた。

ザッ…

「間に合ったみたいね…」

いっの声…

「やれやれ！あれほど関わるなといったのに…このポケ孫め…！」

ああ…！

お姉ちゃん…お祖母ちゃん!!

「大丈夫?…優」

「う、うん……」

私…私……」

優は亜子に抱きついて泣き出した。

「よしよし…わかったから……」

「あとでおしおき覚悟するんじゃぞ!優!」

「…ぐす…うん!」

優は倒れた勇の肩を担ぎ抱えて後ろに下がった。

「お祖母ちゃん…どう?」

「この感じ…狐様じゃなあ……」。

まあ若造のようじゃし…大丈夫じゃろ……」

ビリッ！

ビリッ！！

空気が再び張り詰める！

「ひひ…若造だあ…？」

人間風情が…調子に乗るなよ…？」

狐が立ち上がった。

「やりあう前に交渉といきませぬか…？狐様…」

「交渉…だと？」

茜は交渉を持ちかけた。

「怒りを鎮めて…眠れる地に戻ってはくださらぬか？
わたしらに出来ることであればする…どつかのつ？
考えては下さらぬか？」

「嫌だね…私は人間を喰らう…何が何でもね…くく」

「やれやれ…では仕方が無い」

「お祖母ちゃん…器である憑依されているあの男性…どうします？あれでしたら”剥がし”ますけど」

「構わんよ…。どこの山から連れてきてしまった責任はあやつにもある。」

多少痛めつけねばまた同じ事をするじゃろて…」

「ですね」

「ごちゃごちゃ喋ってるんじゃないよ…人間共ッ！！」

何処までも狐様を馬鹿にしおつて！！」

逆上する狐…今にも飛び掛らんばかりにいきり立っている。
威圧感も今まで以上ではあるが、対峙する茜と亜子は平然としてい
る。

「う、ううう。。」

あれ…？……」

勇が目を覚ました。

「気がついた？…お姉ちゃんとお祖母ちゃんが来てくれたの！」

「僕…：…気を失ったんですか…？」

勇は俯いた。

その表情は悔しさがにじみ出ていたかに見えた。

「仕方ないよ…。あの霊…動物霊だった…：…しかも狐…。

私達じゃどうしようもない相手だわ…。

まさかこんな街中にいるなんて思いもよらなかった…。」

私…：…こんなことばかりだ。

自信過剰の割に、結局何も出来ない…。

力が欲しい…！

「ふむ…。

いきり立ってはいるものの…：やはり狐様じゃのう…。

冷静を保っておる。襲ってこん」

「ええ…。何か企てているんでしょう…。
化かし合いでは分が悪いかもしれません…」

狐はこちらを見据えたまま動かないでいる。
それはこちらと同じ…。

何しろ動物霊の動きの早さときたら人間霊の非ではない。

一瞬でも目を離せば、それが死に直結するかもしれない。

それにしても何も無い時間が続く。

いや、見えないところすでに戦いは始まっているのかもしれない。
いわゆる頭脳戦…相手がどう動いたら自身はどう動くか…。
様々な可能性を考えて2手、3手先に行く…そんな戦いが行われているのかもしれない。

「亜子や…基本的に手助けは無用…。後ろの二人に細心の注意を払
っておいてくれ…」

「わかりました…。
でも、危なくなっただと思っただら一人よりお祖母ちゃんを助けます」

「!?!…私など老いぼれ…助けんでええわ!」

「そうはいきませんよ…優にはお祖母ちゃんがまだまだ必要です。これからバシバシ鍛えてもらわなくちゃいけないし…
何より…おいしいカレーが食べれなくなってしまいます」

ニコツと笑う亜子。

「ふ…まったく…お主ら姉妹ときたら…」

「大丈夫です。」

あの二人だつてやる時はやるでしょう。

私の妹であり…お母さんの娘であり…なによりお祖母ちゃんの孫
なんですから。

いつまでも守るだけでは成長しませんわ…」

「じゃな…」

フツ！！

狐が動いた！

「来るぞ…！！亜子…！！」

「はいッ…！！」

第5話 完

N
E
X
T

S
I
G
N
…

第6話 それぞれの戦い

S I G N 序章

第6話 それぞれの戦い

狐は物凄い速さで茜に向かって駆け出した。

その動きは元来の”狐”のように手を地面についての4足歩行だ。

さきほど、一瞬にして優たちの目の前に現れたときもこの動きだったと思われる。

優と勇にはこの動きを目で追う事は無理だったが、茜と亜子は素早く反応していた。

が、それよりも早く狐は体当たりで祖母を吹き飛ばした！

物凄い速さからの一撃に、祖母は空を舞う。

しかし、ガードは間に合っていたようで、中空で態勢を整えると衝突で動きが鈍った狐に札を投げつける！

「はっ！」

同時に亜子も札を放つ！

しかし、この両者の札は地面へ落ちた。
一瞬早く狐が上空に逃れたのだ！

スタツ！

茜は何事もなかったように着地した。

「お祖母ちゃん！」

「なあに…大丈夫じゃわい。

それよりも思った以上にすばしっこいわ…

目では追えても、体がついてこん…年は取りたくないもんじゃな

…」

「ですがこれは勝機ですよ。お祖母ちゃん」

空を見て二人はうなづく。

そう！空では身動きは取れない！

かっこうの的である。

「出し惜しみはなしじゃ！速攻で終わらすぞ！」

「はい！」

二人はありったけの札を落下してくる狐に放った！

バババツ！

札は全てが狐を捕らえ、体中に張り付いた！

「やったか…！」

「いえ！…ちがいます…！」

亜子には見えていた。

ドサツ…！

狐はそのまま地面に勢いよく叩きつけられた。

かなり高く飛んでいたから恐らく2階、3階から飛び降りた程度のダメージが器の肉体にはあるだろう。

「ギリギリの所でその男の体から抜け出ましたわ…！」

「ふむ…新たな憑代よりしろを手にするつもりか…！」

『はっ…！』

二人は同時にはっとして後ろを振り返った。

「ゆ、優ッ!!」

見ると優が立ち上がり、片腕で勇の首を挟みこんでいる。物凄い力なのか、勇はもがきながら、優の腕を必死にはがそうとしている。

「…くくく…いい体だ…」

このままこの男の首をへし折ろうか…」

優はさらに力を込め、勇は苦悶の表情が一段と増している。

「く…!!このままでは勇君が!」

「迷うことはないぞ亜子!優を攻撃するのじゃ!」

茜はすぐさま優に向かって突進した!

「!」

この茜の判断は狐の思考にはなかった。そのため反応が一瞬遅れた。

「破ッ!」

茜は優の額に札を貼り付けた！

その瞬間凄まじい光を放ち、優は後方に吹き飛んだ！

「ふん…仲間だから手が出せぬと踏んだか？

浅はかだのう…」

「お祖母ちゃん！無茶すぎです！

いくら、対霊体用の札とはいえ…あんなこと！」

「ふん…おしおきじゃて！

それに今のはよお利いとる！ほほ」

「ぐぐ…この…ッ…！

老いぼれがあッ…！この娘の魂を喰らってやろつかッ！」

「くっ！」

（そうよ…！下手に刺激すれば、器の魂を攻撃する…！

そんな事お祖母ちゃんならわかっているはずなのに…！一体どう
いうつもりなの…！？）

「ほっほ…！やれるものならやってみるがいい！
出来るものならな！」

茜は狐を挑発する。

さすがの狐も冷静さをかき、感情に任せて怒りを抑えられないでいるようだ。

「お祖母ちゃん！」

「黙っているがよい！お主は天城君を見ておれ……」

亜子は不安そうな顔をしながらも、言うとおりに勇の肩を担いで二人から離れた。

「くつく……くはははっはっ……」

「いいよ！お前がやれって言ったんだからな……後悔するなよ！？」

「ふん。その子を誰じゃとおもつとるんじゃ。私の孫だぞ。

御託はええからはよおやらんか！」

「ツキツシイイイイイイイ！……！！」

「死ねええええええッ……！！」

…ここは…どこ…？

暗い…。

何も聞こえない…。
何も見えない…。

完全なる無…。

私いったいどうしたんだ？

「…優さん」

え？

「僕です…天城勇です…」

天城君が見える…。
なんでこんなところにいるの？

「それは…あなたを…」

勇がそつと優を抱きしめた。

！…ちよつと…。

何をするの…？

「ずっとこうしたかった…。

僕はあなたが好きです…白凧優さん…」

なんだろう…この気持ち…。

とても暖かい気持ち…。

嬉しい…のかな？

私…。

「これからも…僕と一緒にいてくれますか…？」

うん…。

こんな何も無い世界でも…あなたと一緒になら…。

それもいいかもしれない…。

「優さん…」

勇は優を強く抱きしめた。

「お祖母ちゃん…！」

優の霊気がどんどん小さくなって…！もう限界です！」

「落ち着かんか亜子！

大丈夫…信じるんじゃ…あの子を…」

横になり亜子の回復を受けていた勇が起き上がった。

「亜子さん…もう大丈夫です。ありがとうございました」

「ううん…。何度も巻き込んでしまって…あなたには本当に迷惑ばかりかけてるわ」

「迷惑だなんて…。」

僕は彼女と…優さんと一緒に話したり、行動するのが楽しいです。今まで見ているだけしか出来なかった彼女ですけど…、昨日偶然話すことができて…

まるで今までずっと仲の良い友人だったかのように…本当に自然と仲良くなれたんです。

それが自分ではすごく嬉しくて…」

「勇君…。」

あなた…優のことが好きなのね…」

「はは…。」

ですね…僕は白凧優さんを好きです…。

一番大切な人かもしれない」

そついうと勇は木刀を手にして優の前に立った。

「だから、彼女を失いたくないです…。」

今の僕にはきつと彼女の助けになることは何も出来ないかもしれない。

だから…!」

勇は目を閉じ、剣を構えた。

「せめて…応援をさせてください。」

優さん…あなたは今必死に戦っているんですね…。
僕も一緒に戦わせてください…はッ!！」

勇は気合を入れた!

「!…おお…!

なんとという霊気じゃ…!昨日よりも…」

「ええ…!さらに力強い!」

(…優さん…頑張って!)

なんだろう…?

「どろしたの…?さあ…もっと寄り添って…一つになるっ?」

…よくわからない…なんかザラつく…この感じ…。
優は腕を伸ばし、勇を突き放した。

「…！…何を言っているの？
さあこっちにくるんだ！」

勇は強引に優の腕を引っ張った！

痛ッ…！

やめてッ…！

「…」

あなた…だれ？

天城君じゃない…。

「…何言ってるんだよ…」。

僕だよ。天城勇！ほら…この顔…ね？」

違う…。

あなたの顔は…なんだか作られた笑顔だよ…。

「え？」

あの人はね…本当に心の底から笑うの。

悲しいことがあれば心の底から悲しむし、

悔しいことがあれば心の底から悔しそうにする…。

そして何より、私と居る時の彼の笑顔はそんな作り物じゃない！

「…くく…！」

あなた…だれ？

「狐様だよ…愚かな人間君」

勇は突如豹変して優に襲い掛かった！

両の腕で優の首を締め付ける。

それを解こうと、両の腕を掴むも、力の差は圧倒的だった。

ぐ…ぐう…ッ！

か…カハッ…………！

『優さん！負けないで！』

！！

その時優は確かに聞こえた。
勇の励ましの声。

「は……はは……！！」

あ……あなた……に言われなくてもねええッ……！！」

「な、なに！？」

締め付ける勇の両腕を逆に握力で締め上げ、首から振りほどいた。

「なによ……狐ごときがえらっそーに……！！」

あんたなんかね……こわくッ……！！

ないんだからねえーッ……！！」

優はそのまま勇を投げ飛ばした。

「な……なんなんだ……お前達は……」。

これが人間の底力とでもいうのか……」

「人間をなめんじゃないわよ！このコンコン狐ちゃんめ！」

はあ〜っ！

優は自分の右拳に息を吹きかけた。

「な、なにをする気だ…！」

せえ〜っ…のッ…！！

優は得意の右ストレートを勇の顔面に思い切りぶつけた！！

「ぐはっ…！」

勇は闇の空間で勢いよく吹き飛んだ。

どっつ？まだやる？

「…く…！ふざけやがって…！ならばこれでどうだ！」

!!

その瞬間天城勇の姿から…白凧亜子の姿に一変した！

おねえ…ちゃん？

「そつよ…優。」

もう辛いことはないわ…一緒にいきましょつ？」

うん。

優は亜子に近づいていった。

そつ。

射程内に入った瞬間！

彼女の速射砲が火を噴く！

優の右ストレートが亜子の顔を吹き飛ばす。

「…ば…馬鹿か貴様！？
お前の大事な姉だろっ！？」

関係ないよ。

いくら姿かたちを化けてみても…あなたは亜子ねえじゃない。
どんなに上手く化けたつもりでもね…わかるんだよ。

ばあーつか！

「だ、だからといって…こんな全力で殴れるものなのか！？
お前の祖母といい…なんなのだこの者の血筋は！？」

うっさい奴だ！

この暖かい感じ…あの人が応援してくれてる…。
届いてるよ…天城君。

あんたには悪いけど、倒させてもらっわ…！

「私を倒す…？笑わせるねえ…外じゃ、ガクガク震えてた奴がよく
もまあ！」

自分でもわからないんだ。
何故かアンタにこれっぽっちも負ける気がしないんだよ。

「ほぞけえッ！……！！！」

亜子の姿のまま襲い掛かる狐！

優は妙に落ち着いていた。
本来凄まじい速さだった狐の動きが、まるでスローのように遅く感じた。

本当ならアンタはこの地に来ることなく平穏をすごすはずだった…。
その点に関しては私達人間が悪かったと思う。

「しゅめんね」

！！

この時何かが起こった。

すべてを包む闇が完全なる光に飲まれた。

そして…一つ確かな事は…狐の霊魂は完全に光が消し去った。
それだけは間違いなかった。

「…」

優はゆっくりと顔を上げた。

「白凧……さん？」

「ただいま…！」

第6話 完

N E X T

S I G N
…

第7話 深い眠り

S I G N 序章

第7話 深い眠り

「…」

勇は斜め後ろの優の空席を見て心配そうな顔をする。

昨夜の死闘から一夜あけ、いつも通りの日常に戻った勇。

だけど、そこに彼女の…白風優の姿はない。

時は遡り、昨夜…時間にして20時15分

「ただいま…」

優しい笑みを浮かべた優はそう呟いて倒れ掛かった。

「優さん!？」

「とりあえず…帰りましょうか。
彼はどうします？お祖母ちゃん」

狐に取り付かれていた男…。
憑依された状態で、普段使えないほどの力を酷使した結果…恐らく
全身にダメージがあるだろう。

おまけに空中からの落下…思った以上に危険な状態のようだ。

「救急車を呼んでくれ…死なない程度には回復させてやるかの…ま
ったく」

茜は男に治療を施し始めた。

「優さんを早く寝かせて上げたいですね…。
一番頑張った人ですから…」

「そうね…。
お祖母ちゃん！私達先に帰ってもいいかな？
優をこのままにしておけないし」

「構わんよ。タクシーでも拾って帰りなさい。あとは適当にやっ
くわい」

勇は優をおぶった。

「わお！勇君って見た目によらずパワフルよね」

「ええ…大丈夫です。一応鍛えてますから…」

三人は人通りのある場所まで徒歩で向かった。

「亜子さん、それにおばあさんも…助けに来てくれて本当によかったです…」。

僕…優さんを守れなかった…何も…何も出来なかったッ…！」

「それは違うわ…」。

逆よ。あなたは優を救った…

多分あなたの応援がなければこの子は負けていた。

あなたの叫びが優に届いた…だから勝てた」

「ありがとうございます…」。

でもやっぱり危険に晒してしまったことは間違いないです…。僕はもっと強くなりたい…彼女を守って上げれるくらいに…」

「くす…。
いいなあ…なんか優が羨ましい」

亜子はくすくすと笑いながら優のほつぺたをつついた。

「……むにゃ…なにすんのよあ…ばかあ…
スー…スー……」

「そういえば、お二人はどうやって僕らの場所をわかったんですか？」

「優の帰りがあんまり遅いから心配になっちゃってね。
なんだか嫌な予感がして、携帯のGPSで着てみたの！
案の定厄介ごとに巻き込まれた。この子の無鉄砲さは母親ゆずりかもね」

「なるほど…携帯の！
優さんのお母さんって……その…
聞いてもいいのかわかんなくて聞いてないんですけど……」

「お母さんとお父さんね…4年前にいなくなっちゃったの。
二人揃って失踪……」

亜子は遠い目をして呟いた。

「…すみません」

「ううん。気にしないで。」

この子も言っただけ…私も二人は生きてると思うんだあ。
何の根拠もないけど、なんでかそう思えるの」

勇はこれ以上は聞けなかった。

「私ね…力がないんだ」

「え？…力…ですか？」

「そう。」

優に聞いているかわかんないけど…私の家系には、ある特殊な力が
あるの」

「あ！」

人間にとり憑いた幽霊が…その相手を殺そうとする時に現れる”
印”が見えるって力ですよね？」

「そうそう。」

正確には憑依していなくても、視野に入っていれば反応するけどね。

この”霊王眼”は各世代に一人にしか受け継がれない…。

お祖母ちゃん、お母さん…そして優…この三人が力を持っている」

少し悲しそうな目をする亜子。

それを察したのか勇はすぐにフォローする。

「で、でも！お姉さんはすごいんですよね！？

さっきもあの狐にとり憑かれた人と渡り合ってたし！

自分なんか、立ってもいられなかったですよ！」

「ありがとう…。」

子供の頃は色々もやもやした気持ちはあったけど、

今はそういう気持ちはないし…私には私に出来ることを精一杯やればいって思ってる」

「強いんですね…亜子さんは」

「そう…かな？（そんな事はないよ…ほんとだね）」

そうこうしてるうちに、灯りがちらほら見えてきた。
大通りに出たようだ。

車の行き来もある。

「ここまで来ればタクシーも拾えますね」

「ええ。そうね！すぐに捕まえちゃうぞー！」

そこからすぐに亜子がタクシーを捕まえて、白風神社へ向かった。
彼女は熱こそあったが、苦しそうにはしていなかった。

すぐに神社につき、彼女は亜子さんに運ばれていった。
タクシーで帰るように言われたが、そこまで家は遠くないので断り、勇は一人で帰っていった。

そして二日連続の衝撃的な非日常は終わった。

そして今日…彼女は学校に出てきていない。

「あ…もしもし、僕…天城です」

『ああ！勇君？もしかして優の事で連絡してくれたの？』

学校が終わると、勇はすぐに自宅から優の家に電話を入れた。電話に出たのは姉の亜子だったようだ。

「はい…。その、優さんの具合はどうかになって…すみません。気になっちゃって」

『ごめんなさいね…あの子、まだ目を覚ましていないの』

「え…!!?!?」

それって…なんかやばくないですか!?!?」

『ううん…大丈夫よ。』

私達にしてみればよくあることだし…多分明日には目を覚ますかな？

熱はもうだいぶひいてるし、一生懸命回復に努めてるんだとおも
うわ』

「わかりました…目を覚ましたらよろしくお伝えください。
それじゃあ…失礼します」

ガチャ…！

”大丈夫”

そう言われても勇は心配だった。

とはいっても出来ることもないので、勇は木刀を振りに外に出た。

白凧家

ガチャ…

「…」

「誰からじゃ？」

茜は亜子に聞いた。

「天城君でしたわ。

優を心配して電話をくれたみたい」

「そうか。」

まあ心配するのは無理もないかもしれぬな」

「お祖母ちゃん…あの子、大丈夫なんですよね？」

亜子も心配そうな顔をする。

勇にはこれ以上心配をかけまいと元気に振舞ってみたものの、やはり心配であった。

「案ずるな…。」

自分の霊力を上回るほどの力を使ったのだ…

最低限の霊力をも底をつき、回復に時間が掛かるのは当たり前じゃ

「うん…」

「それよりも私はしばらく家を空けなければならなくなった」

「え？」

「奥里おくみさとで、かなり強力な怨霊うらみたまを捕らえたそうだな。私の力を貸して欲しいそうなんだ」

「奥里…」九鬼家”の管理下ですよね？
白凧が出て行く必要はないんじゃないの？
何もこんな時に！」

亜子は声を荒げた。

「そう怒らない！
向こうにも向こうの事情があるんじゃないか…。
優には主がついておれ…」亜子

「…はあ。
わかったわ…気をつけてね」

亜子は半ば諦め顔のため息交じりに納得した。

「亜子…お前にはほんといつも迷惑をかけるの…。
あの子を頼んだよ。1週間ほどで帰るつもりじゃが…
もう無茶をしないように強くいっておくれ」

「わかった…お祖母ちゃんこそ無茶しないでね」

茜は旅支度をしに自室へ向かい、亜子は優の様子を見に部屋へ向かった。

優の部屋

「…」

まだ目を覚ましていないようだ。

「優…天城君から電話があったよ。
心配してた…」

「スー…スー…むにゃ…ありがとう…」

クスッ。

亜子は笑った。

部屋を見回すと机の上の写真たてに気づいた。

「お母さんとお父さんだ。

若いわね…私達が生まれる前かな。

この写真おばあちゃんにもらったのかな？」

「…。」

「お、お姉ちゃん!!なんで起こしてくれなかったのよ!!遅刻しちゃうじゃない!!」

「よつやく目が覚めたのね!よかったあ!」

「よくないわよ!大遅刻だってば!」

慌てて靴を履く優。

「落ち着きなさい!今日は休みよ!」

「へ...?」

「今なんて...?」

亜子は優に居間に来るようと手招きした。そこで事の経緯を話した。

「ええええええええええええええええ!!私、丸3日も寝てたの!?!」

ぐるぐる…。

優の腹の虫が泣き出した。

「うっ…確かにいつももお腹空いてる…」

「あはは！」

すぐにご飯作ってあげる！何がいい？

ちなみに今日は土曜日だからね」

あの狐とやりあったのが火曜日：水・木・金…寝っぱなし…で今日に至ると…。

「あ！ご飯はカツ丼で！」

なんかこう…がつつり行きたい気分だわ」

「はいはい。

まったく寝起きの女の子とは思えないメニューね。

ま、それだけ元気よかったわ」

あれ？

「そっいえばお祖母ちゃんは？」

「ん。」

「今ちょっと用事で遠出してゐるわよ」

「用事？遠出？」

亜子は料理の準備をしながら答えた。

「奥里へね。何でも強力な怨霊が出たらしくつて。手に負えないから助っ人として呼ばれたみたい」

「奥里つて…結構遠くじゃない。」

「その管轄つて…九鬼家じゃないの？」

日本は

中央部（暁・アカツキ・）・北部（奥里・オクザト・）・南部（天
玖・テンク・）・東部（久木・ヒサギ・）・西部（飛鳥・アスカ・）

この五つの地にて成り立っている。

そして各地には私たち白凧家のように霊と深い関わりを持つ者たちがいる。

私達の住む東部・久木は白凧家。

西部・飛鳥は緋土家。

中央部・暁は草馬家。

北部・奥里は九鬼家。

南部・天玖は相良家。

この五家が知られざる守人としてその地の霊を鎮めてきた。

「なんか…向いづつには向いづつの事情があるんだってさ」

「ふうーん…」

「それからね！お祖母ちゃんからの伝言！

”もう無茶なこととはしないこと…！”
だそうよ

「はぁーい！

流石に身に染みましたよーっだ！」

「…あんまりお祖母ちゃんに心配かけないであげてね。
あれで、かなり心配してると思うから」

…。

「うん。…」

それから…ありがとうお姉ちゃん」

「ん？」

「ちゃんと言えてなかったでしょ？
こないだは助けてくれてありがとう」

姉は微笑みで返した。

「な、なによ！今の顔！」

「べえつつに〜！」

よしっと！亜子特製カツ丼できたわよ！
さあたあと召し上がれ！」

亜子の自慢のカツ丼は物凄く美味しそうだった！

「わあ…！おいしそう…！
いったただっきまあす！」

パクッ

「ん~~~~~！！！」

染み渡るってこつこついう事を言つのねえ！
生き返る〜！

「亜子ねえ絶対いいお嫁さんになれるよ！」

「あはは。ありがと！おかわりあるからね！
たんと食べて早く元気になんなさい」

そうだね。

うん！彼にも…お礼言わなきゃだし！

第7話 完

N E X T S I G N …

第8話 初デート。

S I G N 序章

第8話 初デート。

さてと…

ずっと寝てたから体が鈍ってるな。

「お姉ちゃん！ちょっと散歩にいつてくるね！」

「病み上がりなんだから、あんまり無理しないようにね！」

「はぁーい！いつてきまーす！」

優は勢い良く玄関を出た。

今日は快晴！

こつこつ日はやっぱりランニングに限るわ！

「よおしー！

準備運動をしてっ…と！」

優は門前で軽く柔軟をしてから走り始めた。

「とりあえず…商店街のほうは避けていこうかな」

色々とあれだしね。

優は人通りの多い場所を避けて走り始めた。

「はっ…はっ…！」

優は走りながら考えていた。

あの時…自分の体に狐の霊魂が入ってきて…。

私はどうやって倒したんだろう…。

天城君の声が聞こえたような気はするけど…そこからは何も覚えていない。

お姉ちゃんの話だと、力を使い切って倒したっていうけど…。

私にそんな力あったのかなあ？

とりあえず、もう下手な過信はすべきじゃないなあ。

私だけならいざ知らず…他の人にまで迷惑をかけちゃうもん…。

あの時、お祖母ちゃんたちが来なかったら…きっと私達は殺されていた。

…。

お祖母ちゃんが帰ってきたら、本当に一から修行しよう。

今まで中途半端な気持ちだったんだ。

「！」

あれは…？

河川敷脇の道を走っていた最中、川原に目をやると素振りをする人がいる。

優は急遽道を変えて川原に下りていった。

やっぱりそうだ！

「天城君ーッ！」

「！…白凧さん…！？」

優の呼びかけにすぐに気づく勇。
凄く驚いた表情をしている。

「はっ…はっ…！こんちわっ！」

「も、もう体は大丈夫なの…？」

白風さん3日も休んだもん…心配しましたよ」

ほっとしたような表情で微笑む勇。

「ごめんごめん！この度はご心配をおかけしました！
それと、この間はごめんね…。

また君を危険な目に合わせちゃって…反省してる」

「そ、そんな！頭を上げてくださいよ！

僕はなんとも思っていないんですから！」

優はゆっくりり頭を上げた。

「それからね…」

「え？」

「ありがとう」

最大級の笑顔だった。
勇はドキッとした。

「…？」

「どしたあ？顔赤いぞ？」

「な、ななな…なんでもありません！」

そう言うと、勇は急いで後ろを振り向いてしまった。

「？…変な人ねえ相変わらず。」

でもよかったね…無事にこうやって会話が出る」

「そう…ですね」

しばらく二人は黙ったまま、風の音に身を任せた。

「天城君…君はここで剣の稽古？」

「はい！何事もそうですが努力は嘘をつきません。
こうやって日々、振り続けるだけでも振りの型が安定しますし、
剣速も上がります。」

「僕は才能が無い分、必死に努力しなきゃなつて…」

「偉いなあ…君は。」

「私は逆…。霊術とかに関して、私は才能があった…。
飲み込みも早かったし、お祖母ちゃんも驚いてた。」

「そんなんだから努力をしなかった。」

「でも、それじゃダメなんだつてわかった。」

「私は才能に甘えて何もしてこなかったタダのお馬鹿だった」

「そんな事はないと思うよ？」

「え？」

「何もしてこなかった…そんな事はないよ。」

「僕が知るだけでも2人救ったんだもん」

「…ありがとう。」

「私、これからは真面目に修行しようと思うんだ。」

「お祖母ちゃんやお姉ちゃんのように強くなりたい。」

「ちゃんと一人で救えるぐらいの力を手に入れたい…」

そして今も何処かで苦しむ人や…霊を…一人でも多くこの手で救いたい。

それが…選ばれた人間の使命だと思う」

昔はこんな能力も、霊の存在も大嫌いだった。

だけど今は違う…！

この力に感謝している。

「僕も…

僕も強くなりたいたいです…。

いや…なりたくないじゃない…

絶対にあなたを守るぐらいに強くなります！

だから…一緒に戦わせてください」

天城君…。

「危険な目にあうよ…？

下手をすれば死ぬかもしれないのよ？」

「そうならない男になってみせます！

すぐには無理かもしれないけど…必ず！」

勇の目は本気だった。

なんだか、凄く嬉しかった。

今まで家の中だけの話だった。

それを共有してくれる友達がいてくれる。

家族とはまた違った、この理解者が優にはとても嬉しかった。

「！…や、やだ…私…」

優の目から涙がこぼれた。

それを見せまいとすぐに目をこすってなんでもない振りをする。

「白凧さん？」

「…なんでもないわっ！」

「じゃあお祖母ちゃんが帰ってきたら、一緒に修行しようっ！」

「はいっ！よおおおおしっ！」

「なんかやる気出てきたぞおおっ！」

「あはは！…」

この人といると、なんでこんなに気持ちが悪らぐんだろ。

P M 2 1 : 0 0

白凧神社・優の部屋

「はあ…いい湯だったなあ…！」

お風呂に入っていると、こう生きてるって感じるよねえッ！」

P i P i P i …

メールの着信音だ。

今日、天城君とメアドと携帯番号の交換をしたのだ！

「早速メール送ってきおったかな？」

6 / 2 0 (土) 2 1 : 0 2

天城 勇

件 / 明日よろしければ

こんばんわ (^ ^)

天城です！

もし白凧さんの都合がよろしければ
明日映画にでも行きませんか？

今やってる『Magic Heart』見ませんか？
アクションファンタジーものなんですけど…。
興味ないですかね><。

勇気を振り絞ってお誘いしてみました(´・`・´)

「あやつ…顔文字なんて使っちゃって…。

それにしても…映画の誘いなんて…

こ、これって…デ、デート……なのよね？」

わ、私そんなのしたことないっての…！

あの男…この手馴れた感じ…初めてではなさそうね！

純情ぶって…実は裏で獣の顔を…

(´・`・´) こんな顔文字に騙されてたまるものですか！

(´・`・´) (´・`・´) こんな顔なんでしょ…！

翌日

AM 10:00

聖ヶ丘4丁目・大園公園前

「ま、待った…？」

「う、ううん！今来たところですっ」

何だかんだで優は映画の誘いを受けたようだ。
オシャレとはほとんど無縁だった優だが、ここぞとばかり姉に頼み込み…
姉の服でコーディネートされてやってきた。

薄い青の花柄ワンピース。

孫にも衣装といった感じが。

「…」

勇はぼーっと優を見つめている。

「な、何よッ！」

そんなじつと見ないでってば！

ほら！映画見るんでしょ！急ぐわよ！」

「は、はい！」

もぉ！なんだっていうのよ…！

こちらら4時まで寝れなかったのよ！

おかげで朝方ちよつと寝ちやっつて焦ったじゃない！

「あ、白風さん！こっちですこっち！」

優はあらぬ方向へスカスカ歩いていたようだ。
恥ずかしがりながら勇のもとへ走る。

「いやぁ！面白かったですね！」

「ええ！」

私ああいうアクション映画好きだな！
見ててスカっとするしね」

二人は2時間の映画を見終え、映画館をあとにする。

「まだ13時…ですね。

丁度お昼ですけど…白凧さん昼食でも食べて行きますか？」

「そうね…まあそのくらいは付き合っただけでいいですか！」

二人はファーストフード店で昼食を済ませ、他愛無い話などで1時間あまりを過ごした。

「ふうー！さてと…まだ14時回ったくらいね…。
どうする？」

「んー…そうですねえ。

あ！あそこにカラオケがありますけど、どうですか？」

カラオケかあ…
参ったな…。

実は私はかなりの音痴…

お姉ちゃんはお父さん譲りでめっちゃ上手いのに…私はお母さんに似たせいで音痴だよ…。

「白凧さん？」

あ、カラオケ苦手だったりします？」

「べ、別にそんなんじゃない…！」

「大丈夫っすよ！自分も超音痴ですから！」

気を使って言ってくれたのか本当なのかよくわからないけど…。
まあ…この人の前で何かとキャラ作るのもメンドクサイわよね。

いいわ！

私の音痴に勝るかどうか見てあげようじゃないの！

二人はカラオケに向かった。

そこから4時間。

二人は声がカスれるほど歌った。

「うー…ノドが痛いわ…」

「自分もです…」。

久々に歌ったものだから、かなり痛いっス…」

時間はもう18時を回っていた。

日も暮れはじめている。

「結構時間経ってたのね…」

そんなに時間が経ってたなんて…なんか早く感じなかった？」

「ですね！」

それじゃあ帰りましょうか！

亜子さん心配してますよ！」

二人は夕暮れ道を並んで帰った。

「今日は色々ありがとう…楽しかったわ」

「いえいえ。」

「こちらこそです！急な誘いだっただのに…ありがとうございました」

「うっん。

私も休みはこれといって予定もないし…。

まあ今度はもうちょい事前についてくれるとありがたいわね」

「了解です！」

ザワツ…！

「！」

…「冗談はやめてよね…。
もお！」

いい気分で今日が終われると思ったのに…。

「どっしたんですか？」

「感じるの…ざわつきを…」

「え！？…サインですか？」

何処？

周りに結構人はいるわね…。

優は辺りを見回す。

！

いた！

あの金髪ギャル！？

禍々しい靈気を感じる…。

間違いなさそうだ。

「お姉ちゃんから聞いたけど、サインが出るのは憑依されてる人間だけじゃないんだってね…。」

「ええ。」

なんでも他からターゲットにされてる場合でも、自分の感知できる範囲にいれば感じるそうです…。」

でも、今この辺りで感じられる不穏な靈気はあのギャルだけ。

まず間違いなくあれね…。

「どうするんですか？」

「…私のポリシーに反するけど、首を突っ込むのはやめておくわ…。
もうあなたを危険な目に逢わす事は出来ない」

「白風さん…」

この悔しさは自分にぶつけなさい…優…！

「そつだ！お姉さんに…亜子さんに頼むのはどうですか？」

亜子ねえに！？

確かにお姉ちゃんがいれば問題ないはず。

「わかった！連絡してみる」

白風神社

P i P i P i
…

「はいはい…今出ますよー」

ガチャッ！

「はい。こちら白凧神社でございます」

『あ！お姉ちゃん！ちょっと聞いてほしいの！』

優は詳しい事情を話した。

「わかったわ…。

あなたは下手に手を出さないこと！

それは約束しなさい！いいわね！すぐいくから」

そう言うと電話を受話器に戻した。

亜子はエプロンを脱ぎ捨て、準備をはじめた。

第8話 完

N E X T S I G N
…

第9話 同じ眼を持つ者

S I G N 序章

第9話 同じ眼を持つ者

「…お姉ちゃんが今からこっちに向かってくれるわ!」

30分ぐらい…かな?

とにかくあの人を見失わないように見張ろう。

今はそれぐらいしか出来ない。

それにしても…あの女の表情…。

かなり顔色が悪い…。

本人は自殺衝動に駆られているかもだな…。

だとすると行動を開始するかもしれない。

まずは人気の居ない場所へ向かう…

日も落ちてきて、時間的にも頃合か…。

最悪間に合わない場合…その時はどうする??

「白凧さん、落ち着いて!」

大丈夫ですよ…きっと間に合います！」

天城君：ありがとう！

私がり乱してもなんにもならないものね…冷静になるのよ。

！

ギャルが移動を開始したか！

フラフラと路地へ向かって歩き出すギャル。

「白風さん…動き出しましたよ…！」

どうしますか？追います？」

「…。

こっさりつけましょう…。

目的はあくまで尾行…それ以外は手を出さない」

お姉ちゃんが間に合うことに賭けるしかない！

二人は距離を保ちつつ彼女を追った。

かなりゆっくりだが、フラフラと人気のない方へどんどん進んでいく…。

尾行を始めて15分ほど経った頃だ。
小さなトンネルの中央付近で彼女は止まった。

「立ち止まったわね…」

「何をしてるんでしょうか？」

「わからないけど…」

あの場所が憑依している霊に関連がある場所か…
都合のいい場所だからか…」

ボソボソ…

何か喋っている？

「私…どうしてこんなところだ…」。

ヒッ…！！

（か、体が動かない…！それに…何よ…この目の前のモヤミみたいなものは…！？）

「

「！…！…霊が姿を現した…天城君にも見える？」

「ええ…男性…ですかね？」

彼女の体から出てくる感じでした…

なんと…というか…寒気がします…。

それだけじゃないですね…何か物悲しさみたいなものを感じます

…」

男の霊だ…。

彼女の体内に居たときより禍々しさは消えている。

天城君の言つとおり…何処か物悲しい感じだ…。

「…俺がわかるだろう…？」

君に騙されて…死んだ…木村晃一だよ…。」

「ガタガタ…」

(…こゝこいつ……なんで！？)

なんで私の前に！？)」

「…」お前達”の悪ふざけのせいで…俺は学校にも行けなくなった…
お前達にハメられ…常に優等生で…一番だった俺は…俺は…

…！

親にも見捨てられ…俺は死ぬしかなかった……お前達のせいだ
…」

「わ…私は……！関係ないしッ！
て、ていうか、アンタが勝手に死んだんでしょ……！
化けて出るなんて、あんた最低……！
とっとと消えてよ！キモッ……」

その言葉に霊は怒りに満ちた。

「…いけない……！
霊気が危険な信号を発してる……！
憑依してたときよりも一層禍々しさが増してるわ……！」

かなり強い怨念を抱いている……！
これはまずいわ……！

お姉ちゃん早く来て……！

「……………もついい……
お前のようなクズは地獄の苦しみを与えて……殺してやるよ……」

ヒュウウウツッ！

霊は彼女の体に再び入り込んだ！

「アツ…アツ…」

（なに、これ…体が言うことかかない…！

声も…でない！

いや…いやだ…！死にたくない…ツ！！）」

彼女は自分の左手の人差し指を右手で掴むと、本来曲がらない方向へと一気に曲げた。

ボキッ！

骨の折れる音がトンネルに響く。

悲鳴はなかった。

だが、表情は苦悶に満ち満ちていた。

悲鳴を上げなかったのではなく、声が出なかったのだ。

最大限の恐怖と、痛みは彼女に伝わっていた。

「あの人…自分で自分の指を…！」

「ええ…」

どうやら少しずつ苦しめて殺す気みたいね…。

一発で殺さない所を見ると、まだ理性が完全にとんではいない…。つまり狂気化はしていないわ…。今ならまだ話が出るかもしれない…。い…。」

でもダメ…。

ここでまた首を突っ込めば、同じ過ちを繰り返すことになる。

「…」

悔しくてたまらない…。

目の前で苦しんでる人を救えないでいる…。

彼女は相応の罰を受けているのかもしれない…。だが、このまま殺させるわけにはいかない…！

でも…それを救うことも出来ない…。そんな無力な自分に本当に腹が立つ…。

ボキッ！ボキッ！！

次々に左手の指を自身で折っていく。

「はあ…ッ…」

(もっ…もっ…やめて…許して)」

『ダメだね…』

お前達は全員苦しみの中死ぬんだ…俺のように…』

ボキッ！！ボキッ！！！！

左手の指は全て折れたようだ。

次に霊がとつた行動は…

ドガッ！！

華奢な彼女の蹴りを壁に打ちつけ始めた。

1回…2回…。

交互に足を壁にぶつける。

壁は蹴られるたびにヒビが入り、足からは出血が見られるようだ。

「…白凧さん…
僕はもう…限界です」

勇は中腰から立ち上がった。

「天城君！

落ち着きなさい！あなたが行った所で状況は何もよくなりはいわツ！」

「全力で羽交い絞めにします…ッ！」

「馬鹿ね…！見て解らないの？

あんな華奢な女の蹴りでコンクリートの壁が砕けてる…！
完全にリミッターが外れてる…！

あれだけの力を普通の人間に止められるわけない！」

「ですが……ッ！」

見てられないです…！

このままじゃ彼女は本当に死んでしまいますよ…！？」

「静かにッ…！！

私だって…私だって悔しくて仕方ないわよッ…！！
でも…しょうがないじゃない…力が無いのよ…私達には…！！」

その時だった。
二人の横を一陣の風が突き抜けた。

「
…」

見ると男がトンネル内に入っている！
いつの間に…？

「…俺には貴様ら”二人”は同等のゴミに見える…」

「
…」

（た、助けて…）

女は恐怖に怯えた表情を浮かべていた。
涙を流し、失禁している。

「…下種が…何を見ている？
殺してほしいのか？」

男は女をゴミを見るような目で言った。

「…なに…あいつ…?」

「白凧さん…彼の動き見えました…?」

僕…彼が横切ったことにまるで気づかなかったです…」

只者じゃないのは一目瞭然だ…。

ものすごい霊気…!

それだけじゃない……なんだ…

この途轍もなく重い……例えようのない雰囲気は…!

あの霊の禍々しさすらかき消すほどの…。

『なんだ…貴様は……』

俺の邪魔をするな…』

「知ったことか…。

ゴミをどうこうしようが俺の勝手だ…」

ブリッ!

ブリッ!!

重い雰囲気さらに張り詰める。

「白凧さん…なんかやばくないですか…？」

「ええ…。」

あの男…何を言ったのか知らないけど…完全に霊を怒らせている…！

狂気化の兆候だわ…まずい！」

あの男が何者なのかわからないけど…危険信号が出てるわ…。

でも…これはどうということなの…？

彼女からサインが消えた…。

それだけじゃない！

あの男にサインが見られない…！

この状況下で死なないってこと…？

『では…貴様から……死ねッ…！！！！』

霊は彼女の体を操り、男に攻撃した！

右のストレート！

かなりの速度だ！

ドガッ！！

『！！……』

男は彼女の攻撃をかわし、さらには自らの右拳を腹部に当てている。

「遅いな……」

『くく……！』

愚か者めッ……！どんなに攻撃しようが……ダメージを受けるのはこの女だけだ！』

そうだ……。

どんなに殴りつけても霊的な攻撃でなければ、物理的なダメージは全て肉体にいくだけ……！

私も自分の霊力を拳に込めて打ち込んだことがあったっけ……。
アレ全然効果ないのよね……！

『……！？』

『な………がはっ………！？』

霊に反応してか、彼女が苦しみ出した。

「くく…馬鹿かお前？」

誰が”普通”に殴ったって？」

『な……なんだお前…何をした…。』

『苦しい…』

「白凧さん…なんか様子がおかしくありませんか？」

あいつの攻撃を受けて苦しんでますよ？」

「何かしたのか…ここらじゃ、ただ殴りつけたぐらいにしか見えなかったのに…！」

一体どういふこと？

「ゴミをなぶる趣味はないんでね…。」

楽にしてやるよ…ありがたく受けな」

そついうと男は彼女の顔面を片手で掴んだ。
正面からだ。

「が…が…」

「くく…何するか…わかるよな？」

「あいつ…何をする気ですか…？」

「顔面を持ちながら全身を浮かせた…！？
なんて力なの…！？そんな大柄でもないのに…！」

はっ…！！

まさか…！？

優は気づくや否や走り出した。

「あの世で勝手に殺り合え…。
少なくともこっちでやられるのは迷惑なんで…死ねッ…！」

男は彼女の後頭部を壁に全力で撃ちつけようと、勢い良く突き出した！

ドガッ…！！

「…」

男は確かに全力で、彼女の後頭部を打ち付けた。

コンクリートが割れるほどだ。

だが、直ではなかった。

見ると彼女の頭の後ろにはバッグが挟まっていた。

どうやら咄嗟に優がバッグを投げたのがタイミングよくクッションになったようだ。

「…女…邪魔すんなよ」

「はあ…はあッ…」

間に合ったからいいもの…今の…殺す気だったの?」

霊の気配が消えた…。

こいつがやったのは間違いない…。

一体…何者なの?

「ゴミは始末する…。ただそれだけだ」

「…」

よかった…。
彼女は息があるようね。

ドサッ！

男は女を投げ捨てた。

「興ざめだな…」

男はそう言うと、優を横切って去ろうとした。

「待ちなさい！」

優の叫びに男は足を止めた。

「あなた…一体何者なの？」

「…ふん…」

” 霊王眼 ” か…こんな雑魚が…ね」

！！

こいつ…！

なんで霊王眼なんて知ってるの！？

「じゃあな…」

男は去ろうとした。

その時だった。

「…なんだ？ガキ」

勇が男の前に立ちはだかった。

「…警察に行くんだ…！」

「おやおや…」

正義のヒーローごっこか？」

「行かせないぞ…！」

お前は女性にあんな乱暴をしたんだ！」

「だ、だめッ！天城君！逃げて…！」

ニヤッ…!

男は不敵に笑った。

そして、何事も無く勇の横を歩いていった。

「お前…でかい口叩くのはいいが、それ相応の力を持ってからにするんだな」

その瞬間天城勇は足元から崩れ落ちた。

「ゆ、勇君!？」

優は急いで駆け寄った。

「殺してはいない…雑魚には興味がないからな」

「くっ…!お前ッ…!」

優は立ち上がり、男を追おうとした。

パシッ!

「！…天城君」

勇が優の腕を掴んで静止させたようだ。

「僕は…大丈夫…です…。
追わない…で…」

ガクツ…

勇はそういうと気を失ったようだ。

「俺の攻撃を6発受けて意識保ってられるとはな…。
ただの雑魚じゃなかったか」

「…彼のためにも…あんたを追う事はしない…。
ただ…一つ教えなさい…！」

「何者なの”……か？

くく…、お前と同じ眼を持つ者…とだけ言っておこう」

！！

「じゃあな…次邪魔をすれば…命はないと思え…」

そういうと男は風のように消えていった。

第9話 完

N E X T
S I G N
…

第10話 帰ってきた二人

S I G N 序章

第10話 帰ってきた二人

聖ヶ丘病院

「…」

あれから程なくして亜子姉ちゃんが着てくれた。

事の経緯を話し、痛んだギヤルと天城君の応急処置をして、救急車を呼んだ。

ギヤルは一命を取り留めたものの、体中の筋を痛め、骨折や内臓への損傷も激しく重症らしい。

天城君のほうは元々それほど大きな怪我ではなかったが、念のため検査を受けた。

一本肋骨にヒビが入っているかもしれないそうだ。現在詳しく検査をしている。

「…ありがとうございました」

勇が診察室から出てきた。

「大丈夫！？どう…だったの？」

「心配ありません。」

「ちょっと肋骨にヒビが入ってる程度で一月もすれば大丈夫だそうです。」

「まあ激しい運動はなるべく控えるように言われましたけど」

「ほっ…。」

「心配したよ…。」

「あなたの言葉を無視して、向かった結果ですから…
自業自得です」

「二人とも…ごめんね…」

「私をもっと早く来ていたら…こんな目に合わせなくて済んだのに…」

さつきから自分を責め続ける姉・亜子。

「お姉ちゃんのせいじゃないって…。
もう元気出してよ！」

それよりもあの男…。

「霊王眼を知ってた…」

そして、自分のことを私と同じ眼を持つ者と言っていた…」

「恐らく五家の誰か…」

それは間違いないと思うわ。

「霊王眼のことを知ってるのは身内しか居ないもの」

「とにかく皆無事だったんだし…よかったじゃない」

優は姉の落ち込む肩を軽くなでて言った。

それからタクシーで地元まで帰り、姉は天城君を送っていった。

私はあの男の事を考えていた。

霊も人も…あいつは殺そうとした。

そこに迷いはなかった…。

霊と深く関わっている私達の中にあんな人がいるなんて…。

あの男の目…。

何処か物悲しさを感じたのは気のせいなのかな…。

なんだか楽しい日曜日が最悪の終わり方したな…。

翌日

ふう…今日も巫女様巫女様と…。
いい加減にしてほしいものだわ！

登校途中の優は不機嫌だった。

昨日の疲れからか、いつもより登校時間が遅れたため、
商店街の人たちに巫女様コールをうけてしまったためだ。

学校の校門をくぐる。

グラウンドに彼の姿は無かった。

「天城君…もう教室行ったのかな？」

と、その時だった。

「ああら…巫女様じゃない？」

う…！

この嫌らしいイラつとくる声は…。

優はゆっくり後ろを振り返った。

「お久しぶりね…白凧優！」

「出たわね…」。

このオカルトマニア…」

「だ、誰がオカルトマニアですって!？」

そ、そのどこが悪いのよ!」

彼女は夕見 ゆづみ 司 つかさ。

自称私のライバルで、オカルトマニア。

所属はミステリー研究会…。

個人でもネットのオカルトサイトを錐搦みしているようだ。

ちなみにこの子の両親とうちの両親は古くからの付き合いがあつて、子供の頃からの腐れ縁である。

「先週は学校休んでたようね。」

馬鹿でも風邪をひくんですわね！優」

「ふん…あなたこそ先々週は休んでたじゃない。あなたこそ風邪かしら？司！」

二人はいがみ合う。

「ふん…あなたにはわからないでしょうね！先々週はちよつとした遠征に行つてたのよ！もうあなたに負けないぐらい力をつけてるわ！」

「ふーん…あつそ。」

「さあて教室に行かなきゃ」

優はそそくさと教室に向かった。

「キーーッ！！なんなのよ！あの態度！」

「おはよー!」

皆に挨拶をしながら自席へ。

私は何日か休んでたこともあって、みんな心配そうに声をかけてくれた。

右斜め前の彼の席は空席だ。

教室を見回しても彼の姿がない。

「どうしたんだろう…?」

今日は休みなのかな?」

その頃・校舎裏で

「が、がはっ…」

不良4、5人を相手に一人で戦う男が一人。

「…す、須藤…。」

てめえ…こんな真似して…タダですむと思つなよ…ッ！」

「…ふん。」

だったら口が利けないように…さらにやらせてもらおうぞっ。」

男は倒れる男の胸倉を掴んで拳を振り上げた！

「！…！」

男は拳を振るうのを止めた。

そこには振るおうとした右腕の手首を掴む天城勇の姿があった。

「もう止めてください…。」

それ以上やれば、また停学処分になってしまいますよ。」

男は力を緩め、男を下ろした。

「誰だ…お前？」

「僕は1年B組の天城勇といます。」

いけないとは思いつつも、先ほどからこの人たちの会話聞かせてもらいました。

この人たちのせいで濡れ衣を着て停学処分になった…。だから僕はあなたが怒るのも解ったし、黙ってみていました」

「…1年…天城…」

「でも、これ以上は流石に見逃すことは出来ない。怪我では済まなくなります…やめてください」

「ふん…。」

やめないといったらどうする気だ？」

「仕方ないですね…その時は僕が止めます」

勇の目は本気だった。

「ふん…1年のくせにいい目をしてやがる。」

安心しな。俺だって停学明けのその日に面倒を起こす気はねえよ」

「…須藤さん…」

須藤はそのまま去っていった。

「け…！あの馬鹿野郎…ぜってえ殺す…！」

不良が立ち上がり校舎の壁を蹴って言った。

「無理ですね。」

あなた達じゃ束になってもあの人には勝てない。
今のでわかったでしょう?」

「ああ!？」

てめえ…誰に向かって口きいてんだ?あ?
死にてえのか?」

不良は勇の胸倉を掴んで迫ってきた。

「放して下さい…。」

それ以上やるなら僕も遠慮しませんよ?」

「遠慮だあ!？」

1年のクセに…なんて生意気なガキだ!
こいつぁ肅清してやらなきゃなあ!」

不良は思い切り勇の顔面を殴りつけた。

「ハアツ!ひやは!」

「…」

勇の口元から一筋の血が流れる。

「なんだあ？その目は」

「…本当なら、あなたのような人間を相手にするのは嫌なんですけどね…。」

「ごめんなさい…最近負けっぱなしで、実は結構ストレス溜まっています」

「ああ！？何の話だてめえ！？」

「シャブってんのかあ！？ああ！？」

「ゾクッ！」

不良は勇の目を見た瞬間、体が凍りついた。

その瞬間、男は視界が闇に包まれた。

一撃のもとに地面に叩き伏せられたようだ。

「ふう…。」

いけないな…こんな相手に本気を出してしまった…。

これじゃあの人を止めた意味がないじゃないか…。」

「くくくく！」

「お前、自分で俺を止めておいて、それはないんじゃないか！？ええ？」

物陰から現れたのは先ほど去ったと思われた須藤だった。

「い、これは！その…」

「いいよ。黙っといてやる！」

それよりもさっさと教室に向かうぜ？授業がはじまっちゃう」

「で、でも…彼らは？」

「放っておけや！あいつらが悪い！」

そう言っただけで須藤はニヤツと笑った。

「はは…」

「俺は2年C組…須藤 彰だ！」

お前のさっきの一撃…なかなかやるじゃねえか。
お前気に入ってたぜ」

「須藤先輩…」

さっきはなんか生意気言ったかもですみません」

「気にしてねえーよ。だからそんな顔をするな。それよりもさっさといくぞ！鐘がなっちまう！」

二人は急いで教室へ向かった。

1 - B

ガラガラッ！

「はぁッ！はぁッ！」

ふう…間に合った…セーフ…」

「天城君！？」

どうしたの？寝坊？って…

ほんとにどうしたの！？その頬の痣！それに…血の跡！？」

「あ！いつけな…！」

はは…ちよっとトラブルに巻き込まれちゃって…でも問題ないですから！」

そついうとニコッと笑って見せた。

放課後

帰宅途中。

「ふーん…そんな事があつたんだ」

てかこの天然男でもキレるんだね…。
なんか意外な感じ。

「!…!」

勇はふと足を止めた。

「どうしたの？」

勇の視線の先…校門の前に不良たちの姿がある。
朝よりも多い…8人ほどだ。

「…なに…あいつら」

「上級生の不良たちですね。」

今朝の件で仕返ししてところですかね…」

「先生呼ぼうか…?」

「いえ…僕が行ってきます」

そう言って一人足を進める勇。

僕が…って…あなた怪我してるのよ!?

「へっへ…!彼女とお別れはしたかい?」

「彼女じゃないですよ…」

そうなればいいなって思ってますけど…
僕に話があるんでしょう?」

「察しがいいなあ優等生!

ちよっとツラかして貰うぜ」

そう言って不良たちは勇を取り囲むようにして何処かへ行ってしま

った。

「天城君…」

私を巻き込まないと…。

「くっ…！」

優が跡を追おうとしたその時。

「やめときな」

え？

振り返ると大柄の男が立っていた。

「誰…？」

「あいつはあんたを巻き込まんと…一人で行ったんだ。
そこであんたがあいつを追えば、あいつの男気が無駄になる」

「そんな事関係ない！」

あいつは私の友達で…それに怪我だつてしてるんだから…!」

「…。」

俺に任せてくれないか？」

「え?」

「元はといえば、俺があいつを巻き込んだのがいけなかった。責任は俺にもある…だからこいつぁ俺に任せてもらおう」

この人…天城君が言ってた…

須藤…彰?

「じゃあな!」

そういつて須藤は駆け出した。

優は黙って見送ることしか出来なかった。

「あの人がらわずかに感じた靈気…」

なんだろう…大きくはない。
けど、何か他と違う感じがした…。

第10話
完

N
E
X
T

S
I
G
N
⋮

第11話 死闘

S I G N 序章

第11話 死闘

勇たちは河川敷にやってきていた。

さらに人通りが少ない場所へと移動し、不良達は勇を取り囲んだ。

「…で…。

先輩達…こんな場所で何をしようっていつんです？」

「んなこたあ、てめえが一番わかってんだろ？」

「ああ!？」

「…。

（今朝の男か。他の面子を見る限りリーダー格…）」

勇は相手との間合いなどを見つつ、常に警戒態勢をとっていた。

彼にとって一人一人は格下といえど、やはり一対多となれば油断は出来ない。

おまけに勇の性格からして丸腰の相手に木刀を使う気もない。

「おいおめえら！」

やれ…！病院送り程度は問題ない！くく…！」

男は輪から外れ、後ろに下がった。

「…7人…か。やれやれ…！」

正面の男が突進してきた。

大柄の男だ。

捕まったら少し厄介だと判断した勇は、身を屈め男を足払いでこかした。

それを見て他の者も追い討ちをかけようと一斉に飛び掛ってくる。だが、勇はつかまらんと、男をこかして出来た”輪の穴”から飛び出した。

これで囲まれていない状態。

こうなれば、後ろを取られないように動けばグッと戦いやすくなる。

「こいつ…ちょこまかと！」

不良達は頭にきたのか突進するばかりだ。
だが勇にとってはこの上ない好都合。

血が上って動きが直線的になりすぎている。

ほら。

足を払うことがこれほどまでに容易。

次から次へと襲い来る相手を、軽快な体さばきで交わしつつ、攻撃を加える。

勇の拳は途轍もなく速く…重い！

それは日々、あの特製仕様の木刀を振るっていることが起因している。

勇は剣道の経験はあれど格闘技の経験はなかった。
しかし、鍛え抜かれた肉体と、類まれなる動体視力。

並みの人間程度の動きは手に取るようにわかった。

気づけば7人は全員地に伏せていた。

「…終わりましたけど？」

「まだやりますか？先輩」

「やっぱ…つええはお前。」

まあ安心しろや…そいつらは前座だ。
そろそろ…本命が着てくれる…くくく」

男は余裕の笑みを浮かべる。

今の勇を見てなお、勝てる自信があるということなのか？

「先輩…約束してください。

僕が勝ったら、もうこれっきりにすると」

「いいだろう…勝てたらな！

まあ無理だろうがな！くくく」

それから10分…

一人の男がやってきた。

「…あなたが相手か…。

(身長は180cmといったところか…。

割と筋肉質…。

須藤さんよりは小さいけど、明らかに他と違う雰囲気だな)」

「片桐さん…こいつです…生意気な一年は…」

「…ふーん。

見た感じ、そんな強そうじゃないけど…。

ま、遊んでやるか。メインディッシュが到着するまでな」

男はゆっくりと勇の間合いに入る。

「…はっ！」

勇は向かってくる男に渾身の右ストレートを腹部目掛けて放った。しかし当たった感触はない！

「外した…！？」

（あの距離で！？）

一瞬速く片桐は避けていた。

「渾身の一撃ってのは撃ったあとが隙だらけなんだぜ？」

ドスツ…！！

片桐の膝蹴りが勇の腹部を貫く。

「ガハッ…！！」

「ふん…」の程度かよ
「ふん…」の程度かよ

勇はなんとか踏みとどまった。

「はあ…はあ…」

（まさかあの距離でかわされるなんて…予想外だった。

あの体で割と俊敏なんだ…）」

勇は距離をとって、息を整えた。

「へえ…あんま効いてなかったか。

普通、立ってられないんだけどな」

「もう…油断はしない…！」

勇は集中をはじめた。

それにより雰囲気がかわった。

「！」

片桐もそれを感じたのか、勇の間合いに入ろうとする足を止めた。

二人はどちらも動き出せぬまま、微動だにしない。

そんな中、先にしびれをきらせたのは片桐だった。

正面！顔面狙いの右ストレート！

勇は頭部、いや体ごとそらして攻撃を紙一重でかわす。
だが間合いは詰まった！

男はそのまま、膝蹴りをそのまま繰り出す！

だが、それを読んでいた勇は
すかさず膝蹴りを繰り出した右ももへ肘鉄を振り下ろす！

「グッ……！」

片桐は一瞬よろめいた。
もちろん勇はそのチャンスを逃さなかった。

渾身の右ストレートが片桐の顔面を抉る！！
見事にクリーンヒットし、片桐は勢い良く吹き飛んだ。

「はぁ……はぁ……」

常人なら今の一撃で終了だった。

「ペッ！」

片桐は何かを噴出した。

どうやら今の一撃で奥歯が折れたようだ。

だがしかし、気絶どころか立ち上がった。

「…なかなかどうして…くく」

片桐の雰囲気何か変わったような気がした。

ゾクッ！

勇は瞬間的に後ろへ数歩下がった。

「…」

（気圧された…？）

なんだろう…この変な感覚…。

あの男から妙な違和感を感じる…（「

勇の体から冷や汗がにじみ出る。

「…血が見たいな…。
お前のような粹のいい奴の血が…」

！！

片桐が一瞬にして勇の目前へ現れた。
確かな間合いがあつたはず！

勇は咄嗟に両腕を顔面の前に持つてきた！

ドガンッ！！

勇は吹き飛んだ。

腕でガードしたにも関わらず物凄い力で吹き飛ばされたのだ。

ポタ…ポタ…。

勇は鼻血を垂らしている。

「く…」

（ガードした腕越しに打たれて思い切り鼻打つたな…。
それに今の一撃で頭打つたみたいだ…くそ…）

勇は眩暈を覚えていた。

その隙を片桐は逃すはずがなかった。

ビュッ！

またしても反応が追いつかない程の迅さ…！

片桐の蹴りで、倒れかけていた勇は宙を舞う。

「…がは…」

勇は意識が飛びそうになっていた。

もの凄い衝撃…一打一打が決定打だ！

ドサッ！

勇は受身を取る力も残っていないかった。

背中からもろに地面に打ち付けられた。

「ひひ…！」

もう終わりか？」

倒れた勇に迫る片桐。
先ほどとは打って変わって表情に危なさを感じる。

片桐は急に足を止め振り返った。

「きたか…」

「…片桐…お前！」

そこには須藤彰が立っていた。

「て、てめえ須藤…！」

ま、まあ丁度いい！片桐さん！こいつもやっちゃいましょう！

「織田あ…黙ってる。」

お前に言われんでも最初から”こいつ”の狙いはこいつだあ

「…？」

お前久々に見たら、なんか完全にキマツちまってるな…。
薬でもやってんのか…てめえ」

「くくく…！」

薬より、もっといいもんだぜ……”俺”という強壮剤だ!”

意味不明の言葉を発する片桐。

「う……う……」

勇は立ち上がった。

「天城……!」

お前はもう寝てる。

あとは俺がやる……。元々は俺の問題だ」

「先輩……逃げてください……!」

こいつ……普通じゃない……!」

息も絶え絶え、足もフラフラ。

すでに立つのもやっとといったところか。

「お前も後で食うんだから今はそこで大人しくしてろ。

まずはメインだ……ひひ」

ダッ!

片桐は凄まじい勢いで須藤に向かって突進した。

「！」

「遅いッ！」

ドカッッ!!

咄嗟にガードの態勢を作ろうとした須藤だったが、わずかに間に合わなかった。

片桐の渾身の右ストレートは須藤の顔面に突き刺さっていた。

「…!？」

「…ふん…確かに普通じゃねえようだ…！」

ブンッ!!

須藤は油断した片桐目掛けて拳を振るった。しかし、それを紙一重でかわす片桐。

「ち…!!」

「…俺の全力で倒れない…どうやら頑強さは人並み以上というわけだな…」

そうは言っても須藤にダメージはあった。
額は切れ、血が流れている。

「…」

（こいつは本当に俺の知る片桐かたぎり 亮りょうなのか？

確かに強かったが、せいぜい俺と同等か、それ以下…力も半端じやない上に…

なんださっきの動きは…？まるで見えなかった…）

その頃…

優は走っていた。

嫌な予感がしたからだ。

何処に勇がいるのか…それはわからなかった。

ただ走っていた。

彼がいそうな場所を走っていた。

「！」

そして彼女はたどり着いた。

偶然か否か…

だがそこは惨劇の場になっていた。

勇も須藤彰も倒れ、他にも複数倒れていた。

「一体これは…」

優はすぐに倒れている彼らに駆け寄った。

「天城君…！大丈夫？」

ダメだ…気を失っている。

この人…さっきの大男…！

偉そうなこといって、伸びてちゃ世話ないわね！

それにしても、皆すごい傷だらけじゃない…。

でも立ってる人が居ないところを見ると…やった奴は逃げたのかしら？

「やあ」

！！

優は突然の呼びかけに振り返った。

しかし、誰も居ない。

「君が誰かは知らないけど…
君の力には興味があるな」

！！

いつの間にも後ろに…！！

優は急いで距離をとった。

「ふふ…」

「あなた…誰？
皆をやったのはあなたなの？」

何こいつ…

わからない…妙な違和感を感じる…。

「お前”は寝てくれ…どつやら”俺”の獲物のようだ」

片桐は独り言をぶつぶつ言い出した。

ザワツ！

一瞬にして鳥肌が立つ。

この感じ…！間違いない…！

この男…とり憑かれている…怨霊に…ッ！

見渡せば、倒れている全員にサインが見える。

「くく…美味そうだ」

第11話 完

NEXT SIGN…

第12話 圧倒的な差

S I G N 序章

第12話 圧倒的な差

「…聞くまでもないか。

この仕業…あなたね……」

「くつく！」

早く喰いたいなあ……」

タツ！

片桐は物凄い跳躍で優を飛び越えて、

”こちらへ来い”

と言わんばかりに手招きをする。

どうやら、周りに倒れている連中が邪魔になったようだ。

優は誘いに乗って場所を少しずらした。

「あなたの目的はなに？」

「本当は係わり合いになることは避けたいところだけど……
ここまで巻き込まれてしまっただけは仕方ないわ」

「目的？」

「単なる殺戮だよ……それ以外に何がある？」

「器にしてるその人間には恨みはないの？」

「ないね。」

「コイツは力を欲していた……だから力を貸してやったのさ！」

「そう……。」

「ただの快樂のために人を傷つけるといふのなら、話は簡単ね。
遠慮なく叩き潰す！」

「いいねえ……どうせ殺るなら威勢のいいほうが殺り甲斐があるって
もんだ」

連日のように凶悪な霊が現れる。

この異常な事態の原因はわからない……だが、放っておけば大変な事
になる……。」

それは間違いない。

倉庫の狂気化した悪霊…そして狐の霊…。
昨日の女性に憑いた霊…。

今目前にしている霊の力は狐を上回るものではない。

それに相手は一人…。

やれない事はない…！

だが、先ほどの動き…油断は出来ない。
最大限に注意を払え…！

「…女あ…」

（この女何者だ…？）

隙がねえ…実践慣れしていやがる。

それにさっきとは雰囲気が違うな…臨戦態勢ってやつか。

あの霊気の強さ…下手をすれば喰われかねない…。

ここで殺り合つには割に合わないか…？（「

タッ！

優は構える片桐に正面から向かっていった。
両手には札を構えている。

「ちいッ…！」

（破邪の札か…！

かなり大きな霊気を感じる…！

あれを喰らうのはまずいな）」

ヒュッ！

片桐は素早く後ろに跳んだ。

…。

札に警戒しているか。

狂気化してないが、冷静な分こちらのほうが厄介かもしれないな。

優は足を止めた。

「くく…やるなあ。

（このままではラチがあかないか…。

ならば一気に攻め落とすのみ…死ね）」

「！」

雰囲気が変わった…？

来るか！？

サラッ…

！？…何か感じたような…？

「はぁッ！！！」

片桐が正面から突っ込んでくる。

「？」

「死ねッ！！！」

片桐の勢いに乗せた左ストレートが優の顔面を狙う！

スカッ！！

しかし、攻撃は空を切った。
優は余裕で攻撃を見切ったようだ。

「何！？」

「何意外そうな顔してるの？」

そんな見え見えなパンチ、私じゃなくてもかわせるわよ。
ハッ！」

優は攻撃後の隙だらけの側頭部へ思い切り跳び蹴りを食らわせた！

「がはっ！」

片桐は吹き飛んで地面に叩き付けられた。

大男に対して普通の華奢な女子高生が蹴ったくらいでは、あれほどの衝撃を与えることは出来ない。

優は攻撃に移る時に靈力で筋力を増強して攻撃をしている。

このコントロールは簡単ではない。

それを即座に出来るのは、天性の才能といえる。

「…？」

こいつ…登場時のような速さがなかった…。

一体何なの？

今のは計算でわざとやられたの？

「…こいつ…」

(靈氣は強いが…今の蹴りに靈的な力は込められてなかった…。
こいつ…自分自身ではまだコントロールしきれていないのか?) 「

ダッ！

再び突進してくる片桐！

「何度来ても無駄だってわかんないの！？
今度は”コレ”をくらわせてやるッ！」

優は札を構えた。

「はぁッ！…！」

先ほどと全く同じ要領で左ストレートを顔面目掛けて放つ！

今度は優は素早くかがんで攻撃をかわした！

「な、なぜ当たらんのだ！？」

「？…単純にッ！遅いからッ！よッ！…！」

優はカエル跳びアッパーの要領で札を持った右の掌底を顔面に放つた！

バチバチッ!!

凄まじい衝撃が片桐を襲う!

「ぎゃあああッ!!」

片桐は顔面を押さえながら悶絶する!

「…はあ…はあ…ッ!

なぜ”奪えない”ッ!!」

「奪う…?」

「…く…!そんな事も知らない小娘に…俺は…ッ!」

何を言ってるんだ…?

「うあああああ!!」

片桐は半ばヤケクソ気味に突っ込んできた。

だが、先ほど同様に攻撃はかわされ、優の札を受ける！

「…ぐぐ…はあ…はあ…」

もはや虫の息…。

あと一度の攻撃で終わる。

「ち…悔しいぜ…」

勝てると…喰えると踏んだんだがなあ…」

「観念するのね…」

私はあなたに同情はしない…被うわよ」

優は札を構えて一歩ずつゆっくり歩み寄る。

「教えてやるよ…」

俺に勝った褒美だ…」

？

「奪つ…とは…」意識”のじと…」

俺のような闇の力に堕ちた靈魂は当たり前のように使う…」

!!

意識を奪う…!

何か色々と合点がいった。

今までも幾度と無く動きを見失うほどの速さの相手を見てきた。

だがそれは”速さ”ではなく意識を奪っていたから…。

その間に移動していたら、一瞬にして移動したかのように錯覚するわ。

こいつらそんな裏技を使っていたのね…!

「なるほど…。

で、私の意識は奪えなかったの?」

「ご覧の通り…そのようだ…。

全く…こんな人間がいるなら他の場所で暴れるんだった…」

「あなたがどういう経緯でそのように歪んでしまったのか…。

それはわからないけど…一つ言えるのは人の幸せを…生を奪ってまで得られる幸せなんてない。

「あなたがいくら人を殺めても…満たされることも楽になることもない」

「…かもな…」

「くく…あなたにもう一つ教えておこう…近いうちにこの街は戦場になるだろうな…」

「俺よりも、もっと深く…もっと黒き闇が…喰らいにくる…」

「意識を奪えなかったのはあなたが俺より格上だっただけのこと…次もうまくいくとは思わぬことだ」

「戦場につて…」

「一体何を知ってるの？」

「あなたが知ってる事…全て話して！」

「その瞬間だった。」

「片桐を物凄い波動が襲った。」

「な、何!?!」

「光に包まれる片桐！」

「あ……あ……」

片桐の中から感じる悪しき靈気が完全に沈黙した。

「今の光は一体……」

遠くから何者かが放った……破邪の波動……。

あんな真似が出来る人間がいるの……？

こうして夜の死闘は幕を下ろした。

優は慣れない治療術で勇と須藤彰を回復させた。

といっても応急処置程度だ。

「天城君…体のほうは大丈夫？」

「…ええ。大丈夫です…」

勇はかなり辛そうな表情をしていた。

怪我の痛みじゃない。

もう何度目になるか…自分自身の不甲斐なさ。

「…片桐をやったのはお前さんなのか…？」

須藤が質問を投げかけてきた。

優は一瞬ためらった。

どう答えるべきか…。

普通に考えて、この普通の女子高生がこの男を倒したなんて考えられない。

非常識も甚だしい。

「えっと…それはですね…」

「いや…いいぞ。」

とりあえず、面倒になるし…ここから消えたほうがいい」

た、確かにそのほうがよさそうだ…。

優たち三人は立ち上がった。

「須藤先輩…？」

「俺はいい。お前達だけでいってくれ」

どうやらこの須藤って人は全て自分が責任を取るらしい。

「まっってください…！」

彼らは僕がやりました…！先輩は関係ないでしょう！

それに絡んできたのは彼らからです！一人相手にこの人数ですよ！？

「正当防衛って言えば…通じる話ですよ」

「まあな…」

「だったら…！」

「天城…頼む。

俺のわがままだ…何も聞かずにここは俺に任せてくれや…」

「先輩…」

「天城君行こう…」

先輩の顔を立ててあげましょう」

この人はこの人なりに決着をつけたいんでしょうね…。

優と勇は去っていった。

「うう…」

片桐が目を覚ました。

「目が覚めたか、片桐…」

「須藤…。

俺はいつたい…」

須藤は記憶がなかった。

「こいつらとは話し合った。」

もう馬鹿な争いはやめるってことで納得した…なあッ！」

「あ、ああ…。」

片桐さん…すみません…。

俺らも片桐さんもやられちまって…もうこいつには関わるだけ無駄…。

もしまだやりたいならアンタだけでやってくれ…俺達は今もつやめる…。」

「織田…。」

わかったよ…俺の個人的な恨みからテメェらを巻き込んだ…のはすまなかつたな…。」

「片桐さん…。」

「須藤…今度からは俺一人で挑むつもりだ…正々堂々な…。」

俺はこいつらを従えてお山の大将気取りで強くなったと勘違いしていたんだな…。」

次はこうはいかねえ…覚悟しておけよ」

片桐はニヤッと笑った。

「ああ。いつでもきやがれ！
ただし学校外でだぞ…停学はもう勘弁だ」

須藤もニヤッと笑って返した。

「…ふん…やはりあの程度ではあの女には勝てなかったか…」

男は呟いた。

この男こそが…近い未来、東部久木を戦場へと変える事となる。

「もう少しだ…」。

あと少しで計画は本格始動する…。

それまではひと時の平穏を味わうがいい…白風優…」

第12話 完

NEXT SIGN…

第13話 夏休み編 / 緒斗の森1

S I G N 序章

第13話 夏休み編 / 緒斗の森1

聖ヶ丘高校1 - B

7月24日(金)

「えー、明日から夏休みだけど…みんな注意事項をしっかりと守ってね！」

あと宿題も忘れないように！夜更かししすぎないように！」

「先生！もう子供じゃないんだからわかってるよー！」

おばさん臭いよー！」

教室はドツと笑いが起きた。

川原での戦い後…1ヶ月もの月日が流れた。

あれだけ連日サインを見ていた日々は川原の戦い以降ぱったりと止んでしまった。

これはこれで、とても気がかりではあるが…まあ平和にこしたこと

はない。

それから、お祖母ちゃんは奥里に行ったまま、まだ帰ってきてはいない。

当初1週間で戻るといつていたが、どうも手こずっているらしく長引いているようだ。

とはいえ、昨晚連絡があって無事解決したそうだ。

たぶん明日、明後日には帰ってくると思う。

私も夏休みに入るし、本格的に修行をしようと思う。

「話は以上です！」

「んじゃま、夏休みを満喫しなよ！解散！」

担任の一言でみんな各々騒ぎ出した。

「白風さん！」

「天城君。どしたの？」

彼も傷は完全に癒え、相変わらず剣の修行を頑張っているようだ。

「お婆様戻ってくるんですね！
これで修行が始めますね！」

「うん！でも、ほんとにあなたもやるの…？」

「もちろんですよ！自分も霊力が使える素質があるなら…
使いこなせるようになりたいですから！」

「ん…そだね。まあ君なら根性あるから大丈夫でしょう」

ガラッ！！

誰かが教室の戸を思い切り開けた音がした。

見ると”連中”が立っていた。

ズカズカ

優に近づく怪しい集団。

「しきげんよう…優」

「相変わらず無駄にデカイ胸ね…司」

この子は幼馴染で、自称私のライバル、夕見司。

高い霊力を持ち、ミステリー研究会に所属しているオカルトマニア

だ。

「ふん！貧乳のあなたにはさぞかし羨ましいでしょうね！」

「な、なんですって!？」

ひ、人が地味に気にしていることを…!

「ゴホン…！」

今日はあなたとつまらない言い争いをしに来たわけじゃないのよ

「何よ？」

司は真面目な顔をして言った。

「あなたの協力が必要な…。私達に力を貸して」

「あんたが私に力を借りたいて…よっぽどのことね」

霊がらみの事なのかしら？

「ここじゃアレだし…ファミレスでも行きましょう！
私が奢って差し上げるわ！」

「当然でしょ！相談料よ相談料！」

「キイイイイイイイイイイッ！！

やっぱこんな貧乳に頼むのいやだわッ！」

「まあまあ…落ち着いてくださいよ部長…。

頼みますよ白風さん…。話だけでも…お願いします」

このニット帽の顔色悪い彼はミス研のNo.2…。

名前は知らないけど。

確か上級生だったような…。

優たちはとりあえず近くのファミレスへ移動した。

「で、ちゃっちやと話してよね」

「その前に、その子誰なの？あなたの…か、か、かか…彼氏とか？」

司は勇を見て動揺しつつ尋ねた。

ブツ！！

優は思い切り水を噴出した。

「ち、違うわよ！」

「そ、そう。。」

でも一般人は正直この場においてほしくないんですけどね」

ギロつと勇を睨みつける司。

笑ってごまかす勇。

「いいのよ。この子は。靈感あるからね」

『……』

ミス研一同は驚いた。

「は、はは…どうも…」

天城勇っていいいます…よろしく」

「彼自身、靈気のコントロールはうまく出来ないけど、本気の彼は

私よりも上の力を持つわ」

「な…！？本当に…？」

司は驚いているようだ。

「じゃ、じゃあ…まあいいわ。味方は一人でも多いほうがいいものね…。」

とりあえず自己紹介をするわ！

私は1-Dの夕見司…優の幼馴染よ。ミス研の部長代理をしてるわ」

「じゃあ次は俺が…。」
2-A組、瀬那^{せな}稔^{みのり}。

色白なだけで別に病弱じゃないから…そこんところよろしく。

あとミス研では部長補佐やってるんで…ちなみに靈感はあるけど強くない。

感じる位か、多少見える程度だ」

「…瀬那先輩、体鍛えてますよね…？武道か何かやってるんですか？」

勇が突拍子もなく質問した。

「！…わかるのかい？まあちょっと…」

すごい…ほんとなんだ。
そういうのって見てわかつちゃうもののかな？
私にはさっぱりだ。

「じゃあ次は僕が…同じく2年。

C組の日下部くさかへ 新二しんじです。

ミス研ではまあ…目立たない調査やら、サイトの更新やら…裏方全般やってます…。

ちなみに靈感はないです…」

「日下部先輩は大きいですね…190近いんじゃないんですか？
須藤さんと同じくらいだ！」

と、再び勇が絡む。

ほんとに人懐っこい人柄である。

初対面でここまで普通に接するってある意味尊敬できるわね。

「俺は岡島おかじま 大樹だいき！見ての通り力作業要員だ！

新二と同じ2-Cだ！よろしくな！ちなみに俺も靈感はないっばい…」

「岡島先輩ガツチリしてるから…どう見てもミス研ってより柔道部ですよ…」

と相変わらず裏表のない率直な意見を言う勇。
この男…ほんとズバツと本音をいうなあ…。

「最後は僕か…椎名ついでな 一いち。部長代理と同じ1年D組。
まあこの部のブレインとでも思っていただければいいよ」

クイツとメガネを上げて生意気そうに言う。

「と、まあ…少々個性的なメンバーよ！
部長はちよつと今休学中だけど…なんか5人で頑張ってるわ」

「自己紹介は以上ね。本題に入りましょう。
司のことだからろくでもない事だとは思っけど…まあ聞いてみま
しょう」

「…むかつくけどしょうがないわ。
私達の街から少し北にいったところに森があるのを知ってる？」

「…緒斗おとの森？」

さほど巨大な森林ではないけど、何故が入ったものが迷うという…
いわくつきの森だ。
実際自殺者や、行方不明者の死体が見つかるなど、心霊スポットに
もなっている場所だ。

「そう。まあ流石に有名ですものね…知ってて当然か。逸話もご存知？」

「ええ…自殺の名所であり…心霊スポットとしても有名よね」

「私達の聞き込み調査で掴んだネタなんだけどね、あの森の何処かに洞窟があるらしいの…」。

見つけること自体も難しいらしい上に、中から奇妙なうめき声を聞いたそうよ。

その話を聞いてピンときたわ。

恐らく、森を惑わしている”大本”がその洞窟にいる可能性が高いと私は踏んでいるわ」

「まあ…私も聞いたことしかないからなんとも言えないけど…霊的な力でそういった現象が起きている可能性はあるわね…。だけど洞窟の話は信頼できるの？」

この子の調査って、自分のサイトに寄せられる匿名投稿やら、他のサイトや掲示板を巡って獲た情報だらうからね…あまり信憑性の高いものじゃなさそうだけど。

「確かな情報と聞かれると…確証はないわ残念ながらね。でも興味深くはあるわ。…いい機会だからね調べてみない？」

「…。興味本位で霊地を荒らすのは私個人は賛成しかねる…」。

「ただこれ以上死人が出るのも問題ではあるわね…」

「はあ…。」

奇麗事を言ってみたとところで、正直ワクワクした自分がいた。この1ヶ月何も無かったからかな…不謹慎だな…私。

「ところで、なんで私に声をかけたのよ？」

「わ、私達だけでは不安だったからよ！悪い！？
幼馴染がこうして頼んでるんだから協力しなさいよッ！」

「この子、相変わらずビビリというか…。」

「わかったわ…仕方ない…協力してあげるわ！
でも一つ約束して。私が無理と判断したら引き返すからね！
いい？約束できるなら協力するわ」

「わかったわ…それをお願い。」

「（よし…うまくいった。嫌な子だけど力だけは認めてるからね…）」

何か企てる気がしないでもないけど…まあいいか。

「で…天城君はどうする？ついてくる？」

「…正直ビビってます…。
霊感はあるけど、霊は相変わらず怖いので…。
でも…僕にはあなたを守る使命がありますのでついていきます！」

あ、あはは…。

「じゃあ決まりね！出発日時と集合場所は？」

「今夜よ！今夜0時に学校へ集合！
人に見つからないようにね！」

今夜って…相変わらず突然そういうことを…。
こちらの都合はおかまいなしってか！

というより…私に用事が無い事を読まれてたようで…何だかしゃく
だわね。

まあ結局押し切られて0時に学校集合となった。
お姉ちゃんに本当の事を言えば、止められるだろうなあ…。

むう…これはやはりこっさり行くしかないか。

7月25日(土) AM0時0分・学校

「むづ…なんで誰も来ないのよ!」

司は一人イラついていた。

「悪い…ちょっと遅れたかな?」

ミス研二年生トリオがこっそり現れた。

「遅いわよ!何してたのよ!」

「しーッ!声がかいッスよ部長…」。

俺らだって夏休み早々問題になるなんてゴメンっすから…慎重に行動してくださいよ」

「むう…たしかにみのりんの言うとおりね…ごめんなさい…
それにしても優の奴ちゃんとか来るんでしょっかね!」

「あら?」ご挨拶ね。

「なんだったら帰りましようか？」

「噂をすればなんとやらである。」

「司の後ろに半ギレ優が立っていた。」

「あ、あら優さん…」
「ごきげんよう」

「ふん！」

「ま、まあ時間に遅れた私が悪いんですけどねッ！」

「あとは一と天城君か…」

数分後

「ほぼ同時に二人も合流した。」

「すみません。ちょっと手間取っちゃって…」

「…すみません部長」

「まあいいわ。これで全員揃ったわけだし。
これから北の緒斗の森に徒歩で向かうわ」

『徒歩ー！？』

ー 同全員八モった。

「シーーツ！あなたたち静かにしなさいよッ！」

ま、まさか徒歩とは…。

そつだよ…よくよく考えたらこんな時間にバスや電車が出てるわけないわ…。

「あなた達だらしないわね！ただか1時間ちよつとでしょ！
全くだらしない！」

「部長…ちよつといいかい？」

僕の事前調査によれば、この時間帯…人目につかないように大通りを避けて歩けば

2時間は掛かる計算になるんだが…」

ー がモバイルを開いて説明した。

「…ま、まあ…頑張りましょう！はは…」

この無計画女はぁ…ッ！

7人はしぶしぶ徒歩で向かう決断をした。

2時間30分後

「はぁ…はぁ…」

な、なんなのよ…この罰ゲームじみたナイトウォーキングは…。

「ここが…緒斗の森…」

皆がへたり込む中、勇と瀬那稔は森を眺めていた。

天城君と病弱そうな瀬那先輩は全然元気そうね…他は皆バテてるか。

「なんだか夜つてのもあって凄い怖いんですけど…」

と体の割りに小心者の岡島大樹が呟いた。

「真っ暗すぎですよ…マジで入るのかい…？部長…」

同じくぐぐっている長身の日下部新一。

「…はあ…はあ…」

すでのそれどころではなく、つかれきってる椎名一。

「…優…どう感じる？」

「…外から見た感じはただの森くらいにしか感じないわね…。
中に入ってみましょう…」

司はバッグから懐中電灯を人数分取り出した。

「いい？絶対にはぐれないように、なるべく距離を詰めて歩くこと。
時折点呼を取るわ。夜の森って事もあるし足場とかも用心してね」

こうして私達の夏休み初日は幕を開けた。

第13話
完

N
E
X
T

S
I
G
N
…

第14話 夏休み編 / 緒斗の森2

S I G N 序章

第14話 夏休み編 / 緒斗の森2

緒斗の森にまず足を踏み込んだのは優だった。

「！」

一歩踏み込んだ…その瞬間に、明らかな違和感を感じた。

続いて司、瀬那たちミス研一同、最後に勇が入った。

「…優…。感じる？」

「ええ…。明らかに雰囲気が違う…。全身鳥肌が立ったみたい…」

どうやらこの違和感に気づいたのは夕見司、瀬那稔、天城勇…そして白凧優の4人のようだ。

他の3名は特に何も感じていないようだ。

「かなり強い霊気がこの森全体を包み込んでいるような感じだわ…」

「強いだけじゃないわね。この重苦しくて暗い感じ…嫌な感じだわ。皆大丈夫？」

司が振り返ると岡島大樹、日下部新一と椎名一の三人の顔色が悪いように感じた。

「な、なんか息苦しいっすね…」

「お、俺なんか気持ち悪い…」

「ぼ、僕もなんだか眩暈が…」

まずいわね…。
霊に対する抵抗力がない普通の人間が悪霊の気に当てられた時の症状だ。

これが悪化するとネガティブ思考になったり、気絶したり…憑依されることだって十分にある。

このまま連れて中に入っても大丈夫かしら…。

「優、ここは私に任せて頂戴！」

司が意気込んで申し出てきた。
顔を見る限り自信がありそうだ。

司は目を閉じて集中を始めた。

「…？」

これは…司の霊気…？

司を包む霊気が広域に広がり始めた。
暖かい、優しい感じがする。

「ふう…守護霊壁よ…」

範囲も威力も弱い簡易版しか出来ないけどね。

どう？3人とも！さっきよりは楽になったんじゃない？

「流石部長つす！全然楽になったよ！」

「俺も！部長すげえ！！」

「ま、まあ…たまには役に立ってもらわないと困るからね」

三人の苦痛に歪む顔が笑顔になった。

今の力…私には出来ない芸当だ。

この子はこの子なりに努力を積み重ねてきたんだね…。
ちよっと見直したわよ司。

「ふん!どう?あなたにこんな事できて?優ちゃん」

カチーン!

「あんたって奴は…ちょっと見直したと思ったたらすぐそれかい!」

ああ損した!

「まあまあ…それよりも、始めるならとっとと始めましょうよ。探索」

「みのりんの言うとおりにね。さあみんな進むわよ!」

司、稔、新二、大樹、勇、一、優の順で進むことに。

暗闇を懐中電灯で照らしながらゆっくりと進む。

足場はそれほど悪くないにしろ、ほとんどが闇に包まれている森の中だ。

一歩一歩確かめながら歩いていく。

それにしても、この闇の中…妙な静けさが相まって、より一層恐怖を感じる。

「点呼いくわよー！ー！ー！」

「2！」

「3！」

「4！」

「5！」

「6！」

「7！」

全員いるようだ。

まあ歩き始めてまだ10分と行ったところだ。
今の所一本道で迷う要素はない……。

「みんなちよつとストップ！」

急に司が静止するように声をかけてきた。

「どうしたんすか？…あ！」

「どつやら分かれ道のようですわ…」

左右に別れている。

「本来の目的からすれば二手に別れるのが得策だと思っけど…
正直危険だと私はおもっわ！迷う可能性もあるし」

「その点は心配しないでいいよ」

椎名一が自信満々にいう。

「これを見てくれ」

一が持っているのは小さなモニターのついた機械のようだ。

「これは？」

「受信機モニターさ。こっちに光ってる点が入り口。

僕が発信機を木につけておいたんだ。

このモニターはもう一つあるから、二組に分かれて持てばいい。
これだったら迷っても発信機の信号場所がわかるから迷うことも
ないでしょ？」

確かに。

今現在こうやって使えてるってことは電波とかも大丈夫だと思って

問題ないだろう。

「ちなみに発信機はあと2個。今光ってるここは現在地。つまり僕が持つてる2個の発信機を表している。

この二つもそれぞれ持つてれば二組が合流も出来る！
どうですか？すばらしいでしょう！」

メガネをくいつとする一。

確かに無能ではないようだ。

「仕方ないわね。じゃあ私とあなた達3人で左に行く」

司は新一、大樹、一を指して言った。

「え？俺は…？部長」

「みのりんは優についてあげて。

流石に二人では危ないかもしれないし…。

こっちはこっちで、この3人は私の守護霊壁がなきゃ動けないんでね」

「なるほど…3人とも部長を頼むよ」

「任せといてくれや！部長は俺らが絶対守るからよ！」

「大樹……」

「うんうん！俺達普段あんま役に立てないからな……たまにはいいか
っこさせてくれよ。な？」

「新一……」

「まあ……あれでも一応女の子だからね……守ってやるわ
「……」

いい……仲間たちなんだね。

「大丈夫よ！私は皆に守られるほどやわじゃないですよ！
気持ちだけありがたく受け取っておくわ！」

「あんたも素直じゃないわね司」

「あ、あなたに言われたくないわ！優！

その……えっと……みのりんを……よろしく頼むわよっ」

照れながら優に頼む司。

「言われなくても、任せておいて」

「優さんよろしくお願いするっす……」

深々と頭を下げる瀬那稔。

「えー!? ちょ…瀬那先輩やめてくださいよ! 私一応後輩なんですけど…」

「はは…。君もよろしくな…天城君」

「ええ! よろしくお願い致します! 瀬那先輩!」

こうして二手にわかれて搜索することになった。

左の道を司たちが、右の道を優たちが進むことに。

「優! もし洞窟を見つけても入らないで私達を待ってね!
私達も同じようにあなたたちを待つから!」

少し離れた場所から司が叫んだ。

「はー! っ! 了解よー!」

大声で返事を返す優。

両グループはお互いの道を進み始めた。

「部長…このまま道なりに歩いていて洞窟にたどり着くのかな…」

「新二君は相変わらず心配性ね。まあ確かにこのまま進んで見つかるかはわからないけど、

だからといって道を外れて歩けば危険も多いわ。

私が思うに洞窟は普通の人には見えない…ある種の結界の先にあると考えているわ。

だからそれらしい反応を私が感知できればと思うんだけどね…」

「…大丈夫か？」

大樹は後ろを歩く一が心配で振り返ると、少し遅れ始めているようだ。

「大樹先輩…ちょ、ちよつとだけしんどいかも…」

「部長ー！少し休みませんか？一の奴が疲れたみたいで」

「ふう…やれやれね。」

確かに暗闇の中、不安な気持ちで歩き続けるのはしんどいものね。いいわ。少し休憩しましょう」「

司たちは休憩することにした。

その頃優たちは…。

「2人ともいるよね？」

「いますよ…」

「いるぜー」

よし…はぐれてないわね。

それにしても…中に入り込めば入り込むほど靈気の強さが増していく感じだ。

ガサツ!!

茂みのほうで物音がする。
三人は同時に足を止めた。

「…白凧さん…」

「しっ…」

3人に緊張が走る。

ガサツ!!

勢い良く何かが飛び出した。

どうやら野うさぎだったようだ。

「ほっ…ウサギか…」

スウツ

何かが瀬那稔の横を通りすぎた。

「!…危ない!!」

瀬那稔の叫び声と同時に優は首筋に激しい痛みを感じた。
そして優の体はあらぬ方向へ飛ばされたようだ。

スタツ…

「…」

無言の人影が不気味に立っている。

「…く！誰だ！」

すかさず稔は人影に光を当てる。

「…！」

稔と勇は驚いた！

「…死体…」

スーツを着た腐乱死体がそこにはいた。
顔面は腐食が激しく、目玉が飛び出ている。

「白凧さん！大丈夫ですか！？」

返事がない。

どうやら先ほどの不意打ちで気を失ったようだ。

「天城君…こいつはどうすればいいんだ…？」

「戦うしかないでしょうね…」。

「こいつが優さんを攻撃したってことは…敵ですから」

「コオオオオオオ…」

「天城君…君は彼女を見に行ってくれ…」。

「こいつは俺がどうにかしてみるわ…無理かもだけど」

瀬那は空手のような構えをとった。

「…任せても大丈夫ですか？先輩」

「ああ…。いつてくれい」

勇は優が飛ばされた方向へ駆け出した。

同時に瀬那もゾンビに向かって駆け出していた。

稔は顔面を狙い、右の拳を放った。

スカッ…！

「！」

華麗なフットワークでそれをかわす死体の男。
かわすと同時にカウンターは放たれていた。

勢いのある蹴りは稔の首筋を狙ったものである。

「つぶねッ！」

それを紙一重でかわす稔。

「おいおいおいおい…！」

想像してたよりずっと俊敏じゃないか…ゾンビちゃん…

（今の蹴りも直撃はやばい感じだった。…クソ…暗闇のハンデつき
じゃ分が悪いぜ…）」

「優さん!!どこです!!」

(いない!!そんな馬鹿な!!)」

勇は辺りを手当たり次第照らすものの、形跡すらみつからないようだ。

「!...この茂み...不自然にへこんでる...」

何かが発生したような感じだ...まさか...白凧さんはここにぶつかつた...?

(この辺りにいるのか!?)」

勇は重点的にその付近を捜し始めた。

「はあ...はあ...」

稔は苦戦していた。

どちらも攻撃を放つものの、一打として当たることが出来ないでいる。

「にやろつ…絶対やりたくなかったんだけどな…
(搦んで頭突きとかボコボコ殴りつけるのは…なんていうか気持ち悪いしね…)」

「コオオオオオオオオオ…」

「はは…俺を食う気まんまんって感じなのかな…。
いつちよやりますか…」

第14話 完

NEXT SIGN…

第15話 夏休み編／緒斗の森3

S I G N 序章

第15話 夏休み編／緒斗の森3

「いない…！何処にもいない…優さん一体何処にいつてしまったんですか…」

辺りを探す勇だったが、優の飛ばされた痕跡は見つかったものの、辺りに優らしき人はいなかった。

その頃…瀬那稔は激戦の中にいた！

「ハアツ！！」

瀬那はスーツの腐乱死体と戦っていた。

この死体、瞬発力が並ではない上、優を一蹴りのもとに吹き飛ばすほどの力を持っている。

理性を失うわけでもなく、冷静に相手の動きを読み、攻撃をかわしつつ反撃してくる。

瀬那も十分に對抗はしているものの、決定打どころか一打も浴びせられないでいた。

そこで嫌々ながらも、相手を掴んで接近戦にもっていこうという作戦だ。

作戦通り死体の胸倉を掴むことに成功した瀬那稔。

その勢いのまま頭突きを顔面に食らわせる。

効果があったのか否か、それはわからないが一瞬よろめいた隙を瀬那は見逃さなかった。

拳打、蹴りの見事なコンビネーションが次々と決まる。

「これでラストだッ!!」

トドメの蹴りを側頭部に放った。

死体は勢いよく地面に叩きつけられた。

「はぁッ…はぁッ……やったか…?」

しかし、死体は何事もなかったように起き上がってきた。

「ま…そうでしょうね…。ゾンビだもんな…」

(いくらなんでも体力が持たないぞ…)」

「瀬那先輩!!」

勇が戻ってきたようだ。

「天城君か…彼女は見つかったかい？つと！」

話をしようにも死体が再び瀬那に襲い掛かる！

「瀬那先輩！」

（動きにキレがないように感じる！相当に疲れてるんだ…！）

勇は懐中電灯を二人を照らすように足元に置いた。

そして木刀を構えて目を閉じた。

いつもの精神統一だ。

「瀬那先輩！そのままそいつを”そこ”に留まらせておいてください！」

「はあッ…はあッ…」

（何かする気なのか…？もう避け続けるのも限界だ！）

や、やるなら早くしてくれッ！もうげんかつ！いつ！」

勇は深く深呼吸をした。

次の瞬間！

「はっ！！」

勇は勢い良く木刀を振り下ろした！

もちろん死体との距離は随分とあったため、空を斬っただけだ。だが死体は攻める事を止め、急に立ち止まったようだ。

「…？なにを…したんだ？」

「天城流剣術…風刃剣…」

未完成ですけどね…。どうやら成功したようでよかった」

死体は足元から崩れるように落ちていった。同時に物凄い腐臭があたりに漂った。

「…これは…君が倒したのか？」

「…ってことになるんですかね…正直本当に倒せるなんて思ってなかったんです。」

一人で今の試したの初めてだったんで」

勇は以前に優の力を借りて悪霊を一網打尽にした話を聞かせた。

「なるほどね…」。

でもよかったよ…君がやってなかったら危なかった」

「…」

勇は浮かない顔をしている。

「…？そつだ。彼女は…白凧さんは？」

「いなかったんです…何処を探しても…」

「なんだって…！？そつだ…彼女確か一に発信機を渡されていただろ？」

受信機モニターは俺が持っているから…」

そついつてカバンの中からモニターを取り出した。

「よし…これで見れば、今何処にいるかがわかるはずだ」

ズブッ

「…！…出たぞ…この左の点が恐らく部長たちだ…。そしてこつちが白凧さんになるな」

「何かおかしくないですか…？
この点が夕見さんたちなら…同じ時間歩いてきたとしても
これを見ると優さんはかなり遠くにいますよね…？というか移動
してる」

「みたいだな…。一人で…しかも全力で走っているような感じだな
…」

「彼女…懐中電灯落としてるんですよ…？
こんな暗闇の中…こんなスピードで走れるはずがない…！」

勇は優の懐中電灯をつけて見せた。

「ってことは…やっぱり誰かが連れ去ったってことか？」

「く…！こんな所でじっとしてられない！
僕追いかけます！」

「落ち着いて！冷静さを欠いて闇雲につっこんでも、この闇の中だ…
下手すると怪我じゃすまない！」

「放して下さい！彼女は…ッ…！…いえ…すみません」

勇は落ち着きを取り戻したようだ。

「気持ちはわかるがここは部長と合流したほうがいい。
あの人ならきつと最善策を見出してくれるさ」

そうこうしていると優の発信機の動きが止まった。

「瀬那先輩！動きが止まりました！」

「って…あれ!?!」

突然優の反応が消えた。

「…消えた……」

勇はその場にへたり込んでしまった。

「…とにかくだ！動かないことには始まらないさ！
連れ去ったって事は、何かしらの意図があるんだろうさ！
彼女はきつと無事だ！」

勇を励ましてなんとか立ち上がらせた。

「行くぞ。部長たちと合流するんだ」

司のほうでも発信機の異常に気づき、こちらに向かい始めたようだった。

両者は合流のため歩き始めた。

15分後…

二組は合流し、詳しい話を司グループに説明した。

「話はわかったわ。優の反応が消えた場所に向かいますよ」

「く…こいつは最新式だよ!？」

反応が消えるってなんだよ!きっと踏み潰したりしたに決まっている!」

一が一人ぶつくさ言っていた。

「あんだ、機械の心配より今は優の心配でしょう…!しばくよ…!？」

「す、すみません…部長…」

一の胸倉を掴んで一括する司の姿は怖かったようだ。

「…やっぱり二手に別れるんじゃないかなかったわね…うかつだった」

「あなたのせいじゃないですよ…僕が…僕がついていながらッ！」

勇は未だに自分を責めているようだ。

「天城君。気持ちはわかるけど、切り替えていきましょう。

きつと無事よ。あの子あれで悪運つよいからね」

「夕見さん…」

「くよくよするなよ…な？皆で助けにいこう」

「そうだぜ！俺達なんも役に立てないかもだけど、頑張るからさ！」

「さっさといこう。助けるんだろ？」

大樹、新一、一も励ましの言葉をかける。

「みんな…すみません。

…ですね！優さんならきつと無事ですよね！

よし！いきましょー！」

勇はなんとか立ち直り優の消えた場所に向けて歩みを進めた。

「うう…」

ここは何処…？

私…どうしたんだっけ…？

優が目覚めた場所は暗闇をつつすらと照らしたかのような岩壁に囲まれた場所だ。

どうやら辺りの岩壁にこびりついているコケが発光しているようだ。

「！？…ここは…って…え？」

体が動かない…！？

良く見ると両手首、両足首、胴回りと…得体のしれない紐状のものに巻かれて壁につながれているようだ。

優は霊力を使い腕力を強化して全力で引き剥がそうとした！

ブチッ！ブチッ！！

両手首を縛っていた紐状のものが千切れた。

「ふう…よし！」

同じ要領で両足、胴回りを千切った。

「よつと…！これで自由だ…。

ちやっちやと出口探さないとな」

一方司たちは優の反応が消えた場所に到着した。

「はあ…はあ…！ここか…！？」

白凧さー！あんツ！聞こえたら返事をくださいッ！」

「反対側も見てきたけどダメだった…天城…そんなに落ち込むな。部長が一生懸命探してる…きっと見つけてくれるさ」

「岡島先輩…」

「普段は無理難題ぶつけてくるわがまま部長だけど、あれでもここぞって時にはしっかりやってくれるんだ。今回だつてきつと大丈夫さ」

「日下部先輩…」

「ふん…鬼部長だよ！まったく」

「はは…みんなありがとうございませう…」

「！…ここだ…！」

「ここが更に違和感が大きい…私の読みが正しければ…」

司は、ある一箇所の茂みに目をつけて手を伸ばした。

「感触がないわ…茂みに触れた時のガサガサといった感じがない…！間違いないですわ！この先に優はある！」

ズズッ！

そう言うと司は茂みに溶け込むように入っていった。
茂みの物音一つ立てずに。

「ええ！？…おいみんなー！こっちに来てくれ！」

瀬那は皆を呼び集めた。

「部長がここに入っていったんだけど…なんかスーっていうか…
ズブズブっていうか…」

ダッ！

勇が思い切って飛び込んだ！

「え！？ちょ！おいッ…！」

勇も同じように茂みに溶け込むように消えた。

「…っわけですわ…。俺達も続くぞ…気味悪いけど」

4人も勇に続いて飛び込んだ。

「いてて…て…て！？えええ！？」

瀬那は自分の眼を疑った。

目前にあった木々は消え、広い原っぱが広がっている。

鬱蒼とした木々もなく月明かりが辺りを照らしている。

「これは…」

「みんなも来たようね。

すごいわ…ある種の結界か何かで守られた空間…。

それに見て。まっすぐ行った先にある”あれ”…洞窟じゃなくって？」

司が指差す方に確かに洞窟らしき入り口がある。

「優はきつとあの中に連れ込まれたんだと思うわ…。

皆覚悟はいいわね？こんな場所だからね…何が出てくるかわかったものじゃないわ」

「お、脅かさないでくださいよ部長…」

6人は洞窟に向かった。

第15話 完

NEXT
SIGN
…

第16話 夏休み編 / 緒斗の森4

S I G N 序章

第16話 夏休み編 / 緒斗の森4

「うーん…やっぱりダメか…」

優は洞窟内をうろつきながらため息を吐く。

どうやらこの陸地の先は全てこの湖みたいね…。

向こう側に渡れる道があるかと思っただけ、結局何処もなかった。

さっき湖に小石を投げてみたけど深そうだったな。

「こうしても仕方ないわ…泳ぐしかないならそうするまでよ」

それにしても不思議なのは、私自身何処も濡れてはいなかったってこと。

何処かに隠し通路でもあるのかしら…？

まあでも辺りを探し回っても見つからなかったからね…。

「よし！思い切っていくわ！」

服着たままでも渡れるくらいの距離だし、まあ大丈夫よね。

優は服を着たまま湖に入っていった。

「うう…まあ夏だし…とは思ったけど、冷たいわね…」

優は平泳ぎで少しずつ泳ぎ始めた。

だいたい中央付近に来た時だった。

「！」

えっ!？

何者かが優の足を引っ張ったのだ。

どうやら湖の底に何かがあるようだ。

優は勢いよく湖に引きずり込まれた!

突然の事でパニックになる優!

「ガ、ガハッ…」

く…苦しい…！

優はチラッと足元を見る。

すると黒い影のよくなものが足を掴んで湖底に引きずりこんでいるようだ。

「く…」

息が…まずい…！

優は足首に巻きつく手のようなものを必死に振りほどこうとするが、なかなか外れない！

意識が……。

「！」

優はスカートの中から札を取り出し、咄嗟に影の手に押し付けた！

バチバチッ！

「ギャッ！」

その影は確かにうめき声を上げた。
そして足首に纏わりついていたものが外れた。

外れたや否や、優は全速力で浮上した！

ザパッ！

「ッハ…ハアツ！！…カハツ…カハツ…ハアツ…ハア…」

し、死ぬかと思った…。

本気でやばかった…。

ポチャ…

「え？」

優の目の前に何かが立っている。

そう思った瞬間、優は水から引き上げられた！

思い切り何者かに髪の毛をつかまれて持ち上げられた感じだ！

「キャッ！！」

そしてそのまま何者かは優を目指していた陸地に放り投げた！

ドザッ！！

激しく地面に叩きつけられる優。

「ツッ……！ いったい……なんだって……いうの……？」

優はふらふらと上体を起こす。

目の前の湖の水面に何者かが立っている。

「え……？」

人……？

いや……違う……あれは人じゃない……ッ！

フワッ

その人らしき者は優の元へ降り立った。

「ふふ……ただの人の子ではなかったか……。
おかしな札を持っておる」

まさか……そんな……。

「よ、妖魔…」

「妖魔？…ふふ。そのような穢れ（けがれ）と一緒にしてくれるな…。」

わらわはこの地の水面の霊の集合体…朔夜^{サクヤ}」

「じゃあ…あなたは”精霊”…？」

「ふふ…どうであろうな…。わらわは人を喰らう…人の魂をな。妖魔ほどの傍若無人ではないが、精霊のように人に甘いものでもない」

確かにね…私を殺そうとしたし。

「…私をここに連れ込んだのはあなた？」

「実行したのはわらわの僕^{しもへ}だが…命じたのはわらわじゃな。

この森にやってってくる愚かな人間は皆死にたがっておるのじゃろう？
だから喰ってやっておるだけじゃ。文句を言われる筋合いなどな
かろう」

なんだろう…。

今まで沢山霊を見てきたけど、威圧感もないし靈気も薄い…。
人と話してる感覚だ…。

「あなたがこの森の主ってわけね…。
確かに人は死ぬためにこの地を訪れることもあるかもしれない。
でも興味本位の人間も少なくないはずよ！その人たちまで殺すと
いうの！？」

「ふふ…お前達のようなか？
そのような人間になんの容赦がある？
この地を汚す人間など、わらわには餌同然よ…」

ピリッ！

一瞬空気が張り詰めた…。

ガタガタ…！

体が震えてる！？

「ふふ…すまぬすまぬ。
久しぶりの人との会話…怯えさせてはと思ってな…力を抑えつ
ておるのよ。」

「だがやはり、わらわは抑えるのが不得意でな…人間の小娘ごとき
一言で激昂してしまう。
ふふ…いかんいかん」

やばい…。

間違いなくやばい。

「…私も食べる気なの？」

「もちろん…逃がすつもりはないさ。

だが久々の上物…すぐに殺すには惜しい…もう少し生かしておこうか」

やるしかない…。

今こいつは油断している。

なんとか隙をついて逃げるしかない…！

「ほっ…」

優は震える足を抑え、立ち上がった。

「私はこんな所で死ぬ気はないわ」

「だから？」

「逃がさせてもらっつツッ…！」

優は素早く札を朔夜に投げつけた！
同時に背をむけ駆け出した！

「ギャツ！！」

どうやら札は命中したようだ。

ダメージがあつたのかはわからないが、隙は出来た！
逃げるんだ。

全力で！

「ふふ…小賢しいね…人間」

ビュッ！

朔夜はその姿を巨大な魚のように変化させた。

ドガッ！

ドガッ！！

「ええ！？」

何かが進行方向の岩壁にぶつかっている！
物凄い威力だ！壁がえぐれている！

優は思わず振り返った！

「な、なんじゃありや…」

でっかい魚が空を泳いでる…。

「プツ！プツ！」

朔夜の口から飛ばされた水弾が優目掛けて飛んでくる！

ドガッ！ドガンッ！！

「わっわっ！！」

なんとかかわす優。

こゝ、これが岩にぶつかってた奴か…やばすぎでしょ！

あんなん喰らったらひとたまりもないじゃない！

「くっそ…そっちが飛び道具なら…こっちだつてね!!」

優は破邪札を空中を泳ぐ朔夜目掛けて投げた！

「プッ！」

それに合わせて水弾を放つ朔夜！

バシユッ！

破邪札は軽々と水弾に散らされた！

「…まじかいッ！」

に、逃げるしかない！

あんなんとまともに遣り合えるわけないじゃない！

「ふふ…逃げるのか？」

その頃司達は洞窟内に入っていた。
どうやら複雑な洞窟ではなく割と広い一本道のようだ。

「なんか、すごい物音がしてるわね…。」

何かがいると考えると考えて間違いなさそうですわね…。」

「夕見さん！待ってください！」

勇の叫びで全員が静止した。

ズズツ…

前方に何者かの影がある…。

「な、なんですか！？あれは…！？」

「腐った死体さんですよ…夕見さん。

遭遇しなかつたんですね…僕と瀬那さんは先ほどやりあいました

よ」

『ひいひいひいひい！』

大樹、新一、一はびりまわっている。

「しかも今度は一体じゃないみたいですね…。」

死体は奥から次から次へと湧いてくる。

10…20…。

「こんだけの数…相手にするのは厳しいッスね…。
天城君どうだい？やれるかいな…？」

「やるしか…道がなさそうですよ」

「二人とも待ちなさい！私が被います！」

司が前に出た。

「この洞窟に入ってから靈気感覚が麻痺してるみたいで、強さを全く測れないですけど…」

「やれない相手ではないわ！」

そう言うと司は鞭のようなものを取り出した。

ビシッ！

「さあ…来るならきなさい！調教してあげますわ…！」

ポカーンと勇は口を開けたまま呆然としている。

「ま、ドン引きしないで上げてくれな…。
あれで、ほんと被っちまうからさ…。」

「そ、そうですか…。む、鞭とは…。」

司は鞭を持ったまま突っ込んでいった！

「ハイッ！…。」

ブンッ！ヒュッ！バチンッ！…！！

空気を切る音を奏でたかと思うと次の瞬間には肉を裂く音が洞窟内に響き渡る。

「っし！」

「コオオオオオオッ！」

なんと死体は平気な感じで歩みを進める！

「な、なんで!？」

「部長!危ない!」

「!」

一瞬の隙を死体も見逃さなかった。
間合いをつめ、思い切り頭部を噛み砕こうと口を開いている!

ガチンッ!

一瞬早く、瀬那稔が司の体を引っ張ってかわしたようだ。

「ありがとうございます!みのりん!」

「油断しないでくださいよ部長!」

態勢を立て直して距離をとる二人。

「私の破邪の一撃を受けて抜えないにしろ、ダメージくらいみれてもいいのに」

「俺の見解なんすけど…また底をついちゃったんじゃないんすか?」

「あ…そうかも…」

この森に入ってからずーっと守護霊壁を張ってたからね…霊力が底ついちゃったのかもしれないですわ」

「ですわ…って…。じゃあこいつら倒す術がないってことじゃないか！」

ーがここぞとばかりに叫ぶ。

「そ、そんなこと言われたって、まさかこんな状況になるなんて思わなかったんですもの！」

「ー！お前が責めてどうこうなるもんじゃないでしょう！とにかくどうするッスか！？一度撤退するしか…」

「ダメです…」

勇は前に出て静かに力強く言った。

「天城君…」

勇は木刀を構えた。

「僕が突破口を開きます…。皆さんは優さんをお願いします」

「…。わかったわ…」

あなたに任せますわ。天城君…優のことは私達に任せて」

「はい…頼みます！」

ダッ！

勇は駆け出した！

そして勢い良く木刀を振りぬいた！

「破邪…風刃！横一文字！！」

ドシュツ！！

勢い良く空を切る木刀！

そしてその前方にいた死体はバタバタと倒れだした。

「よし！穴が出来ましたわ！皆行くわよ！」

5人は死体を飛び越えて先に向かった。

「死ぬなよ…天城君！」

すれ違い際に瀬那の励ましの言葉に親指を立ててグッドサインで返した勇。

「僕が…相手だッ！」

第16話 完 N E X T S I G N …

第17話 夏休み編 / 緒斗の森5

S I G N 序章

第17話 夏休み編 / 緒斗の森5

5人は一本道の洞窟を全力で駆け抜けていた。
天城勇が一人死体達を引き付け、5人を行かせたのだ。

白凧優救出のために。

「!...先方...見て!あれは優ですわ!!」

(やっぱり生きていたのね!よかった...!)

「でも部長...なんか様子おかしいっすよ...何かから逃げてるような...」

優は必死な表情で跳び回っている。

「何かに襲われているのかもしれない...!急ぐわよ!」

5人は優の元へ急いだ。

「優！…！？」

な、なによこれ…」

「はぁッ…はぁッ…司！？」

皆も来てくれたのね！」

優は避けながら司の方へ走り始めた。

「…ほう。ここまで入ってこれる人間がいたか…」

朔夜は動きを止めた。

「はぁッ…はぁッ…」

あれは精霊みたいなもんよ…」

優は相当に疲れているようだ。

「おい、新一…見えるか？」

「いいや…見えないね…」はどひっ…」

「…相変わらず見えない…」

どうやら大樹、新二、一の3人には見えてないようだ。

「でかい魚ツスね…あんな奴もいるのか…」

「みのりんには見えてるか…」。

それにしてもあんな大物だなんて、想定外よ…」

「ふう……。少し落ち着いたわ…」。

それにしても何で急に攻めて来なくなったのかしら…」

宙に浮かびながらこちらを見ているようだ。

「ふむ…お前とお前…主らもわらわが見えるか…。
なかなか面白い」

そついうと人型に変身して水面に立った。

水しぶき一つ上げぬよう静かに…」。

「人間…？」

「一体どういふ奴なの…？」

「油断しないで…。恐らく私達じゃどうしようもない相手よ。」

さっきからずっと攻撃されてたけど、わざとギリギリ避けれるよ

うに撃たれてた感じだった…。
遊んでるのよ…。」

どうすれば…どうすればこの窮地から脱することができる？

「ちんたらしてられないわね…。」

あなたの彼…天城君は入り口付近で今も戦っているの」

「え！？どういことよ！？」

本当だ…天城君がいない…！？

「入り口付近で死体がわらわら動きだして襲ってきたの…。
私も力を使い切っちゃって…彼に任せるしかなかった」

「…く…ッ！」

尚更早くどうにかしないとッ…天城君が…！

「優…私に手があるわ。あなたは時間を稼いでほしい」

「え？…何よそれ…！」

あんだ、もう霊力底をついてるんでしょ！？」

「問題なくつてよ…。靈力はほとんど使わなくても出来る。
ただ邪魔されたらおしまい…準備に時間がかかるから…なんとか
時間稼ぎしてほしいの」

「…時間を稼ぐつて…」

ザッ

瀬那が前に出た。

「いいツスよ…」

それしかないつてんだつたら俺が時間稼ぎます…」

「頼むわ…！優もお願い…私を信じて」

司の目が本気だ。

現状私にどうすることも出来ない以上…司に賭けるしかないか。

「大丈夫ツス…部長があの子をしてるときはやってくれるツスから
…。
頑張りましょう…白凧さん」

瀬那先輩…。

信頼してるのね…司のことを…。

「わかったわ…なんとかやってみる…！
失敗したらタダじゃおかないんだからね！司」

「ふふ…誰に言ってるの？私を誰だと思って？」

「3人とも…部長を頼むぞ」

瀬那は三人を見て拳を突き出した。

「あ、ああ…任せろ！お前も…気をつけるよ…瀬那」

「頑張つて…」

「…ふん」

三人も拳を突き出してそれに応える。

「ふふ…話し合いは済んだようだな…」。

「何をするのかわからぬが…このような遊びは久々…楽しませてもらうよ」

朔夜はゆっくりと地に足をつけた。

同時に優と瀬那の二人は駆け出した。

タツタツ！

先に仕掛けたのは瀬那だった。

一瞬にして間合いを詰めたかと思うと、すぐに攻撃に入っていた。

「シッ！」

まずは側頭部狙いの上段蹴り。

ガッ！

「ふふ」

余裕綽々で足を手で掴む形でガードする朔夜。

余裕の笑みを浮かべている。

「にゃろ…ッ！」

足首を捕まれたまま逆さになりながら、今度は足を狙って拳を放った！

が、これも背後に跳ぶことでかわされた。

同時に足を離して、瀬那はそのまま地面に落ちた。

「く…！」

「次は私が相手だ！」

優も接近戦に持ち込んだ。

両手には札をまいて、直な打撃でもダメージを与えられるように工夫している。

華麗なコンビネーションだが、やはり先ほどからの戦いで大きく体力を消耗しているのか、
普段のキレがなく、余裕でかわされる。

「く…当たらない！」

「やはり人が…脆弱なものよ」

その頃、司は地面に”陣”を描いていた。

「部長…これは…？」

「封印の儀式を行う陣よ…出来た…」。

あとは陣の中心に封印するための”コレ”をおいて…」

司は陣の中心にアザラシのぬいぐるみを置いた。

「へ…？なんすか…これ？」

「何って、これに封印するのよ…。」

私のあざらしのぬいぐるみ、しろよー！」

司の顔は真面目だった。

どつちら本気のもりらしい。

「あとは私の血で封印の呪印を書いてっ…よし」

血文字で何やら紙に書いたようだ。

そしてそれをアザラシのぬいぐるみの上に置いた。

「ふう…あとは呪を唱えるだけだ…！」

優…みのりん…もう少しよー！」

「はあ…はあ…。」

「ふむ…二人がかりでもこの様か…。」

わらわが期待しすぎたようだな…。つまらん」

朔夜はゆっくりと瀬那に歩み寄った。

そして目前まで歩みを進めた。

「く…」

「どうした？この距離なら当てられるだろう？」

かまわぬ…もうこの興も終わりじゃ…最後に一撃でも喰らってやるわ」

朔夜は自分の頬を指差して、『殴ってみろ』と言わんばかりだ。

「うわアッ！！」

瀬那は全力で顔面を殴りつけた。

パシヤッ

「…！」

瀬那の拳は朔夜の顔面を貫いた。

まるで水の流れに拳を突き刺すように。

「ふふ…残念でした」

ガシッ！！

朔夜は瀬那の首筋を掴んで持ち上げた。

凄まじい力だ。

「が…がはっ……」

「いい顔だ…」

その時だった。

ドガッ！！

「!？」

朔夜は吹き飛んだ。

優に顔面を思い切り叩きつけられたのだ。

瀬那は朔夜から解放されたものの、どうやら気を失っているようだ。

「…そうであったな…」。

小娘…お前はわらわに攻撃できたのであった」

ザワザワ…

「はあっ…はあっ…」

何…これ…やばい。

朔夜の霊気がどんどん膨れ上がってくる…！

「死ね」

朔夜は突き出した手のひらから、巨大な水弾を優目掛けて放った！

「…！」

優は紙一重で横にとび、それをかわした。

が、その水弾の進行方向は司の一直線上だ！

「っ、司あッ…！」

「…！…しま…」

司は集中していて気づくのが遅れたようだ。

直撃…

そう思った瞬間だった。

「ふんぬうつツ！！！！」

岡島大樹が司と陣の前に立ちふさがった。
もちろん大樹には水弾など見えてはいない。

ただ、何か危機を察知して前に飛び出したのだ！

ドッガーーーーン！！

水弾は大樹に直撃した。

「…」

「大樹…くん…？」

「…へ…へ……守っ……た……ぜ…」

そう言い残して大樹はそのまま倒れこんだ。
司は陣を離れ、大樹に歩み寄ろうとした。

「部長！！！」

「！」

新二の一喝だった。

「大樹のためにも…早く完成させてください…！
部長にしか敵はどうにもできないんでしょう？」

新二は大樹の前に立ちふさがった。

「次来るなら…今度は俺が部長を守る」

「新二君…」

…わかったわ…！」

司は陣について術を唱えだす。

「ほう…いつの間陣など…」

「わらわを滅するつもりか？…小癩な人間よ」

ザッ！

優が立ちふさがる。

「やらせるものか…！」

「どけ…今度は外さぬぞ？」

ビュッ！

朔夜は一瞬にして優の目前に現れた！
意識が奪われたようだ。

「！」

優は急いで拳を顔に向けて放とうとした。

「遅いわ」

だが、その前に優の首を掴んで締め上げた。

「がはっ…」

「ふん…このまま、その華奢な細首…へし折ってくれるわ」

ギリギリッ！

締め付ける手に力が入る！
同時に苦悶の表情を浮かべる優！

「ガ……ッ……ク」

優は朔夜の手を握った。

だが、札はすでに手を離れていたようだ。

「ふん……無駄だ……あきらめろ」

ジュッ！！

その瞬間朔夜の手にも物凄い熱を感じた。

「ギャッ！！」

思わず手を離す朔夜。

「な……何をした！？」

「ガハッ……はあ……はあ……はっ……は……」

優は自分の手を見て驚きの表情を見せた。

「こ…これは…？」

なんと優の右手に淡い紫色の炎が揺らめいている。

「…き、狐火…だと。お前…人間ではないのか？」

「狐火…？これが…？」

はっ…！

まさかあの時の…私の体内で消滅させた狐の魂の力…？

「ふん…奇怪な人間よ…」。

驚きはしたが、そのような炎でわらわに勝てると思っつなよ？」

確かにそうだ…。

こいつは水を操る精霊…火の力が通用するとも思えない…。

「優ツーーーーー！！」

司の叫びが聞こえた。

優は司の方向を見て、すぐに理解したようだ。
準備が整ったのだと。

優は朔夜に背を向け、駆け出した。

「ぬ…！？逃がさぬぞ…！」

バシユツ…！

バシユツ…！

指から細かい水針が放たれる！

優は背や腕にそれを受けてしまった。

「あぁッ…く…く…」

ふらつくものの、走ることをやめず司に向かっていく。

「殺す…！！！」

朔夜も躍起になって追いかける。

一瞬にして距離が縮まっていく！

優の背に手が届こうとした瞬間！

「闇に穢れし数多の靈魂よ…その身に纏う闇を抜いて、再び光を放て！」

我は夕見司…我を主とし、その力を我に捧げよ！

式神の陣、聖霊回歸…！封呪…！！」

司の陣から放たれる光の波動に朔夜は捕まった。

そして徐々に引き込まれ、陣の中心にあるアザラシのぬいぐるみに見事吸い込まれた。

血文字の呪印紙が焼け、アザラシに焼きついたようだ。

「…うまく…いったわ…」

「はあ…はあ…ッ…よかつ…よかつたあ……」

司と優の二人はその場へたり込んだ。

「よ、よいものかつ…な、なんなのだこれは！？」

ぬいぐるみが動いて喋ってる。

「ふふ…あなたは今日から私の式神として生きていくのですわ。よろしくねしろちゃん」

「し、しろちゃん…だと!?!
わらわを誰だと思っておるのじゃ!!小賢しい人間よ!
噛み殺すぞ!?!」

司は悪態をつくアザラシのぬいぐるみを抱きかかえた。

「こんな”ふわもこ”じゃ噛み殺すどころか、噛み付けないでしょ。
全然痛くないわよ」

「くぬううう!は、放せ!たわけもの!」

ジタバタするしろ。

「なんか、こうなっちゃうと可愛いものね。
でもそんなもの持参してるなんて…あんたははじめからこのつもり
だったの?」

「な、なんのことかしら…ほほほ」

ご、ごいっつ…。

「まあいいわ…。天城君が心配だから私は行くわよ!」

「あ!…!いつちゃった…!」

優は先ほどの疲れもあるだろうに、フラフラしながら走っていった。

「部長…岡島先輩も瀬那さんもやばいんじゃないの？」

「そうだった！二人を見なくちゃ！」

「く…わらわが…このようなふわもこの姿にされるとは…。
なんたる…なんたる屈辱じゃ…！」

「天城君…！…あれは…」

な…！？

優はそこで何を見たのか…。

第17話 完

NEXT SIGN…

第18話 夏休み編 / 緒斗の森6

S I G N 序章

第18話 夏休み編 / 緒斗の森6

時は遡り

優たちが死闘を繰り広げている頃…。

天城勇も戦っていた。

「はあっ…はあッ…」

20体程いた死体も残るは5体ほどになっていた。

しかし、そこに至るのに全力で戦い続けてきた勇はすでに限界が近づいていた。

「くそ…」

（握力が…もう全力で振りぬくことは厳しいな…。

出て3回…残り5体いるのに…どうする）

勇の破邪の力はすでに絶えていた。

霊力は司達を行かせるために使った風刃剣で底をついていた。

実質勇の霊力は日に2回しか撃てないようだ。

ではどうやってここまで戦ったか？

答えは：立てなくなるまで彼らを打ち砕いたのだ。

そのため、何度も何度も木刀を振りぬくことで手が痺れ、握力がなくなってしまうのだ。

もちろんその行為に抵抗感があったが、自分が殺されるわけにもいかない。

勇は覚悟を決め打ち倒した。

「クアアアアア！」

死体が襲い掛かる。

死んでるだけあって、彼らに疲れは無い。
恐怖もない。

それゆえに恐ろしい。

「くっ！はあッ！！」

勇は迎撃のため木刀を振りぬいた。

見事に首筋に命中し、死体はよろめいた。

普通に相手が人間であれば、致命傷だ。

しかし、彼らにとってそれはなんでもない一打にすぎない。

勇はすぐさま離れ、態勢を整える。

「はあ…はあ…限界だ…」

もう一撃全力で振りぬけるかどうか…」

この死体達は森で遭遇した奴よりも動きが鈍い。
その点は救いだっただ。

基本的に1対1の形にもつていきやすいからだ。
だからこそ10数体もの死体を相手に死なずに戦い抜いている。

”ここまで数を減らせば…もう相手にしなくてもいい”
それはもう随分前から考えていたことだった。

しかし勇はあえて自分が何処までやれるかを試していたのだ。
優の心配はあったが、司が優の名前を叫んでいたことから無事を確
認し、

自身の限界に挑戦することを決めたのだ。

「やる所までやるって決めたのは自分だろ…。」

根性見せるよ…勇！」

自分を鼓舞し、最後の一撃を決めようと駆け出した。

「ハアツ！！」

先ほどから攻撃し続けてきた死体に最後の振りを放った！

バキッ！！

首の骨が折れる音が洞窟に響く。

死体は勢い良く倒れたが、無論これが致命傷に至ることはない。

「はぁ…はぁ…」

カランッ

勇の手から木刀がこぼれ落ちた。

どうやら今ので握力がつきたようだ。

両手がブルブルと痙攣している。

「ありがとう…。」

僕のがままに付き合ってくれて…ごめんよ…あなた達に罪はないだろうに…」

ガブツ！

勇の左肩に突如激痛が走った！

どうやら気づかぬうちに背後に回りこまれていたようだ。神経をすり減らして戦っていた勇に周りまで注意がいきわたらなかつたようだ。

死体の歯が勇の肉に食い込んでいく！

「うわアアツ！！んのおおおツ！！！！」

勇は無理やり自身の体を走らせ振り切った。その勢いで肩の肉を少々持っていかれたようだ。

「はぁッ…はぁッ！！っそ…！！

（油断した…ッ）「」

バチバチッ!!

勇の体を淡い光が包みこみ吹き上げる!

その光は木刀をも包み込み始めた。

ものすごい霊気である。

底をついたと思われていた霊力も取り戻すどころか、普段以上にあふれ出ている。

これは回復というより、眠っていた力が噴出したといえる。

「……」

勇は軽快に駆け出すと、先ほど首の骨を折った死体に木刀を叩き付けた!

一撃の元に死体は沈黙。

続いて居合いの構えから、片手で横一文字に木刀を振るった。相手との距離がかなり離れた状態だ。

木刀を振るうと、いつもとは違い光を纏った波動が放たれた。

前方にいた三体の死体は避ける事も無く、光に直撃した。これも一撃の元に3体を同時に倒して見せた。

「残ったのはお前だけだ…」俺”を喰った代償は高くつくぞ…」

勇は片手持ちから両手持ちに変えて再び構えをとった。
再び光がほとばしる。

「ひひ…死ね…これが本気の…」

勇は全力木刀を真上から振り下ろした。

ズバシユツ！！

一刃の波動は死体を通っていった。

「カカカカ…」

「…風刃剣」

勇がそういうと、死体は真つ二つに切り裂かれ崩れ落ちた。

「死にぞこないには勿体ないだろ？」

勇はそう言つと意識を失い、その場に倒れこんだ。

「君……天城君……」

「う……う……」

優は心配そうに勇の顔を覗き込んでいた。

「あれ……白風さん……？」

「馬鹿……！目を覚まさないから心配したじゃない……」

勇は優のひざ枕の上で目覚めた。
その優から涙がこぼれている。

「はは……よかった……。白風さんが……無事……で……」

「私はいつだって大丈夫よ……あなたはいつも無茶ばかりして……」

勇は横になったまま辺りを見渡した。

「白凧さんが助けてくれたんですか…?」

「え?...何言ってるの?私が来たときには全員被われていたわ...。あなたがやったんじゃないの?」

勇は自分がやったことをまるで覚えていないようではなかった。

「...途中まで...記憶はあるんですが...うつうつ...」

「まだ起きちゃダメよ!あなた相当深手だったのよ?」

「そっか...僕...彼に...」

(噛み付かれたんだっけ...)

ザッ

「よ!目が覚めたみたいだな!」

「瀬那先輩...皆さん...白凧さんを助けてくれて...ありがとっ!」
「ました...」

瀬那や一たちが覗きに来た。

「水臭いな！俺達仲間でしょ？」

「日下部先輩…ですね…はは」

騒がしい声が聞こえる。

「いい加減わらわを解放しろ！小娘！」

「だあめよ！しろ！あなたは私の式神としてこれからもつくすのよ」
「！」

司とぬいぐるみのしろとの言い争いの声だったようだ。
この”しろ”は元々この地の主で精霊の朔夜が、アザラシのぬいぐるみのしろに封印されてしまったものである。

「ぬ…ぬいぐるみが喋ってる…もしかしてこれは夢ですか？」

「あれは司の式神…もとはこの洞窟にいた精霊よ。今じゃあんなぬいぐるみにされちゃってね」

「しろ！おだまり！」

あなたの声は霊を感じない人にも聞こえちゃうんだから、大人しくしなさいよ！」

「むむむ！この者達を治せば解放してやると言ったではないか！

「この嘘つき娘め!!! いい死に方せんぞ!」

「今の話は本当なんですか? 治したって...」

「本当だよ」

岡島大樹がひよこひよこことやってきた。

「岡島さん!? 服ボロボロじゃないですか...!」

「俺も... ちよつとは役に立てたんだぜ...」

あいつの... あのしろのせいで大怪我させられたんだけどさ、この通り治療してもらったんだ。

まだ節々が痛いけどな。君もあいつの治療を受けたんだぜ?」

「ふわもこアザラシさん... ありがとう」

「誰がふわもこアザラシさんだ! わらわは朔夜だというとるに!」

正直怒っても可愛らしいから迫力に欠ける。

「嘘を言ったのは謝りますわ! ごめんなさい...」

でもあなたの力を必要としているのよ... お願い力を貸して!」

「ふん…人間など欲深い者のいいようにされるのはしゃくじや！
今のようになんか騙すしの…ほんとうに妖魔といい勝負じゃ」

「しろ…」

「じゃが…まあ外の世をしてみるのも一興かもしれん…。
いいだろう…しばらく付き合ってやる…」

ギューーッ！

司はしろを抱きしめた。

「もうしろったら！なんて可愛らしいのっ！」

「ぎゃう！は、放さぬか！無礼者っ！」

こうして夏休みは、なんともハードな経験で幕を開けた。

全員無事で済んだ。

おまけに変な仲間まで増えて。

「みんなー！外に出てみるよー！」

ーの声だ。

勇は優の肩を借りて立ち上がった。

7人は洞窟の外に出た。

「わあ…綺麗…」

外はすっかり朝になっていた。
綺麗な日差しが辺りを照らしている。

小鳥の囀りがとても気持ちよく聞こえた。

「あれ…？なんか…楽だな？」

「ほんとだ…？部長何もしてないんでしょ？」

新一と一が不思議そうに司の顔を見た。

「ああ…守護霊壁？もう使ってないわよ」

「「この元凶が”こう”なっちゃったから、重苦しい靈気は全て消えたわ。」

ほんと清々しい森になったわ」

「むう…わらわのせいだけではないというのに…ふん！」

確かに…。

きっと人間の負が…彼女を…朔夜の心を徐々に蝕んでいたんだろう。きっと精霊から妖魔になりかけていたんだと思う。

全てを霊のせいにするのは簡単かもしれない。

でも根本にはやはり私達人間の要因が少なからずあるんだ。

「んー…！気持ちいい…」

「ですね…」

勇は洞窟を振り返った。

「どうしたの？」

「い、いえ…なんでもないです」

勇はちょこんと一礼して前を向いた。

「んじゃま…帰りますか！」

『おー！』

7人と1匹は森から出るべく出発した。

その頃…

「ふう…久しぶりじゃのう……」

「ここがばあちゃんの家？」

「白凧神社…立派なもんだな…」

白凧茜、そして謎の少年と青年が白凧神社の門前で全景を眺めていた。

第18話 完

NEXT SIGN…

第19話 夏休み編／緋色の髪留め1

S I G N 序章

第19話 夏休み編／緋色の髪留め1

学校前

A M 8 : 3 0

7人はバスにて無事帰って来た。

各々軽い怪我や疲れは見えるものの、こうして全員無事に帰ってこれた。本当によかったと思う一同だった。

「はあうああー…んじゃま…解散しますか…さすがに眠いし」

大あくびをしながら優が言った。

私なんか一睡もしてないっての…。

「優さん、修行の件ですけど…いつからお邪魔すればいいですか？」

そうだった。

夏休みはお祖母ちゃんに特訓してもらったっけ。

「何です？修行って…まさか、あなたのお祖母様に？」

げ…！

こやつに聞かれてしまった…。

司の事だから妙な事言い出すんじゃないかしら…。

「抜け駆けはなくてよ！優！修行するのであれば、我々ミス研部も参加させなさい！」

「な、何言ってるのよ！？しかもなんで上から物を言つかね！」

ほらきた…いわんこっちゃんない…。

「いいんじゃないですか？皆で頑張ったほうが楽しいですし」

この男も満面の笑顔で…なんという天然め。

「はあ…いいわいいわよ…勝手にしなさい！」

でも修行が辛くて弱音吐いちゃうようなら最初から参加しないで
ね。

私は遊びで修行するわけじゃないんだから！」

こんくらい言っとけば大丈夫でしょ…。

「確かにそうね。皆、聞いての通りよ。

強制はしないわ！今より強くなりたいたいなら参加しなさい！」

「俺はやるツスよ。最低限部長の力になれるくらいにはなってきた
い」

瀬那先輩…あれでいて体育会系かしら…。

「俺もやるぜ…今回随分と足を引っ張っちゃったから…俺も強くな
りたい」

岡島先輩…まあ見た目はもろ柔道部だから根性はあるそうね。

「そういう意味じゃ俺が今回なんの役にも立ってないさ。
俺も強くなれるなら頑張りたい！」

ありゃま…日下部先輩、こんな熱いキャラだったっけ…。

残るは椎名一のみ。

みんなの視線が一に向いた。

「な、なんだよ！僕は塾やら宿題が忙しいんだ！君達みたいに暇じゃないんだよ…」

「…そう。だったら強制はしないわ」

「え…？」

一は意外な顔をした。

恐らくもう少し強引に誘われると踏んだのだろう。予想に反して司の対応は冷たかった。

「じゃあ天城君、司、瀬那先輩に岡島先輩、日下部先輩の5人で決まりね！」

「んじゃま、今日は疲れてるだろうし、来るなら明日から来て頂戴！」

「…けっ！勝手にしてください！」

一は怒りながら帰っていった。

「よかったの？司」

「いいのよ。あの子、素直じゃないだけで根は負けず嫌いだから。きつと来るわ」

へえ…けっこつ見てるんだな…司って。

こっしてその場は解散した。

一方その頃。

「ん…？あれは？」

散歩をしていた須藤彰は、前方からこちらに歩いてくる男に気づいた。

「片桐…？」

片桐の表情は朝っぱらだというのに夜のように暗く沈んでいる。

「…須藤…こっこっ…」

片桐はそう言うや否や須藤にもたれかかった。

「な、なんだ！？どうしたんだ…？」

須藤は片桐を近くの公園に連れて行った。

「んで…何があつたんだよ？」

「今日から夏休みだろ？なんで初日からそんな暗い顔…」

「なんかな…。………やつぱいいや…」

「煮えきらん奴だな…。いいから話してみろよ」

「突拍子すぎて引くなよ…？」

もったいつける片桐。

「大丈夫だったの…んで？」

「俺…お前とやりあったあの日あたりからよ…変なものが見えんだよ…」

片桐は両手で頭を抱え込んでしまった。

「変なものって…?」

「最初は気のせいだって…ずっと思いこんできたんだけどよ…ダメなんだ…。最近じゃうなされる様になっただよ…」

「だからなんなんだって!?!はつきり言えよ!」

「だから!…ツ…その…幽霊が…見えるんだよ…」

…

一瞬間が空いた。

「…本気か?」

「だからいったんだ。馬鹿にしゃがって。もういいよ!馬鹿らしい」

片桐は怒って帰ろうとした。

「おい！待てっつて！馬鹿にしたわけじゃないって」

「るせえよ！もうほっといてくれ！」

須藤は片桐の肩を掴んで静止させた。

「俺について来い」

須藤の案内で二人は移動を始めた。

白凧神社

「ばっかもおおおおお おおおん！！！！」

朝っぱらから茜の雷が落ちていた。

怒られているのはもちろん帰宅したばかりの優。

夜中にこっそり家を抜け出したことがバレたようだ。

「お祖母ちゃん…帰って来た早々、そう怒鳴らないですよ…。」
私寝てなくてヘトヘトなんだから…。」

「まったくお前という子は…。ちいっとも成長しとらん!」

「はは…すみません…。んでさ…さっきからずーっと気になってる
んですけど…。」

そちらのお二人は一体誰？」

優は隣で寛いでる二人を指差して言った。

「っと…すっかり忘れとったの…。」

二人とも、ちょっとこっちへ来てくれ…自己紹介をしておこう」

「…うーっす…」

何よこの不機嫌そうな坊主は…。」

こっちの子供はなんか可愛らしいわね。」

「じゃあ自己紹介を…奥里からバアさんに連れられてきた石動^{いするぎ}
馬^{ずま}だ。」

和^か

このガキんちよの世話係として夏休みの間世話になるぜ」

むむ…態度だけじゃなく口まで悪いぞ…この坊主。

「口は悪いが被い師としての腕前はよい。
お前のいい手本になるじゃろつて優」

こいつが…ねえ…。

「いや…私は遠慮しとく…お祖母ちゃんに修行してもらつわ」

「はん！こつちから願い下げだね。こんな洗濯板の小娘興味ないんでね」

な…なんつった！？

「こ、このハゲ…ッ！！洗濯板…だと！？
表に出るやあああああッ！！」

「て、てめえこそ！年上に対してツルツパゲだと…！？
ぶっ殺すぞてめええええッ！！」

ガツンガツンッ！！！！

二人の頭上に茜の鉄拳が落ちてきた。

「1…1ごめんなさい…」

「わ、悪かったよ…。た、頼むから頭はやめてくれ…」

二人は頭を抑えながら謝った。

「は…はは…。オ、オイラは神楽かぐら 由良葉ゆらば。和馬兄ちゃんと一緒に奥里から修行しに来ました！
よろしく願います！」

この子は礼儀正しくていい子みたいね。

でもなんだろう…なんか違和感みたいな不思議な感じがする子ね…。

「二人とも奥里で知り合ったんじゃが祓い師としての素質も十分あるのな。」

お前と一緒に鍛えてやろうと連れてきたのじゃ」

「俺は別に修行とかどうでもいいんだけどね…」

…。
むかつくけど…このハゲ男…。

流石に坊主なだけあって並々ならぬ靈気を放ってるわね。

「んだよ？で、そっちの自己紹介は？（年上を睨みつけるって…なんつうガキだ）」

「私！？…私は白凧優…お祖母ちゃんの孫娘よ」

「…」

和馬がじっと見てくる。

「…な、なによ？」

「バアさん…こいつが後継者なのか？」

む！ぶしつけに…。
指を刺すなっの！

「…ふうーん…まだまだ”葵”程じゃないな…」

「葵…？」

誰よそれ。

「九鬼家の現当主の娘さんじゃよ…年は22だったかの。
彼女は優よりもずっと経験値が上なんじゃ、仕方なからうって」

「まあな」

何よこいつ…!」

なんかむかつくんですけど!

ピンポーン

「誰か来た様じゃな。優見てきておくれ」

「な、なんで私が!？」

シッシと和馬が手を振って行って来いと指図する。
むかつきつつも向かう優。

ピンポーン!

「ああもおお!そんな何回も押さなくたって聞こえてるっての!…!
一体誰よ!こんな朝っぱらからッ!」

ガラッ!

「よお…」

「あなた達…」

目の前に立っていたのは須藤彰と片桐亮だった。

「どうしたの…？こんな朝早くから」

「こいつを見てほしいんだ…」

なんか、霊が見えるっていつててさ…」

ズズツ…

「！…あなた…何か憑いてる…」

優は片桐を指して言った。

黒い影が片桐の肩から漏れているようなそんなイメージが優には見えていた。

「え！？…じゃあこいつが言ったのって…」

「だから…ほんとだって言ったじゃないか…はあ…はあ…………」

この気…大きくないけど悪意を感じるわね。

あの苦しみよう…宿主である彼の生気を吸っているのかも…。

「ちよつとついてきて！」

優は二人を連れて外に出た。

そしてそのまま御堂の方へ入っていった。

「ここでちよつと待ってて」

御堂に二人を残し、優は走って客間へ急いだ。

「お祖母ちゃん！」

「ドタバタ騒々しい！何事じゃ！」

「御被いするわ。知り合いなんだけど…どうやら憑依されてるみたいなの！」

サインは見えないけど、悪意を持った霊よ！」

「ふむ。優やお待ち！…由良葉…主やってみるかい？」

茜は由良葉の頭を撫でて言った。

「え！？そんな…危ないわよ！」

「大丈夫だ。そいつはタダのガキじゃないんだ。問題ねーよ」

問題ないって…なんなのよ！

茜・和馬・由良葉、そして優の4人は御堂に到着した。

「ふむ…確かに憑いておるわ。まあこの程度なら問題ないじゃろ」

問題ないってというのはこの子が被えるって意味で？
本当なのかしら…。

「あなた…えーと…」

「片桐だ…片桐亮……なんかドンドン息苦しくなってくるんだが…」

「片桐さん…今からあなたに憑いている霊を剥がします。
すぐに楽になるから安心して」

優は茜のほづを見て目で合図をする。

茜も頷いてOKの合図で返した。

「片桐亮に憑依し、さ迷えし霊よ…その肉体は本来在るべき場所ではない…すみやかに出られよ…」

優は経を唱え始めた。

するとすぐに亮は苦しみます。

どつやらとり憑いている霊が苦しんでいるようだ。

同調している亮も同様に苦しむようだ。

「はッ！」

優が気合を入れると、その瞬間霊が飛び出た。

「な…なんか出た…」

須藤彰が思わず亮の上に漂う黒いモヤを見て言った。

！
この人あれが見えるの…？

というか…この人やっぱり…。
なんか妙な霊気を感じる…。

「由良葉…見えるな？」

あれはどうやら感情も持たぬ悪意の塊みたいなものじゃ。

さ迷う霊がいろんな場所で負の気に触れて膨れ上がったんじゃの」

「オイラがあれをやっつけるんだね…やってみるよ！」

由良葉は構えた。

小さな体が可愛い。

「はぁッ…！」

由良葉が気合を入れると霊気が高まっていく。

「へえ…！たしかにタダの子供じゃないみたいね」

「ちげーよ。俺が言ったタダのガキじゃないってのは、”アレ”じゃない」

？

どういう意味だろ？

「コオオオオッ！」

優が余所見をしていると、黒い霧はつめきを上げて由良葉に襲い掛かった！

「チエストオツ！」

由良葉は合わせるように拳を突き出し、霧は拡散された。

「やっぱり子供ね…あんな突きじゃ霊に効果はないのに…」

「ふん…やっぱりお前はまだそのレベルか」

「何よ？どういう意味？」

いちいちカンに触るわね！

「いいから見てみるよ」

和馬が指差す方を見ると、拡散した黒い霧は徐々に消滅していつている。

「ええ！？なんで？」

「そんなんもわかんねえのかよ?」

「優には教えとらんからな…そういつてやるな和馬よ」

きいいいいッ!

何よ皆して!

私は何も知らないんだからね!

「単純に自分の霊力を使って、それをぶつけただけだ」

「え…?なによそれ…私もやってみたことあるわよ!?!でも通じなかつた!」

やり方がいけなかつたっていうの!?

「優…ちよつとやってみなさい」

「え、ええ……こつでしょ?」

優はいつもの要領で右手に霊力を集中し始めた。

「こんな感じじゃないの?」

「ふむ…本来”そつち”のほづが難しいものなのだがの…」

え？

「そのやり方は確かに靈力を使つてはあゝる。が…その方法では体内活性…治療力向上…筋力強化のみ。

靈的な攻撃力にも防御力にもならん」

「そうだったんだ…どおりで”これ”で攻撃しても利かないわけだ」

「靈氣が目に見えておらぬから解りづらいのじゃ…。よおく見ておれ」

そういうと茜は右手を出して氣を込め始めた。

ズアッ！

茜の右手から光がほとばしる。

「どつじゃ？これなら目に見えるじゃろつ？」

「うんうん…！すごい…靈氣を一点に集中して高めたのね」

なるほど…靈氣を内に溜めて強化するんじゃないやなくて、纏つて一体化するイメージか…。

「この状態で攻撃を繰り返せば、それは霊的な攻撃力に変わる…。逆にこの状態で霊の攻撃を防ぐこともできる。優は何故か内に溜めるほうを先にやれるようになったようだが…外に溜めるほうが本来容易とされとる」

「そ、そうなんだ…」

やっぱり私の知らない事ってまだまだいっぱいあるんだわ。なんだか修行が楽しみになってきたわ！

寝てない事もあってハイテンションになる優であった。

第19話 完 N E X T S I G N …

第20話 夏休み編／緋色の髪留め2

S I G N 序章

第20話 夏休み編／緋色の髪留め2

「ふむ…とりあえず霊も被ったことじゃ…もう安心しなさい。
だがお主…どうやらかなりの霊媒体質じゃな…」

茜は起き上がった片桐に言った。

「霊媒…体質…？…どうということだよ…」

「霊を呼びやすく…取り憑きやすい体ということじゃ…。
こればかりはどうすることも出来んからもう…。
出来れば…万が一の場合に自分でどうにかできる程度の
基本的な術ぐらい学んでおいたほうがいいのじゃが…」

深刻そうな表情を浮かべる茜。

「マジかよ…。。どうすればいいんだよ！…」

「ふむ…主も優達と修行じゃな…」

ええ!?

こゝこの人まで巻き込むっての!?

「修行なんてかったるいことやってられっかよ!」

「まあ…無理には言わんさ。

またどこぞの霊に憑き纏われるだけじゃて」

ニヤリと笑う茜。

「うう。。。………わかったよ………」

「わかった?何がじゃ?」

お祖母ちゃん意地悪いな……。
はは……。

「お、お願いします………」

「ふむ。それでよい。」

最近の若いのは礼儀をしらんでいかん」

う…胸が痛む一言だな…。

「そつだ…お祖母ちゃん」

「なんじゃ？」

優は須藤の前に来てじつと須藤の顔を見た。

「な、なんだよ…」

「やっぱり…なんかこの人の靈気変な感じがする」

「どれどれ……。ふむ…悪意がないから気づかぬかもしれぬが…。
お主にも憑いておるの」

え！？

「憑いてるの！？」

「うむ…どうも弱弱しい波動じゃな…。
意識を保っていないかもしれんが出してみるか？」

「た、頼む……じゃなかった…お願いします」

「ハッ！」

茜は須藤に向かって一喝した。

「ぎゃうっ！」

なんと須藤の体から一人の女性の霊が飛び出してきた。

「流石お祖母ちゃんね…経も何もなく気合だけで剥がすなんて」

「なあに。この子の力が弱かったからじゃよ」

この子…私と同じくらいの年の子だ。

学生服かな…？どっかで見たような…。

ポニーテールが良く似合う可愛らしい女性だ。

「…三嶋…咲……………？なのか…」

須藤が物凄い驚いた顔で彼女を見ている。

「…覚えていてくれたんだね…須藤君…」

「知り合い…？」

穏やかに笑う彼女はどうかやら須藤彰と関係のある人のようだ。

「…どうして…俺に？」

君は…もう逝ってしまったのだと思っていた…」

「ん…。私が死んで、もう2年経つものね……」

彼女はゆっくりと話し出した。

2年前の7月…夏休みを目前にしたある日、彼女は死んでしまったという。

彼女は当時14歳…中学三年生だった。

須藤とは同じ学校、同学年で小学校からの馴染みだったという。

「須藤君は知ってるかもしれないけど、私が3年生の時…クラスでイジメがあったの。」

私はそれを助けた事から、徐々に矛先が私に向いてね…。

それでも私はいじめを受けてた子が助かったならそれでいいって思ってたの」

「お前を自殺に追いやった奴らは俺がああの後ボコボコにしてやったよ…。」

なんにも変わらないのはわかってた…。三嶋のために…そんな事

を思った自分がいた。

でも結局、俺は何も出来なかった俺自身へのイラ立ちをぶつけた
かったんだろうな…

悪かったな…三嶋…お前のせいにしちまったみたいで…そんなの
報われるわけもないよな…」

咲は悲しげな顔で首を横に振った。

「それは違うよ…。」

私ね、須藤君が彼らに怒って、後先省みずに殴りに行ってくれた
事がすごく嬉しかったの…。

それで彼らへの復讐を思い止まることが出来たわ。

でも、私の中の恨みの念は消えてなかったみたいね…。こうして
浮かばれずに漂ってるのだから」

「三嶋…」

「なるほどの…成仏できない理由…この世に何か未練を残しておる
ののう？」

お主もわかっておるかもしれんが、力が弱まっておる…その時が
迫っておるのじゃ…。

何か力になれることがあれば言ってみんか…？」

「その時って…なんだよ…三嶋…どうなっちゃうんだよ？」

須藤が茜に駆け寄った。

「意識をなくし…記憶もなくなり…さっきの黒い霧のように何もなしにさ迷う存在になるさ…」
結末は見ての通りじゃ…長く漂えば、負の波動にやられ…”あ
あ”なる」

「そんな…」

「須藤さん…」

須藤は三嶋咲の前に立った。

「三嶋…言ってくれ…何か未練があるのか…？」

「…私ね…お父さんやお母さん…皆に知ってほしい事があるんだ…
それを伝えれないから…もしかしたら成仏できないのかな…」

「伝えたい事…？なんだ！？」

「私ね…自殺じゃないんだよ…」

！！

自殺じゃない…？

「……どういことだ……」

「あの日ね…私が死んだ日…」。

イジメの筆頭格の竹谷君に屋上に呼び出されたの。

”俺の女になれば、イジメをやめてやる”って……」

何よそれ…

そんな最低な男がいるのね…。

「私は断ったわ…。どんなにいじめられても…私の心は私だけの…」

好きでもない人に付き合っていく気はなかった…。

それに私は好きな人がいたから…」

「…」

須藤は黙ったまま聞いていた。

「断って…それに腹を立てた彼は…私を襲おうとした…」。

私は必死に逃げたけど…結局追い詰められて…」。

そして足を踏み外して…」

咲は涙をこらえ切れず涙を流し始めた。

須藤は触れられない彼女をそっと抱きしめて言った。

「もういい……いいから……わかったから……」

「うん……」

「やりきれないわね……」

「クズ野郎は何処にだっているもんだな。胸糞わりいッ……！」

初めて意見があつたかもな……この人（和馬）と。

「もう……泣くなよ三嶋……。変な言い方かもしれないけど元気出せよ……？な？」

「うん……ありがとう……」。

なんだか聞いてもらってすごくスッキリした気分……」

「お祖母ちゃん、これで彼女……逝けるよね？」

「うむ……心が晴れたんじゃろうな……」。

これであの子をここ（現世）に縛るものはなくなったはずじゃ

「三嶋……もう少しだけ……こっちに残れないか……？」

「え……？」

「いや…なんでもない。ありがとうな三嶋…話が出来てよかった」

そついつと須藤はそのまま出口に向かって歩き出した。

「ちょ…何処にいくのよ？」

「色々ありがとうな」

振り返りもせず手を振って出て行ってしまった。

「須藤君…」

「行くのか？」

「…」

出口付近で話を聞いていた片桐は、出て行くところとする須藤にすれ違い様に質問した。

だが、返事もなく彼は行ってしまった。

「須藤君……私のためにまた無茶をするんじゃない？」

「てか咲さんほったらかしで行くかね…普通…私連れ戻してくる！」

「やめとけ！」

む…またコイツか。

「なんでよ！」

「そつとしておいてやれつつつてんだよ。」

それに咲さんよ、人って奴は誰のためにでも無茶なんか簡単に出来るもんじゃないだろうよ。

でもアイツはあんたのために無茶をしてきたんだろ…？

つまりあんたはアイツにとって無茶を平気でやれる存在ってことだろ？

それって、すげえ幸せなことなんじゃないの？」

「…」

咲は黙って俯いた。

「はぁ…勝手よ勝手！男ってホント自分勝手にバカよ！バカ！」

「な、なんだよ！？俺なんか間違ってるかよ!？」

自分のために誰かが無茶をしてくれる…それは幸せな事かもしれない。
でもそれで傷つくのを喜べるはずがないじゃない…好きな相手なら

尚更よ。

「咲さん…私は女だし、あなたの気持ちわかるわ…。」

自分のために彼が傷つくのが嫌なんでしょ…?」

「…うん」

「男って皆バカばつかなのよね…ほんと。
心配する身にもなれってのよ」

「ふふ…そうだね…。
あなたにも…そういう人がいるんだね」

え!？」

「い、いや…私は別に！別にほんとに!」

「あはは…うん…。」

私は幸せだな…こうなっちゃっても私のために動いてくれる人が
いる」

この人はきつとずっと独りで頑張ってきたんだな。
誰とも話せず、誰にも気づかれず…触れられず…ただ見ているだけ
…。

それはどれだけ寂しいことなのだろうか。

でも彼女は彼のそばにいて幸せだったのかな…。
何も出来ないし、してもらった事もできない…。

「咲さん…この2年間…辛かった…？」

「…どうだろう…確かに辛い事は沢山あったわ…。
けど彼に憑いてからは幸せだったと思う。
…うん。幸せだった」

「そっ…か。よかったね…よかった…。」

優の頬を涙が伝っていった。

「ありがとう…。私のために泣いてくれて…ありがとう」

その頃…

「…そうか…。わかった…サンキュな」

須藤は中学時代の友人に竹谷の居場所を聞いていた。

聞いた話によると不良グループとつるんで、奴の地元では有名になっ
っているようだ。

須藤は竹谷の地元、生馬に向かった。

中学を出てから聖ヶ丘に引越したため、元の地元である生馬は久しぶりだった。

1時間ほど歩いて須藤は竹谷のいるらしき不良の溜まり場へやってきた。

どうやら廃工場を根城にしているようだ。

騒ぐ声が聞こえる所をみると人はいるようだ。

須藤はそのまま工場へ足を向けた。

「ガハハ！んできさ！……つて…誰だてめえ？」

不良の一人が須藤に気づいたようだ。

工場内には10人ほどの男達が座り込んでいる。

「竹谷はいるか？」

「ああ！？…てめえ誰だ？」

不良がガンを飛ばしながら須藤の目前までやってきた。

「竹谷はいるのか？」

「質問してんのはこっちだろが！？ああ！？殺すぞッ！！」

バキッ！！！！

須藤の上段蹴りが男の側頭部に見事にヒットした。

そのまま勢い良く飛ばされていった。

「な…！てめえ！！喧嘩売りにきたのか！？」

「っせえな…。質問に答えりゃいいんだよ…竹谷は何処だ」

「竹谷はいるのか…いないのか…どっちだって聞いてんだよッ!」

「ひ!ひいいいいい!」

ドガッ!

容赦のない蹴りで男を蹴散らした。

「てめえら…答える気がないなら…全員潰すぞ!」

「んだあ…?何処のどいつだ…デカイ声出してる馬鹿は」

奥から3人の男が現れた。

「…竹谷…てめえ」

「!…へえ…そのデカイ凶体よく覚えてるぜ?須藤ちゃん」

中央に立つ中背の男が言った。
どうやらこの男が竹谷らしい。

「クチャ…誰だよ竹谷?お前の知り合い?」

右の男がガムをクチャクチャしながら質問した。

「ああ。オナ中の須藤ちゃんだよ。むかーしボコボコにされたんだわ」

「へえ。お前をボコボコにか。じゃあ強いんじゃない？」

左の男が須藤を見ながらニヤニヤと不気味な笑みを浮かべている。

「強いよー！俺だけじゃないもん。10人ぐらい居たのに全滅だぜ？マジおっかねえ奴よ」

『こええー』

左右の男がハモって見せる。

だが言葉とは裏腹に、まるで怖がって居ないようだ。

「お前らは関係ねえ…用があるのは竹谷だけだ。そいつを渡せや」

「関係ねえってさ！竹谷どうすんの？クチャクチャ…」

「俺はこんなおっかねえ奴とやりたくないわ。お前らやっちゃって」

「ラッキー！久しぶりに楽しめそうじゃん」

ガム男とニヤニヤ男が須藤にゆっくり歩み寄ってくる。

「お呼びじゃねえんだよ…どけええッ！」

須藤の咆哮が工場内に轟いた。

第20話 完

NEXT SIGN…

第21話 夏休み編／緋色の髪留め3

S I G N 序章

第21話 夏休み編／緋色の髪留め3

須藤に向かって歩みよってくる男二人…。
周りの連中とは一つ飛びぬけた存在感だ。

竹谷をリーダーとして、その側近に当る二人なのか？

「邪魔するってんなら容赦しねえぞ…！」

今の俺に加減は無理だ…怪我したくなかったらすっこんでろ」

「プッ！」

ガムの男が自分で嚙んでいたガムを須藤目掛けて吐き出した！

「！…！」

ガムは避けたものの、一緒に飛び出た唾液が須藤の顔面にかかった。

「ひひ…！どうなるのかやってみてよ。須藤ちゃん？」

挑発するガム男。

「ッ!!」

須藤の射程内に踏み込んだや否やすぐさま蹴りを放つ。

だが、蹴りは男の鼻先をかすめるだけでヒットはしなかった!

「ひゅー　あつぶねえ!」

「!…(あれを避けたか…)」

「おいカズオー!こいつ俺にくれね?」

「金子ちゃん気に入っちゃったわけ?まあいいけど」

そついうとカズオと呼ばれたニヤつき男は後ろに下がっていった。

「まあ、ゆっくり遊ぼうじゃないの須藤ちゃん」

「何度も言わせるな…俺が用のあるのはためえ等じゃねえってんだ
よ…!」

須藤は自ら突進して行った。

間合いに入るや否や、パンチを繰り出す!

長身の須藤の攻撃はどうしても打点が高くなるため、中背相手では全て顔面狙いになる。

「ぶな…っ！」

またしても絶妙なタイミングで攻撃をかわす金子。

「…てめえ…ボクシングか…！」

「ふふ…楽しもうよ」

凄まじい速さの攻撃を見切る動体視力。
瞬時にどの方向へも退避できるフットワーク。

「…はあ…」

「何？…どうしたのよ須藤ちゃん。やる気なくなっちゃった？
それともビビッっちゃったっかな？」

足さばきを続けながらボクシングの構えをする金子。

須藤はゆっくり金子に向かって歩き始めた。

「何だあ？」

そして金子の間合いに足を踏み入れた。

バシッ！！

「！……ぐ……」

金子の右ストレートが須藤の腹部をえぐる。

「はは！何これ！？サンドバッグになりたいっての？いいよ？」

ドスドスドスドス！！

金子の連打が須藤を襲う。

腹、わき腹そしてアッパで顎…。

見事なコンビネーションだ。

だが…

「はあ……はあ……どうなってやがる……」

「……」

「なんで倒れねえッ！……」

「ふん！」

もはや避けれる間合いではなかった。

一閃。

須藤の拳が金子の顔面をえぐっていた。
そのまま気を失い、地面に倒れこんだ。

「悪いな。打たれ強さは人一倍なんだよ」

グサッ

「！」

突如須藤の背中に激痛が走った。

「やるねえ君い…。金子ちゃん倒すなんて大したもんだよ」

カズオが背後から近づき、ナイフで須藤を刺したようだ。
右のわき腹辺りを刺されたようだ。
血が流れている。

すぐさま間合いを取るカズオ。

「ふふ…いいねえその眼。化け物の眼だよ…怖いねえ…」

カズオを睨みつける須藤であったが、ナイフを抜き捨てると、黙って向きを変えて竹谷のほうへ歩みを進めた。

「へえ…俺を無視しちゃうわけね。おいお前等…！」

カズオは周りで見ていた7人ほどの不良たちに向けて叫んだ。

「相手は手負いが一人…。なあに、もう立ってるのもやっとな…。袋叩きといこうぜ？」

『おーーッ…！』

さっきまでびびっていたギャラリーがいきり立ち、須藤を囲み始めた。

同時に竹谷は”任せた”といわんばかりに後ろに下がった。

「…奴等と呼ぶか…くく」

竹谷は何処かに電話をしているようだ。

「竹谷アアツ…！お前等もどけヤツ…！」

「るせえ！！ぶっ潰してやる！！」

ドガバキッ！！

一瞬にして男二人が宙を舞った。

「人が加減してりゃ図に乗りやがって……」

「ひい……！」

須藤と眼があつたものは体が硬直した。

まるでライオンに睨まれたような……恐怖に縛られる感覚。

だが、そうなつたらもう遅い。

須藤はターゲットを逃さない。

次々襲い、倒していく。

「ぐ……冗談だろ……そいつ怪我してるんだぞ……」

ナイフで刺されて……あんなに血が出るんだぞ……

なんで、なんで動けるんだよおおおッ！！！！！！」

「っせえんだよ……。さっきのニヤつきは何処に行ったんだてめえ……」

周りが居なきゃ余裕もでねえってか？ああ！！？」

すでに他のメンバーは全員気を失っていた。
残るはカズオ、そして竹谷のみ。

「カズオオ…ちゃんとやれよ？」

「竹谷…お、俺は…」

「やんなきゃ俺がお前をやっちゃうからね」

ガクガクとカズオが震えだす。

「う、うつつ…うわあああああああ！！！」

半ばヤケクソに須藤に突っ込んでいった。

須藤は須藤で、実のところ慢心相違だった。

10人にも及ぶ相手との戦闘、加えて刺し傷に多量の出血。
もはや気合だけで立っている状態だ。

そんな状況ではあるが単純に真っ向から向かって来る相手に遅れを
取るほど弱くもなく。

須藤はカズオを一蹴した。

「ち…使えない雑魚ばっか」

「さあ…これで一対一だ…。話をさせてもらおうか」

「いいよ?…というか、2年ぶりだっていうのになんなの?」

「三嶋…咲…覚えてるか?」

「三嶋あ?誰だっけ…。悪いね覚えてないや。女の子ならおぼ…!」

404

一瞬にして須藤は間合いをつめた。
と同時に竹谷の顔面目掛けて蹴りを放った!

ドガッ!

「…いつつつ…何するの?いきなり」

須藤の蹴りを片腕でガードしている。
怪我のせいもあり、力が入りきらなかったようだ。

「三嶋咲…お前が2年前殺した同級生だ」

「！……………なんでお前そんなこと知ってんの…？」

竹谷の顔色が変わった。

「やっぱりお前…」

「ああそうさ…彼女が俺を拒絶するからね…」

まあ勝手に足を滑らせて死んじゃったんだ。俺のせいじゃない」

「てめえ…何処まで腐ってやがるんだ…ッ…！」

「はは。さあねえ…」

てか、なに？それを言いになんざわざ来たっての？
相変わらず馬鹿だねえ君は」

ブンッ！

須藤は拳を振るうが、かわされてしまった。

「だからさあッ！すぐに殴りかかるのやめなよ！たく野蛮人め…！」

「その口を閉じやがれ！」

再び攻撃をしかける須藤だったが、動きに精彩を欠いている。
竹谷はなんなく攻撃をかわして、逆に須藤の顔面を殴りつけた。

「ぐはっ……」

「気持ちいいね。殴るのって。君だから特にな須藤君」

須藤は倒れこんでしまった。

流石に疲れもダメージもピークに達したようだ。

「はあ……はあ……謝れ……」

「はあ？なんだって？」

「謝れって言ったんだよ！！三嶋に謝れ……墓前で手について謝れ……。
両親に……頭を……下げろッ……はあ……はあ……」

「……ッチ！くだらねえこと言ってんじゃねえよ……！！ああ！？？」

ドガッドガッ！！

竹谷は須藤を滅多蹴りにした。

「はあ！はあッ！…このカスがッ！」

「よう！」

入り口のほうから声が聞こえた。

「ああ！？おせえんだよてめえら！何してやがった！
…ああ！？」

現れたのは片桐亮・石動和馬・白凧優の三名だった。

「誰だ…てめえら…」

「アンタに名乗る名前なんてないわよ」

ドサッ！

片桐と石動は両手に引きずっていた男達を放り投げた。

「おせえって…こいつ等の事か？
悪いけど倒させてもらったぜ？」

「お前…片桐亮か…？」

「覚えてくれてたようだな…竹谷」

そう。

竹谷と同中だったのは須藤だけではなく、片桐も一緒。

須藤が出て行ってからしばらくして、心配そうな咲を見て

”行こう”

と言い出したのだ。

片桐は地元・生馬にも詳しく案内してやるとの事で今に至る。
和馬は気分についてきたみたいだけど、来てくれて助かった。

入り口付近で4人の不良と鉢合わせしたのだが、その時に戦ってくれたのだ。
ただの口の悪いハゲだと思ってたけど、案外いい人なのかもしれない。

「まさか、お前とこいつが仲良くつるんではな。
仲直りしたのか？」

「まさか。そいつとは何でもねえよ…けどな。
借りは返さないと俺の気がすまないんでね」

「うう…おめえら…なんで来たんだよ…。
ダセエとこ…見られちまったぜ…」

竹谷の足元で声を振り絞る須藤。

「まずいわね…酷い怪我をしてる！」

「ありゃ相当やべえな…とっととブチかまして病院につれてかねえ
と…！」

和馬が走り出そうとした瞬間、片桐が肩を掴んで静止させた。

「んだよ!？」

「…手出し無用だ」

「ああ!？」

見てみると、須藤の方を指さす片桐。

「…あいっ…」

なんと須藤が立ち上がった。

「サンキュ…片桐」

「ふん…とつとと終わらせる」

「終わらせる…？だあ…？」

なめてんのか！？てめえら！！この怪我見えるよな！？

この出血量！！今の今まで転がってた奴だぞ！？何が出来るってんだ！？ああ！？」

ヒュッ！

「え…」

バキッ！！

須藤の渾身の蹴りが竹谷の首にヒットした。
吹き飛びはしなかったものの、ふらつかせた。

「ぐ…ぐ…何処にそんな力…」

「わりいな…さっきとは状況が変わった…」

「ああ！？」

「惚れてた女が見てるんだ…無様に寝てられんよ」

ニコツと笑う須藤。

「あに言ってんだよこいつ!! 気味わりいんだよおおおおッ!!」
いきり立って襲い掛かってくる竹谷!

「…終わりだッ!!」

クロスカウンター…。

竹谷の右ストレートに対して右ストレートを放った。

勝負はリーチの差で須藤に軍配は上がった。

気を失い倒れこむ竹谷。

「…」

須藤は無言で優の方へ向けてガッツポーズをした。

無論優ではなく…優に憑依していた咲に対して…。

咲は満面の笑顔でそれに応えた。

数分後

「…」

「気がついたか」

須藤は竹谷を見下ろしながら言った。

「…俺の負けだよ…好きにしろ」

「彼女がわかるか…?」

須藤はゆっくりと竹谷を起こした。

「……三嶋…さん……」

竹谷の目の前には優が立っていた。
しかし彼の目に映る姿は三嶋咲の姿だった。

「……」

「……うう……うわああ……俺は……俺は……」

泣き崩れる竹谷。

「……あなたも……辛かったのね……竹谷君……」

「！……うう……ごめんなさい……」

三嶋さん……ごめんよ……本当にごめんなさい……」

スッ

咲はそつと泣き崩れる竹谷に手を差し伸べた。

「……もうわかったから……私はもうあなたを恨んではいないわ……」

「うう……うわあああああ」

それから数分間……竹谷が泣き止むことはなかった。
そんな姿を見て、須藤の怒りも消えていた。

「俺……君の両親に謝りにいくよ……」

それで君が戻ってくるわけじゃないけど…。
俺は一生かけて償っていくつもりだよ…。」

「ありがとう…っていうのも変かもしれないけど…
でもありがとう…竹谷君…これからは人のために生きてほしい…
私の分まで…。」

「ああ…そうする…。」

「ううううう…ええ子や…なんてええ子や…。」

石動和馬はとなりで号泣していた。
涙もろい性格のようだ。

ふわあ…

咲の体を淡い光が包みだした。

「！咲…ッ」

「須藤君…ありがとう…。
どうやら時間みたい…。」

「…ごめんな…最後の最後まで…俺は何もしてあげれなかった…。」

「そんなことないよ…私は幸せでした。」

あなたをずっと好きでよかった…。
ありがとう…須藤君」

須藤は涙が止まらなかった。
咲もまた…涙が溢れていた。

「さよならは…言わないぞ…。
ずっと俺のここ（心）で咲は生き続ける」

「うん…ありがとう…」

フワサツ

咲は自分の身に着けていた髪留めを外した。
淡い髪の毛が綺麗に咲いた花のように美しかった。

「これを受け取ってほしい…」

「いいのか…？」

「私はいつもあなたを見守っているからね…」

「咲ッ！行くな…行くなッ！！」

三嶋咲はそのまま天に昇るように消えていった。

その緋色の髪留めを残して…。

第21話 完

NEXT

SIGN…

第22話 夏休み編 / 修行1

S I G N 序章

第22話 夏休み編 / 修行1

「…っ…ん…」

体が重い…。

7月26日(日) … AM 8 : 32 … か。

昨日の一件のあと須藤先輩はすぐに意識を失って倒れた。
疲労と傷と多量の出血が原因だった。

すぐに石動和馬が治療術で怪我は治したが、流れ出た血はどうにも
ならず、すぐに救急車を呼んだ。
正直危ない所だったが、なんとか一命は取り留めたようだ。

あそこまで無茶出来るって…愛の力ってすごいんだな…って普通に
感心してしまった。

私も大切な人のためなら、あんなに頑張れるのかな…。

そうそう。

かく言う私も病院から帰宅後、すぐにボタンキューだったみたい。

そこからの記憶がないもの。

やっぱり寝てなかったし、色々と疲れが溜まっていたのね。

「さてと…とりあえず朝ご飯食べよう…お腹空いた…」

優は居間へ向かった。

「あ、おはようございます。お邪魔してます」

！！

「な……なんで!?!」

なんで天城君がいるのよ!?!

天城勇が目のまで寛いでいる。

どうやら、修行をやる気満々のようだ。

「あ、優おはようー!もう体いいの?」

「お、お、お姉ちゃん！

もう体いいの？…じゃないわよ！なんで勝手に上げてんのよ！

「あら？いけなかった？」

「こ、こいつ…わざとだな…。
なんといい姉だ！

「きいいいいッ！

優は怒って出て行ってしまった。

恐らく身だしなみが散々だったのを見られたからだと思われる。

「は…はは…。やっぱりまずかったような…」

「勇君が気にする事はないわよー！

あの子ただ照れてるだけだし」

「いや…でも、やっぱりこんな朝早くから押しかけてしまって…。
すみません…」

「気にしない！気にしない！あの子喜んでるわよきつと。

それで…修行…だっけ？でも本当にいいの？

歩まずに済めるものなら、それに越したことはない道だと思っけ

ど」

亜子は勇にお茶を出して、自身もイスにかけた。

霊と接する事は危険も伴う…。

自分の経験上、苦しいことも多かったゆえに、

彼にも同じ思いをさせるかと思うと心が痛む部分があった。

「ええ…自分で決めた事です。

僕自身…今の自分には納得いつていません…。

彼女の足を引つ張るのも嫌ですし…気持ち的には彼女を守れるぐ
らいには強くなりたい…ッ！」

「…覚悟の上なのね…。

そっか…だったら止めないわ…頑張ってね」

「はい！」

勇は力強く返事をした。

「あの子を…優をお願いね…。

でも、決して自分の命を軽んじないでね…。

残された人は…一生消えない悲しみを背負っていくことになるの
だから…」

「え…？」

亜子の目は悲しみに満ちているように感じた。

ドタバタッ！

優が戻ってきたようだ。

「あなたねえ！いくら来なさいって言ったからって、何もこんな朝っぱら来ること無いでしょ！」

「はは…ですよね…反省してます。

なんか気持ちが高揚しちゃって…いてもいられずに…です」

まったく…。

もしかしたら私以上に”強くなるっ”という気持ちが強いのかもしれないな…。

「おねえちゃん！ご飯！」

「そういうと思ってちゃんと準備してたわよ！

はい！亜子特製カツ丼よ！」

おおお！！

「美味しそう〜！おねえちゃんわかってるね！」

「あ、朝からカツ丼ですか…！？

しかも大盛り…！白凧さんって見た目に似合わず食べるんですね…」

「え？朝からカツ丼って普通じゃないの？」

「…はは」

勇は彼女の素の反応に何も言い返せなかった。

ガツガツ！

「もう優ったら…！男の子の前ではしたない！」

そんなガツガツかっこまなくても、よく噛んでゆっくり食べなさいよ！」

あなたも一応女の子なんだから！」

「むう…！亜子ねえ最近、ほんととお祖母ちゃんそっくりで口づるさくなっただわよ！」

老けちゃうよ！そんな煩いと！」

「な、なんですって！？」

勇は姉妹の喧嘩を見て微笑んでいた。

「いいですね…やっぱり姉妹とか羨ましい」

「勇君は一人っ子だったっけ？」

姉妹はいいかもしれないけど、私的にはもっと大人しい女の子らしい妹がよかったわ」

「それはこっちの台詞よ！

もっと物静かで優しいお姉さまがよかったわ！」

『ふん！』

二人してそっぽを向いてしまった。

「はは…まあまあ……」。

ところでお祖母様のお姿がありませんが…まだお休み中ですか？」

「ううん。お祖母ちゃんはもう起きてるわ。

今頃裏で二人をしごいてるんじゃない？」

二人？

ああ…居候の二人のことかな。
姿が見えないし。

「ごっつちそうさま！美味しかったよ！」

「お粗末様！食べっぷりだけはいつ見てもいいわね」

「っし！腹も膨れたし！天城君！裏庭に行きましょう！」

「あ！はい！失礼します！」

勇は亜子に一礼して優の後を追っていった。

裏庭

「どつした！もう終わりかい？」

「く…クソ…ババアツ…！」

どつちら石動和馬と神楽由良葉の両名が腕立て伏せを強制させられているようだ。

「お祖母ちゃん何してるの？」

「優か…もう体はよいのか？」

「うん。それより二人は朝から筋トレ？
暑っ苦しいことやってるわね」

「基礎体力や筋力作りは大切な事じゃ。
被い師といえど、憑依した人間と渡り合う事も多々あるのじゃ。
そうなった場合、普通に鍛えた程度の肉体では適う筈も無い」

確かに…。
筋力強化なんかも出来るけど、基礎がないと無理をきかせようにも
出来ないからね…。
私も自分の力はわかってるつもりだから、変に強化しすぎないように
している。

後日筋肉痛になる程度ならいいけど、もっと激しい損傷を負いかね
ないからね。

「午前中は基礎体力作り…昼は霊術の修行…夕方は宿題じゃ！」

「へえ…そんなメニューなんだ…。
宿題まで組み込まれてるなんてね…」

「あ、あの！僕も今日から修行をさせて頂きたいのですが…」

「何！？…どういことじゃ優！」

優は勇のこと…仲間達も修行を望んでいることを伝えた。

「なるほどの…。」

それほどまでに言うのであれば断ることはないが…。
厳しい修行になるかもしれないぞ？」

「はい！自分は構いません！強くなれるなら…！」

「強くなれるかどうかは本人次第じゃ…。」

素質の問題もある…。時間も限られておるしな…。」

だが、元々〇に近い力なんじゃ…今よりはマシにはなるじやろ
うて」

「はあ…はあッ…1000ッ…！」

「クラァッ！！終わったぞ！！ババァッ…！」

ゴッソッ…！！

茜の鉄拳が和馬の頭に落ちた。

「…ッ…！！だ…だから…頭は…！」

頭を抱えて悶絶する和馬。

どうにも学習能力がないらしい。

「ふん…口の減らぬ小僧じゃ！」

「ばっちゃん…オイラ…もうへトへト…」

由良葉はまだ小学生。

当然それ用のメニューではあるだろうが…。

恐らく本人の限界ギリギリを見極めた上で、回数など設定してあるんだらうな。

「まだこれから走りこみじゃ！」

容赦のないシゴキだわ…。

まあはじめからわかってたけどね…。

簡単に強くなんなれないってこと…。

「優に勇！主らも走って来い！」

『はい…』

二人はすでにバテバテの和馬と由良葉の後を追って走り出した。

「はあ…はあ…お前のばあさん…
ありやまともじゃねえわ…」

しばらく走っていると和馬が口を開いた。

「まあ厳しい人ではあると思うわ…」

「おねえちゃんも昨日帰ってからすぐ寝ちゃったから知らないと思
うけど、

オイラも和馬兄ちゃんもアレから腕立て・腹筋・背筋・走りこみ
までやらされて大変だったんだよ…。

はあ…はあ…」

そうだったんだ…。
き、厳しいな。

「僕はワクワクしてます！どんな修行が待ってるんだろ！」

あ、相変わらずポジティブというか…。

「お前のダチはマゾか…？」

「そっぴえばお二人は優さんとどういった関係なんですか…？」

僕は優さんのクラスメイトの天城勇です。よろしくお願いします

「！」

「俺達は…んつと…えー…まあ遠い親戚みたいなもんだよ…。」

（おい！こいつ事情知ってるのか？被い師とか言ってる通じるのか？）

「

和馬はコソコソと優に耳打ちした。

「ああその事。大丈夫よ、彼全部知ってるし」

「んだよ！俺達は奥里の被い師だ。」

俺はこのガキのお守りでついでにきただけ！ちなみに名は石動和馬だ」

「ガキガキっていうなよ！ハゲ！

オイラは神楽由良葉っていうんだ！よろしくね兄ちゃん！」

「こちらこそ！」

4人は河川敷を通過し、山へ続く道に入った。

この先には朝霞山がある。

それほど高い山でもないが聖岩ひんがしわと呼ばれる巨大な岩石が頂上にある
ことで地元では有名である。

とはいえ登山を楽しめるような高い山でもないので登山客もいない。
つまり人の出入りはめっぽう少ないというわけだ。

「え、何？あそこ登るの？」

「そつだよ…お前らはいいだろつよ…まだ疲れてないんだから…。
俺らはもうへつへつだつての…こんな小ぶりの山でも登りは相当
きついぜ…」

まあ確かにそつかも。

4人は山を登り…そして下り、再び走り…神社へと戻ってきた。

「AM11時30分…といったところか」

「はあ…はあ……………」

きつい…想像以上に…。
私、体力自信あったんだけどな…。

「山道のように整っていない道を駆ければ普段以上に疲れるぞ。それに普段使っていない脚の筋肉も鍛えられて丁度ええじゃろて」

「優さん大丈夫ですか？」

「天城君…あなたはなんともないの？」

この人、緒斗の森に行った時もそうだったけど…体力半端ないわね…。
なんでこんだけ走って、すぐに息が整うのよ。

「自分元々毎日走りこんでましたし…この位ならいつもの修行の範囲です」

「ふむふむ…天城君は体力面に関してはマズマズじゃな」

「へっ！そりゃ筋トレしてない分余裕で当たり前だろッ！」

すかさず和馬が野次をとばす。

「ほう…和馬。まだそんな元気があるのか？
追加で走ってくるかの？」

「じょ…冗談！もう一步も動けないっての！」

「皆ー！ー！ご飯もちよつとだから手を洗って部屋で寛いでー！」

亜子は皆の食事の準備をしていてくれるようだ。

4人はへトへトの体をなんとか起こして客間へ向かった。

「はあ…水がうめえ………つたくよお……なんで俺までこんなシゴかれなきゃなんねえわけ？」

「和馬兄は文句が多いなあ！大人なんだからもっと頑張つてよね！」

由良葉は呆れ顔をしている。

「お二人は奥里から来たんですっけ？」

奥里といえば日本北部…雪国でしたね。

「こっちは冬になつても雪は滅多に降らないから憧れちゃうなあ」

「冬になれば白銀の世界よ！機会があつたら一度遊びに来な！案内するぜ？」

「ほ、ほんとですか！嬉しいなあ！」

テンション上がる気持ちわかるな。
私も雪なんてもう何年も見てない気がする。

「そういえば、お祖母ちゃんから何も聞いてないけど、
そっちで何か問題があったんだよね？」

「…ああ。その事か。」

「ばあさんの口から何も言ってないなら、俺達が何か言うのもアレ
だし。」

「わりいな。直に聞いてくれ」

「?…まあいいや。」

「機会があればお祖母ちゃんに聞いてみよう。」

「ピンポン！」

「！」

「誰か着たぞ？」

「多分私の知り合いよ。ちょっと行って来る！」

「優は玄関に駆けて行った。」

「はぁーい！」

ガラッ！

「来て上げましたわよ！」

「…別に頼んでませんけどね！」

夕見司だ。

相変わらずぶてぶてしい態度だ。

「部長に先越されてら…」

後ろには瀬那稔、岡島大樹、日下部新二の2年トリオが立っていた。さらにひっそりと立っていたのが片桐亮。

「ウス…」

揃い踏みと言う訳だ。

でも椎名一の姿はそこにはない。

やっぱり来ないつもりなのだろうか。

「皆…覚悟はいい？」

「けっこーハードみたいよ？」

「望むところですよ！」

「覚悟は出来てるさ…。ついていけないときは置いて行ってもらう
ていっす…」

皆目が本気のようにだ。

私も頑張らないと。

こうして修行が幕を開けた。

第22話 完

NEXT SIGN…

第23話 夏休み編 / 修行2

S I G N 序章

第23話 夏休み編 / 修行2

昼食のカレーを皆で平らげ、各自軽く自己紹介などしながら休憩を1時間ほど挟んだ。

お祖母ちゃん曰く” 休息も大事” だそうだ。

P M 1 : 0 0

「そろそろ修行を再開するかの…」。

というか…今日は勉強会と主らの実力を確認しようかの。

皆玄関から靴を持ってくるようにな

そう言つと茜は9人を連れて地下室へと案内した。

「すごい…こんな大きい地下室があるんですね…」

「地下室っていうか…地下の洞窟みてえだな。」

なんでまんま地面なんだよ…靴を持って来いってこついつわけか

「地面だけではないですわ。壁も土の壁…」

勇を筆頭に皆驚いているようだ。

確かに一般家庭にはない物珍しいものではある。

さらに地下室と呼べるかも怪しいものであるから尚更である。

「ええ。ここは修行するのにつつつけの場所よ」

ここに降りてくるのはどれくらいぶりだろう。

真面目に修行なんて思い立ったこと自体本当に久しぶりな気がする。

「薄暗いとは思つが我慢しておくれ。」

さて…修行をつける前に色々と知ってもらつ事がある」

9人は地べたに座らされた。

「まず…私や優のような力を得るといふことは…」

より人並み外れた存在になるといふことじゃ…。

何も知らない者からすれば理解し難い異端と呼ばれるじゃろつ」

そつだろつね…普通じゃなくなる…つてことだものね。

「簡単に言えば化け物扱いされるし、嘔吐き呼ばわりもされる。時には非難の対象にもなるやもしれん…何もしてなくても…それが人間というものじゃ…」

「たとえ人のために行動しても…感謝されることはないかもしれない。

逆に畏怖され…中傷されるかもしれない…。

でも、それで人間を恨んではいけない…でしょ？お祖母ちゃん」

「うむ。その辺りは学ぶ前に覚悟してもらいたい…。

とはいえ口で言うのは簡単じゃが…なかなか割り切れない事もある…。

じゃから極力目立った行動は避けるべきじゃな…それが一番いいのかもしれない」

何も知らない人間を巻き込んで、その結果いい事ってあまりないように思う。

感謝してくれる人間もいる。

でも、そうでない者もいることもまた事実…。

色んな意味で強い心が必要なんだ。

それは力を得た者が背負っていく運命。

「助けてほしい時だけペコペコ頭下げて、助かったと思ったら今度は手のひらを反して化け物扱い…。」

そんな救いようがねえ奴は五万といるさ。

だが俺は”助けるんじゃない”…とかそんな後悔はないね。恨むなんてのは、もつてのほかだと思っぜ？

てめえが助けると決めて助けたんだ。どう思われようが関係ねえ！そうだろ？動くも動かないも決めるのは自分自身なんだからな。相手のリアクションに期待して動くのはやめたほうがいいぜ？てめえがどうしたいか！そこが重要だと俺は思っ

全員あつげに取られている。

「な、なんだよ…おめえら！」

「いや…なんかすごい尤もらしい事を言っから…」

正直驚いた。

「ふむ。たまには良いことを言っじゃないか…和馬。

まあそっいう事じゃな。

”誰かのために動く”…それを決めるのは他でもない自分自身…。そこで期待値と違う反応をされて恨むのはやはりおかしいのかもしれん”

皆領いて納得しているようだ。

「うむ。では心得はこの辺りでいいじゃろう…。

ここからは霊について少し説明しよう」

「お祖母ちゃん！私が説明してもいいかな！

おさらいを兼ねてね！」

「いいじゃろう」

「ごほん！じゃあ優先生が説明しましょう！

幽霊は主に動物霊・人間霊に分けられます！

精霊や妖魔と呼ばれる上位の霊もいますが、滅多にお目にかかるものではないです！」

「動物霊って…前から気になってたのですが、人の言葉をしゃべってましたよね？」

あれって…今にして思うとすごくないですか？」

「天城君！その通り！動物霊は誰もが人語を操るわけではないわよ！

あの時の狐のように人語を操るものは特殊でね、長らくこの世をさ迷って成せる業なの！」

「ほづ…そうなんですな」

「ちなみに更に年月を重ねていけば精霊、もしくは妖魔に変化することになるわ。」

その分かれ道はその靈魂の性格や、周りの環境によってかわってくるの。」

負の感情が多い場所に居続けければ妖魔に…逆に自然豊かな場所や人々に祀られてるような霊は精霊になるわ」

「この子は精霊になるか妖魔になるかの瀬戸際にいたのですわね…」

司はポーチからシロを取り出した。

「失敬な！わらわを妖魔のような穢れと一緒にするでない！」

「ぬいぐるみがしゃべったああああ!？」

初見の片桐と和馬は驚いたようだ。

「ふむ…何か感じてはいたが、まさか式神を連れておるとは…。」

「司ちゃんも成長したのう」

「うちのシロは水面の精霊崩れですわ。」

私の不慣れな契約の封呪で大幅に力を削られてしまったようで、今はまだ治癒術程度しか使えませんがね」

「わらわをこのようなふわもこの姿にしおって…いずれ力を取り戻

して喰ろうてくれるわ！
夕見司とその一味め！」

その一味って…。

「ごほん！話を戻しますよ！
他にも様々な霊がごっちゃんになって一つになった霊や、
物に靈魂が憑依する付喪神と呼ばれるものもあるの！」

「へえ…。」

皆、ポカーン顔ね…。
まあ実際見てみないと実感ない…か。

というか、シロのせいで注目を奪われた気がする…。

あのふわもこめ…！

「な、なんじゃ！わらわをいじめるのか！この凶暴小娘！」

しばきてえ…。

「まあ優の説明程度で今はよからう。

では続いて私達人間に宿る靈気の話をしてよう」

「それ気になってました！」

日下部先輩だ。

「俺、いや俺だけじゃなくて大樹もなんですが…靈感がないんです」

「ふむ。普通多くの者がその状態じゃな。

人は誰しも靈気を内に秘めておる。

だがそれを押さえ込む殻で覆われておるんじゃ」

「殻…ですか？」

「うむ。殻は人それぞれ厚みも違う…」。

殻が薄ければ、ちよつとしたきっかけで破れ…靈能力に目覚める。

だが分厚い者は普通に生活していて殻が破れることはない。

私や優…司ちゃんのように殻が薄い血筋もあれば、逆に君のようにガチガチに分厚い者もいる」

「じゃ、じゃあ…俺達に希望はないんですかね…？」

大樹を見て悲しげに呟いた。

「新二…」

「いやいや…殻を破ればいいだけの事…。
修行次第で誰もが破ることは出来るさ。
ただ、それにどれくらいの時間がかかるか…じゃな。
それにそつちのずんぐりむっくりの君はもうすでに殻を破り始め
ておるぞ?」

「え!?!…俺が…ですか?」

大樹は自身で驚いた。
どうやら自覚はしていないようだ。

「うむ…。まだ殻の一部が欠けた程度じゃが…靈気が漏れておるの
を確かに感じるぞ。

一部が欠ければ、後は修行次第ですぐに全て破れるぞ」

「そうなんだ! よっしゃ!」

「大樹いいなあ…」

そうか…岡島先輩は緒斗の森で…朔夜の攻撃をモロに受けてたもん
ね。

あれがきっかけで殻が破れたんだ。

「まあそう悲観しなさんな…。」

時間はどのくらい掛かるかわからんが、やってみる価値はあるじ

やるつて」

「はい…」

「話を戻すかの。」

霊気は霊に干渉する上で非常に重要なものじゃ。

己の霊気が強ければ、霊をよりはつきり見ることもできる。

また霊からの攻撃から身を守ったり、また霊を滅する力にもなる。

”霊気”は力強さを意味し”霊力”は霊気を操る上で必要な力を意味する」

「簡単に言えば、霊気は霊に対する攻撃力・防御力！霊力は、技を使うための…」

んーゲームのRPGとかのMPみたいなものよ！

霊力が空になったら霊気を扱えないから、攻撃も防御も何も出来ないの！

つまり無力化しちゃうわけ」

一同凄く納得しているようだった。

「むう…若い者には優の説明のほうがしっくりくるのか…。
逆に私にはさっぱりじゃな…」

「んでじゃ。」

午後からの修行はこの霊気・霊力・霊術をひっくるめて学んでもらう。

「霊と戦う術もそうじゃが、己を守る術を重点的に教えるのでそのつもりで」

私的には、守る術より…倒す術を学びたい…。

あの力…”狐火”…実践で使えるようにもなりたいしね。

「まずは主らの霊気と霊力を測ろうかの。

今日の修行はそれでおしまいじゃ。それをやると修行出来なくなるからのう」

測定か…久々だな。

どれくらい自分の力が成長してるか…ドキドキしてきたな。

茜は皆を奥に連れて行った。

円形上に札が並べてある陣がある。

「これから皆の霊気を測る。この陣は霊気に反応して動作するものでな。

端にある小さな円に手をつき、霊力を集中する。

そうすれば、左回りに霊気は円を辿るように循環していく。

何処まで霊気が伝わっていくかで、その者の霊気がどの程度かを測るわけじゃ」

「札は全部で2000枚だっけ？ちなみに札一枚につき霊力10として換算してるわ。」

この計測形式はあくまで私達の家系（5家）に伝わる形式だからもしかしたら別の計測形式があるかもしれないけどね」

「まあとりあえずやってみるのが早いじゃろう…私がやってみせるかの」

茜は円の端にある小さい円に右手をついて集中を始めた。

ザワツ！

お祖母ちゃんの本気…どの位なんだろう…？

「はッ！！」

茜が気合を入れた瞬間、左回りに札がザワザワと”立ち上がった”！

「ふむ…暫くは靈気に反応して立ち上がった状態になる。」

これで最後に立っている札にかかれた数字が私の霊力というわけじゃ

円を何週かして中央を目指して札が立ち上がっている。とはいえ、中央まではまだまだ余裕があるようだ。

最後尾の札…223…。

「223か…ふむ。私の霊気の強さは数値化すれば、大体2230といったところじゃ」

「…これはすごいんですね…？」

「まあ2000枚あって、これだけしか立たねば、凄くないように感じるじゃろうな」

この形式は昔から伝わるもの…。
大昔の私の先祖はこれ以上の力を持っていたということなんだろうな…。

「じゃあ続けて皆もやってみるがいいさ。そろそろ札も寝る頃じゃ」

そついうと今まで立ち上がったた札が元通り地面に張り付いた。

「じゃあ…誰から行く？行きたい人いる？」

「私がやってあげるわ！」

やっぱり出てきたか。

この目立ちたがりやめ！

「うっほ…いい胸だな…ふへへ…」

和馬がスケベそうな顔をして司を見つめていた。
その瞬間だった。

シュッ！

「うあ！？」

稔の右足がだらしない和馬の顔面まで飛んできていた。

「いやらしい眼で部長を見ないでくれないツスか？
年上でも容赦しないツスよ？」

稔の目がめずらしくガチになっていた。

「わ、悪かったよ…そんな怖い顔すんなよ…」

「みのりん！あなたすぐに暴力的になるのダメって言うてるでしょ
！」

「す、すみませんっす…」

「やあい！やあい！怒られてんの！あっはっは…！」

この男も大概大人げがない。

「煩いですわ！ハゲツ！！」

ああ…言っちゃったよ。

ドストレートに…。

和馬はショックを受けたようで、地面に手をつけている。

「ふん…気を取り直していきますわよ…！はっ！」

ザワツ！

札が一斉に立ち上がった。

「…いくつ…ですこと？」

司が立てた札の最後尾は…57。

「あなたの霊気値は570ってとこね」

すいすい…。

正直この子がここまで強い霊気だったなんて予想外だ。

私が以前計測したのは中学3年…1年くらい前か…。

その時は確か28枚程度…つまり280くらいだった。
今どの位になってるかわからないけど…

もしかしたら…私より上なのかもしれないな…。

「ふふ！さあ優…あなたの实力を見せてもらおうかしら？」

「ふん…望むところよー！」

第23話 完

N E X T S I G N …

第24話 夏休み編 / 修行3

S I G N 序章

第24話 夏休み編 / 修行3

優は陣の端にある小さな円に手を置いて集中を始めた。

司め…見てなさい！

「はっ！！」

優は気合を入れた。

勢い良く札が立ち上がっていく。

「どつだ…ッ！」

「…55枚…ですね。」

夕見さんより2枚ほど少ないです…」

天城勇が最後の札の数を見て教えてくれた。

霊気値が550って所か…。

まさかこの子(司)に負けてたなんてね…。

「ふふ…優、そんなに落ち込まなくてもよくってよ？
いずれはこうなる運命だったのよ」

「言ってなさいっての！ふん！」

正直悔しい思いだ。

自分がこの面子の中で飛びぬけてすごいとは思っていなかったけど、
この子には負けてない自身があっただけに…なんともはや。

まあ勝ち誇るのも今のうちよ…！

見てなさい！この修行期間中に絶対に抜いてやる…ッ！

「じゃあ…次は僕が行ってもいいですか…？」

勇が優に変わって円の前に立った。

「緊張するなあ…」

「大丈夫！いつも通り、精神統一するイメージでやればいいから」

優のアドバイスを笑顔で受け取ると、真剣な顔つきをして円に手をついた。

「ふう……」

この子の靈氣…今までも幾度となく感じてきたけど、
実際の程度の力なんだろう。

恐らく私や司よりも上…。

「ハッ!」

勇が気合を入れた瞬間! 勢い良く次々と札が立ち上がっていく!

「すごい…」

「ほう…あのマゾガキ…中々じゃねえか」

司も和馬も驚いているようだ。

「見てみるわ…」

優は札の最後尾を確認しにいった。

「102…すごい…約1020ってことね…」

私の倍近くのかってこと…?

天城君と私に…こんなにも差があったっていうの…？

「いやはや…自分でも驚きです…」

「体力・靈気の強さ…どれをとってもこの面子の中で群を抜いておる…」。

あとは技術さえ学べばとんでもない被い師になれるのう」

でも、こうしてみるとお祖母ちゃんが2000ちょっとっていうのも変な感じがするな。

どういうことなんだろう…？

「あの小僧…何か違和感を感じぬか？」

「どういづことですか？シロ。天城君に違和感？」

「いや…気のせいじゃ…」。

それよりも、この遊び…わらわにもやらせてくれぬか？司

「優…いい？」

妖魔になりかけた水面の靈の集合体…朔夜。

あんなふわもこの姿になって、力のほとんどは封じられたにしろ、元々は凄まじい靈気の持ち主だったわけだ…。

一体どれほどの力を持つてるのか興味はあるわね。

「いいわよ。やってみれば？」

「ふふ！見ておれ、弱き人間ども…わらわとの格の違いを思い知るがよい」

「あんな事いっても、あのナリじゃなんか迫力に欠けるな」

和馬の言うことは最もである。

見た目は可愛いあざらしのぬいぐるみだからね…。

「ではゆくぞ！ほれッ！」

ザザザッ！！

今までになく一気に札がざわめきだった。

「ふふふ…随分と力は失ってしまったが…。

まあこんなものじゃろて…」

「…512…すじい…」

私はこんな奴に勝ったっていうの…？

といつても遊ばれてただけか…実際最初から本気で相手をされたら…。
私達なんか全員掛かりでも1分もたないでしょうね…。

これが精霊レベル…。

でも、ますますおかしいわね…お祖母ちゃん…昔何度か妖魔とやりあつたつて言つてたけど。

「ガキ…ちよつとツラかせ」

茜をちらちら見る司に気づいた和馬は優を皆から少し離れた場所に連れて行った。

「なによ!？」

「バアさんに…違和感覚えてるんだろ？」

「…あなたも気づいてたの？」

「なんつつか…」。

俺がお前に謝るのも変かもしれないが…悪かったな…。

バアさんの靈気が極端に落ち込んだのは俺達のせいなんだ

…」

「どづいづ意味よ…」

和馬に問いたただそうとしたその時だった。

「二人とも何をしておる？」

二人の背後に茜が立っていた。

「お祖母ちゃん…どづいづことなの？」

「バアさん…」

二人の表情を見て全てを察した茜はため息を一つ落として言った。

「和馬よ…いいのだ。その件はもう終わったこと…」。

優にもいずれ話す…」

そついうと二人の背中を押し、元の場所へ戻った。

『今は聞くな』

つまりそついう事なんだと、この場で問い詰めるのはやめた。
でもやっぱりそつうなんだ。

お祖母ちゃん…力が弱まったんだ…。

「あ、優さん！」

「ん？どうしたの？」

「今、瀬那先輩がやってみたんですけど、11枚でしたよ！」

「はは…やっぱり俺まだまだみたいツスね…」

「瀬那…稔…まさかこうしてお前と絡むとはな」

片桐がぬつと瀬那の隣に来て話し出した。

「俺も同意見。」

片桐…：俺とあんた…それに須藤と…”不破”…
朝霞中四天王って呼ばれてた頃を思い出すな…」

「あなた達昔馴染みだったのね…でもやっぱり瀬那先輩って悪だったのね。」

なんとなくそんな気がしてたけど」

「いやいや…からかわないでください…。」

俺はもう…そういうの止めましたから」

しかし、悪の道からオカルトへの転向って…どういった心境の変化なのか興味はあるけど…。
これもまた今度かしらね。

「次は俺がやらせてもらう」

片桐亮…霊媒体質の持ち主か。
見た感じパツとした力は感じないから…まあ瀬那先輩とどっこいどっこいといった感じかな。

「…9…だと…？」

「はは…まあそんなもんだよ」

まあ想定内だわ。

続けて日下部新一が挑戦するも、結果は1枚も立たなかった。
つまり0。

岡島大樹は15枚と大健闘。
もしかしたら素質があるのかもしれない。

「これで私達は一通り終わったわね。」

「あなた達はやらないの？」

「ああ！？つうかやらないといけねえの？」

「うむ。先輩じゃろつ…力を見せてやればよい」

「バアさん…しらねえぞ…」

石動和馬がだるそうに手をついた。

「ちっ…どうにでもなれだ」

和馬が気合を入れると札が一斉に立ち上がった。

「すごい…！！これって…」

「あのハゲ…なかなかやるではないか…」

お主等小童より、あのハゲと遊びたかったぞ」

327枚…。

お祖母ちゃんの223枚を軽く抜いちゃった。
この人口だけじゃないんだ。

「おいバアさん！見せるついでだ！

「このガキもいいいな？」

「…！」

「…由良葉どうする？…嫌なら止めればよい…。お主が決める」

由良葉は一瞬戸惑ったが、すぐに笑みを浮かべた。

「オイラやってみる！」

皆はいい人だ…だから大丈夫だよ。ばあちゃん」

そういつと由良葉は円に手をついた。

「いくよっ！まずは”オイラ”からだ！」

由良葉は気合を入れた。

同時に次々と札が立っていく。

「…これって…」

23枚…？

予想外だ…。

この子は何か特別で、隠された力でもあるのかと…正直期待してた

んだけど。

「やつぱ…オイラの力はまだこんなもんだ…。」

”銀”^{ぎん} 今度は君の力を見せる番だよ」「

由良葉は独り言をぶつぶつといつているようだ。

「ばあちゃん。いくよ…！」

「ああ」

いくつて…何？
何をする気なの？

「はっ…！」

由良葉が気合を入れた瞬間。
靈感のある者は体に異変をきたした。

ある者は震え、あるものは冷や汗を流した。

「ふう……全く…。」

無駄な戯れにつき合わせてくれるな…由良葉「

「誰……？」

目の前に立っているのは間違いない。神楽由良葉だ。

少なくとも姿かたちは。

だが、それは明らかに彼ではなく別人の気配。

「ワシは銀…由良葉と体を共存する白狐の靈魂だ」

白狐…

なるほど…白髪に獣の耳に尻尾…納得だ。

「この子にとり憑いてどうしようっていうの？」

対面してるだけで震えが来る感覚…朔夜を目の前にしているようだ。

「そう警戒しなくていい…」。

ワシは由良葉の友人…敵ではない」

「銀の言う事は本当じゃよ優…二人は納得してそうしておく」

一体どういう経緯でそうなったのよ！

もう謎ばっかりじゃない！

「まあこうして出てきたのじゃ…戯れに参加してみようか」

そういつと地面の円にそつと手をついた。

「靈気を発するぐらいなら…お前の体にも影響はなかるう？由良葉。
うむ。そうか」

対話…できているのか…。

体内で…。

なんとも奇妙な光景だ…。

「では少しばかり力を発しようか…はっ！！」

ビリッビリッ！！

凄まじい波動だ！

少しでも靈感がある者は由良葉の体からほとばしる光の波動が見えていた。

「こんなものか…もうよいか？」

そこに居る全員はその力に…絶句していた。

枚数にして1050枚…。

霊気値10500…圧倒的である。

「それでは由良葉の友人ら…また会う日まで…」

そういうと耳や尻尾が消え、髪の色も元に戻っていった。

「…皆…ごめん…怖かった？」

一同は啞然としている。

「…だよね…」

由良葉は俯いてしまった。

自分でもこうなることが怖かったようだ。

タッ！

かと思うと一人が飛び出していた。

ギューッ！

「ほえ！？」

「か、かわいいいいい！！きゃーなんて可愛い子なの！
由良葉ちゃん可愛い！」

司だった。

可愛いもの好きの司らしい行動だ。

でも、由良葉にとってどんなに救いだっただろうか。

いつもは生意気だけど、やっぱりいい奴ではあるんだよね。
あの子……。

「お、おねえちゃん！苦しいよお！」

「く……クソガキッ！！……なんて羨ましい！あ、当って……くっそお！！
はっ……！？」

必死に羨ましがると馬を瀬那は軽蔑のまなざしで見つめていた。

「な、なんでもねえよ！……けっ！」

はは…。

この個性的な仲間達と修行するんだよね…このひと月…。
誰も脱落しないで最後までやりぬきたいな…。

霊気値はこのような結果になった。

神楽由良葉（銀）	1	0	5	0	枚・霊気値	1	0	5	0	0
シロ（朔夜）	5	1	2	枚・霊気値	5	1	2	0		
石動和馬	3	2	7	枚・霊気値	3	2	7	0		
白凧茜	2	2	3	枚・霊気値	2	2	3	0		
天城勇	1	0	2	枚・霊気値	1	0	2	0		
夕見司	5	7	枚・霊気値	5	7	0				
白凧優	5	5	枚・霊気値	5	5	0				
神楽由良葉	2	3	枚・霊気値	2	3	0				
岡島大樹	1	5	枚・霊気値	1	5	0				
瀨那稔	1	1	枚・霊気値	1	1	0				
片桐亮	9	枚・霊気値	9	0						
日下部新二	0	枚・霊気値	0							

「よし…では続いて霊力を測るとするかのう」

第24話 完

NEXT SIGN…

第25話 夏休み編 / 修行4

S I G N 序章

第25話 夏休み編 / 修行4

茜は靈氣を測る陣から少し離れた物置のような場所へ皆を誘導した。

「続いて靈力値を計測する…。」

靈力とは先にも言うたが、靈氣を使うのに必要な力じゃ…。

いかに強大な力を持つとも、靈力値が少なければ力は持続できぬし使用限度もすぐに来てしまう。

まあ細かいことは修行の際に説明しようかの…。」

ゴソゴソと物置から何かを探す茜。

「あつたあつた…計測にはこいつを使う」

壺ほどの大きさのお椀だ。

見ると何やら文字らしきものが書かれた札がお椀の至る所に張られている。

「この椀は特殊な呪術の札で、椀の中に靈力を溜めれるようになっておる。

ここに己の靈力を込めるようにイメージしながら集中すればそれでよい。

少しでも靈感があれば、この中の霊力は可視化されるから目に見えるじゃろっ」

ホレっとなお腕を渡した。

「優よ…やってみせておやり」

「うん。じゃあ皆見ててね。

お腕を両手でこうして持って、意識を集中するの。

さっきの霊気を測る時とは別の要領だからね。

これはこの腕に、注ぎ込むようなイメージをもってやればいいか

「ら

優は集中した。

するとお腕の底から何かゆらゆらと淡い光があふれ出した。

「はあ…ッ！」

優は全ての力を注ぎ込むように力を込める。

「…ふう…。こんなものかしらね」

お腕の三分の一ほど淡い光に満たされている。

「ほう…。優…やはり以前霊力の底の底をついただけはあるの…。以前より大幅に霊力値が上昇してある」

「そうみたいね…。自分でもびっくりなんですけど…。えーっと…420…ってとこかな？」

「なんですか？その数値は？」

司がお碗を覗き込んだ。

「中に目盛りがふつてあるのよ。」

さっきの靈気を測った時と一緒に！

解りやすいように数値化してるのよ」

「見る限り全部で1000目盛りしかないわね…？」

「まあ大きさが大きさだから仕方ないわ。」

まだ余力があればまだお碗があるから、そっちでやればいいし」

それにしても420か…。

自分でも驚きだわ…。以前は200前後しかなかったのに。

5年くらい前だろうか…

お祖母ちゃんやお母さんが一度お碗を一杯にしたのを覚えてる。

この調子だと二人追いつくのも遠くないかも！

「じゃあ私が次行ってもよろしくって？」

司は優の持っていた腕を受け取った。

「…これ、優が入ってるのはどうするの？」

司はお腕を斜めにして霊力を地面に零そうとした。

「ちよっ！何するのよ!？」

「何するのって…あなたが入ってたら計測できないじゃない」

だからって私の一日の霊力をそんな無駄にするような真似を…!

「司ちゃん。腕はまだいくつもあるから心配せんでええ…。」

その霊力は後で各自のために有効利用するんじゃないからのっ…。」

「そ、そうなの…わかりましたわ」

司は茜にお腕を渡した。

茜は優の霊力の入ったお腕に蓋をして、優の名前を書いた。

どつちやら本当に後で使うようである。

「ほれ…司ちゃん。やってみるがよい」

司は茜からお碗を受け取ると、集中を始めた。

「注ぐように…注ぐように…」

すると先ほどと同じように淡い光が浮き出てくる。

「…え？」

司は自分で自分の眼を疑った。

チヨロチヨロつと出て、すぐに終わってしまったのだ。

「う、嘘でしょ！…ふんぬうー！」

気合を入れて見るものの、変化は無いようだ。

「ふむ…105…それでもすごいもんじゃよ」

「そ、そんな事言われても…この子が凄かったからよくわかりませ
んわっ！」

正直靈力に関しては自分でもよくわかっていない。
今まで靈力を意識して使ったことといえば、肉体強化に、簡易治癒術ぐらい…。

司といえば守護靈壁を広範囲に発動して何時間も持続してたって聞いたけど…

単純計算で言えば、私が同じ事をすれば司の4倍持続力があるってことになるわね…。

「次は僕がいいですか？」

天城君か…。

さつき靈気を計測した時のイメージがあるから、皆も期待してる感じね。

でも

”靈気が強い”靈力が多い”

この方程式は必ずしも成立はしない。

靈力もその人の素質による所はあるけど、基本的には出発点ほどの人も大体同じ。

あとは、より多く使い込み…靈と接しないことには靈力の成長はない。

天城君は内に力を秘めてはいたが、實際力が解放したのはごく最近。経験値を積んだといっても数回程度。

そこまでは行かないはず…。

「注ぐイメージ…ですね…！はぁ…っ！」

チヨロ…

淡い光がチヨロチヨロと溢れてきた程度だ。

「…っ…」

どっちらこんなものです…20…か」

やっぱりか。

「そんな悲観する事ないわよ。皆も似たり寄ったりだと思っつから」

「なに？自分は別格とでも言いたいの！？

見てなさい！絶対追い抜いてやるんだからッ！」

別にそんなつもりで言ったんじゃないんだけどな…。

「僕も頑張って優さんに追いつきます！」

はは…皆燃えてるなあ。

その後に瀬那稔、日下部新一、岡島大樹、片桐亮の順に4人が行った。

結果は似たり寄ったり。

瀬那稔は2.5…天城勇とそれほど変わらずといたところである。日下部新一は、元々まだ殻を破っていないので反応することもなく0。驚きは岡島大樹だった。

「ふおおおおッ！」

声裏返ってるし…。

「って…ええ!?!」

「こ、これって…どうなんだ?」

皆は驚きの表情をした。

結果は5.6…。

数値だけ見れば、さほど驚くことはないが殻を破ってほとんど時間も経ってないのにあの数値…。

素質があるのだろうか。

最後の片桐亮は至って普通17だった。

「ぱつとしない…何もかもぱつとしない…」

少しいじけてるようにも見えただけ、触ると怪我しそうだったのでみんなそっとしておいた。

「おいガキ！先にやってやんな！」

神楽由良葉…

狐の靈魂と自ら体を共有する小学生。

477

彼自身の力はまだ未成熟といった感じだけど、
”銀”が表に出た時の力強さはこの中にいる誰よりも群を抜いて強い。

恐らく朔夜同様、精霊の位に達している霊なんだ。

「和馬兄ほんつと口悪いよね！エロいし！」

そんなんだから葵姉ちゃんに愛想つかされるんだよ！」

「な…！？てめえ！誰が愛想つかされたって！？」

「…」

茜が和馬を睨みつけ無言のプレッシャーを与える。

「な、なんでもないっす…。」

(ち…！あとでせつてえシメる！)「

どうやら茜の拳骨が恐ろしいようだ。

「それじゃあ行くよ！」

由良葉がお椀を手にし、集中を始めた。

ドクドクッ！

一気に光があふれ出る！

「わぁ…すご…！お姉ちゃんよりすごいかも…590だ！」

無邪気にはしゃぐ由良葉。

590って…この子の素質によるもの…？

それともそこまでの経験を積んでるのかしら…？

もしくは狐の霊と体を共有していることが関係しているのかしら？

「銀はどうするっ…いいの？…そっか」

「由良葉君、銀はなんて言ってたの？」

「自分はやつても同じだって。

なんかオイラと一緒にになったことで霊力の幅は同化しちゃったんだってさ」

なるほど…。

残るは朔夜…じゃなかった。

今はふわもこアザラシのシロちゃんだったね。

それと石動和馬…。

この人は何だかんだで凄いから、どれほどか楽しみだわ。

「じゃあわらわの力も見せようかの」

ちよこちよことお椀まで這って行く姿がなんとも可愛らしい。

「よつと…とくと見よ…！」

由良葉同様にあふれ出てくる光。

「どつじゃどつじゃ！わらわは小さいから見えぬ！

司！みておくれ！司！」

「はいはい……。今見てあげますわ。」

「！……………やっぱり凄いわね…510ですわ」

「む！それではそっちの小童に負けておるではないか！

解せん！もう一回やらせる！」

「はいはい！もういいでしょ！」

司はシロを拾い上げて抱きしめた。

「は、放せっ！むきゅう！」

「最後はあなたよ」

「わーってんよ…かつたるい」

和馬がお椀に手を添えて集中を始めた。

チヨロ…。

反応は由良葉やシロのように噴出す感じではない。

「…まあこんなもんだろ」

「180...?」

優は意外そんな顔で和馬を見た。

「んだよ?こんなもんだよ普通。

おめえがそんだけ特別だったこと。

これで自覚できたか?よかったな」

そう...なんだろうか?

「そういえば、お祖母ちゃんはやらないの?」

「私か...そうじゃな。やっておくか」

は...!しまったかも...。

お祖母ちゃんに何があったのかわかんないけど...以前に比べて力を失っている。

きつと、これをやれば弱体化が顕著にわかってしまう。

だから一番手でやらずに私に回したんだ。

それを私つたら...。

ポン

「気にすることはないぞ優…」

茜は優の頭をポンと撫でてお椀に手を回した。

「お祖母ちゃん…ごめん」

「はっ！」

茜が気合を入れるとお椀に光が溢れてきた。

「ふう……まあこんなもんじゃろ…」

「305…」

やっぱり凄く弱まってるんだ…力が。

「優！あなたなんて顔してるの？」

お祖母様すごいじゃない！」

「あ…え、ええ！そうね！流石おばあちゃん！」

って、お祖母ちゃんより霊力のある私が言ったら嫌味か。

「まあとりあえず皆の力量がわかったの。」

これを元に修行内容も検討しようかの…。という事で今日の修行はここまでじゃ」

「でもお祖母ちゃん、まだ昼ちょっと過ぎたぐらいよ?」

「靈力を根こそぎ使ったんじゃ。靈術の修行はできんじゃろ。」

私は私で今後の計画を練らねばならんし…。まあ初日という事でのんびりするがよいさ」

確かに靈力は今空になっちゃったからね…。

靈力の回復には睡眠が一番効果的。

といっても昼寝程度じゃ全快は無理だけどね。

「まあ各自好きにやるのでいいんじゃないですかね?」

「ですわね。」

きつと明日から厳しい修行なんでしょ?

今のうちに宿題でも片付けておくかしらね」

そうだった。

宿題もあるの忘れてたな…。

各自、修行する者もあれば、昼寝する者…宿題する者様々だ。

「私も宿題するか…」

霊力値の結果

神楽由良葉（銀）	霊力値	590
神楽由良葉	霊力値	590
シロ（朔夜）	霊力値	510
白凧優	霊力値	420
白凧茜	霊力値	305
石動和馬	霊力値	180
夕見司	霊力値	105
岡島大樹	霊力値	56
瀬那稔	霊力値	25
天城勇	霊力値	20
片桐亮	霊力値	17
日下部新一	霊力値	0

第25話 完

NEXT SIGN…

第26話 夏休み編 / 修行5

S I G N 序章

第26話 夏休み編 / 修行5

「…」

現在午後11時45分…。
優はベッドに入ってから30分ほど経っていたが、未だに眠れず
いた。

はぁ…疲れてるから寝たいってのに…。
環境が変わるとダメなのかな私…。

「スー…スー………」

ベッドの隣で心地よい寝息を立てながらぐっすり寝てるのは夕見司。
じゃんけんで負けた結果、ベッドの隣に布団を敷いてそちらで寝て
いるのだ。

「はぁ…そっちのがどう見ても快適じゃなさそうなのに…
この子って何処でも寝れちゃうのかしら」

「あ……う……ん……」

寝返りをうつす。

暑いのかTシャツを自分でめくっている。

「こらこらっ！お腹見えてるっの……」

優はTシャツを整えてタオルケットをかけてあげた。

ちなみにあの後……

天城君は素振り&筋トレ。

この子とミス研メンバーは宿題……

かくいう私も宿題を少し片付けていた。

片桐亮は昼寝しちゃうし、あの人たち……石動和馬と神楽由良葉は二人でどっかいつっちゃうし。

で午後7時頃みんなでわいわい夕食を食べて……

雑談しながら9時には皆で近くの銭湯へ行ってきた。

んで10時ちよい過ぎに帰宅して、各自解散となった。

男子は御堂、女子&シロは私の部屋という事になって今に至る。

「明日は朝6時起床…かぁ。早く寝なきゃ…」

私が寝れないでいるのには、やはり心に引っかかっている部分があるからなんだろう。

奥里へ出かけ…大幅に遅れて帰って来た祖母・茜。

霊気は弱まり、霊力も以前の7割近く減少……

それだけを犠牲にしなければならなかった出来事があったんだろう…。

今はきつとその話を聞くときではないのかもしれないが、やはり気になってしまうのも事実…。

「折を見て…聞いてみよう…」

優はそのまま深い眠りへといざなわれていった。

ジリリリリ…!

「ふぎゃあ!？」

けたたましい目覚まし時計の音に驚き飛び起きる優。

カチツ!

急いでそれを止めた。

「…はあなんてうっさい目覚ましよ…」

ふにっ!

「ひっ!？何!？」

優は何か柔らかい物を踏みつけたようだ。
見るとシロを踏みつけてしまっている。

「く…：…わらわを踏むとは…いい度胸じゃ…：…小娘…」

「あ、はは…：…ははは…：…ごめん」

「許さぬう!」

シロが優の顔面に向かって飛びついてきたが、

条件反射で優の鉄拳がカウンターとしてシロの顔面に入ってしまった。

「ぎゃむっ！ー！」

「いっ！めんっ！っいっ！」

「もぉ…何事よ…朝から騒がしい…」

司が起き出した。

この騒ぎでようやく目を覚ましたようだ。

「おはよう司…ごめん。あなたのシロを踏んじやっ…はは…」

「シロちゃん…あなたフワモコなんだから踏まれたぐらいどうってことないでしょ？」

しばらく居候の身なんだからやかましくしてはダメよ！」

「ふ、ふざけるでない！いくらフワモコであろうとも、踏まれるのは嫌じゃっ！」

司！お前も仮にもわらわの主人であれば怒ってしかるべき場面じゃぞー！」

「るさいわねえ…！おだまりッ！ー！」

司は足元でぎゃんぎゃん言うシロを思い切り蹴り飛ばした。

「…ど、動物虐待…なのじゃ…」

「ちょっと司！やりすぎじゃない！シロが可哀想でしょ！」

「ふん！丁度よくってよ！」

「この子を甘やかしても何もいい事はないからね…時には体でわか
つてもらわなくちゃ…ね？」

「寝起きは機嫌が悪いようね…」。

「ま、まあ…とりあえず早く準備して台所へ行きましょう！」

「ほらもう6時まわってるし」

「私達は朝食の準備担当。」

「お姉ちゃんが普段やってる仕事のお手伝いだ。」

「さすがに人数が多いので準備も大変というわけだ。」

「ちなみに男子達は…」

「おらッ！てめえらいつまで寝てんだ！？ガキども起きろッ！！」

和馬の怒号が朝っぱら御堂に響いている。

「も、もう6時か……眠いな……」

「てめえらなァッ！勇を見てみる！ちゃんと起きてとっくに掃除にかかってんぞ！」

お前ら一応2年で先輩なんだろ！？しめしがつかねえだろが！」

「い、いえ……自分いつも朝は早いので……」

「ったく……ダメな先輩共をもっておめえも大変だな。

とりあえず、ここの掃除を条件にここで寝泊りさせてもらってんだ。

そこら辺はちゃんとやつぞ」

和馬を見て、

『意外に真面目なんだ……』と思う男子一同だった。

厨房

「あら、二人ともおはよう！司ちゃんよく寝れた？」

「おはようございます亜子さん！」

ええ！快適に寝かせて頂きましたわ

「…私はちよつと寝不足」

「よかったわ。でも優はなんで寝不足なのよ。」

おかしな子ね」

悪かったわね！

どうせ神経質ですよ！っだ！

「朝食はご飯とお味噌汁…それに玉子焼きに肉じゃが…ですね！」

「ピンポン！司ちゃん正解！下準備を見ただけでわかつちやうんだね！」

もしかしていつもお料理とかしてるの？」

「はい。母の帰りが遅いときとかは私が食事作ってるので…腕に自信はないですけどね！」

「誰かさんにも見習ってほしいものだわね」

優をちらつと見る亜子。

「へいへい…そのうち覚えますよーっだ！ふん！
じゃあ私玉子焼き作るわ！」

「失敗しないでくださいよ？優…」

「あ、あんた…その物凄く不安そうな目やめてよね！
一応これでも女の子なんだから！なめないでよ！」

AM7:20…

皆がリビングに集まった。

「んー！味噌汁のいい匂いがしますね！」

「おう！朝から掃除頑張ったからな！きつと朝飯は美味しいぞ！な！
お前ら！」

2年生4人組はどうにも慣れない早起きと朝仕事でまだ目が覚めていないようだ。

「和馬兄…聞こえてないっばいよ……」

「けっ！だらしねえ！最近のガキは軟弱モンだぜ！ったくよ！」

「みんなお待たせーっ！朝ご飯だよっ！」

『おーっ！』

眠っていた四人もご飯を前にようやく目覚めたようだ。

亜子の持ってきたご飯に肉じゃが…とても美味しそうである。とにかくいい匂いが食欲をそそる。

「味噌汁もあるからいっぱい食べてね。」

「私の味付けだけど…多分美味しいですわ」

『おーっ！』

「司ちゃんの手作り味噌汁…んーっ！感激だ！」

「エプロン姿がかわええのっ…」

「そっすね…部長…」

瀬那と和馬は司の味噌汁よりも司自身に釘付けになっているようだった。

「おい…こいつら大丈夫か…？」

「片桐さん…多分大丈夫ですよ…はは…」

他の面子も二人の様子にはあっけにとられているようだ。

「みんなお待ちセツ！優様特製玉子焼きよっ！」

『おーーーーーッ！！おーーーーー…！？』

テンションが”それ”を見る前と見た後で明らかに違った。

「な、何よ…」

「それ…玉子焼き…？…なんか少し黒い気が…」

う…！

痛いところつくわね！

「ちょ、ちょっと焦げちゃっただけ！大丈夫！味は美味しいから！」

見た感じはどうにも美味しそうではない玉子焼きだ。

「優さんの手作りなんて感激だなあ！」

天城勇だけはやたらと喜んでいた。

フォローというより、持ち前の天然つぷりの素の反応である。

「ま、見かけはともかく味がよければそれでよしだな…とりあえず喰おうぜ！」

「皆、起きておるようじゃな」

茜がやってきた。

『おはようございますー！』

「うむ。おはよう。」

ほづー！美味しそうじゃな…って…なんじゃこの黒いのは

う…う…う…。

「ふんっだ！今に見てなさい！絶対に見た目もすばらしいもの作ってやるんだからねっ！」

「優が作ったのか…すまんすまん…。
とりあえず食べるかの！それでは頂きます！」

『頂きます！』

パクッ！

「んーっ！お姉ちゃんの肉じゃが美味しい！」

流石といわざるを得ないわね…。

司の味噌汁は…。
ズズ…。

「！……………く、悔しいけど美味しいじゃないの！」

「ふふん…あなたとは違うのよ！ほほ！」

く、なんて奴め！あの見下した顔っ！
いつか絶対見返してやるっ！

「わ、私の玉子焼き食べてみなさいよッ！」

「いいですわ…そこまで言うなら食べて差し上げるわッ！
この玉子焼き崩れをね！」

「く、崩れって言うな！立派な玉子焼きだもん！」

パクッ！

司が最初の一口を食べた。

皆も、恐ろしくて手をつけていなかったので司の反応を気にしているようである。

「…」

「な、なんとか言いなさいよッ！」

ま、不味いのかしら…。

「美味しい！優さんこれめっちゃ美味しいですよ！」

え！？

あらぬ方向から贅辞の音が。

天城君お世辞にもそういつてくれるアンタが今じゃ仏に見えるわ。

「…確かに見た目に反して味は美味しいですわね…」

ええ!?

この子がお世辞なんか言うわけないから…つまり…。

「ほんとに…?」

「うむ…。見た目はあれじゃが美味しいぞ優」

やった!

ほらみたことかっ!

「っしやあ!どうじゃあ!」

「ま、でも見た目を差し引けば及第点はあげられないですわよね?お姉さま」

「だね。これを料理として認めるわけにはいかなくってよ!」

『料理をなめないでっ!』

亜子と司がハモって反撃してきた。

「うっっ！」

絶対この二人ギャフンと言わせるんだからッ！

そんなこんなで楽しい朝食会は終わった。

AM 8 : 35

「さて…午前中は筋力トレーニングと走り込みじゃ。

腹筋・背筋・腕立て伏せ…各自回数は特に設けてはおらん。

自身の今の限界を知る…その上で努力を重ねてもらおう。

人は自分に甘いものでな…無意識にも手を抜いてしまうものじゃ。

だから”ダメだ”と思ったらそこから+5回をすれば丁度いいじ

やろう」

「確か12時までに戻ってくるって感じだったよな？」

「うむ。走り込みを含め、その時間は厳守しておくれな」

岡島先輩、日下部先輩…大丈夫だろうか。
苦手分野に見えるけど。

「ん？白風さん、そんな心配そんな顔せんでくれ。

俺達も覚悟の上で参加してるんだ。遅れた時は置いていってくれればいいから」

「うん！ご想像の通り、俺も大樹も運動にかんしちゃってんでダメだからさ。」

皆は気にしないでいいからね」

「そっか…うん。ごめんなさい」

だよね。

先輩に失礼だった。

皆筋トレを始めた。

各々自分のペースで、真剣に取り組んでいた。

”負けていられない”

そう思う優だった。

「皆…頑張るんじゃないぞ…」

それをそつと見つめる茜の姿があった。

「はあ…はあ…」

皆筋トレだけでも結構息が上がっている。

まあ回数が設定されていない分、余力はなくなるのは当然といえば当然…。

「っし…走りにいってくる…」

岡島大樹と日下部新二は一足先に筋トレを終え、走り込みに行ったようだ。

ちなみにコースは事前に地図を渡してある。

「あいつら…1年の時いじめられてたんだ…」

腕立てふせをしながら稔が語りだした。

「でもな、あいつらそこから目をそらしたり、逃げ出したりしなかった。」

真正面からぶつかっていく根性があった…。
だから大丈夫だよ…乗り越えていけるさ」

お互いに信頼してるんだな。

「そうですね…うん。きっと大丈夫！」

第26話 完

NEXT SIGN…

第27話 夏休み編 / 修行6

S I G N 序章

第27話 夏休み編 / 修行6

「お前ら、そろそろ時間だ…筋トレはそんなくらいにしとくぞ」

和馬が皆に声をかけた。

午前中の修行は徹底した肉体強化。

腹筋・背筋・腕立て伏せ…回数は決められてはいないが、自身の限界まで続ける。

これが終わり次第、走り込み。

河川敷を通り、そのまま朝霞山を登り、下り…河川敷を通って神社へ戻ってくる。

距離はさほどでもないが、やはり山登りが曲者で体力を想像以上に消耗する。

昨日走ってみてわかったけど大体1時間はかかる。

それも筋トレ抜きでそれぐらい掛かったから、多分もう少し掛かるだろう。

今が10時を少し回ったくらいだから…

万が一を考えて余裕を持って行こうと言うことだろう。

” 12時までに戻って来い”

そう言われたからには守らねば…。

お祖母ちゃんのことだから破れば何かしらのペナルティがあるかもしれない。

お昼抜きとか絶対に避けたいところである。

「そだね…行きましょう」

流石に肉体派の男子ね…まだ余裕あるみたい。

私も司も…結構キテるわね…。

「大丈夫…司？」

「はあ…はあ………」

『大丈夫』って手でサインをしたが…どう考えても大丈夫そうになり。

やはり想像以上にハードだ。

石動和馬、片桐亮、瀬那稔、天城勇、神楽由良葉、夕見司…そして

白風優の7人は先に行った
岡島大樹と日下部新一の後を追って走り出した。

しばらくして各自スピードにバラつきが出始めた。
和馬・勇の両名は安定した走り、先頭を切っている。

そこから少し遅れて、片桐・瀬那の二名がついて、その後ろを由良
葉が一生懸命ついていつている感じた。

優と司はそこから大分後ろを、スローペースで走っていた。

「はあ……はあ………」

「司……少し休憩する？」

「大丈夫よ……あなたこそ余裕があるなら私を置いて先に進みなさい
ッ……」

「出来てるならとつくにしているわ……はあ……はあ……
正直……いっぱいいっぱいよ……やっぱり男子はすっぴいわね」

でもあの子…由良葉君はどうなってるのよ…。
いくら元気な子供とはいえ…小学生が高校生に食らいついていつて
るって…。

「優…見て…朝霞山よ」

そつだ…多分本当の意味でキツイのはここからだ。

「頑張るわよつ司！ここはそんな高い山じゃないし…いけるわ」

「あなたに励まして貰わなくっても…はあ…はあ…ノープロブレ
ムよ！」

司は気合を入れて優を抜き去っていった。

「ちんたらしてたら…置いていくわよ！優！」

「ふん…負けないんだからね！」

二人は不敵な笑みを浮かべ、さっきよりもハイペースで山に入った。

「はっ…はっ…!!」

流石だね…片桐…俺についてこれてる」

「っせえよ…!あの野郎に勝つために…鍛えてたんだ」

山道を駆け上がりながら、瀬那と片桐が話をしていた。

「あいつ…?ああ…もしかして須藤彰か?」

「ああ…あいつはいつだって俺の一步前をいきやがる…。
だったら俺はあいつ以上に鍛えるしかねんだよ」

「…そうか。それにしても…あの石動つて人と天城君には驚かされる…」

「だな…。オッサンのクセになんて体力してやがんだ…。

それにあの1年…天城つていつたっけか…すげえ奴だぜ。

俺的には後ろのガキも怖いけどな…」

チラツと後ろを見ると、まだ一生懸命に食らい付いて来る由良葉の姿があった。

「だな…。末恐ろしい子供だよ…俺達負けないようにしないと…」

「はは…負けたら流石に立場がねえわな」

二人は苦笑いをしながら走っている。

「はあ…はあ…兄ちゃんたち何笑ってた…!？」

にしても…きつつい…奥里の山の中を遊び場にしてたオイラだから、

こういった足元がデコボコな道は慣れてるんだけどな…やっぱり大人には勝てないのかな…」

「ん…あれ…?おい瀬那!」

「どうした?!…あれは?」

前方で和馬と勇が足を止めている。

片桐と瀬那は二人に駆け寄った。

「はあ…はあ…どうしたんだ…?」

「!…お前ら!」

瀬那は目の前で倒れ込んでる岡島大樹と日下部新一に駆け寄った。

「大丈夫かよ！二人とも……」

「あ、ああ……平気だ。少し……無理しすぎたかも……」

「瀬那……皆……俺達は少し休んでいくから先に行ってくれ……」

「どう見ても大丈夫ってツラじゃねえだろ……！」

「おい瀬那……そいつらも覚悟の上でやってんだろ？
だったら置いて進むべきだろ。いくぞ」

行くぞと先頭だって立ち止まる瀬那たちを煽る片桐。

「ああ！？てめえ……！」

「片桐の言うとおりだよ……俺達は覚悟を決めてやってるんだ……」

「先に行ってくれ……」

二人は死にそんな顔で先に行くように頼む。

「ざけんな！だからって、そんな死にそんな顔してるお前らを置いていけるかよ！」

俺達仲間だろう！」

「ふん…！俺は先にいくぜ！」

片桐は先に行ってしまった。

「ボウシ…お前の気持ちはわかるが、こいつ等の気持ちもくんでやれ…。」

自分でやるって言うてんだろ？」

「瀬那先輩…」

「二人は先に行ってくれ…。こいつ等は俺が連れて行くんで」

「……………はあ。ほら行くぞ天城！」

「先輩…先で待ってますからね！」

和馬と勇は三人を置いて先に進んだ。

「少し休もう。そこからゆっくり行けばいいぞ」

「瀬那…ありがとう…でも…いいんだ。お前も行ってくれ」

ドンッ！

岡島は瀬那の胸をはね押しした。

「な、何すんだよ…大樹…」

お前ら…意地張ってたってどうにもなんないだろが…！」

「俺達、ほんと瀬那には感謝してるよ。」

「いつだってお前が後ろから背中を押してくれるし…いつだっけしてくれた」

「だけど…それに甘えてた自分もいたんだ…」。

「いつもお前や部長がどうかしてくれて…だからそれをいい事に俺達は努力してこなかった」

「新一…お前まで…」

「俺と新一で決めただ…」。

「もう甘えてばかりの自分に別れを告げようってな…」

「ああ…だから行ってくれ…」。

「俺達はもう…自分の足で歩けっからよ…」

二人はふらふらと立ち上がった。

「お前ら……」

「お前が先に行かないから……俺らが先に行かせてもらっせ……」

「二人ともすげえカツコイイよ！

オイラなんか感動しちゃったね！」

「由良葉……見てたのか……」

こっそり後ろで一部始終を見ていた由良葉。

さらに後ろから優と司も追いついてきたようだ。

「みんなー！休憩中？」

「うん！そんなとこ！ほら、ボウシの兄ちゃん行こっよ！

二人のためにも……ね！」

「……」

瀬那は大樹と新二の顔を見て、そっと頷いた。

二人も答えるように親指を立ててそれに答える。

「うっし！行くぞ由良葉！」

「うん！お姉ちゃん達も行くー！」

司は何も言葉を交わさず由良葉に次いで走りぬいていった。

「え…！？でも先輩達は！？ほつとくの！？？」

「優…！」

「な、何よ司！あんだだつて…！」

「いいから来るの！振り返ってはだめ…！」

司…あんだ…。

優も二人を置いて先を急いだ。

「行ってくれたな…新二」

「だね…。ありがとう部長…！」

「っしゃ！頑張ろうぜ大樹！もうすぐ頂上だ！」

AM 11時57分

「はあ……はあ………」

「やっと……やっと山降りたぞ………」

大樹と新二はようやく山を降りたようだ。

ここからどんなに頑張って走っても12時には間に合いそうもない。

「時間……間に合わないな」

「だな……」

まあでもいいさ……最後まで諦めずに頑張ろうぜ！

二人は腕を合わせていった。

「なあに青春してるんですの？」

「まったく男同士で気持ち悪いぜ？」

出口で瀬那と司が待っていたようだ。

「瀬那…部長……なんで!？」

「先に行つてつて言ったじゃないっすか！」

「あーら!私達別にあなた達を待つてたわけじゃなくつてよ?」

「そうそう!俺らもちよつと疲れちまつてな…休憩してたつての!そこんどこ勘違いしてもらつちや困るぜ?」

「部長…瀬那あ……」

「嘘が下手なんだよ!…つたく…わざとらしいつたらないぜ……」

二人は泣いているように見えたがそれには触れず瀬那は一言

「行こうぜ」

と行って笑つてみせた。

大樹も新二も本心では『ありがとう』と言いたかった。

でもそこは照れ臭くもあり…それを瀬那も司もわかつてあげたよう
だ。

4人は何も言わずにラストスパートをかけて走つた。

「ほら…あと少しよ！頑張ろう！」

「ん…！？ありゃ…あいつら…」

4人は神社を目の前に、人影が集まっているのを確認した。

「おそおーいぞー！」

「まったくクソガキども！今何時かわかってんのか！？
13時だよ！まったく！」

優たち全員が門前で待っているようだ。

「なんで…もしかして…待ってたのか…お前ら？」

「この色男がなーんか知らないけど、ゴールしてなかったそうよ！
このオッサンも、お人よし天然小僧もね！」

「う、煩い…俺は別に何も言っていない」

「ふん！なんでもいいよ！俺ももう腹が減ってしゃあねえんだよ！」

「よかったです。皆でゴールできて……なんか感動的ですね！優さん！」

ま、みんなお人よしってことだね。

「ふん…主ら何を笑っておる…時間厳守！
忘れたといわさぬぞ…？」

「げ…お祖母ちゃん…」

マジな顔…やっぱり飯抜きかしら…。

「ふん…まあ今回は見逃してやるわ。」

「じゃが今回だけじゃぞ！？わかったら手を洗って居間に集合じゃ
！」

ええ！？

ってことは…

「お、お咎めなし…！？よっしゃああ…！」

こうして午前中の修行はなんとか全員クリアできた。
だが、午後からも厳しい修行が待ち受けている…。

そつとも知らずに食事に夢中になる優たちであった。

第27話 完

N E X T S I G N …

第28話 夏休み編／修行7

S I G N 序章

第28話 夏休み編／修行7

P M 2 : 1 5

午前中の修行を終え、昼食のカレーを食べて休憩していた所へ茜がやってきた。

「さて…遅れたが午後からの霊術の修行に入るかの」

いよいよだ。

私個人としては、こっちの修行を重点的にしたかった。

いくら霊による死を知れた所で、それを止める力がなければなんの意味もない…。

私は強くなるんだ！

「修行に入る前に言っておく…。

私が教えることはあくまで基本的なことじゃ…。

たかだかひと月では学ぶにも時間が足りないからの」

確かに当然といえば当然か…。
そんなに簡単に全てを出来るようになるはずもないわよね…。

「だが基礎をしつかり学んでおけば、応用は利くようになる。
今後継続して修行をするにしても、基礎がしっかりしておけば、
進歩も早い」

「それで…基礎って…何をやるの？お祖母ちゃん」

「慌てるでない優。」

最低限…霊と渡り合うために重要な4点…

”視””攻””守””治””

「シコウシユチ…？」

「視…すなわち視覚じゃ…。

霊はもちろんじゃが、自身の霊気も見えなければ話にならん」

「靈感がある人は…自然に見えるものじゃないんですか？」

「天城君。見えるかの？」

茜が勇に向けて拳を差し出した。

「?…い、いえ?」

「私には自身の靈氣の流れが見えておる」

「それって…もしかして昨日、由良葉君が変身したときの…
あの光みたいなもの!?」

「うむ。ではこれでどうじゃ?」

茜は更に気合を込めた。

「ブリッ!ブリッ!…
空気が張り詰める。」

「ああ!」

茜の拳から光がほとばしっている。

「見えたじゃろ?」

「うん!」

「僕も見えました…すごい」

どうやら日下部新二以外は全員見えているようだ。

「つまり、こうして強力な霊気であれば感じる事が出来るということじゃ。」

「優や司ちゃん、天城君は恐らく普通のレベルなら霊視できるじゃ。」

「じゃが岡島君、片桐君…君らは恐らく弱い霊は感じれないし、強い霊でもうつすらとしかまだ見えないはずじゃ。殻が完全に破れてないからの。」

「日下部君に至っては私の霊気どころか霊も見えぬ…」

なるほど…。

「さらに強い霊であれば、自身の霊気を完全に隠すことも出来る。これがやっかいでの…自身を纏う霊気だけでなく、攻撃として使う霊気まで見えなくできる者もある」

「透明の霊撃ってこと…か」

「見えない攻撃じゃ…避けようもない。」

「うむ。霊撃…こいつは私ら人間が霊に放てばダメージを与える事が出来る。」

「じゃあ逆に霊からの霊撃を人が食らうとどうなるかわかるか？」

「んー…どうなるんだろ」

今まで散々食らってきたのは霊にとり憑かれた人間からの物理攻撃。霊的な攻撃って…どうなんだろう。

「怨霊の類の霊撃は主に恨みなどの怨念…。

食らえば心身に異常をきたす…。

他に軽い場合で眩暈や気絶…重ければ意識不明に陥る場合もある。よほど強力なものであれば即、命を落とす場合もある」

そんなに恐ろしい事だったの…。

「優には昔教えた気がしたんじゃないかな…気のせいじゃったか？」

ギクッ…。

そう…だったけ？

「他にも精霊や妖魔のように力のある者は属性をもつ霊撃を使う者もおるぞ」

「属性…はっ！そつだ！朔夜…じゃなかったシロの水球攻撃！」

あれも霊撃だったんだ！

「わらわもこの姿になって力は落ちてしまったが…使えないことは

ないからの…ふふ」

得意げにシロが不敵な笑みを浮かべている。
でもその顔には説得力が欠けているようにみえる。

「とにかく致命傷になりうる攻撃を受けるのはマズイでの。
避けるにしろ見えねば話にならんというわけじゃ」

「でも…見るって…ちょっと修行しただけでも見えるようになるの
？」

「完全には無理じゃろ。

じゃが意識することでこれからの戦いの運びが随分と変わってくる。
」

最優先で習得を目指したほうがよいの」

確かに…そんな話を聞いちゃったら、すぐにでも覚えたいところだ
わね…。

「まあ詳細については修行に入ってから説明しよう。
まずは4つ全て軽く説明するでの。

じゃあ次は視・攻・守・治の”攻”について語ろう。
字が如く攻撃を意味する…」

霊を攻撃…か。

私の霊力を込めた札で攻撃なんかがそうよね。

「霊に攻撃を行う際には道具を用いる方法や、己の霊力を使い攻撃する方法がある。」

道具の場合、一番ポピュラーなのが札じゃな」

「ほら！こんな感じで札に呪印を書いて、そこに霊力を注ぎ込むの。呪印の効果で霊力が消えることもないから、いつでも使えるのが利点ね」

札を皆に見せて回る優。

「うむ。他にも霊気を使えぬ者でも使える点が大きい。

これをもっておれば、霊が見えぬ者でも退治は出来るからの。

じゃが気をつけてもらわねばならんのが威力じゃ。

霊力を込めた者の霊気が弱ければ威力は当然弱い。

その辺りも要注意じゃ」

「呪印は札だけじゃなくてもそれを書ければ霊具になるのよ！」

「呪印にも色々とあって、札などに書いてある物は一発用：

つまり一度使ったら終わりという代物じゃ。

一度霊力を込め、それを放つたら、もう霊力は込めれない。

他にも術者専用呪や、何度も上書きできる高等呪など様々にある…。

まあこれは今は知らんでもええじゃろう」

「それで攻撃の修行って何を学ぶの？
札の投げ方とか？」

「いや…霊具は使わんやり方…。
つまり自分の霊力で攻撃する術を学んでもらう」

それって霊気を纏って殴るって奴か！

「直で身に纏い攻撃する…これは第一ステップ。
これが出来たら、”飛ばす”ことを学んでもらうからの」

霊気を飛ばす…か。

確かに遠近中と言えば近距離攻撃が主になってしまっているね。
幅を持った攻撃を考えれば必然的に飛ばす発想になるわね。

「視・攻・守・治の”守”に関しては攻に通ずるものがある。
ようは自身の霊気の壁で敵の霊撃を防ぐのじゃ。
その方法を学んでもらう。まあ基本的には”攻”と一緒にじゃな」

「最後の治って…もしかして治療術？」

「察しがいいの。」

その通り。治療術を学んでもらう。

これは戦いの際、自分はもちろん他人の怪我也癒せて大変に重宝する能力じゃ。

じゃがそれだけに非常に難しいとっていい。

恐らくこの習得は時間がかかるじゃろ…跳びぬけたセンスでもない限りの」

治療術は長期戦には必須だろう。

だけど、お祖母ちゃんの言うとおり治療術は難しい。

口で説明は難しいけど、独特な力の練り込みやイメージが大切。

体を静止し、集中し…ようやく少しの回復が見込める程度の私だけど、

実戦ではほとんど使えないレベルだろう。

「とにかくこの4点を午後の修行では学んでもらう。

とりあえず裏庭に行こうかの」

全員は居間から裏庭へと移動した。

「これから修行にあたり、チーム別けを行う。

優、司ちゃん、天城君、和馬に由良葉がAチーム。

瀬那君、日下部君、岡島君、片桐君がBチームじゃ。

Aチームがすでに殻を破ったもの…視の修行に入る。

Bチームがまだ殻を破っていないもの…まずは殻を破ることから始める」

「具体的には何をするの？」

「ふむ。とりあえず朝霞山へ行くぞよ。

食後の運動をかねて、やや駆け足じゃ！」

ま、また走るのか…。

茜に続いて皆は軽めに走りながら朝霞山へ向かった。

「さて…では修行の説明に入るかの。

なんじゃ？もうバテたのかの？」

う…お祖母ちゃん…時間厳守できなかったことの罰のつもりね…。
やっぱ根に持ってたよ…鬼ばあちゃん…。

「Aチームは散歩じゃ。」

「この山を”意識”して歩いてみるんじや」

「歩く…だけですか？」

意識して歩く…。
そうか。

「ここが霊山だから…辺りの霊気を意識して歩くって意味ね？」

「うむ。まずは”見える”を前提にイメージして歩くことじゃ。

頭の何処かで見えないと思っていると、見えるものも見えなくなる。

よいな。”見える”…このイメージを忘れるでないぞ」

「わかったわ。じゃあ適当に歩いてくる」

「17時に入り口に集合！よいな」

和馬は由良葉と、優は勇と司と同じ方向へ歩いていった。

「主らは私と一緒に頂上の聖岩までいくぞ。
修行はそこで行う」

「ま、また登るんすか…」

茜と4人は頂上を目指して歩き始めた。

「意識して歩く…見える…」

「口で言うのは簡単だけど…難しいですわね」

「見える…見える…」

3人は適当に山道を歩きながらブツブツ言っていた。

木々を揺らす風…鳥のさえずり…。
微かに感じる霊気…。

優は自分の手を見てみた。

「…見えないか…」

霊気を纏うイメージで手に集中…。

「これでもダメか…」

「優さんでもダメですか…」

「なあに…まだ始まったばかりですもの。
私自身すぐに出来るなんて思っていないわ。
気を楽しみにして望みましょう！」

「ですわね…こういうのは焦ってもダメですわ。
まずは平常心が大事！ですわ」

「トヨ」

司のポシエットからシロが顔を出した。

「靈気を見ることも出来ぬのか。
くく…これは笑いものじゃの」

「しーろ！あんた蹴飛ばすわよ」

まったく憎ったらしいフワモ「あざらしめ。

「優！乱暴はやめてくださる！？
こんなんでも可愛いシロなんですからね！」

「おお司！たまにはよいことをいう！
流石わらわの主じゃ！」

「調子いい事いつちやって！」

あなた何かしらないんですの？霊気を見るコツとか」

「さあ…：わらわは人間じゃないんじゃ！わかるものか！」

だよ…。

まあ言って出来るようになるなら、お祖母ちゃんがとっくに教えてくれているわよね…。

「自分達で掴むしかないってわけだ」

「頑張りましょう！」

まっあなたには負けないんですからねっ！優！」

「望むところよ！」

二人は手のひらをパチンと合わせて決意を立てた。

第28話 完

NEXT SIGN…

第29話 夏休み編 / 修行8

S I G N 序章

第29話 夏休み編 / 修行8

朝霞山頂上に向かったBチームと茜は聖岩のある頂上まで到着した。

「さて…お主等はまだ殻を破りきってはおらん。

まずはそれを完全に破ることじゃな…」

「殻を破るって…具体的に何をすればいいんすか？」

瀬那稔が質問を投げかけた。

「うむ。これがまた口で説明するには難しい。

まあ…ここですつと座禅かの」

「な…ちょっと待ってくれよ婆さん…」

「こんな所で夕方まで座禅しろってのかよ!？」

片桐亮がつつかかった。

気持ち他他の三名も同じだったようだ。

便乗して食いつく岡島、日下部、瀬那。

「お、落ち着けい！」

よいか…殻を完全に破るにはより多く靈気に触れる事じゃ。だからこの靈山で特に靈気の集まるこの場所で座禅しておればいつかは殻が完全に破れる」

「いつかっていつだよ…！」

「殻が破れたかどうかなんてどうやって確認すればいいんすか！」

「ずっと座禅はキツイっす…」

「俺、まったく殻が破れてないんですけど…それでもちやんとできるんですか!？」

一度に4人いっぺんに喋りだした。

「ええい！おだまりッ！！」

茜の一喝で4人は黙った。

『…』

「いつかはわからぬ。

個人差もある以上なんとも言えん。

殻が破れたかどうかは私が見れば解る…自身を包む靈気の流れでな。

日下部君に関しては皆より時間は掛かるかもしれんが…
まあこればかりは仕方あるまい。
以上！何か質問は！？」

「ざ、座禅の件は…」

「ん！？」

茜は岡島を睨みつけた。

「い、いえ…何でもないっす…」

「よろしい。じゃあ始めよ！」

4人は嫌々そくに座禅を組んだ。

P M 5 : 0 0

全員は言いつけ通り、朝霞山の入り口に集合した。

皆、何かを掴んだ顔ではなく…沈んだ暗い顔をしている。

「その顔じゃと…皆成果は得られなかったようじゃな」

あれから散々山の中を歩いてみたけど…結局何の成果もなかった。

”見える”…これを念頭に気合を入れてみたり、目を瞑ってみたり…色々試してはみたけど、一向に見える気配がなかった。

「お祖母ちゃん！なんかこう…もっとコツみたいなのないの!？」

「コツか…ふむ。」

もうちょいやってみて出来ねば教えようかの」

ひょっひょっと…まるで出来ない優たちを弄ぶように笑う茜。

「お祖母ちゃんこの通り性格悪いから…期待しても無駄ね…。
瀬那先輩たちはどうだったの?」

「まったく成果なしツスよ…。」

つつか…もう足が限界ツス…座禅ってあんなシンドインスね…。」

Bチームは全員限界を察つするには十分な表情をしている。

ま、まだ私達のほうが楽そうね…。」

「とりあえず戻るかの。
皆相当へばつとるみたいじゃし」

た、確かに。

何だかんだで厳しいかも。

これを一ヶ月…か。

でも強くなれるなら…やれるわ！

帰りは皆歩きで帰った。

体力バカ为天城君も流石に疲れたようだ。

顔色が曇っている。

「大丈夫…？顔色悪いわよ？」

「あ…いえ。大丈夫ですよ」

「なんかあった？」

「いえ。初めての分野で…ちょっと疲れてしまつて…。
難しいですよね…なかなかイメージ出来ないです…」

「皆一緒よ。あなただけじゃないわ」

「ですね…はい！お家に帰ったら宿題ですね！」

ゲツ…そうだった。

「もう！なんでそんな事思い出すのよ！」

「いっ、いっめんなさい」

10人は帰宅し…着替えを持って門前に集合した。

「んじゃ行くわよ！」

修行終わりに銭湯に行くことにしたのだ。

流石にこの大人数では…とのことだ。

まあ一応私も年頃の女の子だし…ね。

お祖母ちゃんと亜子ねえ以外を引きつれ、近くの銭湯へ向かった。

「銭湯なんて久々だわ」

「ですわね…昔はお母さんたちとよく来てたわよね…」

優は切ない表情をした。

「…」

「あー！……ごめんなさい。私…」

「うっん。なんでもないわ！

ほらっ！さっさといきましょ！」

優と司は女風呂へ、他のメンバーは当然男風呂へ向かった。

「んじゃコインランドリーって…」

皆は着ている服をコインランドリーへぶち込んだ。
洗濯はここで済ませるようだ。

「にしても…なんか恥ずかしいな…」

「片桐照れてんのか？」

瀬那がニヤニヤと照れる片桐を見て笑っている。

「るせえよっ…！べ、別にそんなんじゃない…」

「瀬那先輩が帽子とったとこ初めてみました…。
普通ですね」

「ちょ…天城君…キミ何を想像してたんだい」

「い、いえ特には…」

和気藹々と風呂場へ向かう。

すると女子風呂の方から優達の声がする。

『…無駄に大きいわね！』

『ああらごめんなさい。とても同じ年には思えないですね』

「お、おい！テメェら！向こうで刺激的な会話してるぞ！」

”このオッサンは…”

和馬を見てその他全員がそう思った瞬間だった。

「お前ら大好きなくせに何大人ぶってやがる！

あれか！ムツツリスケベか！ったく！

由良葉！オメエはこんなつまんねえ男になっちゃいかんぞ！」

「和馬兄みたいにもなりたくないよ…。」

そんなんだから葵ちゃんに愛想つかされるんだよ！」

「ま、またお前はそんな事を…」

「オッサ…和馬さんの恋人ツスカ？

スミに置けないっすねえ！このこの！」

瀬那がここぞとばかりにチャカす。

「そ、そんなんじゃねえよ…」

『うわあ何これ…柔らかい…』

『そ、そんなに揉んじゃ…だめ…あ』

「！！！」

これには男全員が食いついた。

この見えない中の怪しい会話がなんとも想像力を膨らませる。
特に思春期の男供には刺激が強いようだ。

『もう！そんなにしたらシロが可哀想でしょ！』

『だって…ごく柔らかいんだもん！』

全員が一瞬にしてしらけてしまった。

ありきたりな展開だが、彼らにとってはとても残念だったようだ。

しろは流石に大衆の面前でしゃべるのは禁止。

どうやらウォッシュユタオル代わりに持ち込んでいるようだ。

7人は無言のまま体を荒い、湯船に浸かった。

「…男って…空しい生き物だな…」

全員静かに頷いた。

「ふわぁーいいお風呂だったぁ！」

「ですわね」

優たちが上がった頃には全員が休憩所で待っていた。

「オセエよ！ったく女って奴は無駄に風呂が長いぜ！」

「っるさいわねえ！和馬さん…あなたのスケベな会話……
こっちまでダダ聞こえでしたから」

和馬は青ざめながら司の方を見た。

”フンッ！”

と、そっぽをむかれてしまう始末だ。

「そ…そんな……」

「哀れなオッサンスね……」

「俺はああいう大人には絶対にならんぞ…絶対にな…」

あつという間の1時間。

でもこれが本当に癒しになる。

さっきまで死にそんな表情を浮かべていた皆だが、まるで生き返ったかのように明るい表情を見せている。

「さ！帰って晩御飯ね！んでもって…宿題…か…」

それを考えるとなんだかちよっぴり悲しくなるわね。

「まあまあ。優さん…そんなあからさまに落ち込まないでくださいよ！」

皆で宿題楽しいじゃないですか！それに一応学生の本分ですし…ね！」

このポジティブ天然男め！

はあ…楽道家っていいわね…気楽で。

9人はそのまま銭湯をあとにし帰宅した。

「ただいまああ！」

「おかえりい！晩御飯出来てるわよ！」

今日は亜子特製コロッケ！その他諸々よ！」

『おお！』

テンションが上がる皆。

「ガキだなガキ！飯の一つでよくもまあそんなテンション上がるぜ
…」

「あら。ご飯は大切ですよ？和馬さん」

亜子がニコつと微笑みかける。

ポツ…

和馬は顔を赤らめた。

「亜子さん…あなたは俺の心のオアシスです」

「ええ？」

今度は亜子ねえをナンパしよる…。
ダメな大人の代名詞だけじゃなくて…ダメな”男”も加えなくちゃ
ね…。

そんなこんなで楽しい食卓を囲み、その後皆で宿題を片付けた。

P M 9 : 1 6

「さて…お主等、明日も早いしそろそろ休みなさい」

『はい』

ふう…何だかんだでやっぱり疲れるな…。
今日はぐっすり寝れそうだ…。

男子達は御堂へ、優と司は優の部屋へ向かった。

御堂

「さてと…ガキ…やるぞ」

「え…うん…」

何やら内緒話をする和馬と由良葉。

他の皆は疲れからか、寝静まっているようだ。

「視えるための修行のコツ…おしえてやんよ」

二人はこっそりと御堂をあとにして裏庭に移動した。

「まあここでいいだろ。」

別に御堂の中でもよかつたんだが喋って連中を起こすのも可哀想だしな」

「和馬兄…昼間も言っただけど…コツってほんとにあるの？」

「ある！俺もそれで見えるようになった」

「じゃあ何で皆に教えてあげないの！？」

和馬兄は口悪いし、女つたらしだしスケベだけど、いい人だと思
ってたのに!」

「おいおい!…あのばあさんも恐らくは知ってるんだ。

あえて言わずにいるようだから黙ってるだけだつての!」

「じゃあなんでオイラには教えるのさ!

なんか卑怯じゃん!」

「むう…お前なあ…せつかく教えてやるって言ってるのに!

素直に聞かないならいいぜ!もう教えん!」

「いいもんね!お姉ちゃん達に教えないならオイラもいい!ふんだ!
和馬兄見損なつたよ!」

完全に怒ってしまった由良葉。

「わ、わあつたよ!俺が悪かつたよ!

明日!明日あいつらにも教えるよ…流石にこの時間に起こすのは
悪いだろ!?」

「ほんとに教える?

まあ教えなかつたらオイラが教えるけど」

「ああ!いいよ!じゃあ大人しく聞くんだぞ?」

「うん！」

「1番のコツは自然体だ…何も力まず自然と一体になるんだ。頭も空っぽにする…”見える”って思い込むのも大事だが、それ以上に何も考えない…」

自然と一体化するイメージのほうが俄然いい」

「そうなんだ…自然と一体化…」

「そしてポイントはもう一つある…それが”夜”ってことだ」

「…夜!？」

月を指差して得意げに喋る和馬。

「夜は昼と何が違う?」

「んー…太陽の代わりに月が出てる」

「ま、まあそれもそうだが…俺が今月を指差したのは特に意味はねえからよ。」

ほら…もっと根本的に違つのがあんだろ!」

「…んー…」

由良葉は腕組をして考え始めた。

「ガキのクセに想像力がない奴だな！」

「だって眠いんだもん…お子様は寝てる時間だよ…！」

「ぎゃ、逆ギレすんなよ…ええい！もういいや！

明るさだよ！夜は暗いだろ！」

「そんなの当たり前じゃん！」

”このガキ”…そう思う和馬だった。

「とにかくポイントは夜だ。

この闇がもってこいなよ…霊気ってのは輝くからな」

「そっか！…確かに昼間より確認がしやすいかも！」

「だろ！ひひ！これで見えるようになるのも時間の問題よ！」

「うん！ありがとう和馬兄！」

お礼を言って由良葉は御堂の方へ駆け出した。

「お、おい！何処行くんだよ！修行はやんねえのか！？」

「やんないよ！眠いし！

てか抜け駆けはやだっでいったでしょ！んじゃおやすみ！」

由良葉は行ってしまった。

「なんか…納得いかねえ…」

第29話 完

NEXT SIGN…

第30話 夏休み編 / 修行9

S I G N 序章

第30話 夏休み編 / 修行9

7月28日(火)

AM 6 : 00 起床…

先日同様、優も料理を試みる…

今日はややし炒めという無難な料理だったからか、特に評判が悪いこともなく普通に食事を終えた。

AM 7 : 45…

食事を終え、裏庭に集合。

先日より1時間早い。

理由は先日の午前の修行で岡島大樹、日下部新一の体力不足が原因で12時までには修行を終え、戻ってくるという約束事が守れなかったためだ。

岡島先輩も日下部先輩もすぐく申し訳なさそうだったな…。
別に気にしなくてもいいのに。

「それでは昨日同様午前の修行を始める。
手を抜かず真面目にの…特に和馬…よいな」

「な、なんで俺なんだよ!? お、俺は至って真面目だよな！」

シーン…

「て、てめえら！なんて薄情なガキ共だっ！」

日ごろの行いが悪いせいよ。

腕立て・腹筋・背筋：このセットを回数制限なしに行う。

目安は自分の限界を感じてから+5回。

誰も監視をしているわけではない。

完全に自主性に任せている。

そもそもが自分のために自分から望んで行っている修行だ。

手抜きがそのまま自分に返ってくるだけ…

いわゆる自分自身との戦い。

「く…」

実は昨日よりも体がしんどい……。
というか、全身筋肉痛で痛いのだ。

どうやら私だけでなく、ほとんど皆が同じ状況だ。
昨日より明らかに精彩を欠いている。

「皆…:すまん、また足を引っ張らないように早めに行くぜ」

「時間に余裕があったら、戻ってからもうちょい筋トレも頑張ってみるよ」

「大樹君、新二君…:頑張つて！あなた達なら出来るからね！」

『部長…:はい！』

二人してハモった。

司はミス研のメンバーに絶対の信頼を置いているようだ。

二人は仲良く並んで駆け出していった。

「おい…:おめえら…:そろそろ行ったほうがいいかも知れないぞ」

AM9:42…

昨日和馬に声をかけてもらったのは10時を少し回ったくらいだったから

約20分ほど早い…。

「この筋肉痛を考慮して…か。

確かにやばそうだな…一番ガタが来てるのは脚だからな」

片桐先輩の言うとおりだ。

確かに全身痛いけど、一番は足腰だ…。

「そういつだった。

また時間破ったら、今度こそ絞られっぞ…」

食事抜きは真面目に勘弁してほしいところだ。

とにかく走ろう。

普段であれば1時間弱で往復できる。

だからこの時間に出発というのは本来であれば少し早い。

だけど恐らくオッサンの判断は間違っていない気がする。

2時間後…

「ハアツ…ハアツ………」

全身がバラバラになりそうだ…。
体中が痛い…。

皆も似たような状況だ…。

誰も喋らずに寝転んだり、しゃがみ込んでる。

息は絶え絶えだ。

「な、なんとか…ついた………」

「もう…ダメだ…」

先に出発した岡島大樹、日下部新一ペアもようやく到着。
最後の二人もなんとか時間内に戻ってこれたようだ。

しかし結果的に散々だな…。

ここまで体がいう事を利かないだなんて。

「ふむ。皆相当へばっておるようじゃの」

茜が出迎えに来た。

「お祖母ちゃん……体動かない……」

「じゃろうな。ほれッ！」

茜は優に救急箱を投げ渡した。

「ちょ！危ないじゃない！……ってこれなに？」

カパッ

救急箱を開けると中に冷却スプレーとシップが入っている。

「皆の分もある。1週間はお世話になるじゃろうって」

「地獄に仏ってこついう事ね……ん？」

「これ呪印……？」

なんでシップに呪印が…。

「私の治癒力を込めたシップじゃ…気持ち回復力が違っじゃろっ。ありがたく使っんじやぞ！」

へえ…お祖母ちゃんも優しいところあるのね。

優は皆にシップを配った。

「つつうー！ちべたいー！」

これは利くわあ…！

なんとなくそんな気がするわよねシップって。

「皆体が動くようになったら手を洗ってリビングに集合じゃ。

昼食にするよ。ちなみに今日でカレーも終いじゃ」

『飯いいい！』

全員今の今まで動けなかったが、昼食の一言で皆飛び起きて洗面所へ走っていった。

P M 1 : 3 0

皆食事を終え、皆各々休息を取っている。

「さて…そろそろ腹ごなしに運動するかの!」

げ…。

まさか、また山に登るの!?

走って!?

「じよ、冗談よね…」

「ふふふ…当然じゃて。いい運動になるじゃろ?」

鬼だ…。

茜と9人は支度後、すぐに朝霞山へと向かった。

「お…おお!？」

なんたる!脚が軽い!

午前中より全然楽だ!

まさか…これってお祖母ちゃんのシップのおかげ…?

「むかつくバアさんだが…やっぱりえんだな…」。

この人の下で必死こいて修行すれば…実力はちゃんとつきそうだ
ぜ」

「まあ…ちよつとサディスティックな所があるけどね…お祖母ちゃん
ん」

和馬もなんだかんだで実力は認めているようだ。

そして、茜のシゴキで確実に強くなれると確信している。

だからこそ腹の立つことも踏ん張って乗り越えてきているのだろう。

1時間後

朝霞山へなんとか全員到着した。

「二人とも大丈夫ですか…？」

岡島先輩と日下部先輩だけめっちゃしんどそうね…。
でも、初日よりは少しはマシになったような…気がしないでもない
わね…。

「よし…では今日も昨日と同じじゃ。

Aチームは散歩、Bチームは頂上で座禅じゃ」

「お祖母ちゃん！時間もそんなにあるわけじゃないんだからコツを
教えてよ！」

「コツか…どうしようかのう…」

「いいじゃねえかバアさん。教えてやれよ」

「和馬！でしゃばるでない！」

「つつか、もう教えちまったんだわ。ガキに」

ええ！？

この人コツ知ってたの！？

…いい性格してるわね…流石。

「はあ…つまん…。」

教えてしもうたのか…せっかく若者が右往左往苦惱する様を楽しみにしとったのに…。」

お祖母ちゃん…。

ちよつとSっていったけど…これじゃDSな気がしてきたわ…。

「まあそういうことだから、お前らにも教えてやる！」

「ありがたく聞くんだな！」

何コイツ…物凄い偉そうなんですけどっ！

「コツはね！自然体なんだって！」

何も考えずに自然と一体化するイメージで心を空っぽにすればいいんだって！」

「て、てめえ！俺が今言おうとだな！」

由良葉が間から話し始めた。

「んでね！昼間よりも夜の暗闇を利用して修行すると掴みやすいんだってさ！」

「靈気は光り輝くから！」

「そ、それも言うのかよ！このクソガキッ！」

暗闇…なるほど。

それは確かに合理的かも。

でもだったら昼間にこの修行やるのってあまり得策じゃないんじゃないの…？

「まあ…和馬の言うとおりじゃ…。」

はは…そう怖い顔をするでない！

ここでの散歩は全く意味がないわけではないからの。

自然体がどういふものなのか…このほうが自然も多いし掴みやすい。

あとは夜に成果を試せばええじゃろっつ

「むう…でも3時間近くも散歩って結構しんどいし、無駄な気がするんだけどなあ」

「安心せい。つまらなくなってしまうが、主らには最高じゃろっつて。

今週中には見えるようになるわ。下手すりゃ今晚にでも身につけておるかもな」

「ええ！？」

「それだけこの環境と散歩には意味があるってことじゃ…。
騙されたと思って3時間でも散歩してみい。

邪念を消し…自然体での。

自身もこの山の木々や草むらと同化するよつたの…。」

そう言い残し、茜はBチームを連れ頂上へ向かっていった。

「自然体…。」

そんな事なら昨日のうちにも散々やった気がするけどなあ…。
まだまだなんだろうか？

「とりあえずお祖母様の言うとおりにやってみましょ。」

「ですね…嘘か誠か…とにかくやれることをやりましょー！」

だよね。

今は散歩に全力をつくす。

PM 5:00

言いつけ通り5時には皆入り口に集合した。
Bチームは相変わらず苦悶の表情だ。

実感がわかないのはAチームもだ。

結局散歩中に見えるようになった者はいなかった。
全ては夜：暗くなつてからだ。

そこで何かを掴めればいいけど…。

「そいじゃ戻るよ」

帰りの徒歩は相変わらず。

昨日に比べて、皆話をする元気は残っているようだ。
それぞれくだらない雑談をしながら白凧神社を目指す。

30分後

神社に到着、皆着替えを持ち銭湯へ向かった。

「あーウズウズするわ！

今見ても…なんともないし…早く真つ暗くならないかしら！」

「慌てたつてしょうがないでしょ！優つてせつかちなね」

「うるさいわねっ！あなただつて気になるでしょ！」

「別にあなたほどじゃないわ。

こついうものは焦つてどうこつなるものじゃないわ。

焦ることでかえつてドツポにはまらないとも言えないしね」

ぐ…たまに大人な発言するのよね…この子。

優たちは銭湯で体と心と…ついでに衣類の洗濯を済まし、家路へ向かった。

「まだ夏だもんね…明るいわ…」

「ですね！まあ夜は逃げませんから。

まずはご飯！ですね！」

亜子ねえのご飯美味しいから、確かに1日の楽しみの一つではあるわね！

帰宅後、すでに食事の準備が整っていたので皆すぐに食事に飛びついた。

ちなみに今晚のメインはハンバーグだった。

これがまた最高に美味しかった。

食後少し休憩してからは宿題をした。

頭の中では自分の力の事が脳裏にこびりついていて、勉強にあまり身が入っていなかったのは反省である。

とにもかくにもこれで全て完了！

「っしやあ！寝る前に確認いくよー！皆！」

「優！夜更かしはダメじゃからな！……たく……行ってしまった。ちゃんと聞こえたんじゃろな……」

「なんだか優……楽しそうですね。
あんなに沢山の友達が出来て……なんだか羨ましいわ」

「亜子……」

「まああの子も、もう子供じゃないですから……ちゃんとわかってますよ」

「じゃといいんじゃが……」

裏庭

「さて、Aチーム諸君！準備はいい！？」

「あなただけよ…その妙なテンション…
私はもう眠くって眠くって…はああわああ…ふにゃ」

このKY巨乳め…！

「ふん！私だけ出来たからって恨まないですよっ！」

第30話 完

NEXT SIGN…

第31話 夏休み編／修行10

SIGN 序章

第31話 夏休み編／修行10

「…」

見えない…。

体の力を抜いて…リラックス…。

自然体を意識してゆっくり靈気を高めるイメージ。

「ダメだ…見えない！」

「優…ちよつと待つて！……ボンヤリだけど…

あなたの体を淡い光が包んでいるように見えるわ…！」

「ええ！？……なんで司が見えちゃってるのよ！」

「知らないわよ……うわ！怒ると光がブワって逆立つわね……！

おもしろいですわ…」

「靈気はとても素直に心情を映すからな。

体調が悪い時は淀んでいるし、感情の変化も映し出す。

にしてもさすが司ちゃんだな。俺でもコツを掴んで三日は見えな

かっ たつてのに。
センスは文句なしだな」

く、くそ…！

「でも…私自身は見えてないですわよ…？」

「まだ不慣れだからな。靈気を高めてみな」

和馬に言われるまま、司は靈気を高めた。

「！…み、見えるわ！すごい！」

「な！以前じゃ靈気を最高に高めても見えなかったろ？」

まあ靈気を高めれない状態の”体を自然に流れてる微弱な靈気”は慣れるまでは見えないと思うがな。

そうやって一度見えちまえば、頭が勝手に覚えちまうから忘れることもない」

なんか面白くないわね！

「ちなみに明るい場所ではまた見えないかもしれないが、見えなくなっただけじゃないからな。

目が慣れてくるまでは、まだまだハッキリは見えなくて当然だか

ら

「もしかして私昼間の時点で見えていたのかしら？」

「可能性はくないな。

まあでもこれでハッキリしてよかったんじゃね？
ダブルユウとガキンちよはまだ無理って感じか」

「ですね…全く何も見えないです」

「右に同じ…悔しいけどしょうがないわね」

「だね…。オイラもう眠いから寝るよ…

また明日の夜に試す。ふわぁー…」

由良葉はそういつて御堂に戻っていった。

「天城、お前はどつする？戻るか？」

「和馬さん、先に寝てください。

僕はもう少しだけ頑張ってみます」

「そか。あんま無理するなよ？

これは我武者羅にやって出来るようになる類のもんじゃねえから
な。

焦っても仕方ないぜ？」

「はい…わかりました。」

でも、ちよつとだけ…感覚でもなにか自分でつかめたらなって…」

和馬はため息交じりに『がんばれよ』と残して御堂に戻っていった。

「優…あなたもまだやるの？」

「うん。別に張り合うつもりじゃないけどさ。」

私も私なりに何か掴めないか…もう少しだけ頑張ってみる。

司も先に戻って休んでね」

「あまりこんつめないでね。」

倒れられたら迷惑なもの。

あなたのあんまり美味しくない料理食べれなくなっちゃうしね」

「うん…ありがとう」

「べ、別にお礼を言われること言っていないわよ！

じゃあね…お先に、おやすみ」

司も優の部屋に戻っていった。

「憎まれ口ばっかだけど、優しい奴なんだよね…あの子」

「はは。ですね…。」

司さんって皆から好かれてますよね」

「あんなんでも根は真面目だしね。

でもね、あれでも昔は敵も多くて大変な時もあったんだけどね」

特に女子には何だかんだで因縁つけられてたっけ…。

「そうなんです…全然そうは見えないですけど。

皆それぞれ色々な事情を抱えて生きているんですね」

「何しんみりしちゃってんのよ天城君。

なんかあったの？」

「いえ…何も無いですけど、ふとそう思って。

はは…やっぱらしくないですね」

「ん！あなたは笑顔が似合うわ。

よしっ！いつちよ頑張りましょ！

司に置いてきぼりはやっぱゴメンだわ！」

「はい！」

二人はそこから1時間ほど頑張ってみたが、結局成果は得られなかった。

そして見えぬまま更に3日が経過した。

7月31日(金)

PM9:30

「今日こそは見えるようになってるといいけど…」

「ですね！今日で7月も終わってしまいますし、何かしらの成果を出して来月を迎えたいところです」

「自然体…自然体…」

司は三人の前に立って集中を始める。

「じゃあ今日も私が靈気を高めるわね」

司は靈気を高めた。

優たち三人は目を閉じている。
心を静めるのだ。

力まず、何も考えず……。
ありのままに……。自然と一体化する……。

優はゆっくり目を開けた。

ズズ……

「……！」

み、見えた！

うつすらだけど……。確かに司を淡い光が包み込んでいる！

「……」

「……」

天城君と由良葉君……。どうなんだろ。
今声をかけてもいいものかしら。

「……ダメ……みたいです」

「オイラも何も見えない」

二人とも見えないんだ…。

「優のその顔…どうやらクリアしてみたみたいね。おめでとう」

「う、うん…。二人ともごめんね」

「なんで謝るんですか！おめでとうございませう優さん！」

「優ねえちゃんすごいよ！おめでとう！」

二人とも自分の事のように喜んでくれる。
なんだか申し訳ないな…でも…ありがとう。

「ありがとう。二人も頑張ってたね」

「おめえらあんま落ち込むなよ？」

この俺様！天才和馬様でコツを教えてもらって、やっと三日目
で見えたんだぜ？

おめえらじゃ1週間ぐらい見込んでて丁度いいだろ」

「和馬さん…ありがとうございませう。」

まだコツを覚えて4日目ですもんね…！

うん！頑張ろう由良葉君！」

「だね！勇兄ちゃん！」

これで私も視・攻・守・治の”攻”の修行に入れる！

司と和馬はお祖母ちゃんにすでに攻の手ほどきを受けてる。

最初に教わってたのは体を纏っている靈氣を操る術だった。これは攻撃にも防御にもどちらにも必須な技術。

私は以前お祖母ちゃんに靈氣を内に留め、筋力や治癒力を高める肉体強化の方法と、体を靈氣で覆い…さらに攻撃する部分に集中し、纏わせることで靈撃力に変える方法を聞いた。

前者は後者よりも難易度が高いようだが、何故か私はそちらを先に習得してしまっていた。自身の靈氣が見えなかったこともあり、纏うイメージの発想がなかったことも要因の一つだったと思う。

司は私以上に術のセンスがあるのか、後者の靈氣を一点集中で纏う方はアツサリやってのけてしまった。前者の方は苦戦しているようだが…。

そうだ。

靈氣の性質の話聞いた。

普段体を自然に流れる霊気は+でも-でもないニュートラルな霊気らしく、

攻撃力にも防御力にもならないそうだ。

お祖母ちゃんの説明上2種類を+と-で表現しているけど、
ようは相反する二つの性質をもっているらしい。

攻撃力を発揮する+と、防御力を発揮する-。

さっきいった肉体強化のほうは-に力を高めることで可能らしい。

逆に肉体の一部を集中的に霊気でコーティングする方は+を高めて
やらないと意味はないらしい。

まあ-の霊気を例えば腕に集中的に纏えば、盾にもなるらしいけど。

逆に+の霊気を体内に留めるやり方は自滅行為らしく、”絶対にや
らないこと!”だそうだ。

まあ想像すればどうなるかはなんとなくわかる…。

とにかくこの性質を見極め、戦況に応じて瞬時に切り替えて扱う術
を学ぶというわけだ。

でもよくよく考えると私の”狐火”…

あれは+の性質に高めた結果で出てきたものなのかな…。

明日、お祖母ちゃんに見せてみようかな。

「さてと…じゃあそろそろ寝よつか…私、今日は疲れちゃって……」

「天城君達はまだ頑張るの？」

明日は1日休みだし、ゆっくりしたら？」

明日は日曜日。

1週間の疲れもとりさないとのことだ。

まあ確かに、修行漬けじゃ嫌になっちゃうかもしれないし、何より体も休ませてあげないとね。

「ですね…今日はもうあがっときます」

『おやすみー』

勇達は御堂へ。

優と司は部屋へ戻った。

「優…起きてる？」

「うん。どろしたの？」

「私明日ね、一に会いに行こうと思うの」

「一……ああ！あの眼鏡の！」

修行にただ一人参加しなかったミス研部の1年。
確か椎名一……。

やっぱりなんだかんだで心配してたんだな。

「うん……やっぱり心配だから……」

気づいたら朝だった。

目覚ましに気づかなかったようで、すでに9時近くになっていた。

司の使っていた布団は綺麗に畳まれ、片付けてあった。

「あ、メール……」

天城君と司からだ。

天城君は和馬と由良葉君と久木見物らしい。
今日も一応は帰って来るそうだ。

司は一言。

『寝ぼスケさん行つてきます』

だ。

優は居間へ向かった。

「亜子ねえおはよー」

「優遅いよー！もう皆それぞれ出てっっちゃったわよ？」

「ええ！？瀬那先輩や片桐先輩も出て行っっちゃったの？」

「みたいね。まあ久々に家に帰ってたんでしょー。

朝ご飯食べる？」

まあ久々の休みだし、ゆっくりしたいのかもね。

「うん！食べるー」

私はどうしようかな。

聖ヶ丘病院

「…！珍しい出迎えだな」

「よっ」

出血多量で入院していた須藤を出迎えに来たのは片桐だった。

「もう1週間か…そんなに長く入院なんてしなくてもよかったのによー…参ったぜ」

「体が鈍ってんじゃないか？」

「まあな。…！」

突然須藤を片桐の蹴りが襲った。

だが、それを片腕でガードする須藤。

「ッ…何をしやがる…！」

「お前が鈍ってるのか…俺が強くなったのか…これじゃわかんねえな」

「ああ!？」

「今のは俺の中じゃ軽く蹴ったつもりだ。
不意打ちとはいえ、お前だったらガードするまでもなく避けれた
と思ったんだがな」

「喧嘩売ってんのか…てめえ」

「一緒にやんないか…修行」

片桐はこの1週間の出来事を話した。

「おもしろえ…どうせ暇な夏休みだ。
いいぜ…俺も参加させてもらっぜ」

第31話 完

NEXT SIGN…

第32話 夏休み編／修行11

S I G N 序章

第32話 夏休み編／修行11

「おい、あれ見てみるよ」

塾に向かう椎名一を見てニヤける男子3人組がいた。

「あいつD組の椎名じゃね？」

「ああ。オカルトクラブだっけ？キモいオタクだよな。
成績はいいかもしれねえけど、俺はあんな根暗にはなりたくねえ
わ」

中心の小太りの男子がわざと聞こえるように大きな声で行った。

「…。」

（同塾の三人組か…めんどくさい奴らだ。係わり合いにならないよ
うにしよう）」

一は聞こえないフリをしてそのままやりすごそうとした。

「おうおう。無視されちゃったかな。さすが優等生」

「でもアレだよな。いつも女の尻について回って。ありゃほんとに男かね」

「あの女も見た目はいいけど、オカルトオタクじゃ気持ち悪いっただらないよな！」

「まあ似たもの同士気が合うんだろ！ひやはは」

「！……」

一は振り返って三人組に歩み寄った。

「んだよオカルト野郎！文句あるんですかあ？ひやはは」

「どうせ怖くて何も出来ないもやしっ子だろ！
ねえ椎名くん？あっはははは」

「…まれ…」

「ああ！？何だって！？聞こえないぞ！
ハッキリしゃべれよオカルト野郎！」

「謝れって言うてんだ！この腐れ豚野郎がッ！！！」

椎名は中央の小太りの男に向かって怒号を放った。

「ああ！？なめてんのかてめえ。

おい！お前ら

『へへ…！OK』

周りの二人に命令をして椎名を羽交い絞めにさせた。

「は、放せっ！！！」

「よし路地裏に連れて行くこうぜ」

一は抵抗するも、体格で劣る二人になすがまま、路地裏に連れて行かれた。

ドガッ！！

「ぐはっ……！」

一は羽交い絞めにされたまま小太りの男に殴りつけられていた。

「ちょ！弱ええ！マジもやしじゃんコイツ」

「はあ……はあ………」

一はキツと小太りの男を睨みつけている。

「…気に入らないな。んだ！その目はッ……！」

バキッ！！

男の蹴りが一の鳩尾みぞおちを抉った（えぐった）。

「……！！」

悶絶する一。

「もういいやお前さ。」

放しちゃって。つまんねえしこのカス」

「……くく……」

一は解放されたと同時に笑い出した。

「んだこいつ…笑ってやがる」

「悪いね…あまりにも可笑しくてね…」

「あ？」

「一人じゃ殴りかかることも出来ない豚が人語を喋るなよ…。
どっちが臆病者だかね」

挑発をする一はフラフラと立ち上がった。

「ぶっ殺す!!」

男は思い切り突進してきた。

ドガッ!!

フラフラの一に攻撃をかわせるわけもなく、一を体当たりで吹き飛ばした。

そして男は倒れる一に馬乗りになって顔面を殴った。

「はぁッ!!はぁッ!!…これで許してやるよ雑魚!」

一にはすでに反撃する力は残っていなかった。

「…っせえよ…」

自分だけでなく司までバカにするアイツが許せなかった。
そして、何も出来ない自分にもそれ以上に腹が立った。

一は悔しさと涙が流れた。

ぶつけようのない怒りが一を苦しめていた。

「おいてめえら行こうぜ!

あんな野郎に構ってたらこっちまでオカルト野郎になっちまうぜ
「!」

下衆な笑い声がやけに耳について離れない。

さっきまで立ち上がる力すらなかったのに…

気づいたら一は全力で走っていた。

” そうありたい ” と… 思っ てはいた。

だが、体力も勇気もない自分には出来ない と…

” ありえないことなんだ ” と勝手に決め付けていた。

その自分の中の常識を崩し、理想の男らしい自分を一瞬垣間見たことは純粹に嬉しかったのだ。

苦痛を伴うことや…辛いことから目を反らし、無難な道をひたすら歩んできた一を一変させたのは、

” このままやられっ放しじゃ気持ちがおさまらない ”

そんな今までにない感情が沸いたせいだった。

司を馬鹿にされたことや、何も出来ない自分…それらに対する怒りが一をそうさせたのだ。

「…」

一は覚悟を決めたように目を閉じた。

ドガッ！

「……え？」

3人組がのされている。

「大丈夫か？」

一の前には通りがかった須藤と片桐が立っていた。もちろんこの二人と一は面識など無い。

「あ、ああ……」

「俺はおめえらとは全く関係ないし、どう揉めようが俺らの知ったこっちゃない。」

だから手を出す気もなかったんだけどよ……

強い相手ならいざ知らず……いかにもインドアな奴に三人がかりは男じゃねえ。

悪かったな、つい手が出ちまった」

それだけ言うと片桐と共に二人は路地裏から出て行った。

「……なんだ……あの不良……いい……人？」

『あ！片桐先輩……』

『お前は…夕見司……奇遇だな』

表通りから司の声が聞こえてきた。

「い…っ…」

一はフラフラしながら路地裏から出て行った。

「私は友達を尋ねにちよつとその塾に行こうとしてたんです。

お二人は…まさか…決闘!？」

「お、おいおい…なんでそういう発想になるんだよ…。

紹介するぜタメの須藤彰だ。

この子は俺が修行してる…まあ…なんだ…仲間だ」

「何赤くなってるんだよてめえ…。

その子が勘違いしたの、俺のシャツの血だろ。

あーああ…洗ったばっかだっつーのに…」

須藤は先ほどの喧嘩で返り血を少しシャツにつけてしまったようだ。

「片桐先輩の友達ですか…。

夕見司です。よろしく」

「須藤彰だ。こちらこそよろしく」

二人は握手した。

「なんだよ部長…そんな不良にも顔が利くんだ？」

「…!!…一!ど、どうしたのよ!そのボロボロの姿!」

司は慌ててボロボロの一に近寄った。

「大丈夫!?眼鏡割れてるし…フレーム曲がってるし…。顔はれてるし!鼻血出てるし…口切れてるし!あなたでも喧嘩なんかするのね…はっ!まさか!？」

司は須藤の顔を見た。

「おいおい!お、俺じゃねえよ!」

「ああ。その人が助けくれたんだ…」

「そ、そうだったの…ごめんなさい須藤先輩」

「べ、別にいいけどよ…。
んでさ、片桐から聞いたんだけど、修行してんだろ？
俺も参加させてもらおうと思うんだ」

司は須藤をじっと見つめた。

「靈気を普通の人以上に感じる…。
変なことを聞くかもしれないですが…須藤先輩…。
靈とか見えちゃったりしますか？」

「…ああ。見えるよ…。
それに白凧神社でやってんだろ？面識ある奴らは何人かいるから…
多分許可してもらえらと思うんだが…」

「ならきつと大丈夫ですわ。
きつと苛める相手が増えてお祖母様も喜びになると思うし」

「い、苛めるってなんだよ…」

「まあ修行が始まればわかかんよ…くく」

片桐は不気味な笑みを浮かべた。

「あのね…」

「が口を開いた。」

「ん？」

「いや……その。」

「ううん……なんでもない」

「そう言っただけで塾に向かおうとする。」

「……あなたを迎えに来た」

「！」

「私は強制はしたくないけど……やっぱりあなたがいなくて寂しくもあるわ。」

「でも、やっぱり何度も誘うべきじゃないと思ってるし……一度しか言わないわ。」

「一緒に修行しない？」

司の言葉を背中で聞いていた一はゆっくり振り返った。

「僕も……強くなれるのかな……」

「ええ…あなたならきつとなれるわ」

一は小さく頷き笑顔を見せた。

8月3日(月)

AM7:45

「今日からこの二人が修行に加わることになった…
まあよろしくしてやってくれ」

「片桐と腐れ縁の須藤彰だ。
まだ何もわからないけど、よろしく頼むよ」

「須藤先輩！来てくれたんですね！」

「天城！ああ！面白そうだしな！
何より片桐に差をつけられるのも面白くないからな」

「ふん…」

片桐先輩なんだか嬉しそうだな。

やっぱライバルが居た方が修行に身が入るんだろうか。

「まさか須藤まで合流することになるとはな…」

「瀬那：こうして喋るのは久しぶりだな。」

相変わらず不健康そうだけど、体はずっと鍛えてたみたいだな」

「まあ…な。」

俺には”約束”があるんだよ。大切な人との約束がな…。

そのためにも強くならなきゃって思ってるんだ」

「そうか…まあよろしく頼むぜ」

こうして新たなメンバーを加え修行が始まった。

午前中の修行は岡島大樹と日下部新一以上に椎名一は苦戦していた。元より運動は、やる必要があるときのみで、その他はまったくしてこなかった一。

筋トレの時点でバテバテに。

そんな一を岡島と日下部が支えるように一緒に頑張っていた。

「なんだろう…なんか調子上がってきたかも」

そう実感していたのは優だけではなかった。

わずか1週間の修行ではあったが、元々運動不足等でほぼ0からのスタート。

それゆえに伸びも大きく感じるのだ。

だが一方では午後の霊術の修行はあまり芳しくないようだ。

Aチームの白凧優・夕見司・天城勇・石動和馬・神楽由良葉は霊気を見えるための修行を言い渡され、

勇と由良葉以外はそれをクリアしたものの、残る二人は一向に成果が現れないでいた。

Bチームも同様に成果が出ていなかった。

片桐亮・瀬那稔・岡島大樹・日下部新二に加え、須藤彰と椎名一もBチームとして霊気を完全に覚醒するために

殻を破る修行をしている。

内容的には朝霞山の頂上での座禅。

ただひたすらにそれを続ける。

しかし、1週間経って誰一人として結果が出ていない。

祖母いわく変化はあるらしいのだが、何分自覚できないため本当な

のかが解らず苛立ちも見られ始めているようだ。

とにもかくにも今は信じて頑張るのみ！

第32話 完

N E X T S I G N
…

第33話 夏休み編 / 修行12

S I G N 序章

第33話 夏休み編 / 修行12

8月3日(月)

P M 9 : 3 1

天城勇、神楽由良葉の”視る”ための修行に付き合う和馬、勇、司の三名。

コツを教えてもらってから毎日のように続けている夜の修行。

司はコツを知って初日に、優は4日目に習得した。

「…く…やはり今日もダメみたいですね…」

「オイラも…見えないや」

”焦るな”…そう言葉をかけてあげたい所だが、果たして自分が同じ立場で、

それを言われて気休めになるのかどうか…。

むしろそれが、かえって焦らせてしまう結果になるかもしれない。そう思っつて優は言葉をかけるのをやめた。

「とりあえず今日はもう遅いし、休もうか由良葉君」

「そうだね。出来ない時はもう出来ないって思うしかないし！焦ってもしょうがないしね！」

あの子が自然と言ってくれたな。

ありがとう由良葉君。

「優？何処に行くの？部屋に戻らないの？」

「うん。ちょっとお祖母ちゃんに話があるんだ。先に休んでて」

そういつて優は司と別れ、茜の部屋へ向かった。

茜の私室

「お祖母ちゃん、入ってもいい？」

「ん？どうしたんじゃ？入りなさい」

優は襖を開け茜の部屋へ入った。

「実はお祖母ちゃんに見せたいモノがあるんだ」

そういつて優は右手を突き出した。

ズツ！

右手に靈気が集中していく。

「はぁ…ツ！」

「おお…！」

優の右手を淡い紫色の炎が包み込んでいる。

「最初はなかなか自分の意思で出せなかったんだけど、こっそり練習して出せるようになったんだあ！」

「そうかそうか。狐火を使えるまでに成長しておったか」

あれ？あんまり驚いてない。

「まるで私がこれを使えるようになるのを知ってたみたいな反応ね」
「うむ。わかっておったさ。
なんせそれを見越してお主に狐様を倒すように仕向けたんだから
の」

！！

「どっさり…」とどっさり」

「ふむ…この際じゃから教えておこうかの…
霊王眼の特性について…」

霊王眼の特性…？

「うむ。霊王眼は単に”霊による死の刻印”を見るだけの能力だけ
にあらず…
霊王眼には本来5つの能力を持つておるのじゃ」

「5つの能力…！？」

初めて聞いた…。
霊王眼は”霊による死”を報せるだけの能力じゃないの…？

「1つ…霊による死の刻印を視る能力…
2つ…霊の能力を吸収し…自分のものにする能力…
3つ…霊を封印する霊気の刃を操る能力…
4つ…他人の霊力を回復させる能力…
最後に筋力・霊力・霊気・動体視力に至るまで、全ての能力を一時的だが飛躍的に上昇させる能力。
この5つがあるのじゃ」

「もしかして私の狐火は2つ目の”霊の能力を吸収し、自分のものにする”って能力で習得した能力ってこと!?!」

「うむ。修行や成長に伴い、この5つの能力は全て使えるようになる…いずれはな。
だが全てを自在に使えるわけではない」

「どっぴつこと?」

「私ら白凧家のように日本各地に霊と深い関わりを持つ一族…
私達の住む東部・久木の白凧家。
西部・飛鳥の緋土家。中央部・暁の草馬家。
北部・奥里の九鬼家。南部・天玖の相良家。
これは知っておるの?」

「うん…。私達同様、霊王眼を持つてるんだよね」

私はあの男を思い出していた。

霊王眼を持つ者…天城君を一瞬にして倒した…。

あの冷酷で悲しい眼をした男…。

「うむ。5家はその昔は一つの一族じゃったそうじゃ。

一族を束ねる長…霊王と呼ばれる男は先に述べた能力を自在に使っていたそうじゃ。

だが、大妖魔”閻星”との戦で相打ちとなり…死して、それ以降の子孫は力の一部に特化し、

他の能力は3割程度しか発揮できなかったという」

「それが現在でも引き継がれてるってこと…?」

でもこの5つのうち…白凧家はどれに特化してるのかしら?

「うむ。ちなみに私達白凧家の特化能力は、先ほど説明した1つ目…
霊による死の刻印を視る能力じゃ。

つまり他の4つの能力は動頑張っても、特化する他の能力の3割程度しか発揮できん」

「そうなんだ…でも、霊による死のサインの能力って割合とかそういうもので測れる能力なのかしら?」

見えるか見えないか…それだけな気がするけど。

「優はまだ知らぬだけで、この霊による死の刻印はまだまだ能力が発展があるのじゃ。」

それについてはまたいずれ説明してやろう。

ちなみに先ほど言った他4つの能力も特化していれば、それぞれ発展系の能力を持つ」

そうだったんだ…見えるだけじゃなく…他に発展するんだ…
一体どんな能力に…。

「ついでだから5家のどれがどの能力に特化しているか教えてやろう。」

西部・飛鳥の緋土家…これは5つ目の”身体能力、霊能力を大幅に上昇させる能力”に特化しておる。

中央部・暁の草馬家…これは4つ目の”他人の霊力を回復させる能力”に特化しておる。

北部・奥里の九鬼家…これは3つ目の”霊を封印する霊気の刃を操る能力”に特化しておる。

南部・天玖の相良家…これは2つ目の”霊の能力を吸収し…自分のものにする能力”に特化しておる」

あの男は…もしかしたら緋土家の人間だったのかもしれない…。

あの身体能力…多分間違いない…。

「優の狐火に関してはこれでわかったじゃろ？」

「なんでこんな能力が身についたかはわかったけど…。
これって知らずに使ってたけどさ、+に靈気を上昇して出してるんだよね？」

茜はニヤリと笑った。

「それは違うぞ優…。

狐火は+でも-でも放出の意思と最低限必要靈気まで高めれば出せる。

つまり攻撃用だけではなく防御用の狐火にも使えるというわけじゃ。

これは全ての靈術にいえる事じゃ。良く覚えておきなさい」

そうなんだ…。

「じゃあ-方向に高めても”放出の意思”があれば…出せるってことなんだ。」

「さ、もう夜も遅い。」

話はまた明日すればよからう」

「そうだね。夜遅くごめんねお祖母ちゃん」

優はお礼を言って茜の部屋をあとにした。

自分の能力について少し知れたことはとても勉強になった。

「っし！明日からも頑張るぞ！」

そんな決意から1週間が経過した。

8月10日(月)

体力面から見て、正直劇的な変化は見られなくなった。
毎日ほぼ同じペースでメニューがこなされていく。

いわゆる倦怠期なのか…。

だが、そんな中でも皆真面目に修行を続けていた。
それぞれが思いを抱いて取り組んでいる。

人間覚悟を決め、努力を始めればそう簡単に諦めたりしないものな
んだな。

ちなみに靈術の修行の方では変化が現れた。

Aグループではつい先日と一昨日に天城君と由良葉君が靈気を見れるようになった。

私と司は”攻”の修行の肉体強化と靈気を集中し攻撃部位に纏わせる術を習い、

今は靈気を飛ばす修行をしている。

これがなかなか難しく、司も苦勞しているようだ。

靈気を切り離すという行為がこれほどまでに難しいとは思わなかった。

石動和馬は相変わらず、私達に口出すばかりで特に何もしてないようだ。

Bグループも瀬那先輩と片桐先輩と岡島先輩が殻を破ったようで、今靈気を見る修行をしているそうだ。

日下部先輩と須藤先輩、椎名一はまだ殻が破れていないそうだが、お祖母ちゃんいわく、あと少しだそうだ。

見て解る変化があるのは靈気が見えた人たちだろう。

他はまだ成長に実感がわからないようだ。

まあ…無理はないかもしれない。

今日の修行も終わり今から帰るところだ。

いつもなら特に言葉はないが、今日は皆の顔を見て一言言った。

「お主等も修行を開始した頃より大分たくましく成長したの。そろそろランクを上げようと思う」

「ええ！？…ランクって…これ以上何しようっていうのよ…」

「オーバーワークは肉体的にも精神的にも辛いじゃろう。

だから、メニューは変えぬ。ただ毎週土曜日にちよっとしたお楽しみをもらう」

お、お楽しみ！？

嫌な予感しかしないんだけど…。

「まあ皆察するが如し…楽しむのは私だけじゃ。ひよっひよ！」

「な、何をすんだよ…バアさん…」

「ふふ…実践じゃよ」

実践…？

霊と戦うってこと…？

「悪霊狩りでもよいのじゃが…もつそこら辺の奴らじゃ優や司ぢゃんじゃ物足りないと思うからの。
ちいと強い奴とやってもらう」

「ちいと強い奴って…誰よ」

そんな奴がいるの…？

「私じゃ」

『へ？』

一同啞然とした。

「私自身ではない…が、私の霊力全てをつぎ込んで作った傀儡人形…
その名も傀儡ちゃん番号じゃ！」

まんまじゃん…。

「まあお披露目は土曜日まで待つんぢゃな。
楽しみにまっておね」

た、楽しくない…。

「あ…一応両グループ混合でやってもらうからの。
和馬は別じゃがな」

全員掛かりつてことか…。
でもなんで和馬さんだけ別なんだろう？

「なんで俺は別なんだよ」

「正直和馬一人でも倒せてしまつかもしれんからな…外したのじゃ。
じゃが怠けられると思うでないぞ？
主の相手は傀儡ちゃん弐号が相手じゃからな」

ニヤリと笑うお祖母ちゃん。

この笑いはきつと相当危険なんだろうな…。

「詳しくは土曜日に話すが…一つ先に言っておく。
一丸となって…互いを支えあいながら戦うこと…」

「うん…」

茜は真面目な表情になった。

「下手をすれば怪我では済まん…最悪死ぬぞ…
くれぐれも仲たがいはせんことじゃ…」

…あの顔…マジね…。

優たちを徐々に緊張感が包んだ。

それから月日はあっという間に経ち…。

約束の土曜日がやってきた。

先週に比べて変化があったのはBチームの殻を破れていなかった、
日下部新一、須藤彰が完全に開花したぐらい。

他のメンバーに特別な変化は見られなかった。

今は午後2時…場所は朝霞山頂上。

「よし…ではお楽しみを始めようか」

片桐先輩と須藤先輩が担いできたこのワラ人形。

普通のサイズじゃない。

人間サイズのワラ人形…。

間接が人間みたく別れているようで、良く出来ている。
顔の部分には紙が張られ、顔が描いてある。

なんとも間のぬけた顔だ…。

お祖母ちゃんが描いたのだろうか…。

傀儡ちゃん番号も傀儡ちゃん式番号もあの微妙な笑顔が逆に怖い気もする。

「和馬はあとでやるので。」

「まずはこの子等を遊ばせてやってくれ」

「けっ！俺は人形遊びなんかする気なんかねえってのに…。」

「それじゃあ…皆よいな？」

「修行の成果特と試すがよい！」

こうして傀儡ちゃんとの死闘が幕を開けた。

第33話
完

N
E
X
T

S
I
G
N
…

第34話 夏休み編 / 修行13

S I G N 序章

第34話 夏休み編 / 修行13

直立不動のワラ人形傀儡ちゃん番号。

頭にあたる部分に顔を描いた紙が張られている。

傀儡ちゃんとの距離は5mほど。

片桐亮、須藤彰、瀬那稔の3人を前列に、

その後ろに白凧優、夕見司、天城勇の3人がつける。

そして後列に岡島大樹、日下部新一、椎名一、神楽由良葉…そしてついでにシロが構えている。

「それでは始めるか…」

茜は霊気を集中し始めた。

すると、傀儡ちゃんがググツと動きを見せた。

その瞬間緊張が走る。

前衛の3人は喧嘩慣れしているものの、霊術戦となると恐らく初めて。

殻を破ったばかりの三人では霊撃力も何もありませんだろう。

皆で考えた作戦は、3人がかりで押さえ込んだ所を”攻”の修行に入っている後方の
優、勇、司の三名が攻撃するという算段だ。

「…」

スッ！

一瞬の出来事だった。

傀儡ちゃんとの距離は確かにあったはずが、一瞬に間合いを詰められた。

前衛が反応した頃には、すでに傀儡ちゃんは攻撃態勢に入っていた。

「須藤さんッ！！」

勇の呼びかけも空しく、須藤は傀儡ちゃんの右拳の一撃を顔面に食らった。

「須藤ッ！てめえッ！」

瀬那が顔面狙いの跳び蹴りを繰り返すも、空振りに終わる。

尋常ではない速さ。

否…そうではなかった。

優だけがそれに気づいていた。

「!…やば…」

攻撃後の瀬那は隙だらけだった。

そこに間髪居れず傀儡ちゃんの攻撃が迫る!

またしても顔面狙いの拳打が襲い掛かる!

ガシッ!!

「くッ…!」

「白凧さん…!?!」

間一髪で優が割って入って攻撃を受け止めたのだ。

「皆しっかりして!

これはこの人形の術によるものよ…。

でしょ!?!お祖母ちゃん!」

「ふふ…やるのう。

その通り…強い霊には相手の意識を奪う術があるのじゃ。

この術中にはまると意識を奪われ、あたかも瞬間的に移動しているような錯覚を起こす。

防ぐにはある程度の霊気をもって防ぐほかない」

やはり…。

私の目にはあの人形の動きが大したものではないように映った。にも拘らず前方の三人はまるで反応することもなく黙って間合いにいられていた。

とつか…今攻撃をガードしてみたけど…さほどの威力じゃないわね。

優は吹き飛ばされた須藤の方を見た。何故か立ち上がってきていない。

「須藤先輩！大丈夫なの！？」

「…」

優の呼び声に返事がない。

いかに不意打ちとはいえ、打たれ強さに定評のある須藤彰が一撃で沈むのは解せなかった。

「攻撃力は最小限に抑えておいておる。

”物理的”にはじゃがな…ふふふ」

「それって…」

ビュッ!

傀儡ちゃんが優に追い討ちをかける!

「ほれ!喋ってる場合じゃなからう!

もう意識は奪わんでおいてやるぞ!」

ドガッ!!

「きゃあっ!!」

優はガード越しに吹き飛ばされた!

何よ…!!

これっ!さっきの一撃より全然早いし…重いッ!

「ふふふ!意識を奪わぬ代わりに少々戦闘力をアップさせてみた。
ちなみに須藤彰が一撃の元に葬られた理由…わかるかの?」

「…霊撃…ッ!」

「正解!」

これが靈気の籠った一撃なの…？
靈力が減少…いや奪われる感覚がした…。

「優ならわかるな？靈力が底をつき…さらなる負荷がかかればどうなるか…」

以前の狐戦で靈力を使い果たした私は3日も寝たきりになった…。
てことは…須藤先輩も靈力を奪われて…！？

「安心しなさい…彼には一応手加減はしたからな…まあ数時間は目を覚まさんじやろうがな」

「みんな！下手にあの人形の攻撃を受けないで！

靈撃の防御じゃなきゃ意味が無いわ！ガードをしても多分無駄よ
！」

戦いながら瞬時に靈気の性質を変化させる…。
そんな高等技術…まだ会得してないわよ…！？

「優…守ることばかり考えていてはダメみたいですね」

「司…。」

「そつね…攻めに転じなきゃどちらにしても勝機はないわ」

「ハアッ!！」

「せいやあっ!！」

優と司が話してる間に前衛の片桐と瀬那が傀儡ちゃんに攻撃をしかける。

流石喧嘩慣れしているのか、上手いこと攻撃がヒットしている。

しかし相手は人形。

急所などない上、痛みも恐怖も感じない。

つまり一撃に耐えれば…!

「…」

「やばッ!！」

ドガッ!！」

瀬那は傀儡ちゃんの右アッパーを顎に食らってしまった。

瞬時に狙いを察知し、自ら首を後ろに下げ、打点をずらしたのは賞賛に値するものだが、
霊撃という意味ではかすってしまったえばアウトだ。

瀬那もその場で倒れてしまった。

「んのッ!！」

片桐が怒りの鉄拳を傀儡の顔面に食らわせた。相当の威力がこもっていたのか、人形は態勢を崩し、その場に倒れ込んだ。

「おお!…片桐君…今の攻撃……マグレとはいえ、靈気を纏った…紛れも無い靈撃じゃ」

「優今がチャンスよ!」

「ええ!」

優と司が走り出した!

「はあッ!！」

先に攻撃したのは司だ。
自慢の武器・鞭に靈力を込め打ち込んだのだ。

続いて優は得意の右ストレートを倒れ込む傀儡ちゃんのドテッ腹に打ち込んだ。

もちろん拳は靈気を集中させた靈撃だ。

「……」

表情がないからダメージがあるのかわかりづらッ！

優は馬乗り状態でここぞとばかりに靈撃を打ち込み続けた。

「すげえ…効いてるのか…!?!」

「片桐先輩！一旦態勢を整えましょう！倒れた二人を端っこへ移動させますわ！」

司の指示の元、倒れた二人を邪魔にならない場所へ移動させる仲間達。

「はあッ…はあッ………」

ピクリともしない…。

私の攻撃が予想以上に効いてる…？

それとも何か狙って…

優は一瞬祖母、茜の顔を確認してしまった。

ニヤリ…

「しまっ…」

一瞬の隙が命取り…。

優は一瞬目をそらしたその隙を傀儡ちゃんに狙われた。
顔面に一撃。

強烈な拳打を浴びて吹き飛んだ。

「かはッ…」

なに…え…空!?

優は一瞬何が起きたのかわからなかった。
気づいたら目前には青い空が広がっていたのだ。

” ああ、私は殴り飛ばされたんだ”

そう気づいた瞬間にはすでに次の攻撃が襲い掛かろうとしていた。

倒れる優に追い討ちをかけるように傀儡ちゃんが駆け出したのだ。

「優ッ！！」

司の鞭が傀儡ちゃんの腕に絡まり、すんでのところで動きを止めた！

同時に攻撃を仕掛けている者がいた。

「ハアッ！！！！」

天城勇だ。

霊気を纏った木刀を全力で振り抜いた！

バシッ！！

つと、傀儡ちゃんの顔の紙がひん曲がった。

「ふむ…すばらしい一撃じゃな。

じゃが天城君の弱点は霊力のなさ…」。

今の一撃でほとんど消費したのう」

痛みがない以上、攻撃に耐えてしまえば、インターバルなしにカウンターが放てる。

右手は司の鞭が巻きつき、使えないものの、左手は生きている。

すぐさまその腕を降りぬき勇の顔面を貫いた！

「ぐはっ…！」

「あ…天城…く…ん」

宙を舞う勇。

そのまま受身も取れぬまま地面に激突した。

「靈気がいかに強くても、攻撃を防ぐ術を知らねば一撃でこの様子やな」

強い…！

「…俺は行くぞ…！」

「大樹…お、俺も行くよ！」

岡島大樹、日下部新二の両名は倒されていく仲間を見て、恐怖と怒りの感情がせめぎあっていた。

目の前で殴られ、吹っ飛ばされ、気を失っていく。こんな光景を見て、喧嘩慣れしてない二人は恐怖を覚えない理由がなかった。

しかし、同時に仲間がやられる事に対する怒りも込みあがっていた。そしてついにその感情が恐怖を乗り越えた。

「うわあああッ！！」

「てやああ！！」

二人は自分で何も出来ない事はわかっていた。それでも戦いに参加した以上、何もせず指をくわえて見ているだけの自分には耐えれなかった。

「部長ッ！！俺等が捕まえておきます！！白凧さんを見てやってください！！」

「まかせろああッ！！」

二人は傀儡ちゃんに飛び掛り、押し倒した！

「大樹君！新二君！」

二人の気持ちを察したのか、司は鞭を解いて、優に駆け寄った。

「司…私はいいから…！二人を！」

「おだまりなさいッ…！二人は覚悟の上よ…シロちゃん！」

司はシロを呼びつけた。

「なんじゃ？」

「優を治してあげて！」

「ふむ…まあわらわには今それくらいしか出来んからの」

シロは治療術を得意としているため、この戦いには治療役として参加している。

「ぎゃッ…！」

「ぐあああッ…！！！」

岡島大樹と日下部新一の叫び声に振り返る司。
無残にも倒されてしまったようだ。

「く…！よくもッ…！」

司は立ち上がったばかりの傀儡ちゃん目掛けて跳び膝蹴りを繰り返した！
見事にヒットしたが、残念ながら霊力はその部位に集中はしてなかった。
それゆえダメージはない。

「はぁッ！..!」

先ほどの優同様馬乗り状態で拳打を打ち続ける司。

ある程度打ち込んだあと、司はすぐにどいて距離をとった。
そして中距離からの鞭攻撃にシフトし、連打を浴びせる！

「はっ！はっ！..!」

「...」

だがしかし、それを物ともせず立ち上がる傀儡ちゃん。

「なに...よ..!」

傀儡ちゃんは距離をとったまま、司に向けて右手を突き出した。

警戒する司。

「はっ…！司あ…！逃げてえええッ…！」

「え？」

優がそう叫ぶ前に、彼は飛び出していた。

ドッガーーン…！

突如として響き渡る轟音と砂煙。

何かが司目掛けて飛ばされたのだ。

「けほ…けほ……はっ…！」

砂煙の中目にしたのは椎名一の仁王立ちだった。

「…」

ドサッ！

そのまま前のめりに倒れる。

どうやら、何かしらの危機を察知し、司の前に飛び出したようだ。

「…」

司はすぐさま駆け寄って、一の状態を確認する。
全身に渡って擦り傷がある…それに気を失っているようだ。

「くっ…！よくも…！」

「…」

煙で司を確認できないのか、立ち尽くす傀儡ちゃん。

「よくも一を…皆を…ッ！うわああああッ…！」

司は砂煙の中から飛び出し全力で傀儡ちゃんを攻撃した。
不意をつかれた傀儡ちゃんにかわすことは出来ず、そのまま一撃を腹部に受け、吹っ飛んだ。

今までにない強烈な一撃だった。

司の右手を纏う霊気…いや全身に、今までに無い輝きを放っている。
限界を超えた霊気…！

しかし、それは幻のようにすぐに消え去った。

「はあっ……はあ……お願い……今ので終わって……」

第34話 完

NEXT
SIGN……

第35話 夏休み編／修行14

SIGN 序章

第35話 夏休み編／修行14

「はあ…はあ……」

司は渾身の一撃を放ったせいか、すでに満身創痍…立っているのがやっとだった。

傀儡ちゃんは司の攻撃を受けたまま立ち上がってこないようだ。

「司…すまない…俺がいながら、皆を…グッ…」

片桐は足首を捻ったのか、右足を引きずっている。

今意識を保っているのは白凧優、夕見司、神楽由良葉、片桐亮、そしてシロのみ。

須藤、瀬那、岡島、日下部、椎名、天城の6人は傀儡ちゃんの前に奇しくも敗れ去った。

「先輩…大丈夫ですか？」

「あ、ああ…ちよっとひねった程度だ…それよりも…」

今の一撃で倒せたのか…？」

「…！……………どうやら…今までは遊んでただけ…みたいですね」

司は倒れる傀儡ちゃんを見て冷や汗を流しながら言った。

どうやら、傀儡ちゃんを纏う霊気を見てそれを察知したのだろう。

「…」

司の言葉どおり、傀儡ちゃんは何事も無かったように立ち上がった。

「くっ！来るか!？」

「先輩…私達に出来ることはもはや動きを封じることぐらいですわ…」

司の霊力はすでにつきていた。

霊気も力強さを失い、体力的にもすでに動き回れる状態じゃなかった。

「司…お前は休んでろ！奴を羽交い絞めにするなら俺だけで出来る」

「でも…！」

「二人とも下がって！」

優と由良葉が前に出てきた。

「優…それに由良葉君…」

「選手交代よ！私はもう回復した。

霊力も全然まだいける！あとは私達に任せて」

「オイラ、銀に変身するのは禁止されてるけど、霊撃は出来るし…
やっちゃんもんね！」

「司…どうやら意地を張っていても仕方なさそうだ…。

俺達はあのフワモコに回復してもらったほづが…今はベストだ」

「…ですわね…。

その代わり…ちゃんと倒すのよ！優！」

「もちのロンよ！…任せな」

司は片桐に肩を貸して後方に下がっていった。

「さて…由良葉君…さっきの作戦…期待していいのよね？」

「うん！…ただ時間が掛かるから…その間一人で頑張ってね…お姉ちゃん。」

「さっきからずっとチャージしてるんだけど、オイラ自身”コレ”あんま使ったこと無くて難しいんだ」

「時間稼ぎか…。」

「ごめん、私アイツぶっ倒すつもりでやるからね…！」

「OK！…んじゃ万が一の時は頼んだよ！」

優は傀儡ちゃんに向かって突進した。

「靈気を最大限に高める！」

「はあああッ！」

「ポッ！！」

優の両手に淡い紫色の炎が包み込んだ。

「な、なんだあれ！？」

「片桐先輩にも見えるのね…
あれは優の狐火…！緒斗の森でシロちゃんに使った技ね…！」

「ほう…！優め防御を完全に捨てたか」

今の私じゃ瞬時に高めた霊気の性質を変化させれない。

常に…の霊気を纏っていれば、恐らく攻撃を受けてもダメージは少量！

でもそれじゃこちらの攻撃力も0…これでは勝ち目はない！

だったら、攻撃は全て避ける！

それを前提に全ての霊気を両手の狐火に集め…この最大級の攻撃力をぶつけ続けければ！

勝機はある！

多分だけど…。

正直、この狐火がどれほどの威力なのか…自分自身わからないからね…！

「はあッ…！」

傀儡ちゃん目掛けて放った、優の勢いをつけた右ストレートは空を切った！

流石に正面…そう簡単に受けてはくれないか！

傀儡ちゃんのカウンターの蹴りが跳んでくる！

それを一瞬で見切って、身をかがめ避ける優。

蛙飛びの要領でアッパーを放つものの、これも避けられてしまった。
先ほどより更に動きがいい！

人形とは思えぬ動きに翻弄される優。

一旦距離を置き、呼吸を整える。

こちらは無防備…。

私は霊力が人並みはずれて高いから、一撃で持ってかれることはないと思うけど…。

霊撃力だけじゃなくて、物理的なダメージもヤバイのよね…。

むしろそつちでダウンさせられる可能性もあるから…やっぱ攻撃を食らったらまずい！

「…」

ドッ…

傀儡ちゃんは霊気の巨大な弾を放ってきた！

「な…!!」

ドッガーーン!!

なんとか間一髪でかわしたものの、態勢を崩してしまった。

「あつぶな…!!」

そうだった…アレがあるんだ…目に見えるからなんとか、かわせるけど…

あれ見えなかったらめちゃくちや危険ね…」

ザッ!ザッ!!

「しまっ!」

すでに態勢を崩していた優に迫っていた傀儡ちゃん。
勢いよく優の腹を蹴り上げた!

「ぐはっ…!!…!!」

宙に舞う優。

だが容赦なく追い討ちをかける！

今度は舞い上がった優を両拳で叩き付けた！

「ッ……！！！」

声にならない激痛が腹部、そして背中に走る！

今にも意識を失いそうだ！

「優ーッ！！！」

「おい！由良葉！！今助けにいけるのはお前しかいないんだぞ！」

「わかってるよ！！……でもまだ……まだ力がッ……！」

「ふふ……優や……お主はこの程度かのう」

「く……なめん……じゃ……ない…………わよッ……！！！」

優はなんとかその場に立ち上がった。

傀儡ちゃんにとって、今はトドメをさすには十分すぎるチャンスだった。

だが、茜はあえてその選択をやめた。

「はあ……はあ……」

傀儡ちゃんは手を広げ大の字をしてみせる。

まるで”撃って来い”といわんばかりだ。

プチッ！

「ふーん……どうなってもしんないんだから」

優はその態度に完全に頭に血が上ってしまった。霊気を両手ではなく、右一点に集中しはじめた。

さきほどの狐火がより一層力強く燃え盛る。

「はああああッ！！！！喰らええええッ！！！！」

優の全力の右ストレート！

それが傀儡ちゃんの丁度中央部分に撃ち放たれた！！

インパクトの瞬間！

物凄い衝撃と光が一瞬その場を包んだ！

傀儡ちゃんはその巨体を数メートルにわたって吹き飛んだ。

「ふむ…狐火だけでは…ないな。体外の狐火・そして体内の肉体強化…」

外部・内部の同時強化か…。

怒りに我を忘れてそんな器用なことまでやるとはのう。

センスがあるのかないのか…わからんやつちゃ」

「はあ…はあ……………くそッ…」

「…」

傀儡ちゃんは立ち上がった。

腹部に燃えたと思われる焦げ痕…そして貫通痕まである。

「じゃあ…何度でも喰らわせてやるわよッ…！」

「無理じゃな。」

確かに優の霊力はまだまだ余裕がある。

じゃがあれだけ強力な一撃を放った直後に、同量の霊気を練り上げ、高めるのは時間が掛かる。

悪いがその時間はくれてやれん…終わりじゃ」

傀儡ちゃんが優に攻撃をしようとした瞬間、何かガソレを阻止するかのよう

に優と傀儡ちゃんの間を飛翔した。

「！…由良葉君！」

「おまたせお姉ちゃん！」

「ゆっくり休んでていいよ！」

全身を白い狐火の炎が包み込んでいるような…そんな見たことのない靈気を放っている。

「すごい…！」

「狐火モード…いっくよおおッ…！」

由良葉は軽快に駆け出した。

と同時に両手に作った”炎弾”を投げ出した！

これは先ほど優と傀儡ちゃんの間を飛んでいったものに他ならない。

ドガッ！ドガッ！…

弾は傀儡ちゃんに見事に命中！
右足に左肩に焦げ痕が残る！

「まだまだ行くよ！！」

由良葉の炎弾にタメはなかった。
次から次へと放っては作り、放っては作り…。

一定の距離を保ちつつ、動き回り、攻撃を放つ！

「すごい…！」

傀儡ちゃんも黙ってはいない。

由良葉の攻撃をかわしつつ、その動きを追っている。

だがすばしっこさでは由良葉が一枚上手だ。

追いつけるようではなかなか追いつけない。

だが、このまま倒せない状況は明らかにまずい。
なぜなら、由良葉は動けば動くほど体力を消耗する。

しかし、傀儡ちゃんは人形…疲れなどない！

ちなみにダメージだが…実のところあまり効いてはいなかった。

由良葉は靈力こそタフだが、靈気がさほど強くはない。

それゆえ手数は多くても、一撃一撃に決定的な威力が無いのだ。

優はそれを察知したのか、自身の気を再び高め始めた。

「はあっ…はっ…くそっ！全然倒せない！なんで…！？」

「遠距離攻撃の弱点はガードが容易な点にある。

早さも今ひとつじゃからな。着弾する前に靈気を…に切り替えれば、ほぼダメージはない。

威力あつての使える手札じゃな…残念ながらその速さ、その威力では、何にもならん」

由良葉の動きが落ちてきた。

と、思った矢先に突進してきた傀儡ちゃんに捕まってしまった！

「しまった！」

「…」

ド…ド…ド…

近距離からの靈気砲を喰らった由良葉！

「……っ」

「ほう…すぐさまに性質を…に変えて攻撃を防いだか。

由良葉は靈気の性質操作が得意なのかもしれんな…じゃが」

ドッ…！

容赦のない、近距離からの2発目。

無論避ける術なく、直撃してしまった。

「……」

「終わりじゃな」

由良葉は気を失ってしまった。

「お祖母ちゃん…ラスト一発よ！」

「む！？」

優は先ほどと同様の狐火を携え、現れた。

「これで終われええええッ！！！！」

優の全力の狐火を纏った右ストレートが今度は傀儡ちゃんの顔面を貫いた。

勢い良く吹き飛ばす傀儡ちゃん。

「はぁ……はぁ……ッ……もうこれで……スツカラカンよ……こっちは」

「見事じゃな……じゃが……」

「う……そ……」

傀儡ちゃんは立ち上がった。

「まだまだ爪が甘いのう」

「お礼なら運んでくれた天城君に言うのね！
まあもうこんな時間だし、明日にすることね」

「…ってもう夜9時！？そっかぁ…天城君が…」

私の力…全然通用しなかったのかな…。

第35話 完

NEXT SIGN…

第36話 夏休み編／修行15

S I G N 序章

第36話 夏休み編／修行15

「お祖母ちゃん入ってもいい？」

「…入りなさい」

夜分に茜の部屋を訪れたのは亜子だった。

「珍しいのう…どうしたんじゃ？」

「うん…。ちょっと話があったね」

亜子は祖母の隣に座った。

「今日…傀儡人形で優たちと実戦をしたんだってね」

「うむ…。少々荒っぽかったが、自分の実力も掴めるじやろう…。
実戦に勝る修行はないからな…」

「なんで…優はともかく、他の子たちはそこまでする必要があるの？」

「…。私は間違った選択をしているのじゃろうな…。
だが…今は…彼等を信じて続けるしかないんじゃない？」

「どういう事なの…？」

「こんな急成長を望むようなことするなんて…！
まさか…」

「わからんが…近いうちに何か途轍もない事が起きるような…そんな胸騒ぎがしてやまないんじゃない？」

「ほんの1ヶ月ほど前に異常なまでに狂気化した霊たち…
そうかと思えば、ここ最近は全く刻印を見ることもない。
何かが起ころうとしておる…」

茜は真剣な眼差しで両手を組んだ。

「でも…もし何かあっても私やお祖母ちゃんがいるじゃない！
未熟とはいえ…あの子もやってくれるわ…それだけじゃ心もとな
いっていいの？」

「私も力を大きく失ってしまったからの…」。

「正直不安は否めん…。彼等若い力が必要なんじゃない…わかってくれ
…亜子」

「私は…お祖母ちゃんが憎まれるんじゃないかって…。
そんなの嫌だもん…」

「ありがとう…亜子。」

私は恨まれようが構わぬよ…それに無理強いはしないつもりじゃ…。

ここで得た力で、せめて自身の身を守ればそれでよい」

「お祖母ちゃん…。」

あまり無理はしないでね。

まだまだ元気で居てもらわなきゃ…ね。

優も私も…皆お祖母ちゃんが必要だから」

そう言っつて亜子は部屋をあとにした。

「…。」鉄”…今何処におるんじゃ…。」

今宵はそれぞれがそれぞれの想いを胸に、静かに流れていった。

そして夜は明ける。

8月16日(日)

AM 8 : 30

「ふわぁ…よく寝た…」

今日は日曜日：ゆえに修行は休みだ。

司はすでに部屋をあとにしてるようだ。

布団が綺麗に畳んである。

優は起き上がり、着替えを終え、そのままリビングに向かった。

「お姉ちゃんおはようー」

「おはようー！体は大丈夫？」

「うん。なんとかね。皆は？」

「司ちゃんはお出かけしたみたいね。」

男子達はなんか朝早くから皆で出て行ったわよ？」

「そうなんだ…？」

「遊びにいったのかな？」

「何処に行くかは聞いてないの？」

「うん。ただ、修行する時の服装だったから、どっかで特訓してるんじゃない？」

ええ！？

休みだつて言うのに…男子は真面目ねえ…。

その頃朝霞山では…

「頼む…修行をつけてくれ」

石動和馬に頭を下げる男子一同。

「お、おい！頭上げろよな！」

「じゃあ修行をつけてくれるんだな！？」

須藤が食いついた。

「ちょ！落ち着けよお前等！…いいか？
この際だからハッキリ言っただんよ！」

和馬は全員を座らせた。

「昨日の戦い…黙ってみてたが、ありゃ勝つのは難しいだろ」

「それって…いくら修行しても無駄なことかよ」

「そうは言っただねえよ片桐。」

ただ、今日明日で倒せるようになるには厳しいって話だ。

あれはいわば、バアさんを相手にしてるようなもんで、普通に強敵すぎんだよ。

勝てなくて当然だったの」

「そう…なのか？」

「バアさんの霊力を込められて動く傀儡人形…すなわちバアさんの分身みたいなもんだ。

まあ人形を操作する分の霊力を差し引いて、本人よりは多少弱くはあるけどな。

だが逆に無限の体力、痛みや恐怖心を感じない強み…総合的に見ても本人に遜色なくなるだろうよ」

「おばあさんは何を想って僕等を戦わせたんでしょうか…」。

圧倒的な実力差があるのはわかっていたと思うし…
それを知った上であるの実戦をする意味ってあったんでしょうか？」

「勇。俺には昨日の一戦：意味のあるものだと感じたぜ？」

霊撃の怖さや、自分の実力が解ったる？」

それだけでも十分に価値があるさ。

次やりあう時は嫌でも霊撃に注意するだろうし、

自分が出る事、出来ない事がわかれば…これからの課題も解りやすいしな」

「確かにな。勝つことだけが全てじゃない…か。

アンタから見て、俺達は何をどう伸ばしていけばいいと思う？」

須藤の問いに和馬は少し悩んでから口を開いた。

「須藤、お前はまだ殻を破ったばかりだから、ハッキリ言えば普通の人間とさほど変わらない。

その上、見た感じ霊気も霊力もそれほど強いものでもなさそうだから地道に基礎特訓を重ねることだな。お前は喧嘩慣れしてるし、

霊気操作さえ覚えれば十分に戦えるはずだ。片桐、瀬那…お前等にも言えることだな」

「”攻”に”守”…どちらも”視”の修行が終わらないと取り掛かれないな。

早いとこ次のステップに進みたいぜ！」

「お前等、何も視る修行一点に集中しなくてもいいんじゃないか？ こいつは焦ってどうこうなるもんじゃないし、靈気の流れを掴んだり、自分で操作できるように
そっちも平行してやってれば、次のステップの習得も早いはずだ。 つつても靈気が目に見えないとイメージしづらいけどな」

「僕の…僕の欠点は…」

「勇…恐らくお前自身、自覚してると思うが、やはり靈力が少ない点だ。これは攻守に渡り致命的だ。」

お前は靈力がずば抜けて高い。だからお前の攻撃は見た目以上に凄い威力なんだ。

先日の戦いでもお前さんの一打が恐らく一番威力が高かった。
白凧優の狐火以上にだ」

「そ…そうなんですか！？僕の一撃が…」

「だが、靈力が乏しい分、一撃放つと半分以上の靈力を失うことになる。」

これじゃ、攻撃も出来んし、相手の攻撃を下手に喰らえば一撃でおだぶつだ。

だから課題は靈力強化だなあ。あとは靈力配分調整とかな。
そんだけ靈気が強いんだ。無駄に靈力つぎ込んで放たなくても十分に威力が出せる気もするし…。

まあそのあたりかな」

「ありがとうございます！」

「んで、ノツポ、デブ、メガネだが…」

「誰がノツポだよ!!」

「デブっていうな!!」

「メガネですが何か!？」

日下部、岡島、椎名が一斉に食いかかった。

「ちょ…冗談じゃないか…そんなムキになるなよ…」。

大樹と新二は肉体的にキレがまだ無い。

喧嘩もあまりましたことないし、戦いなれないと厳しくもある…」。

だが、逆に靈術に長けていけば、それを十分に補えるわけだ。

現状…どちらを頑張ればいいのかと言われると困るけどな」

「あの…僕は？」

「一に一つ朗報だ。

昨日強力な一撃喰らったおかげで殻が完全に破れた。よかったな」

「で…僕は何をどうすればいいんだよ!」

「基本的には新二と大樹と同じだ。

お前も喧嘩慣れしてないし、体力もそんなにあるわけじゃないしな」

「ふん！」

「んで最後、ガキ！」

「オイラ？」

「お前は基礎部分はよく出来てる。

霊力も申し分ない。補うべき部分は霊気の操作と霊気自体の強化だな。

由良葉は手数が多いが、一発一発が軽すぎるんだ。威力が大きければ十分戦力になる。

にしても狐火モードだったか？あれになるの時間かかりすぎ。

あれじゃ本当の実戦じゃ使い物にならんぞ」

「ぶう！」

和馬の分析が終了した。

皆、各々の課題が見えてきて明るさを取り戻したようだ。

昨日は流石に惨敗がショックだったのか、皆沈みっぱなしだった。

「てか、せつかくの休みだったのに、なんでこんな野郎共ばっかと山で修行なんだよ…はあ」

「あら？華もおりますわよ？」

木陰から出てきたのは夕見司とシロだ。

「ぶ、部長！」

「っ、司ちゃん！」

瀬那と和馬が食いついた。

「和馬さんの分析…実能的を得てましたわね。流石ですわ」

「い、いやあそれほどでも…あるかなあ」

鼻の下を伸ばす和馬。

「部長…なんでこんな場所へ…」

「隠れて修行するつもりだったんですけどね…来て見たら皆がいるんですもの」

「司！早くわらわに力をくれ！」

シロが司の胸元でジタバタしている。

「力をくれ…って、司ちゃん、こいつの呪印を解くつもりなのか！
？」

「いいえ。完全に解くつもりはないですわ。

でも、人間の姿への変化ぐらい出来るほどにはしてあげようと思
って…。」

やっぱり、今のままだとこの子戦力にならないし」

「きい！主がこんなフワモコに封印するからじゃろう！」

「あら？じゃあなに？ワラ人形だったらよかったの？」

「う…それはそれで嫌じゃ…」

「てか…戦力って…」

「あら？このままで終わりじゃないのでしょ？」

もちろんリベンジをするのよ」

「リベンジって…司ちゃん…聞いてなかったかもしれないけど、
傀儡人形に勝つのは厳しいと思うぜ…？残念だけどな…」

「だからといって、負けっぱなしは性に合いませんわ！

あなた方もそうなのでしょう？だからこそここにいる」

「だな」

須藤と片桐がニヤツと笑った。

「まあ出来るだけのことをやってみましょう！」

「ふふ！皆で頑張ってお祖母様を驚かせましょう！」

「ちょっとおおお！！皆こんなところで何やってるのよ！私を仲間はずれにしないで！」

優が茜、亜子を引き連れやってきたようだ。

「ふふ。聞きました？」

あの子達、恨むとかそんな気持ち全然ないみたい」

「じゃな…いい子らじゃ」

「皆ー！お弁当持ってきたから、お昼食べましょー！」

亜子の呼び声で皆一斉に集まってきた。

辛いこと、苦しいこともあるけれど…こつちやって支えあえる仲間が
いる私はきつと幸せなんだろうな。

第36話 完

N E X T S I G N
…

第37話 夏休み編 / 修行16

S I G N 序章

第37話 夏休み編 / 修行16

8月29日(土)

傀儡ちゃんと初めて戦って2週間が経った。

先週はあえて挑むのを止め、今日という日に合わせて修行を続けてきた。

その結果…

私達は強くなった。

少なくとも2週間前とは違う。

午後2時

場所は朝霞山頂上。

天気は晴天…蝉の声が耳につく。

「修行の締めにはもってこいのラストバトルね」

「どれだけ強くなったのかワクワクしますわね」

皆それぞれ思いは違えど、気持ちは高揚していた。

「ふふ…皆本当に、今日までよくついてきた…。」

皆よい表情になったのう…。」

「今回はわらわも”この形”で参加させてもらおうぞ」

シロは司の呪印レベルを弱める事で、人の姿に化けるまでの力を取り戻していた。

今回はフワモコあざらしの姿ではなく人間の姿で参加するということだ。

「もはやここに来て、細かい事を言うまでもないの。全てはこの一戦が示してくれるはずじゃ」

「ええ。お願いします！」

優たちは各々の立ち位置で構えた。

すでに辺りを緊張感が包んでいた。

「よかるう…ハッ！」

茜は傀儡人形…傀儡ちゃんき号に霊力を注入した。

「では始めようか…何処からでも掛かってくるがよい！」

そう茜が言った瞬間駆け出したのは須藤彰と片桐亮だ。

「ふむ…なるほどの」

傀儡ちゃんはその場で構えた。

明らかなカウンター狙いだ。

痛みも恐怖も感じない人形。

ゆえに相当の攻撃でない以上は一発を凌いでからすぐにもカウンターが放てる。

須藤彰の霊力では一撃でも当ててしまえばそれで終い。

そうふんでのカウンター狙いだ。

「はぁッ！」

須藤の長身からの跳び蹴りが傀儡ちゃんの腹部を狙う。

ドガッ!

直でそれを受け止める傀儡ちゃん。

両手でしっかりと脚を捕まえている。

「フンッ!!!」

なんとその態勢から、空いた左足で頭部を蹴り飛ばした。

この一撃で傀儡ちゃんはグラついた。

右足を掴んでいた両手も緩み、その場から脱出する須藤。

そして態勢を崩しているその一瞬を見逃さず、今度は片桐が追い討ちの蹴りを放つ。

これはガードも間に合わなかったようで、少し吹き飛び、しりもちをついた。

「今だ!」

須藤の呼び声で勇が木刀を振りかざして飛び掛った。

「全身全霊の一撃ですッ!!はぁッ!!」

木刀を纏う靈気が激しく光を放っている。
小手先の一打で手数を増やすのは、やはりこの短期間では無理だった。

そこで覚えたのが全靈力を木刀に伝え、それで攻撃するものだ。
強大な靈撃力を持つ勇だけに、この全靈力を込めた一打の破壊力は相当のものだ。

ドガツ!!!

地に這う傀儡ちゃんに容赦のない一振りが放たれる！
避けることも、ガードすることもなく、その顔面に見事にヒットした。

「ふむ…危なかったの」

茜の咄嗟の靈氣操作で、今の一打は防がれてしまったようだ。

何処を狙っているのか解ってしまえば、そこに靈気を集中し、性質を・に変えてしまえばいいだけのこと。
靈術戦はいかにわからぬように打ち合うか…。

とはいえ、こつも早く靈氣の操作、及び性質の瞬間的変換は茜ほどの熟練者にならなければ難しい所ではある。
並みの者であれば、今の一撃は防御も間に合わなかったであろう。

しかし今の一撃、想像以上の威力だったのか、防御を貫き、確実なダメージを与えていたようだ。

「勇！もう下がってるんだ！」

須藤の指示の元、勇は下がった。

「さあ…来いよ！…終わりじゃねえんだろ！？」

「…」

傀儡ちゃんは黙って立ち上がった。

「ふむ…全力で行くぞよ」

ダッ！

傀儡ちゃんが須藤目掛けて駆け出した。

意識は奪っていない…が、相当な速さだ。

肉体強化的な方法なのか、とにかく尋常ではない動きだ。

「…おっ」

一瞬にして間合いに入る傀儡ちゃん。
同時に跳び膝蹴りが須藤の腹部を狙う！

ドガッ！

「く…ッ！うう！」

須藤は一瞬早く膝蹴りを両手で掴むようにガードした。
だが勢いに負け吹き飛んだ。

「なんと！…やるのう」

「はあ…はあ…し、凌げた…」

今の跳び膝蹴り…もちろん+の霊気が籠った紛れも無い霊撃。
だがそれを須藤は-の霊気を両手に纏って防いだのだ。

「俺も片桐も…そして瀬那もなあ…。

この-の霊気を操作する修行に重点を置いてやってきたんだ！
お前に勝つためだけに、攻撃は捨てた！」

「なるほどの…元より肉弾戦において、強みのある三人じゃ…。
あえて攻撃を捨てることで、ダメージは与えれなくとも、接近戦
で動きを封じることには専念するわけか。

-の霊気を常に纏っておれば、少々の攻撃も防げる道理。

考えたのう」

「はあ…はあ…」

（んだあ…！？まだ全然動いてないのに息切れ…？
というか若干眩暈がする…だと！？）

須藤は自身に起こった異常事態に戸惑っていた。

「ふふふ。一撃防いだのは賞賛に値する…が、甘いのが、

私の霊気はそんな弱いものではない。

防ぎはしたが、元より少ない霊力じゃ…くく、もう一押しすれば
それで終わりだ」

「須藤ッ！下がってる！あとは俺がやる！」

「俺達がつ！だろ！片桐ッ」

片桐と瀬那が飛び出した。

間合いに入られる前に傀儡ちゃんは回し蹴りを放つ。
それをしゃがんでかわす瀬那。

「ッラアッ！！」

瀬那は懐に入ると同時に近距離から右拳を腹部目掛けて放った。

ドスッ！！

「ほっ…！」

今の一撃…霊撃かッ！」

「俺の長所は運動神経、動体視力ともがいいことだ。

よっはあたらなきやいいんだろ！？かわせばいいんだ！」

確かに瀬那稔は身のこなしに関しては群を抜いている。

「ほっほ！その自信…是非ともへし折ってみたくなったのう！ほい

！」

「！…！」

瀬那の攻撃をものともせず、カウンターの右フックが放たれる。

だがそれを紙一重でかわす瀬那。

さらに蹴りや拳の乱舞が飛び交うものの、全て紙一重でかわす瀬那。

「ほっ…口だけじゃないようじゃな」

「はっ！なめんじやないつての！」

かわすだけじゃなく、今度は攻めに転じる瀬那。
だが、瀬那の攻撃は軽くあしらわれる。

長所である身軽さは、その小さい体に起因する。
だがそれが逆に短所の力の無さを生むことにもなる。

ちなみに霊撃力のほうも威力はさほどでもないようだ。

だが瀬那のこの時間稼ぎは後につなぐのに必要不可欠だった。

今こうして戦っているのは瀬那たちだけではない。
優や由良葉は霊気を高めていた。

強力な一撃を放つためには、現状の力量では瞬時に引き出せない。
それゆえ、その力を蓄えるための時間がどうしても必要なのだ。

「ふむ…やりおるのう瀬那君。

仕方ない。少々汚いかもしれんが、ここで眠ってもらおう」

傀儡ちゃんは大きく後ろに跳んで、瀬那との距離をとった。
と同時に両手を前に突き出して構えた。

「！」

瀬那はそれを見るや否や、すぐに追うのをやめ左に跳んだ。

「前回の戦いをすっかり学んでおるようじゃな。

だがこんな靈気弾もあるのじゃ」

傀儡ちゃんは突き出した両手を左右に勢い良く振った。

すると、傀儡ちゃんから180度前方に細かい靈気弾が飛ばされたのだ。

「皆！！しゃがんで！！」

後ろに控えていた優は技を見るなりすぐに掛け声をかける。

この攻撃タイミングよくジャンプしてよけるよりもしゃがんでやり過ごすのがベスト！

しかし、この攻撃に間に合わなかった者がいた。

前方で戦っていた、須藤、瀬那、片桐の三名だ。

「ぐわああっ！！」

「ふふ」

3名はそのまま地面に倒れ込んだ。
他の者はなんとかやり過ごしたようだ。

「く…く……ッ」

「片桐君だけかな。喰らってなお立つのは」

須藤も片桐も霊気の性質は、で高めていた。
それゆえダメージの軽減は出来た。

しかし、須藤は先の一撃でほとんどの霊力を消費していたため、今の一撃でついに0になってしまったようだ。
瀬那に関しては、常に+の霊気を纏っていたため、モロに一撃を受けたことになる。

そのため一撃のもとにダウンしたというわけだ。

「…」

「くそつたれ！」

弱っている所へすかさずやってくる傀儡ちゃん。

フラフラになりながらも、なんとか立ち上がった片桐は最後の力と
いわんばかりに蹴りを放った。

しかし、そんな状態の蹴りが当る訳も無く、あっさりかわされた。同時に攻撃に入ろうとする傀儡ちゃんに”何か”が跳んできた。

「どっせいッ！！大丈夫か！片桐」

跳んできたのは岡島大樹だった。その巨体を生かしたタツクルは霊撃ではないにしろ、吹き飛ばすには有効だった。

「岡島ツナイスだ！」

「立てるか？早いところ引くぜ！」

「だが、まだ時間稼ぎが必要だろうっ！？」

「あいつがやるって言うてるんだ」

後ろを振り返ると勇が木刀を構えていた。

「もう霊力は残ってません…ですが、この身が動く以上やってみます。」

片桐先輩は態勢を整えてください。その時間を稼ぎます」

「…。わかった！だが無理をするなよ！」

そういつて大樹と一緒に下がる片桐。

「さあ来い！僕が相手だッ！」

「…」

傀儡人形は立ち上がると、小振りに手を振った。

「？」

ドサッ！！

勇の背後で何か音がした。
振り返る勇。

「な…！？片桐先輩！？岡島先輩！？」

なんと岡島、片桐の両名が肩を組んだまま倒れ込んで動かない。

「天城君！！後ろツ！！」

「へ！？」

優の掛け声に振り返る勇だったが、時すでに遅し。すでに傀儡ちゃん両拳は振り下ろされていた。

ドガッ！！

頭上から振り下ろされた両拳に沈黙する勇。

「ふふふ…なあ…どじするっ。」

第37話 完

NEXT SIGN…

第38話 夏休み編 / 修行17

S I G N 序章

第38話 夏休み編 / 修行17

岡島先輩と片桐先輩を倒したのは霊気弾だ…。

正面にいた天城君が目視出来なかったようだが…恐らく見えないように工夫した攻撃。

霊気は高い場合、霊視能力の低い者でも見ることが出来る。

だが、さらにそれ以上の力でコントロールすることで見えなくする事も可能…。

今の攻撃、見えてたのは私や司…シロくらいだろうか。

とにかく今の一撃といい、先ほどの拡散的な霊気弾といい…。
まだまだ先の戦いで見せてない手の内はあるみたいね。

今無事ているのは

私…司に由良葉君、シロに椎名一に日下部先輩の6人か。
一と日下部先輩じゃ、そう長い時間戦えないだろうな…。

シロは…

「シロ…お願いよ、まだ戦っただけの力は溜め込めていない…。時間稼ぎをお願い!」

「時間稼ぎ…?なにを言うておる…わらわは”あれ”と遊ぶつもりじゃ…。」

「まあ見ておれ」

そう言つて軽いステップで前に出るシロ。
人間の姿は成人女性…。

特に筋肉質でもなく、本当に一般的な体系だ。

「いくぞ…人形」

「ふむ…精霊に近い靈気…これは油断できぬかの」

シロは正面から傀儡ちゃんに向かって駆け出した。

「は、速いッ!」

一瞬にして間合いを詰める。

これには茜も一瞬驚いたようだ。

「ハッ！」

シロの上段蹴りが放たれた。
バシッ！と軽い音が響いた。

だが、実際問題この戦いは肉体の勝負ではない。
人形の霊力を全て消耗させればそれで終わり…。
ゆえに物理的な攻撃力はなんら意味はなさないのだ。

「なかなかやる…今の一撃の霊力消耗…」

そう易々と喰らい続けるわけにはいかんようじゃ

当然といえば当然だ。

以前霊気を計測したとき、シロの霊気値は5120。
それに対して茜の霊気値は2230…。

この差は大きい。

それゆえ攻撃を受ける際にもしっかりと…の霊気でガードしなければ、

勝負の行方はシロに傾くだろう。

「思ったよりやりおるわ。」

あの一瞬であそこまでガードされるとはの。

ではこれでどうじゃ？」

「む!？」

シロはサッカーボール大の水弾を生み出した。

「水蓮華」

生み出された水弾は傀儡ちゃん目掛けて放たれた!
かなりのスピードで飛んでいく。

「性質がわからん以上うかつに迎撃せんほうがよいのう…。
ここは回避じゃ!」

速いとはいえ、軌道は直線。
傀儡ちゃんは余裕で回避をした。

「咲き誇れ…水蓮華」

水弾が傀儡ちゃんを横切る寸前でシロがそう言った。
その瞬間水弾が弾け、横に立つ傀儡ちゃんに水が降りかかった!

「なんと…!」

傍目には水が掛かった程度にしか映らないが、実の所…細かい霊撃が降り注いだわけだ。

直撃は無かったものの、完全回避にも程遠い5割の被弾！

流石にこの瞬間では一点集中の霊気強化のガードは間に合わなかった。

それゆえ今の一撃は大きなものとなった。

「くく……ぬ！？何事じゃ！？」

急にシロがわめき出した。

その瞬間だった。

ボンッ！

「へ…？」

なんと人の形から再びフワモコアザラシのぬいぐるみの姿に戻ってしまった。

「どうやら今の一撃で力を使い果たしたようじゃな」

「ば、馬鹿な！あんな稚拙な技の一つ程度で底をつくようなわらわではない！」

な、なんでなのじゃ！」

よくはわからないが、これで強大な戦力が一つ消えたわけだ。

「俺達が行く番だな。」

「ちえ…やられ役は辛いぜ」

「新二君…一…」ごめんね」

「謝らないで下さいよ部長！俺等に今出来る精一杯をやるだけだから」

「ぜーったい！いつか…やっつける側に回ってやるぜ…！」

一はメガネを外して傀儡ちゃんの前に立った。

新二はそれを後ろで見ている。

どうやら一人ずつやりあうつもりのようにだ。

「…君には前回一発食らわされて何もやり返せてない」

「…」

「だから。今日は一発入れてやる…！」

「椎名君か…まあ意気込みは合格じゃな」

一はダツと駆け出した。

正面からではない。

傀儡ちゃんを中心に円を描くように回りだした。

「翻弄するつもりかの？無駄じゃ」

ビュッ！

一瞬にして一の前方に立ちふさがる傀儡ちゃん！

「…うわっ…！」

ドガッ…！

渾身の一打が傀儡ちゃんに与えられた。

正面の一の一撃ではない。

「ッ！…効いた？」

「一が隙を作り、そこに新二が打ち込む作戦だったようだ。この作戦、実力が伴っていれば有効だったであろう。」

「…」

「ガードする必要も無いほどの低威力…残念ながらダメージは与えられなかった。」

「ドガッ！！」

「強烈な回し蹴りが新二の胸に食い込んだ。もちろん霊撃！」

「一撃のもとに沈む新二。」

「うあああッ！！」

「ドカッ！」

「一の拳打が傀儡ちゃんの腹部に当たった。だが、やはりこれもダメージはなかった。」

ビュッ！！

すかさずカウンターが一を襲った。
近距離からの蹴り…しかも水月にそれはヒットした。

「が…ハッ………」

霊撃でなくても悶絶モノの一打だ。

一はおなかを抱えたまま崩れ落ちた。

「へ……へへ…一発くれてやった…へへ」

「なんと…あの一瞬で性質変化、霊気を腹部に集中させる操作を行ったというのか！？」

これは意外な才能をもっておるの！」

一は今の一打に耐えた。

が、一瞬にして希望は潰える。

頭部狙いの蹴りが放たれたのだ。

もちろん悶絶する一にかわすことなど不可能。

何も出来ぬまま崩れ落ちた。

「皆…ありがとう」

「皆がくれた時間のおかげで準備できたわ」

「やっちゃんもんね！」

司、優、由良葉の3人の準備がようやく整ったようだ。

3人が準備をしていたのは”霊気の充填”。

霊気は一瞬で一気に噴出し高めることも出来る。

実際いつも最大の霊気値をはじき出す場合、この方法をとっていた。だが、それ以上に霊気の底上げが出来…かつ、最大級の霊気を連続して扱える方法がある。

それが霊気の充填だ。

強力な霊撃…全身に湧き出す最大限の霊気を霊力でもって放つ。

この時消耗するのは霊力だけではない。

霊気にも乱れは出る。

特に強力な一撃であればあるほど、その乱れは大きい。

先の戦いでも優が最大級の狐火を放ったあと、霊力に余力があるに

も関わらず連射できなかった。
これは靈氣が乱れていたためである。

この乱れを回避するために有効なのが靈氣の充填だ。
外側に靈氣を強めるイメージではなく、内側に溜め込むイメージで
それを行う。

肉体強化と似た要領であるため、難易度は高めだ。
それなりの靈氣の操作技術が必要な方法。

優と司は、それをこの2週間で見事に会得したのだ。

これにより、あらかじめ靈氣を練っておけば、
最大限の攻撃直後：再び体内の靈氣を爆発させ乱れた靈氣を上回る
靈氣で元の状態に戻せる。

こうなれば、すぐにまた最大限の攻撃が放てるというわけだ。

だが、靈氣の充填にはメリットだけではなくデメリットも、もちろ
ん存在する。

まず第一に靈氣を充填するのに時間が掛かる。
これは実戦において、致命的だ。

そして第二に充填した靈氣もを使い切ったあと、
靈氣が乱れるどころか、体外に放出することも困難なほどになる。

こうなってしまうえば、攻撃も防御も出来ない。
”無力化”してしまうのだ。

それゆえ熟練者ほど、この高リスクな靈気の充填はしないものである。

熟練者にもなれば靈気使用後の乱れを少なくし、また立ち直りの時間も速い。

それゆえ充填など滅多には使用しないのだ。

だが今の優たちは熟練者ではない。
それゆえ、今はこれが最善の一手。

「ほっほ！三人とも準備はよいようじゃな。
じゃが私もそう易々とは負けてやれぬぞ！」

傀儡ちゃんのほうから3人に突進してきた！

「由良葉君、行くわよ！」

「OK優ねえちゃん！」

由良葉と優が手を重ねて傀儡ちゃんの方に向けた。

「む…？何かするつもりか…？」

『双炎玉!!』

二人がそう言うのと、勢い良く巨大な炎弾が噴出した。白い炎と紫の炎が絡み合い、美しい光を放っている。

「なんと!!」

ドッガー————ン!!

炎弾は突っ込んできた傀儡ちゃんに直撃した。

「よしっ! 当たったわ!」

「優! まだよ! あの程度で倒せたら苦労しないわ!」

二人を置いて、司は駆け出した。

自慢の鞭を振り回しながら土煙の中に姿を消した。

バキッ! バシッ!!

土煙で見えないが、司の鞭の音が響いている。

ザザッ！

司が後退して来た。

「ふう……」

「やっぱまだまだ元気みたいね…何発かもらっちゃった」

「もらっちゃったって…あんた大丈夫なの!？」

「平気…とは言えないけど、ちゃんと…の靈気でガードしたからな
んとか…。」

「靈気の充填をしてなかったら多分耐えれなかったかも…」

「でも、あの一撃を受けてもまだ全然平気だったの？」

「一生懸命編み出した必殺技だったのに…」

「それよりも…あの土煙の中で攻撃してくるんだもの…！
お祖母様との距離はあんなに離れてるのに…凄いわ」

「やっぱ一筋縄じゃいかない…か！」

「ふむ…狐火を球体状に練りだし、高速で放つか…。」

「よくぞそこまで成長したものだ。」

「司ちゃんも+と-を上手く切り替えて戦っておった。」

「皆それぞれに成長しておるが…やはり素質か…この二人は群を抜いてセンスがある。」

由良葉はどうか…?」

「ふににににいいいい!!!」

由良葉は全力の狐火を両手に纏っていた。

「今もてる最大の攻撃力!! オイラも本気で引っちゃうからね!!」

土煙が消えかかったと同時に由良葉が飛び出した。

「あれはあなたが教えてた技?」

「技って程のものじゃないわ。単に狐火を両手に纏って攻撃するだけなもの。」

でもあれはこないだの由良葉君の炎弾とは比べ物ならない威力のはずよ!

私も行くわ! 司…サポートよろしくね!」

二人も由良葉に続いて駆け出した!

第38話 完

NEXT SIGN…

第39話 夏休み編／修行18

S I G N 序章

第39話 夏休み編／修行18

優と由良葉によるタツグ戦術。

傀儡ちゃんを左右から攻めるようだ。

「ハッ！」

由良葉は右手の狐火を傀儡ちゃんに向かって放った。

距離はまだある…が、かなりの速度で飛んでいく炎弾だ。

「つつあ！」

炎弾をよけるでもなく、自ら靈気の弾を放ち相殺した。

反対側から優が迫ってきているのがわかったからだ。

体捌きでかわしていれば、恐らくわずかな隙が出来ていただろう。

「はあッ！」

隙はつけなかったが、距離を縮める時間は稼げたようだ。
優は間合いをつめ、頭部狙いの上段蹴りを放つ。

これを片手で余裕のガード。

優にもガードされることがわかっていたのか、はたまた両手に靈気を集中してるため操作出来なかったのか…
今の蹴りは靈撃ではなかった。

傀儡ちゃんはすぐさまカウンターの拳を放つ！

優はそれを両手でガードした。

相当の威力だったのか、優はよろめいた。

「ふむ…己の靈力量に任せて、防御を捨てたか…常に+の靈気で勝機を狙うか」

多少の攻撃ならきつと大丈夫…！

今は攻撃に重点を置かなきゃ！

守っているだけでは勝ちはないわ！

ヒュッ！

「ぬ!?!」

傀儡ちゃんの左手を司の鞭が縛り付けた。

「今よッ！」

司の掛け声に合わせて由良葉が飛び出した。

「もう一発ッ!!!」

今度は傀儡ちゃんの懐に入って殴りつけるように左手の狐火をぶつけた！

今ので2発…由良葉に今と同等の威力を放てる回数はあと2回…。

「やるのお！見事なコンビネーションじゃ！」

由良葉は連続で畳み掛けることをせず、一旦引いた。

今の一撃でガードを貫いてダメージを与えた感触は確かにあった。しかし、その攻撃であとの2発を与えるよりも、

ガードできない状況下で攻撃したほうがよりダメージを与えることが出来る。

そう考え、あえてそこでの連打はやめたのだ。

「ふん!!」

「!...きゃっ!!」

傀儡ちゃんは思い切り左手を振った。

鞭で縛られていようがお構いなしに、力で振りほどこうとしたのだ。

その結果、司ごと振り回し、結果振りほどくことに成功した。

だが、その一瞬に隙が出来たのを優は見逃さなかった。

「シッ!!」

ドガンッ!!

優の全力の右ストレートが腹部に被弾!

見事な焦げ痕が付く!

「はあああッ!!!!」

ドカドカドカッ!!

優は由良葉と違い、手数で勝負に出た。

由良葉は霊力の絶対量が多いものの、その配分が下手で無駄に霊力を消耗してしまう点がある。

優にはそれが無い分、乱打も可能というわけだ。

” 最小限で最大限の効果を ”

まだ完璧ではないにしろ、その要領は掴んでいる。

「 やりおるな…一撃一撃が確実なダメージになっておる…！
これは油断しすぎたかの 」

優の乱打に翻弄される傀儡ちゃん。
だが、明らかに何かを狙っている…優もそれは感じていた。

一瞬の隙が命取り…！

「…」

ブンッ！

攻撃を喰らう中、傀儡ちゃんの両拳が輝きだした。

「！」

優はすぐさま攻撃の手を止め、後ろに下がった。

あそこまで靈気がハッキリ輝いているということは…すなわちそれ

だけ強力な靈気が集まっているということ。
いくら優の靈力量が多いといっても、守備なしにあれを喰らうのは、
余りにも無謀…。

警戒してしかるべき。

ダッ！

優が引いたその瞬間に傀儡ちゃんは一回転して走り出した。

向かう先に居たのは由良葉だった。

傀儡ちゃんは前方に向けて巨大な靈気弾を放った！

由良葉の体の大きさと同等なほどに巨大な靈気！

しかも速い！

「！」

由良葉も咄嗟のことに、対応が効かないでいた。

”避けなければ”

頭の中ではわかっていても、体がそれに対応してくれない。

ドッガーーンッ！！

由良葉に直撃！

恐らくガードも間に合わなかった！

「由良葉君ツーーー！！！」

さらに、傀儡ちゃんは由良葉の状態を確認せずに再び一回転し駆け出した。

「来る！」

優はすぐさま構えた。

いかなる攻撃にもすぐに対応出来る様に！

「……」

先ほど同様走りながら左手を突き出した。

と同時にあの巨大霊気弾を放った！

優は予測して構えていたため、すぐさまこれを横に飛んでかわした！

「危なかった……」

！……まさか……！！？

「そんな…」

ドッガーーン!!

なんと…実の狙いは優ではなく…直線状にいた司のほうだった。
油断していた司にかわすことはもちろん、防御すら出来なかった。

「ふふふ…司ちゃんには悪いが、眠ってもらおうよ…。
残るは優…主だけじゃ」

その瞬間だった!

ドッガーーン!!

突如として起こる衝撃音!

「な、なんじゃ!?!」

何かが傀儡ちゃんに攻撃したのだ。

優ではない。

傀儡ちゃんの背後からの攻撃…。

「へへ…！やっとこ無防備のところに渾身の一撃を打ち込めたね…！」
神楽由良葉の一撃だった。

なんと、あの巨大霊気弾を喰らってなお、立ち上がったのだ。

正確にはあの攻撃を直撃した訳ではなかったのだ。

偶然か否か…由良葉は咄嗟に霊気を高めていた両手を突き出し、わずかながらに直撃を避け、

さらに衝撃波でその軽い体が吹き飛ばしたのだ。

これによりダメージは最小限に抑えられた。

「なんと…まあ…」

この不意打ちでわずかながらに隙が生じた。
一瞬の隙だ。

だがそれを見逃さなかったのは優だった。

司をやられた怒り…司のことを忘れ、かわしてしまった自分への怒り。

それを全力で傀儡ちゃんにぶつけた！

「うああああッ…！！」

ドガッ！

「…」

それほど重い衝撃音ではない。
しかしながら、それは強力な一打だ。

炎を帯びた拳。

傀儡ちゃんの腹部をチリチリと円状に燃やし焦げ目が浮かぶ…そして！

バシユッ！！

腹部にはくつきりと拳の型の穴が開いた。
周りには焦げ目を残し、プスプスと煙を吐いている。

「はぁ……………はぁ……………」

「ふむ…」

ドサッ！

地面に伏したのは…

優ではなく…傀儡ちゃんだった。

「はあ……はあ………やった…の…？」

優も今の一打で全ての霊力を使い果たしたようだ。

同時に体力も尽きたようで、そのまま崩れるようにしゃがみこんだ。

まさに精も魂も尽き果ててしまったようだ。

「優…いや、皆ようやったな…。」

まさか負けるとは思わなかったわ」

「へへ……でも私も今ので力尽きちゃった」

「たいした奴等だよ。お前ら…本当に倒しちまうとはな…。」

茜が最初から本気で、もっと嫌らしく戦っていたならば、勝敗は別
だったであろう。

だが、それでもこの結果は素晴らしいものだった。

3時間後

「う……う……」

司が目を覚ましたようだ。

これで全員が目を覚ましたことになる。

「目が覚めた？司」

「優……？……そうだ！結果は！？」

勢い良く起き上がる司。

「落ち着きなさいよ司。ちゃんと勝ったわよ！」

「ほ、ほんと！？」

「うん！皆で得た勝利よ！

私達やったのよ！」

皆本当に嬉しそうに笑っていた。

この一ヶ月、正直楽なことはなかった。

それでも強くなると信じて努力を続けてきた。

その結果がこうして勝利の形として現れたのは喜ばしいものだった。

「最後の修行がこういう結果になったのはアイツらにとっては自信に繋がるし、よかったんじゃないかな」

「お主は結果が出なかったようじゃがな」

皆が喜ぶ中、和馬と茜がこっそりと話をしていた。

「るせえやい！…あんな”化け物”ハナから勝てる気なんてしなかったっての」

「傀儡ちゃん弐号…ありゃ、お主と私が組んでも恐らく敵わんじやろうな」

「はあ…それがわかってて、なんで”銀”に霊力込めさせたんだよ…」

「仕方なからう。ワシでは力不足じゃし…」

「だとするとお主より強いのはもう銀しかおるまい」

由良葉の体内に共存する白狐の霊・銀。

精霊に近い力を持ち、由良葉の体を依り代としている。

銀の人格が表面に出ると、由良葉の体にも変化が現れる。外見だけじゃなく、霊気値も大幅に上がる。

この状態で傀儡ちゃん式号に霊力を込めたのだ。

和馬は皆の知らないところで何戦か戦った。

しかし結果は手も足も出ない…まさに桁外れの実力だった。

「とりあえず…楽しいひと夏だったぜ」

「…一ヶ月か…早かったの…」

向こうに戻ってもちゃんと修行に励むんじゃぞ?」

「わあってるよ!又何かあればいつでも連絡くれよ。

飛んでいくからよ…」。

俺等奥里はあんた等に大きな借りが出来ちまったしな」

「ふむ。その時はあてにさせてもらっつさね」

「お祖母ちゃんー!何話してるの!??」

もう山を降りようよー!」

優たちはすっかり立てるまでに回復して、すでに下山準備に入っていた。

「さて、じゃあ下りるかの」

「ああ」

『修行ありがとうございました』

一同深々と頭を下げた。

「よいよい。それよりも、よく一月の間修行に耐え、頑張ったの。主等は確実に強くなっておる。誇ってよいぞ。だが、慢心はするでないぞ…まだまだ未熟であることは忘れぬよ」

『はい！』

皆、それぞれ家に帰っていった。

こうして一ヶ月にも及ぶ修行の日々は幕を閉じることになった。

最終的に勝利という最高の終わり方には皆満足していた。

私も…強くなった実感を持てた。

きつとこれで戦える…！

っていつても、最近はやインを見ることもなかつたんだけどね。これからも…もしかしたら無いかもしれない。

でも、本当はないならないでそれが一番なのよね。

”死を告げる刻印”なんて…。

でも、見かけたら…その時は今度こそ私の力で助けてみせる！

「それが能力を得た…私の運命だものね」

さあてと！

夏休みも明後日で終わりかあ。

残りの二日は満喫しよう！

明日は商店街のお祭りだし、目一杯楽しもうと！

第39話 完

NEXT SIGN…

最終話 夏休み編 / 夏祭り

S I G N 序章

最終話 夏休み編 / 夏祭り

ぴゅぴゅ…！

目覚まし時計が鳴り響く。

「うあ…うう……」

優は寝ぼけながら時計を止めた。

今日は8月30日…日曜日。

商店街のお祭りの日だ。

夏休み最後のお楽しみと言えるイベントだ。

「ふにゃあ…まだ9時か…」

お祭りは16時スタート。
まだ時間はある。

優は寝ぼけ眼でリビングに向かった。

「おはよお……」

「おはよー！今日は遅かったわね！」

亜子が家事をしながら挨拶を返した。

昨日の疲れが出たのかな。
なんかちよつと疲れ気味だ。

「今日は商店街のお祭りでしょ？もちろん行くのよね？」

「うん！夏休みはずっと修行ばっかだったからね。
今日はうんと羽を伸ばすんだあ！」

多分皆も来ると思うしね！

「あ！そつだ！優ー！これ着てみて！」

亜子が持ってきたのは白地にピンク色の花があしらわれた綺麗な浴衣だ。

「わあ！すっごい可愛い！どうしたの！？それ！」

「お祖母ちゃんからプレゼントだって。」

修行を最後までやりとげたでしょ？そのご褒美だって！」

「ありがとう！お祖母ちゃんにもお礼が言いたいわ！
今何処にいるの？」

「ん…お祖母ちゃんは今駅に行ってると思っわ」

え？

「石動さんと、神楽君ね、朝方奥里に帰るって…その見送りに駅に
行ってるの」

「な！？なんで！？夏休み明日まででしょ！？

なんでそんな急に帰るのよ！！」

まだ、お別れもなにもしてないのに…。

「和馬さんがね、恥ずかしそうに言ってたわよ。
優たちの顔見たら帰りづらくなる！ってね。
だから何も言わずに帰るって」

優は亜子と茜の前に出て行った。

「どっ…かな？」

「わぁ！可愛いじゃない！」

「馬子にも衣装じゃな…なかなかよいのではないかの」

二人の反応も上々だ。

「ほ、ほんとに!？」

「うん！頑張つてね！」

頑張つて!？

「な、何を頑張るっていうのよ!」

「ふふ…さあ何かしら？」

不敵な笑みを浮かべる姉。

なんだか恥ずかしくなって優は家を飛び出した。

「はあっ…はあっ…もう！なんなのよ！」

てか、私なんて飛び出してきちゃったんだろっ…。
今更戻るのも恥ずかしいなあ…。

まだ13時…時間あるなあ…。

まあいいや…ぶらぶらしめじつと。

ザワ…

「？」

目の前に見慣れない学生服を着た少女が立っている。
長い黒髪が綺麗な少女だ。

「…白風…優さん？」

「え！？」

ザッ…ザッ…

少女は優に歩み寄ってくる。

「気をつけてね…近いうち…この辺りは戦いの舞台になるかもしれない」

「どづいづいとー!？」

「私の名は鹿子^{かのこ} 流華^{るか}…また近いうちに会いましょう」

そう言っつて優の横を通り過ぎていった。

「ちょっと待って…!…つてあれ…?」

いない…?

今の子…一体…。

この辺りが戦いの舞台になるって…どづいづ意味…??

「あれ?優じゃん」

え?

「あ！須藤先輩！」

前から声をかけてきたのは須藤彰だ。

「？…どうかしたか？」

「い、いえ。なんでもありません。須藤先輩もお祭りですか？」

「ああ！祭りか！だからそんな恰好してるんだな。

俺は単にブラブラしてただけさ」

「そうなんだ。16時から商店街のお祭りなんですよ。

出店とか、ほら…この河川敷では花火も上がるんですよ。

規模は小さいですけどね」

「そうなんだな。俺生馬の出身で、こっちに来たのは去年からだからな。」

あんましらねえんだわ」

そうなんだ。

「一緒に行きませんか？暇だったらですけど」

「な！？なななな…！？」

？

何を慌ててるんだろう？

「お、俺でいいのか…？」

「…？…あの…何かものつすごおーっく勘違いしてませんか？」

須藤は顔を赤くして走って行ってしまった。

「ちょ！先輩っ…あちゃあ…行っちゃったよ…」

私何かまずいこと言っちゃったかなあ…。

優はそのまま辺りをぶらつきながら商店街に向かった。

「あら！？巫女様じゃない!?」

「あ…あはは…」

すぐに商店街のオバチャンにからまれる優。

「今日は可愛い浴衣着ちゃって！見違えちゃったわあ！」

「い、いえ…そんなことは…」

うつ…懐かしいなあ…このやりとり…。

巫女様なんて呼ばないでよねえ…！

「優…さん？」

「え？」

前方に立っていたのは天城勇だ。

普段着の彼がポカーンとこちらを見ている。

「あ、天城君」

「こ、こんにちわ…白凧さん…なんていうか…その…
すごい似合ってますね…その浴衣」

「そ、そかな？ありがとう勇君…」

「え！？今なんて…」

「な、なんでもないっ！それより天城君もお祭り？」

「え、ええ。もしかしたら皆さんに会えるかと思って…」

勇がそう言った矢先に声が聞こえてきた。

「おーい！」

「御暑いねえお二人さん！」

「ケツ！見せ付けてくれますねえ」

岡島大樹、日下部新一、椎名一のお馴染み三人集だ。

「皆もお祭り？あれ…瀬那先輩と司はいないのね」

「ここに居ますわ！」

「うわっ!」

いつの間に背後に…。

う…この子も浴衣じゃない!

しかも…可愛いじゃないの…。

「ういッス…なんかいつもの面子が集まっちゃった感じですね」

瀬那先輩…夏真っ盛りだし、流石にニット帽はやめたのね…。
でも手ぬぐいって…。

結局この人何か頭にかぶってないと落ち着かないのかしら。

「ほほ!これが人の祭りか…。なかなかと面白そうじゃの!」

って…

「あ、あんたシロ!何してんのよ!」

「?…何がじゃ?たまにはよかろう人の姿で歩くぐらい」

いやいやいや!

「そこじゃない！なんであなた…み、水着でうろついているのよ！」

「小づるさいガキじゃのう。」

そんなに露出が嫌いか？男共はそうでもなさそうじゃがな」

ニヤツと岡島達を見るシロ。

「もう！司！あんたどういいう教育してんのよ！」

「優は真面目な女子高生ですものね。仕方ないですわね。この上着を羽織なさいな」

司は持ってきていた上着を渡した。

「いやじゃあ！あついいい！」

「文句は受け付けませんわ。少しだけでもその恰好できてよかったでしょう？」

そんな恰好で歩かれてお巡りさん何か言われたらお祭りが台無しでしょ」

そう思っなら最初から服着せてこいよッ！

「まったく…お！出店も始まった見たいね！」

「ですわね！皆楽しみましょー！」

楽しそうにする優たちをコッソリ覗く者がいた。

「おい」

「ギャツ！」

「ギャツって…お前何コソコソしてるんだよ片桐…」

「す、須藤…！お前こそ…こんな所で何してんだよ！」

「お、俺は別に…た、たまたまだよ！」

「お、俺だつてたまたまさ！たまたま通りかかったら祭りがやつててだな…」

「あー…！あれ片桐先輩と須藤先輩じゃない!?」

『…！』

二人はあっさり見つかってしまった。

「先輩達……まさか…そういう関係…？」

「！ー！ち、ちがつー！」

「つ、司！おま！何を！？ち、違うわッ！誰がこんな奴と…！」

「焦る姿が余計怪しいんですけど…。」

まあいいですわ。先輩達も一緒に祭りを満喫しましょう」

「そうそうー！皆で回ったほうが楽しいぜ！」

「司…岡島…」

瀬那はクイッとクビで”来い”と合図してニヤッと笑った。

「瀬那………ったくー！どいつもこいつもー！」

「じゃあねえな。行くか須藤」

二人は皆に合流した。

焼きそば、焼き鳥…焼きイカや玉せん…わた飴、りんご飴。

色々な食べ物がある。

ゲームも金魚すくいや、射的…水風船や輪投げと定番ぞろいだ。

皆はそれぞれ時間を忘れて楽しんだ。

「あー楽しかったね！」

「ですね！それにしても…片桐先輩金魚すくい上手すぎですよね！」

いつの間にか優は勇と二人きりになっていた。

「だね！まさかあんな特技があつたとはね！」

なんかあの片桐先輩ってところがギャップあつておかしかったわ！」

「ですね。思わず笑っちゃいましたよ！」

ひゅー…

ドーンッ！

闇夜を照らす、美しい花…花火が上空を照らした。

「あ！ほら花火だよ！もう上げる時間なんだね！」

「河川敷でしたよね？確か！」

「うん！いこっか！」

「ええ」

自然に二人は手をつないで駆け出していた。

「はあ…はあ…！ふう…！皆もう集まってるみたいね」

「ですね…！あ！すみません！」

勇が手を握っていることに気づいてパッと放した。

「あ、ごめん！つい…」

「い、いえいえ…嬉しかったですし」

しばらく二人は目を合わさずに、無言でいた。

花火の音以上に胸の鼓動がやたらと大きく聞こえていた気がした。

「いつの間にか…二人つきりだね」

「ですね」

「天城君…これからも…ずっと」

ドンッ！

「え？今なんて？」

花火の音が丁度優の言葉を遮った。

「うっん！なんでもない」

そう言って最高の笑顔を見せる優。
それを見て赤くなる勇だった。

「あの二人、上手く行ってるのかしら？」

「さ、さあ…わからないツス」

優と勇を隠れて観察していたのは司と瀬那だった。

「上手くいくといいわね」

「部長は応援してるんツスカ…？」

「まあね。あの子、多分初恋なんじゃないかしら？
天城君はいい子だから…あの子だったら優をちゃんと守ってくれるし」

お似合いだと思うわ」

「…お、俺は…部長のことが…」

「え？」

「俺…絶対部長守れるぐらい強くなります…」。

そしたら俺と……俺と付き合ってください！

ドンッ！

突然の告白……。

司は戸惑った表情を見せる。

「……ダメ……ツスカね……」

「ううん。……みのりんだったら……ステキかも」

「えー？それじゃ……」

「だーめ！まだ……あなたは私を守るほど強くないでしょ？」

「う……そうツスね……」

「でも期待してるからね……頑張っつてね！」

「……はい……」

結局その日、天城君とは何事もなくお別れしちゃった。
でも、凄く楽しかったし…すごい胸がドキドキしたし…ま…いつか。
まだ高校生活は始まったばかりなものね！
焦らず…だね。

「はあー…明日で夏休み最後…か」

優は一人星を眺めながら帰宅した。

その頃…。

とある場所で会合は行われていた。
灯りは唯一つ…周りを闇に包まれた薄暗く冷たい部屋だ。

「ようやく…準備は整った…。
君たち7人は選ばれし者たちだ…。

腐った人間共を滅ぼす勇者として選ばれたのだ」

先頭に立つ男が大声で周りの7人を称えた。

「皆、それぞれ独自に動けばいい。

各自思いは違うのだからな…ただ…我々の契り…

絶対の約束事…”人間を滅ぼす”…これだけはくれぐれも忘れぬように」

「もちろんです…我々は境遇こそ違えど…

人を殺したいほど怨んでいる点では皆同じ…。

滅ぼすことにためらいなどありません」

「くく…そうだったな。

さあ始めようか”Seven's DoA”の諸君…

Dead or Alive…生死を問わず…食い殺せ…!

生きた奴らも漂う靈魂も…全てを…全てを滅ぼすんだ…!!

手始めはこの…久木だ…くく…!!」

優の知らない所ですでに事は動き始めていた。

これから始まる惨劇…果たして止められるのか…。

それはまさに…

” 神のみぞ知る ”

次章『SIGN 二章SEVEN・S DOA』へ続く…

最終話 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7538h/>

SIGN 序章

2010年10月10日01時37分発行